

常磐自動車道遺跡調査報告32

かみ ごおり
上 郡 B 遺跡
もと まち にし
本町西 A 遺跡



口絵 周辺航空写真

1975年 建設省国土地理院撮影

序 文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は、昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間
が、平成11年にはいわき中央～いわき四倉間が開通し、現在は富岡までの区間で工事が
進められています。

この常磐自動車道建設用地内には、先人が残した貴重な文化遺産が埋蔵されており、
周知の埋蔵文化財包蔵地に加え、数多くの遺跡等を確認しました。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、
我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎を成すものです。

福島県教育委員会では、常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財
の保護・保存について開発関係機関と協議を重ね、平成5年度以降、埋蔵文化財包蔵地
の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い、その結果をもとに、平成6年度から現
状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし、発掘調査を実施してきま
した。

本報告書は、平成12年度に行った富岡町に所在する上郡B遺跡ならびに本町西A遺跡
の発掘調査の結果をまとめたものです。

今後、この報告書が県民の皆様の文化財に対するご理解と、文化財保護活動の普及や
地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活
用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり御協力いただいた日本道路公団、財団法人
福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関並びに関係各位に対し、感謝の意を表
するものであります。

平成14年1月

福島県教育委員会

教育長 高 城 俊 春

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模開発に先立ち、対象地域内にある埋蔵文化財の調査を実施しております。常磐自動車道建設にかかる遺跡の調査については、平成6年度から平成8年度までに、いわき中央からいわき四倉間のうち、いわき市四倉町に所在する10遺跡の調査を実施いたしました。さらに、平成9年度からはいわき四倉から富岡間にかかる遺跡の発掘調査を実施しており、平成12年度までにいわき市四倉町・広野町・楡葉町・富岡町の30遺跡の発掘調査を実施いたしました。

本報告書は、平成12年度に実施した発掘調査のうち、富岡町に所在する上郡B遺跡・本町西A遺跡の2遺跡の発掘調査成果を収録したものです。

本町西A遺跡では、旧石器時代の石器や縄文時代前期の集落跡、中世の建物跡などが検出されました。中世の建物跡から出土した大甕などは、当地域の中世を考える上でとても貴重な資料と考えられるものです。さらに上郡B遺跡では、数少ないながら古墳時代前期の住居跡や平安時代の建物跡などが検出されています。

今後、この報告書を、郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

おわりに、この調査にご協力いただきました日本道路公団東北支社いわき工事事務所、福島県担当部局、富岡町ならびに地元の方々に深く感謝の意を表します。

なお、埋蔵文化財の保護につきまして、今後ともより一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成14年1月

財団法人 福島県文化振興事業団
理事長 佐藤 栄 佐 久

緒 言

1. 本書は、平成12年度に実施した常磐自動車道遺跡発掘調査の報告書である。
2. 本書には、福島県双葉郡富岡町に所在する次の2遺跡の調査成果を収録した。
 - 1 上郡 B 遺跡 (54300060) 双葉郡富岡町大字上郡山字上郡
 - 2 本町西 A 遺跡 (54300009) 双葉郡富岡町大字本岡字本町西
3. 本事業は、福島県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて実施し、調査に係る費用は日本道路公団が負担した。
4. 福島県教育委員会では、発掘調査を財団法人福島県文化センター（現 財団法人福島県文化振興事業団）に委託して実施した。
5. 財団法人福島県文化センター（現 財団法人福島県文化振興事業団）では、事業第二部遺跡調査課の次の職員を配して調査を実施した。

文化財主査	山内 幹夫	文化財主査	福島 雅儀
文化財主査	富田 修	文化財主査	高橋 幸司
文化財副主査	能登谷宣康	文化財副主査	井 憲治
文化財副主査	菊田 順幸	文化財副主査	鈴木 広子
文化財副主査	千葉 秀樹	文化財主事	堀川 雄二
文化財主事	丹治 篤嘉	文化財主事	門脇 秀典
文化財主事	三浦 武司		

6. 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。
7. 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図・2万5千分の1地形図を複製したものである。(承認番号 平13東複第369号)
8. 本書掲載の分析は、次の諸氏・諸機関にご協力いただいた。(敬称略)
 - 蛍光 X 線分析 三辻 利一 (大谷女子大学)
 - 石器の石質鑑定 真鍋 健一 (福島大学)
 - 炭化物樹種同定 株式会社古環境研究所

9. 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。

10. 発掘調査および報告書作成にあたって、次の諸機関・諸氏からご指導・ご協力をいただいた。

(五十音順・敬称略)

財団法人新潟県埋蔵文化財事業団・東北大学総合学術博物館・富岡町教育委員会・
富岡町役場・長岡市立科学博物館・流山市教育委員会・野田市教育委員会・福島大学教育学部
四街道市教育委員会・飯塚博和・小川勝和・小熊博史・小栗信一郎・加藤 学・川端弘士・
藤澤良祐・増崎勝仁・矢島敬之・柳田俊雄・山田 廣・吉田 義

用 例

1. 本書における遺構実測図の用例は、次の通りである。

- (1) 方位 図中の方位は真北を示す。方位記号がないものは、図の真上を真北とする。
- (2) 縮 尺 挿図のスケール右脇に示したが、原則として竪穴住居跡 1/40・1/50，掘立柱建物跡 1/50，土坑 1/40とし，その他の遺構は大きさに則して縮小した。
- (3) ケ バ 遺構内の傾斜部は∟の記号で表現し，相対的に緩斜面の部分には∟のケバを使用した。また，後世の攪乱部は∟の記号で表現した。
- (4) 土 層 遺構外堆積土は大文字のLとローマ数字で，遺構内堆積土は小文字のℓと算用数字で示した。
(例) 遺構外堆積土・・・L I・L II 遺構内堆積土・・・ℓ 1・ℓ 2
- (5) 標 高 挿図中に示した標高は，東京湾平均海水面からの海拔高度を示す。
- (6) 網 点 遺構図で使用した網点は各挿図中に用例を表示した。
- (7) ピットの深さ 平面図のピット番号下には，() 内にピットの深さを示した。単位：cm。
- (8) 破 線 挿図の破線は推定線を示す。
- (9) 土 色 名 挿図の土層注記において使用した土色名は、『新版標準土色帖』に記された色調に基づいている。

2. 本書における遺物実測図の用例は、次の通りである。

- (1) 縮 尺 率 挿図のスケール右脇に示したが，原則として土器・土製品は1/3または2/5，石器・石製品は2/3または1/3で採録した。
- (2) 土 器
 - a. 繊維混入の土器は断面に黒三角印で表示した。
 - b. 須恵器は断面を墨染とした。
 - c. 土師器の黒色処理は実測図に網点で表示した。
 - d. 粘土紐の積み上げ痕は，断面に一点鎖線を入れて表示した。
 - e. その他の網点等の用例は各挿図中に表示した。
 - f. 計測値は実測図の下に表示した。推定値は() 内に表示し，遺存値は< >内に表示した。
- (3) 石器・石製品
 - a. 網点等の用例は各挿図中に示した。
 - b. 計測値は実測図の下に表示した。推定値は() 内に表示し，遺存値は< >内に表示した。
- (4) 遺 物 番 号
 - a. 遺物番号は挿図ごととし，本文中では下記のように省略して表記した。
(例) 図1の2番の遺物・・・図1-2
 - b. 遺物写真の中で遺物に付けた番号は，挿図中の遺物番号と一致する。

(例) 1 - 2・・・図 1 - 2

3. 本文中および遺物整理に使用した略記号は次の通りである。

富岡町……TO 上郡B遺跡……KKR・B 本町西A遺跡……MMN・A
竪穴住居跡……SI 掘立柱建物跡……SB 木炭窯跡……SC 焼土遺構……SG
溝跡……SD 土坑……SK 集石遺構……SS ピット……P
風倒木痕……F グリッド……G 遺構外堆積土…L 遺構内堆積土…ℓ

4. 引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略し、各編ごとにまとめて収めた。

目 次

序 章

第1節 調査にいたる経過	1
第2節 遺跡の位置と自然環境	3
第3節 周辺の遺跡と歴史的環境	5

第1編 上郡B遺跡

第1章 遺跡の環境と調査経過	11
第1節 位置と地形	11
第2節 調査経過	11
第3節 調査方法	13
第2章 遺構と遺物	16
第1節 基本土層	16
第2節 竪穴住居跡	18
1号住居跡 (18)	
第3節 掘立柱建物跡	20
1号建物跡 (21) 2号建物跡 (21) 3号建物跡 (24)	
第4節 木炭窯跡	26
1号木炭窯跡 (26) 2号木炭窯跡 (28) 3号木炭窯跡 (30)	
第5節 土 坑	32
1号土坑 (32) 2号土坑 (32) 3号土坑 (32) 4号土坑 (34)	
5号土坑 (34) 6号土坑 (35) 7号土坑 (36)	
第6節 集石遺構	36
1号集石遺構 (36)	
第7節 溝 跡	37
1号溝跡 (37)	
第8節 ピット群	38
第9節 遺構外出土遺物	44
第3章 ま と め	50

第2編 本町西A遺跡

第1章 遺跡の環境と調査経過	55		
第1節 遺跡の位置と地形	55		
第2節 調査経過	55		
第3節 調査方法	58		
第2章 遺構と遺物	60		
第1節 遺跡の概要と基本土層	60		
第2節 竪穴住居跡	63		
1号住居跡 (64)	2号住居跡 (69)	3号住居跡 (73)	4号住居跡 (78)
5号住居跡 (82)	6号住居跡 (85)	7号住居跡 (88)	8号住居跡 (91)
第3節 掘立柱建物跡	93		
1号建物跡 (93)	2号建物跡 (98)		
第4節 土坑	101		
1号土坑 (101)	2号土坑 (101)	3号土坑 (102)	4号土坑 (102)
5号土坑 (103)	6号土坑 (105)	7号土坑 (106)	8号土坑 (106)
9号土坑 (107)	10号土坑 (107)	11号土坑 (108)	12号土坑 (108)
13・34号土坑 (108)	14号土坑 (111)	15号土坑 (111)	16号土坑 (111)
17号土坑 (112)	18号土坑 (113)	19号土坑 (113)	20号土坑 (113)
21号土坑 (115)	22号土坑 (115)	23号土坑 (116)	24号土坑 (116)
25号土坑 (117)	26号土坑 (117)	27号土坑 (118)	28号土坑 (118)
29号土坑 (120)	30号土坑 (120)	31号土坑 (120)	32号土坑 (125)
33号土坑 (127)			
第5節 その他の遺構	127		
1号焼土遺構 (127)	2号焼土遺構 (128)	グリッドピット (128)	
第6節 遺構外出土遺物	130		
第3章 考察	154		
第1節 遺物について	154		
第2節 遺構について	163		
第3節 まとめ	166		

付編 自然科学分析

付編1 福島県富岡町上郡B遺跡出土の炭化材の樹種同定	231
付編2 福島県富岡町本町西A・上本町G遺跡出土縄文土器・中世陶器の蛍光X線分析	235

挿 図 目 次

序 章

- 図 1 常磐自動車道位置図…………… 1
図 2 富岡町域の段丘区分図と調査遺跡…… 4
図 3 富岡町所在の遺跡…………… 6

第 1 編 上郡 B 遺跡

- 図 1 上郡 B 遺跡グリッド設定と調査位置図…14
図 2 遺構配置図……………15
図 3 基本土層図……………17
図 4 1号住居跡……………19
図 5 1号住居跡出土遺物……………20
図 6 1号建物跡……………22
図 7 2号建物跡と出土遺物……………23
図 8 3号建物跡と出土遺物……………25
図 9 1号木炭窯跡……………27
図10 2号木炭窯跡……………29
図11 3号木炭窯跡と出土遺物……………31
図12 1～3号土坑と出土遺物……………33
図13 4～7号土坑……………35
図14 1号集石遺構と出土遺物……………37
図15 1号溝跡……………38
図16 I区ピット群……………39
図17 II区ピット群……………41
図18 II区ピット群断面図……………42
図19 P22・25と出土遺物……………43
図20 遺構外出土遺物分布図……………45
図21 遺構外出土遺物……………47
図22 伏焼法タイプの木炭窯跡の類例……………51

第 2 編 本町西 A 遺跡

- 図 1 本町西 A 遺跡調査区位置図……………56
図 2 国土座標とグリッドの関係……………59
図 3 本町西 A 遺跡遺構配置図……………61
図 4 基本土層……………62
図 5 1号住居跡（1）……………65
図 6 1号住居跡（2）……………66
図 7 1号住居跡出土遺物……………68
図 8 2号住居跡……………70
図 9 2号住居跡・出土遺物……………71
図10 3号住居跡（1）……………74
図11 3号住居跡（2）……………75
図12 3号住居跡出土遺物……………77
図13 4号住居跡（1）……………79
図14 4号住居跡（2）……………80
図15 4号住居跡出土遺物……………81
図16 5号住居跡・出土遺物……………83
図17 6号住居跡……………85
図18 6号住居跡出土遺物……………87
図19 7号住居跡・出土遺物……………89
図20 8号住居跡・出土遺物……………92
図21 1号建物跡（1）……………94
図22 1号建物跡（2）……………95
図23 1号建物跡出土遺物……………97
図24 2号建物跡……………99
図25 1～5号土坑……………104
図26 6～14・34号土坑……………110
図27 15～21号土坑……………114
図28 22～28号土坑……………119
図29 29～33号土坑……………121
図30 土坑出土遺物（1）……………122
図31 土坑出土遺物（2）……………123
図32 土坑出土遺物（3）……………124
図33 土坑出土遺物（4）……………125
図34 土坑出土遺物（5）……………126
図35 1・2号焼土遺構……………128
図36 グリッドピット……………129
図37 遺構外出土土器分布図（1）……………131
図38 遺構外出土土器分布図（2）……………132
図39 遺構外出土遺物（1）……………135
図40 遺構外出土遺物（2）……………136

図41 遺構外出土遺物 (3) ……………137	図49 遺構外出土遺物 (11) ……………147
図42 遺構外出土遺物 (4) ……………138	図50 遺構外出土遺物 (12) ……………149
図43 遺構外出土遺物 (5) ……………140	図51 遺構外出土遺物 (13) ……………150
図44 遺構外出土遺物 (6) ……………141	図52 遺構外出土遺物 (14) ……………152
図45 遺構外出土遺物 (7) ……………143	図53 遺構外出土遺物 (15) ……………153
図46 遺構外出土遺物 (8) ……………144	図54 遺構外出土縄文・弥生土器の割合 ……154
図47 遺構外出土遺物 (9) ……………145	図55 野島式土器の類例 ……………156
図48 遺構外出土遺物 (10) ……………146	図56 竪穴住居跡の平面規模 ……………164

付編 2

図 1 クラスタ分析の結果 ……………236	図 3 未分類試料と中世陶器の両分布図 ……237
図 2 A・B・C群の両分布図 ……………236	

表 目 次

序 章

表 1 平成12年度調査遺跡一覧…………… 2	表 2 富岡町所在の遺跡一覧…………… 7
-------------------------	-----------------------

第 1 編 上郡 B 遺跡

表 1 出土土師器一覧……………48	表 2 ピット一覧……………49
--------------------	------------------

第 2 編 本町西 A 遺跡

表 1 グリッドピット一覧 ……………130

付編 1

表 1 上郡 B 遺跡における樹種同定結果 ……232

付編 2

表 1 分析試料一覧 ……………238

序 章

第1節 調査にいたる経過

平成11年度までの調査経過

常磐自動車道は、埼玉県三郷市を起点として、茨城県・福島県浜通り地方を縦貫して宮城県に至る、太平洋沿岸の交通の大動脈として計画された路線である。この計画の内、三郷インターチェンジ（以下ICと略す）からいわき市のいわき中央ICまでは、昭和63年に供用が開始され、さらに、いわき中央ICからいわき四倉ICまでは平成11年3月に供用を開始している。

これら供用が開始された区間の内、茨城県境からいわき中央ICまでの間に所在する埋蔵文化財に関しては、昭和59・60年にいわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して4遺跡について発掘調査を実施した。いわき中央IC～いわき四倉IC間の埋蔵文化財に関しては、平成6年から9年まで好間～平赤井・平窪地区の10遺跡の発掘調査をいわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して実施し、四倉町大野地区の10遺跡の発掘調査を福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター（現 財団法人福島県文化振興事業団）に委託して実施した。

いわき四倉IC以北の路線については、平成3年にいわき四倉IC～富岡IC間が整備計画路線に格上げされ、平成5年には施工命令が下されている。さらに富岡IC以北についても、平成8年に相馬ICまでの区間が整備計画路線となり、平成10年に施工命令が下されている。

福島県教育委員会では、いわき四倉IC以北の路線内に所在する埋蔵文化財に関して、平成6年度より表面調査を実施し、平成10年度までに宮城県境までの表面調査を終了している。この成果を受けて、平成7年度よりいわき四倉IC～富岡IC間の試掘調査を実施し、平成9年度からは同区間に所在する遺跡の発掘調査が開始されている。平成9年度はいわき市内の5遺跡と広野町内の1

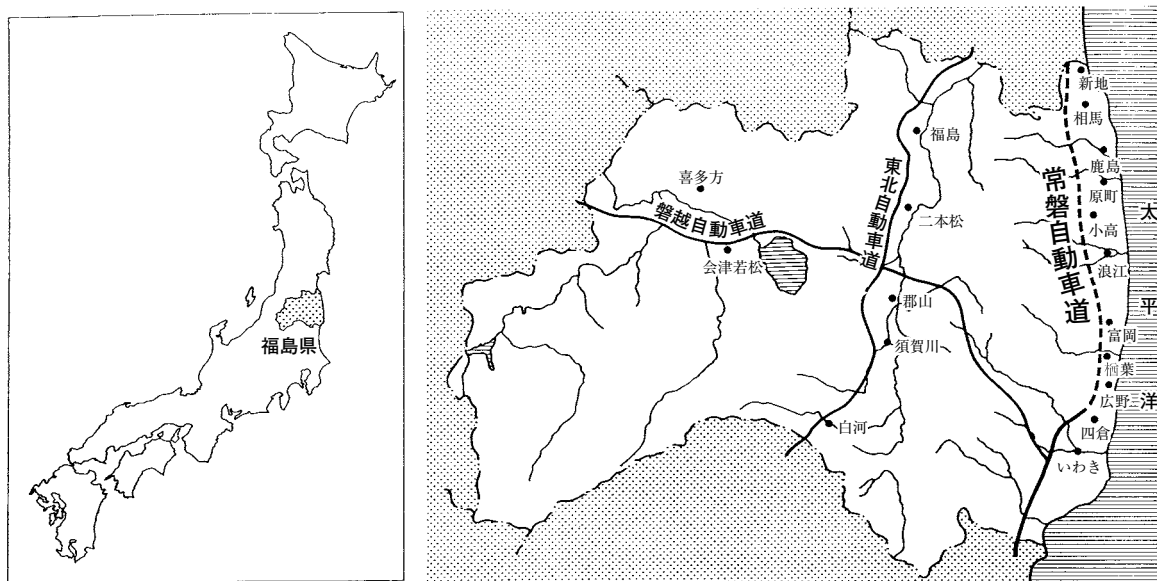


図1 常磐自動車道位置図

序 章

遺跡の発掘調査を実施し、平成10年度はいわき市内の4遺跡、広野町内の3遺跡、楢葉町内の3遺跡、富岡町内の2遺跡の発掘調査を実施した。この平成10年度の調査により、路線内に所在する遺跡の内、いわき市内に所在する遺跡の発掘調査を全て終了した。平成11年度は、広野町内の4遺跡、楢葉町内の5遺跡について実施した。なお、福島県教育委員会では、表面調査・試掘調査・発掘調査を財団法人福島県文化センター（現 財団法人福島県文化振興事業団）に委託してきた。

平成12年度の調査経過

平成12年度の常磐自動車道関連の遺跡発掘調査は、調査員34名の体制で開始した。調査対象地は、第12次区間の双葉郡広野町から富岡町までである。

発掘調査に先立ち、4月上旬から富岡町内で新たに発掘調査が予定されている遺跡の条件整備状況の確認を行うとともに、連絡所・駐車場等用地借り上げ、連絡所設置などの準備作業を進めた。また、現町道下を対象とする上田郷Ⅵ遺跡では、町道の迂回工事が行われた。

調査は4月17日から広野町上田郷Ⅵ遺跡、楢葉町馬場前遺跡・大谷上ノ原遺跡、富岡町本町西A遺跡・上本町F遺跡、1日遅れて4月18日に楢葉町小埜城跡の6遺跡の発掘調査を開始した。この内、上田郷Ⅵ遺跡・小埜城跡は3次調査、馬場前・大谷上ノ原遺跡はそれぞれ2次調査と、継続調査が多いこともあり、順調に展開した。5月19日には狭長な上田郷Ⅵ遺跡の調査を終了した。

5月に入り、新たに楢葉町小山B遺跡と富岡町上本町G遺跡の発掘調査を開始した。小山B遺跡は水田に挟まれた場所にあり、水路に留意しながらの調査となった。また、上本町G遺跡では一般道路から入り込んだ不便な場所にあるため、調査に先行し、路線内に作業員通勤用通路を確保ののち、連絡所設置・駐車場造成などの準備作業を行った。また、同遺跡は、深い沢に挟まれており、沢に泥水が流れないようにする沈砂・土留め処置にも留意した。小山B遺跡からは木戸川自然堤防上に立地する平安時代の集落跡、上本町G遺跡からは縄文時代前期の集落跡が検出された。

6月からは、楢葉町鍛冶屋遺跡3次調査と、富岡町上郡B遺跡の発掘調査を開始した。上郡B遺跡は遺跡内に比高差の大きな段丘崖を挟んで発掘調査区が二分されるため、上位面の発掘調査を先行させた。上郡B遺跡上位面からは古墳時代前期の住居跡が検出された。また、4月に調査を開始した楢葉町大谷上ノ原遺跡について、6月14日に発掘調査の終了した北側部分を引き渡すとともに、新たに工区変更に伴う南東側1,600㎡の追加発掘調査を行うこととなった。大谷上ノ原遺跡からは、

表1 平成12年度調査遺跡一覧

遺 跡 名	所 在 地	調 査 面 積	時 代	所 収 報 告 書 名
上田郷Ⅵ遺跡	広野町上北迫字上田郷	700㎡	縄文	常磐自動車道遺跡調査報告22
小埜城跡	楢葉町上小埜字正明寺他	5,500㎡	縄文・平安・中世・近世	常磐自動車道遺跡調査報告27
鍛冶屋遺跡	楢葉町上小埜字根子原他	6,200㎡	縄文・平安・中世	常磐自動車道遺跡調査報告28
馬場前遺跡	楢葉町上小埜字馬場前他	18,740㎡	縄文・奈良・平安・中近世	常磐自動車道遺跡調査報告29
小山B遺跡	楢葉町上小埜字地藏堂	4,560㎡	平安・中世	常磐自動車道遺跡調査報告30
大谷山根遺跡	楢葉町大谷字山根	600㎡	奈良・平安	常磐自動車道遺跡調査報告31
大谷上ノ原遺跡	楢葉町大谷字上ノ原	10,600㎡	旧石器・縄文・平安	常磐自動車道遺跡調査報告31
二枚橋遺跡	楢葉町上繁岡字二枚橋	3,200㎡	縄文・平安	常磐自動車道遺跡調査報告31
上繁岡山根遺跡	楢葉町上繁岡字山根	5,100㎡	縄文・平安・中世・近世	常磐自動車道遺跡調査報告31
上郡B遺跡	富岡町上郡山字上郡	3,140㎡	古墳・平安	常磐自動車道遺跡調査報告32
本町西A遺跡	富岡町本岡字本町西	6,800㎡	旧石器・縄文・中世	常磐自動車道遺跡調査報告32
上本町G遺跡	富岡町本岡字上本町	14,100㎡	縄文・平安	常磐自動車道遺跡調査報告33
上本町F遺跡	富岡町本岡字上本町	7,000㎡	縄文・平安・中世	常磐自動車道遺跡調査報告33
日南郷遺跡 (確認調査)	富岡町上手岡字日南郷他	7,600㎡ (※2,840㎡含)	縄文	常磐自動車道遺跡調査報告33

1次調査に引き続き旧石器時代の石器群が検出された。

7月には、楢葉町鍛冶屋遺跡と小山B遺跡の部分的な拡張範囲について、関係機関協議の結果、追加発掘調査を実施することとなった。鍛冶屋遺跡からは、平安時代・中世の集落跡に加えて、南斜面から縄文時代後期の集落跡が検出された。

8月11日には富岡町本町西A遺跡の発掘調査が終了し、現地引き渡しを行った。本町西A遺跡からは縄文時代前期の集落跡の他、中世の建物跡も検出された。また、富岡町上郡B遺跡では段丘崖より下位面の発掘調査に入った。

9月には、楢葉町小塙城跡・大谷上ノ原遺跡、富岡町上郡B遺跡・上本町G遺跡・上本町F遺跡の発掘調査が相次いで終了し、現地引き渡しを行った。引き続き、楢葉町二枚橋遺跡・上繁岡山根遺跡の発掘調査を開始した。この頃になると、楢葉町馬場前遺跡では、大規模な縄文時代の集落跡は知られるところであったが、その上面に奈良～平安時代の集落跡、さらに、その上面に中～近世村落の遺構がおびただしく検出された。この調査を進めるため総力を挙げて対応した。その結果、町道中島－高田線の南側と、北側の中～近世村落跡については、調査を終了することができた。

10月には楢葉町鍛冶屋遺跡・小山B遺跡・二枚橋遺跡の発掘調査が終了し、現地引き渡しを行った。二枚橋遺跡は戦後の農地構造改善事業により大きく削平を受けて、遺構の遺存状態が良くなかったため、発掘調査が予定より早く進行した。また、同月初旬に楢葉町大谷山根遺跡と富岡町日南郷遺跡の発掘調査を開始した。

11月には楢葉町大谷山根遺跡・上繁岡山根遺跡の発掘調査が終了し、現地引き渡しを行った。また、富岡町日南郷遺跡は、次年度に予定されていた発掘調査範囲について確認調査を実施した。

12月の初旬には富岡町日南郷遺跡の発掘調査・範囲確認調査が終了し、12月20日には楢葉町馬場前遺跡の発掘調査も終了した。なお、馬場前遺跡では、町道中島－高田線より北側4,500㎡の文化層2面（平安時代と縄文時代の文化層）が次年度調査となったため、シートによる養生を行った。

第2節 遺跡の位置と自然環境

福島県は東北地方の最南端に位置し、面積は13,782km²である。これは北海道・岩手県について全国で3番目に広い。その内、およそ8割は山地で占められ、東部には太平洋に沿って阿武隈山地、中央部には磐梯・吾妻・安達太良を含む那須火山帯が通る奥羽山脈、西には越後山脈がせまっている。それらはほぼ南北に走っていて、県全体は西から会津地方・中通り地方・浜通り地方の三つに区分される。

上郡B遺跡・本町西A遺跡は、浜通り地方のほぼ中央部の双葉郡富岡町に所在する。町の面積は68.47km²で、東西約12km、南北約7kmと太平洋から標高400～600mの阿武隈山地にかけて東西に広がった土地をもち、約6割が山林で占められている。これは「富岡」の地名の由来からもうかがい知ることができる。諸説ある中で、「遠見ヶ丘」とする説があり、なだらかな丘が遠くから見えるの意と

伝えられている。

浜通り地方の気候は、太平洋岸式気候で夏季は涼しく、冬季は海洋の影響で暖かい。富岡町は、年平均気温が12.2℃で、夏は海風があるため涼しく、冬季は「空っ風」と呼ばれる強風が大きな特徴のひとつとなっている。また町の気象で顕著なものとしては、降水量の多いことが挙げられる。年間降水量は1,196mmを観測し、県内では雪の多い会津地方に比して少ないものの、他の地方よりは多い。秋季の9・10月に特に多く、これは台風や熱帯低気圧の影響によるところが大きい。概して、四季を通じてしのぎやすい温暖な気候といえる。

交通路は関東地方から宮城県仙台市方面へ通じるJR常磐線と国道6号線が南北に走っている。東西には県道36号線などが通っていて中通り地方へとつながっているが、いずれも険しい山道で峠越えは容易でない。集落はJR常磐線の町内に二つある富岡・夜の森両駅周辺を中心に発達している。また、周辺山地の緩斜面には比較的面積のまとまった牧場や牧草地が分布していて、集落もある程度各地に散在している。平成13年現在、建設中の常磐自動車道は、富岡町内では阿武隈山地の東縁を添う形で緩やかなS字カーブを描くルートをとっている。これは、比較的平坦な部分に建設されているJR常磐線や国道6号線のおよそ2～4km西を通ることになる。

富岡町の地形は、西から阿武隈高地・河岸段丘地帯・海岸低地の3地形に区分され、西高東低の浜通り地方特有の地形となっている。町の西部、太平洋から西へ約7km地点には、標高100mの等高線に沿うように双葉断層と立石逆断層の2つの断層が南北に縦走している。これらの断層によって地形は大きく区分される。2つの断層西側は阿武隈高地の東縁部で、富岡川や紅葉川などの大小の河川が険峻で樹枝状の溪谷を刻んでいる。断層の東側に入ると河床勾配は緩やかになり、河岸段丘地形を形成する。さらに町のほぼ中央を東流する富岡川流域両岸には沖積地が開け、水田・畑地な

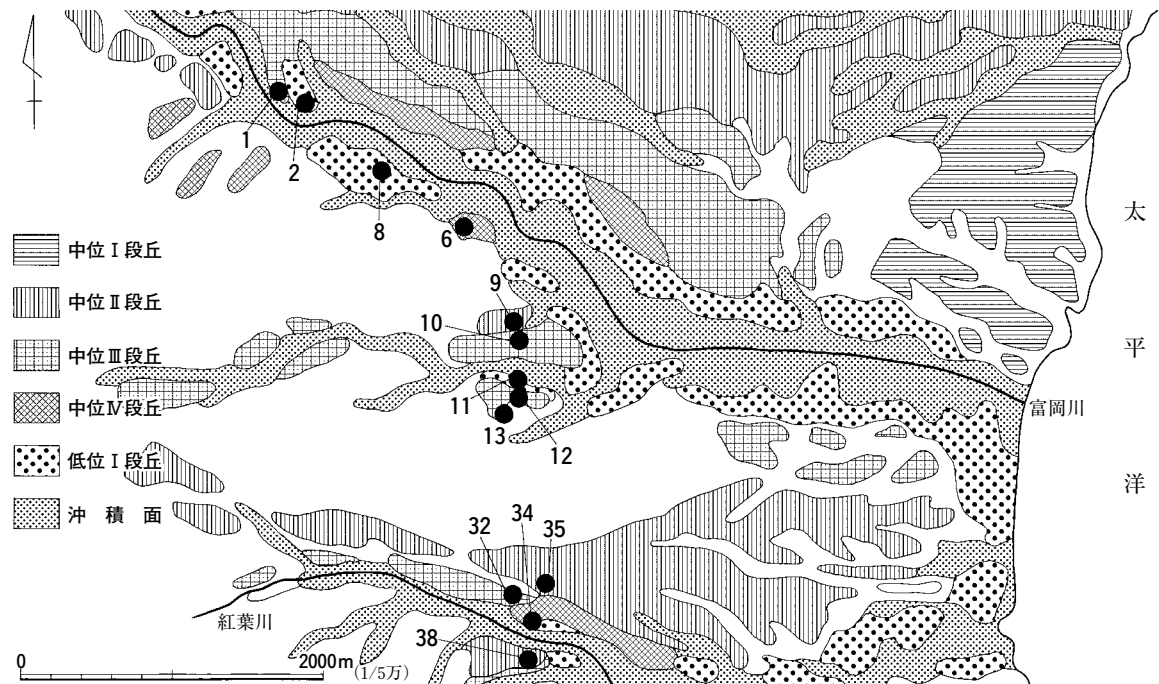


図2 富岡町域の段丘区分と調査遺跡 (久保ほか1994より、図中の遺跡Noは表2に対応する)

どに利用されているが、広大な平野部を形成するには至っていない。

また、富岡川を中心にこの一帯の地形を見た場合、南と北では景観が大きく異なっていることがわかる。両遺跡のある南側では、第三紀鮮新世の大年寺層を基盤とする段丘地形が続き、小河川によって樹枝状に解析された複雑な地形を示している。北側は上手岡地区から夜の森にかけて末広がり延びる平坦な段丘地形になっている。

これら富岡町内に広がる段丘面は標高の高いもの（年代の古いもの）から、中位Ⅰ・中位Ⅱ・中位Ⅲ・中位Ⅳ・低位Ⅰ段丘面と呼ばれている（久保他1994）。これらの段丘面の形成年代については、中位Ⅰ面が約13万年前、中位Ⅱ面は約11万年前、中位Ⅲ面は約9万年前、中位Ⅳ面は約7万年前、低位Ⅰ面は約1.8万年前と考えられている。この内、富岡町内には中位Ⅱ面と中位Ⅲ面が広い面積を占め、その大部分は隆起扇状地的な山麓河成平坦面である。中位Ⅳ面・低位Ⅰ面は富岡川や紅葉川沿いに細長く分布しているが、沖積面や基盤の露出する丘陵地によって随所に寸断されている。富岡町内の常磐自動車道調査遺跡の多くは、これら段丘面上に位置する（図2）。

地質構造をみると、浜通り地方の位置する阿武隈高地の東側は、グリーンタフ造山帯の外縁にあたり、花崗岩類を基盤としている。花崗岩類に伴出する有用鉱物は多目的に利用され、富岡町には嘉永6年（1853）より磁鉄鉱の採掘が始まった上手岡鉱山が存在し、海岸部には砂鉄などの分布も認められる。

（鈴木）

第3節 周辺の遺跡と歴史的環境

富岡町は、南双葉地方広域市町村圏の中核的な自治体であり、行政や経済等に関わる出先機関が設置されている。歴史的にみても、古代より地域の重要な位置にあったことがうかがわれる。富岡町で知られている最も古い時代の遺跡は、後期旧石器時代に溯る。本町遺跡からは頁岩製の細石刃核が、また日南郷遺跡の試掘調査では石刃が出土している。

縄文時代の遺跡は、富岡川沿いと紅葉川沿いに多く分布している。日南郷遺跡では、平成10年度の試掘調査により出土した搔器が草創期に属する可能性を有している。早期の土器は、本町西A・C遺跡、後作A遺跡より出土している。前期に属する土器は、本町遺跡・真壁城遺跡C地区・蛇谷須遺跡より出土し、本町西A・C各遺跡からは前期初頭の土器や遺構が検出された。中期の資料としては、日南郷・本町・滝の沢・蛇谷須遺跡より土器が、前山A遺跡からは集落跡が検出された。後期になると資料は増加し、蛇谷須・一本松・上ノ町B・上郡B遺跡よりこの時期の土器が多数検出されている。晩期の遺跡は、片倉遺跡のように低位段丘面上に立地するようになる例が多い。

弥生時代の遺跡は非常に少ない。確認されているのは、毛萱遺跡と真壁城跡A地区のみであり、毛萱遺跡からは、天神原式期の遺構と遺物が検出されている。ここで出土した土偶は類例が希少であり、特筆される資料である。

古墳時代になると、再び遺跡数が増えて来る。前期の遺構・遺物としては、毛萱遺跡・真壁城跡

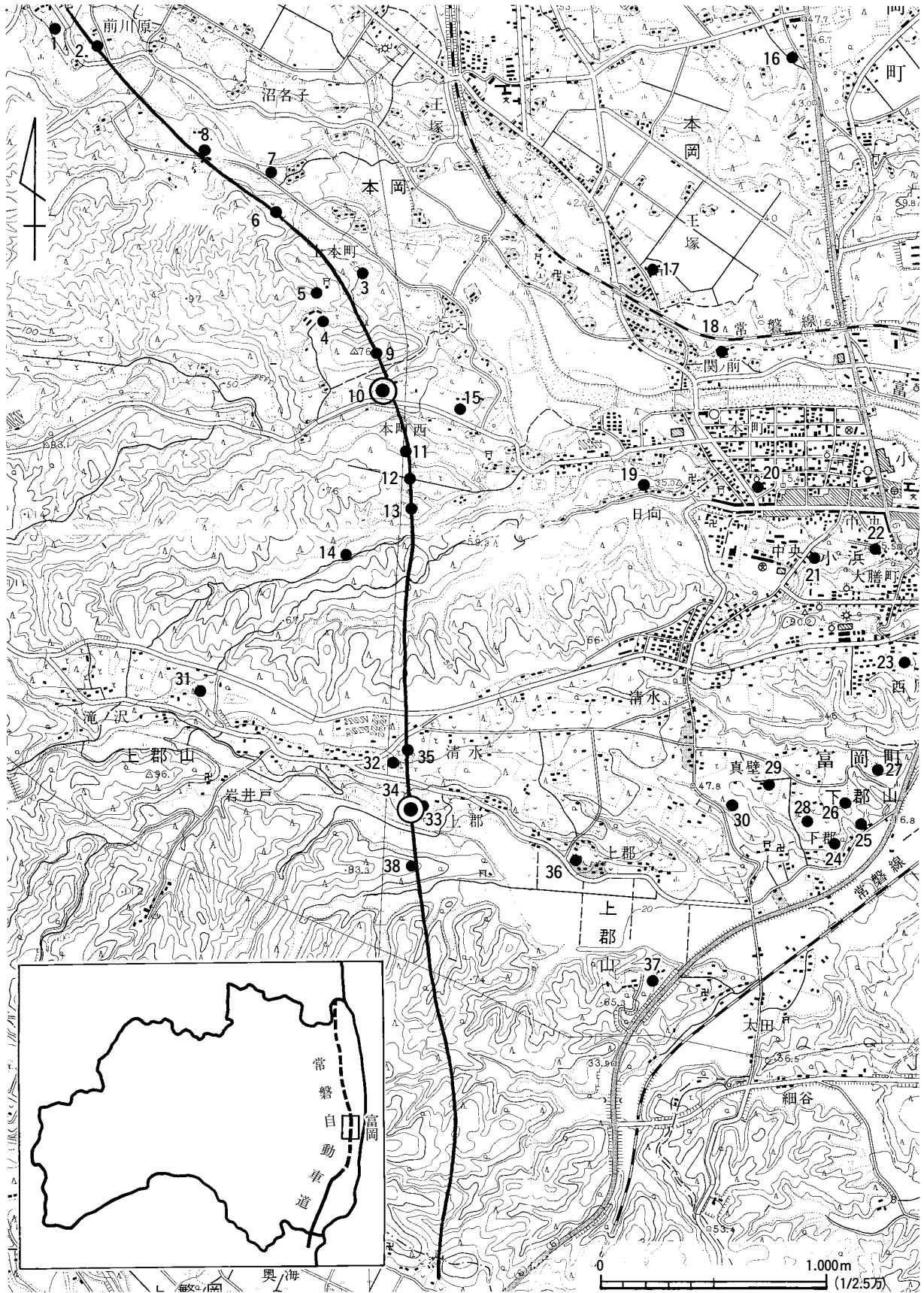


図3 富岡町所在の遺跡

(国土地理院 1/2.5万地形図 承認番号; 平13東複第369号)

表2 富岡町所在の遺跡一覧

No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要	備考	
1	54300008	平道地遺跡	富岡町上手岡字平道地	縄文・平安時代・近世の散布地	第2編所収	
2	54300052	前川原遺跡	上手岡字前川原	近世の散布地		
3	54300049	上本町A遺跡	本岡字上本町	奈良・平安時代の散布地		
4	54300061	上本町B遺跡	本岡字上本町	奈良・平安時代の散布地		
5	54300050	上本町C遺跡	本岡字上本町	社寺跡		
6	54300051	上本町D遺跡	本岡字上本町	縄文・奈良・平安時代の製鉄炉・散布地		
7	54300062	上本町E遺跡	本岡字上本町	縄文時代の散布地		
8	54300056	上本町F遺跡	本岡字上本町	縄文・平安時代・中世の散布地		
9	54300065	上本町G遺跡	本岡字上本町	縄文時代の散布地		
10	54300009	本町西A遺跡	本岡字本町西	縄文時代の散布地		
11	54300047	本町西B遺跡	本岡字本町西	奈良・平安時代の散布地		
12	54300046	本町西C遺跡	本岡字本町西	縄文・奈良・平安時代の散布地		
13	54300045	本町西D遺跡	本岡字本町西	縄文・奈良・平安時代の散布地		
14	54300044	本町西E遺跡	本岡字本町西	縄文・奈良・平安時代の散布地		
15	54300048	本町西F遺跡	本岡字本町西	縄文時代の散布地		
16	54300011	新田町一里塚	本岡字新夜ノ森	近世の塚		
17	54300012	王塚古墳	本岡字王塚	古墳		
18	54300013	関根遺跡	本岡字関ノ前	縄文時代の散布地		
19	54300016	日向館跡	本岡字本町	中世の城館跡		
20	54300017	本町遺跡	本岡字本町	古墳・平安時代の散布地		
21	54300018	上の町A遺跡	小浜字中央	縄文時代の散布地		
22	54300038	大作横穴墓群	小浜字中央	古墳		
23	54300023	西原A遺跡	仏浜字西原	古墳時代の散布地		
24	54300034	真壁城跡A地区	下郡山字真壁	中世の城館跡		
25	54300030	真壁城跡B地区	下郡山字真壁	中世の城館跡		
26	54300029	真壁城跡C地区	下郡山字真壁	中世の城館跡		
27	54300028	真壁城跡D地区	下郡山字真壁	古墳時代・中世の城館跡		
28	54300035	真壁F遺跡	下郡山字真壁	古墳 平安時代の散布地		
29	54300027	下郡山古墳群	下郡山字真壁	古墳		
30	54300026	清水一里塚	上郡山字清水	近世の塚		
31	54300021	滝の沢遺跡	上郡山字滝の沢	縄文時代の散布地		
32	54300059	岩井戸東遺跡	上郡山字岩井戸	奈良・平安時代・近世の散布地		
33	54300058	上郡A遺跡	上郡山字上郡・清水	縄文・奈良・平安時代の散布地		第1編所収
34	54300060	上郡B遺跡	上郡山字上郡	縄文・古墳・平安時代の散布地		
35	54300057	清水遺跡	上郡山字清水	奈良・平安時代の散布地		
36	54300032	一本松遺跡	上郡山字上郡	縄文時代の散布地		
37	54300037	上郡山館跡	上郡山字太田	中世の城館跡		
38	54300063	前山A遺跡	上郡山字前山	縄文時代の散布地		

A地区などから検出され、中期になると、小浜古墳群が確認されている。また、王塚古墳・真壁古墳では、墳丘が残されている。7世紀になると、真壁城跡A地区からは集落跡が検出され、さらに佛浜横穴群・清水尻横穴群・小浜横穴群・大作横穴などの横穴群が確認されている。横穴墓群の出現は、檜葉町や大熊町などと軌を一にしている。富岡町や檜葉町周辺は、『国造本紀』によれば、「道尻岐閉国」と呼ばれており、5世紀後半代の富岡には、円墳を築くような地域的な支配者層が形成されていたことになる。

奈良・平安時代になると遺跡数はさらに増加する。富岡川右岸の段丘面上や双葉断層東側、市街地南の太平洋に張り出した丘陵、紅葉川流域より多くの遺跡が確認されている。

富岡町の奈良・平安時代を代表する遺跡としては、小浜代遺跡が挙げられよう。奈良三彩陶器は東北地方では初の出土となった。8世紀中～後葉頃のものとして推定される、埋込基壇を積み礎石を据えた瓦葺きの2棟の建物跡からは、鉄鉢様の椀形須恵器や奈良三彩陶器など、仏具的な遺物が出土していることから、官衙的性格を兼備えた寺院跡の可能性が高い。双葉郡内における官衙遺跡としては、双葉町の郡山五番遺跡が郡衙跡と推定されているが、小浜代遺跡の場合は多賀城跡や陸奥国分寺などとのより密接な繋がりが想定され、その特異な性格が浮き彫りとなっている。

富岡町における奈良・平安時代の生産基盤としては、稲作農耕が第一に挙げられる。毛萱から佛浜にかけては条里型地割りが今も残されている。その他、製鉄が行われていたことが上本町D遺跡の発掘調査で確認されている。

中世の遺跡としては、真壁城跡や毛萱館跡、上郡山館跡、小浜館跡、日向館跡、諸沢館跡、高津戸館跡、大菅館跡といった城館跡が残されている。

鎌倉幕府成立後は、三浦一族の和田氏が標葉郡の総地頭として檜葉方面までも統治した後、岩城一族の檜葉氏・標葉氏が双葉地方を実質支配した。岩城氏は平安時代末期に、開発領主として一族を各郡に分封し、源頼朝に従って所領安堵を得ている。富岡町は岩城・檜葉氏の勢力下にあり、在地小領主として富岡氏の記録がある。

近世では、平藩の鳥居氏・内藤氏の支配を受けた後、富岡町も含め檜葉郡は分断され、幕領・棚倉藩・多古藩、仙台藩預かりなどの支配を受けた。幕領の小浜代官島田帯刀については天保飢饉の際に農民救済を行った名代官として、檜葉・富岡両町に顕彰碑が残されている。近世の代表的遺跡としては、上手岡鉄山鋳炉跡がある。

(富 田)

参考文献

- | | |
|-----------|----------------------------|
| 久保 和也他 | 1994 『浪江及び磐城富岡地域の地質』 地質調査所 |
| 富岡町史編纂委員会 | 1987 『富岡町史 第三巻 考古・民俗編』 |
| 富岡町教育委員会 | 1990 『富岡町の文化財』 |
| 福島県教育委員会 | 1984 『福島県埋蔵文化財一覧表』 |
| 福島県教育委員会 | 1984 『福島県埋蔵文化財分布図』 |
| 福島県教育委員会 | 1996 『福島県遺跡地図 浜通り地方』 |

第1編 かみごおり 上郡B遺跡

遺跡記号 TO-KKR・B
所在地 双葉郡富岡町大字上郡山字上郡
時代・種類 縄文～古墳時代・平安時代 集落跡
調査期間 平成12年6月13日～9月20日
調査員 井 憲治・鈴木 広子・門脇 秀典

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 位置と地形

上郡B遺跡は、福島県双葉郡富岡町大字上郡山字上郡に位置する。遺跡のある富岡町は、福島県東部の「浜通り地方」に属し、南北に長いこの地方のほぼ中央部にあたる。北は大熊町を経て原町市・相馬市方面へと続き、南は常磐自動車道が延伸しつつある楢葉町・広野町、そしていわき市へ至る。西は阿武隈高地山間部の村である川内村と接し、東は太平洋に面している。

本遺跡が立地する上郡山地区は、富岡町の南端に位置し、楢葉町と接している。遺跡の北側には、県道いわき・浪江線と国道6号線を結ぶ、町道関名古・滝の沢線が東西に走る。この町道を挟んだ北東には上郡山多目的集会所があり、ここから約2.8km北東は富岡町役場・富岡警察署・中央商店街等の中心地となる。JR常磐線富岡駅までは東へ約3km、そして、南東約3kmには楢葉町にまたがる東京電力福島第二原子力発電所がある。また、西へ約1.5kmの谷あいには富岡町の奥座敷として知られる岩井戸鉱泉がある。

本遺跡周辺の地形は、仙台層群大年寺層を基盤とする段丘地形が続き、小河川によって樹枝状に開析された複雑な様相を示している。上郡B遺跡をはじめとする近隣の遺跡は、この河岸段丘上にある。本遺跡は、調査区の南境を東流する紅葉川の左岸、南向き斜面に位置する。遺跡の基底面を形成する基盤層は、中位Ⅱ段丘面から低位Ⅰ段丘面までの5面に分けることができる。本遺跡北側に所在する清水遺跡付近が最上位面に該当し、中位Ⅱ段丘面に相当する。清水遺跡と本遺跡の間に位置する岩井戸東遺跡は中位Ⅲ段丘面、本遺跡は中位Ⅳ～低位Ⅰ段丘面に相当する。また、本遺跡と紅葉川を挟んで南側にある前山A遺跡は、中位Ⅱ段丘面に相当する。

調査にあたっては、調査区が遺跡内で連続していないため、便宜上北側をⅠ区、南側をⅡ区と呼称した。Ⅰ区の標高はおよそ50m、Ⅱ区はおよそ35mで、比高差15mの崖線が東西に延びる。各調査区の基盤は、Ⅰ区が中位Ⅳ段丘面、Ⅱ区が低位Ⅰ段丘面に相当する。Ⅱ区の南端と紅葉川の標高差は約3mである。現在、遺跡の範囲に民家はまばらで、今回調査した区域の調査開始直前の状況は、山林と荒地であった。

(鈴木)

第2節 調査経過

上郡B遺跡は、平成6年度に福島県教育委員会が実施した表面調査で登録された遺跡である(福島県教育委員会1995)。土師器の散布地として32,700㎡が遺跡の推定範囲とされ、平成8年に試掘調査が行われた。その結果、縄文時代から古墳時代を主体とする集落跡の存在が指摘され、予定路線内における要保存面積は3,140㎡と確定された(福島県教育委員会1997)。平成12年度の調査は、予定路線

内の3,140㎡について福島県教育委員会から6月8日付けで指示書が提示された。

発掘調査に先立ち、日本道路公団東北支社いわき工事事務所富岡工事区長ならびに福島県教育委員会文化課立会のもと、調査区範囲や路線幅の確認、条件整備等について事前協議を行った。その結果、①調査区を南北に縦断する私道の付替え・迂回処置の件、②立木伐採後の搬出処理がされていないこと、③雇用作業員の人員不足などの問題点が挙げられた。このため、①の問題を解決すべく、付替え道路の設置を6月上旬に日本道路公団いわき工事事務所ならびに福島県教育委員会文化課の立会のもと行った。また、③については、近接する上本町F遺跡や本町西A遺跡の調査が先行して行われていることから、地元作業員の雇用が困難であったため、本町西A遺跡の調査が終了する8月上旬まで、いわき地区から作業員を雇用する運びとなった。②については、調査開始前に地権者が事前に搬出する運びとなった。前述の問題点の解決とともに、連絡所・駐車場・進入路・安全掲示板や標識旗掲揚塔の設置等を町道関名古・滝の沢線を挟む北側路線内に設けることとした。

今回の上郡B遺跡の調査は、条件整備が整った6月中旬から本格的な調査を開始した。調査区北側（I区）の上位段丘面の調査を先行させて行うこととし、基本土層Ⅱ層上面までの表土剥ぎは重機を用いて行った。作業員による手掘り作業を開始し、6月下旬には古墳時代前期の住居跡（S I 01）や古代の木炭窯跡（S C 01）などが検出された。その間、グリッド杭の設定と水準点の移動を随時行った。

7月上旬には、I区の掘り込み調査と併行して、下位段丘面（Ⅱ区）の重機による表土剥ぎを行った。Ⅱ区の表土剥ぎに際して、排土を東側部分に一時仮置きし、上位段丘面のI区西半部に随時搬出した。I区で設定したグリッド杭を延伸させ、水準点の移動を行った。

8月には、掘り込み作業も飛躍的に進み、上位段丘で認められた同様の木炭窯（S C 02・03）や掘立柱建物跡（S B 01～03）なども検出された。8月上旬以降、いわき地区作業員の解雇とともに、本町西A遺跡からの作業員を導入して調査に対応した。

お盆明けの8月後半には、下位段丘面のⅡ区を中心に掘り込み・精査作業が行われたが、旧沢部と考えられる北半部分では遺構や遺物が希少であった。9月上旬には遺構の検出作業もほぼ終盤となり、縄文後期後半（加曾利B式期頃）の資料も比較的まとまって出土するようになった。また、上本町F遺跡とともにラジコンヘリによる空中撮影を行った。

9月中旬には、全面的に遺構の検出面を下げ、遺構の再確認を行った。その後、地形測量を行い、町道隣接部分の危険地帯について、縄張りを行った。また、本遺跡の調査終了間際には、上繁岡山根遺跡の調査区範囲の確認や下草刈りなど、条件整備等を合わせて行った。9月20日には、発掘器材を楢葉町上繁岡山根遺跡へ搬出し、プレハブ・トイレなどの撤収作業も行い調査の全行程を完了させた。

10月17日には、日本道路公団いわき工事事務所、福島県教育委員会文化課、福島県文化センター遺跡調査課の関係職員で調査終了状況を確認し、引き渡しを行った。 (井)

第3節 調査の方法

上郡B遺跡の調査にあたっては、国土座標（公共座標第Ⅸ系）に基づいて、調査区全域に10mの方眼を単位とするグリッドを設定し、その起点となる座標を調査区外南西側のX：147,200・Y：102,800に定めた。グリッドについては、起点の座標から東西方向に西から東にA・B・C・・・と付したアルファベットと、南北方向に南から北に1・2・3・・・と付した算用数字とを組み合わせさせたA1・B2グリッド等の呼称を用いた。グリッド杭の打設にあたっては、日本道路公団が工区内に設置した2点の測量杭データを利用した。このデータはステーションNo236+80.000（X：147,481.574・Y：102,839.260）とNo236+20R（X：147,423.424・Y：102,864.371）である。上郡B遺跡の調査では、遺跡内で調査区が連続していない点や2枚の段丘面にまたがっていることを考慮し、便宜上北側の中位面をⅠ区、南側の低位面をⅡ区とした。今回の調査範囲は、Ⅰ区がE～G・18～26グリッド、Ⅱ区がC～G・9～15グリッドの範囲にまたがる（図1）。このグリッドとは別に、平面図作成に際して1mごとに水糸ラインを設ける必要があったため、国土座標に基づいた記載を行った。調査においては国土座標のXをN（北）に、YをE（東）に置換し、それぞれの座標の下3桁を使用している。つまり、起点の座標（X：147,200・Y：102,800）は、N200・E800となる。また、標高については、富岡町大字上郡山字清水220に所在する3級水準点（I-63号）の65.455mを基準とし、遺跡・遺構の測量を実施した。

上郡B遺跡の表土除去作業は、重機を用いて行った。この作業にあたっては、表土層の厚さが一定しないことや検出面の上位に遺物包含層が予想されたため、調査員の指示のもと、慎重にこれを実施した。排土は、工区範囲内のⅠ区西側に運搬した。その後、人力により遺構・遺物の検出作業を行った。この際に使用した道具は、草削り・唐鍬・移植ベラ等である。遺構の掘り込み作業にあたっては、各遺構の形状・大きさ、重複関係に留意して、土層観察用のベルトを設定した。竪穴住居跡は4分割法を用いた。土坑など小形の遺構については、長軸方向にベルトを設定した。木炭窯跡は長大であることから、平面形にあわせ随時ベルトを設定した。掘立柱建物跡については、掘形を平面的に2～3cm掘りくぼめ、柱痕の確認につとめた。その後、各側柱穴の柱痕の配列に留意して、掘形を半截した。遺構の掘り込みの際には、移植ベラ等を用いて行った。また、土層観察用のベルトは、写真撮影や実測などの記録を行ったのち、取り外した。

遺物の取り上げに際しては、次の点に留意した。遺構内からの出土遺物は、遺構名と層位名を付して、さらに出土位置を実測図に記録した遺物については、その採り上げNoを付した。遺構外出土遺物については、設定したグリッドごとに取り上げ、そのグリッド名と層位名を付した。なお層位名を付す際には、基本層位はローマ数字を用いてLⅠ・LⅡと表し、遺構内堆積層は算用数字を用いてℓ1・ℓ2と表した。

遺構の記録は、平面図と土層断面図を原則とし、基本的には1/20の縮尺で作成した。微細な出土

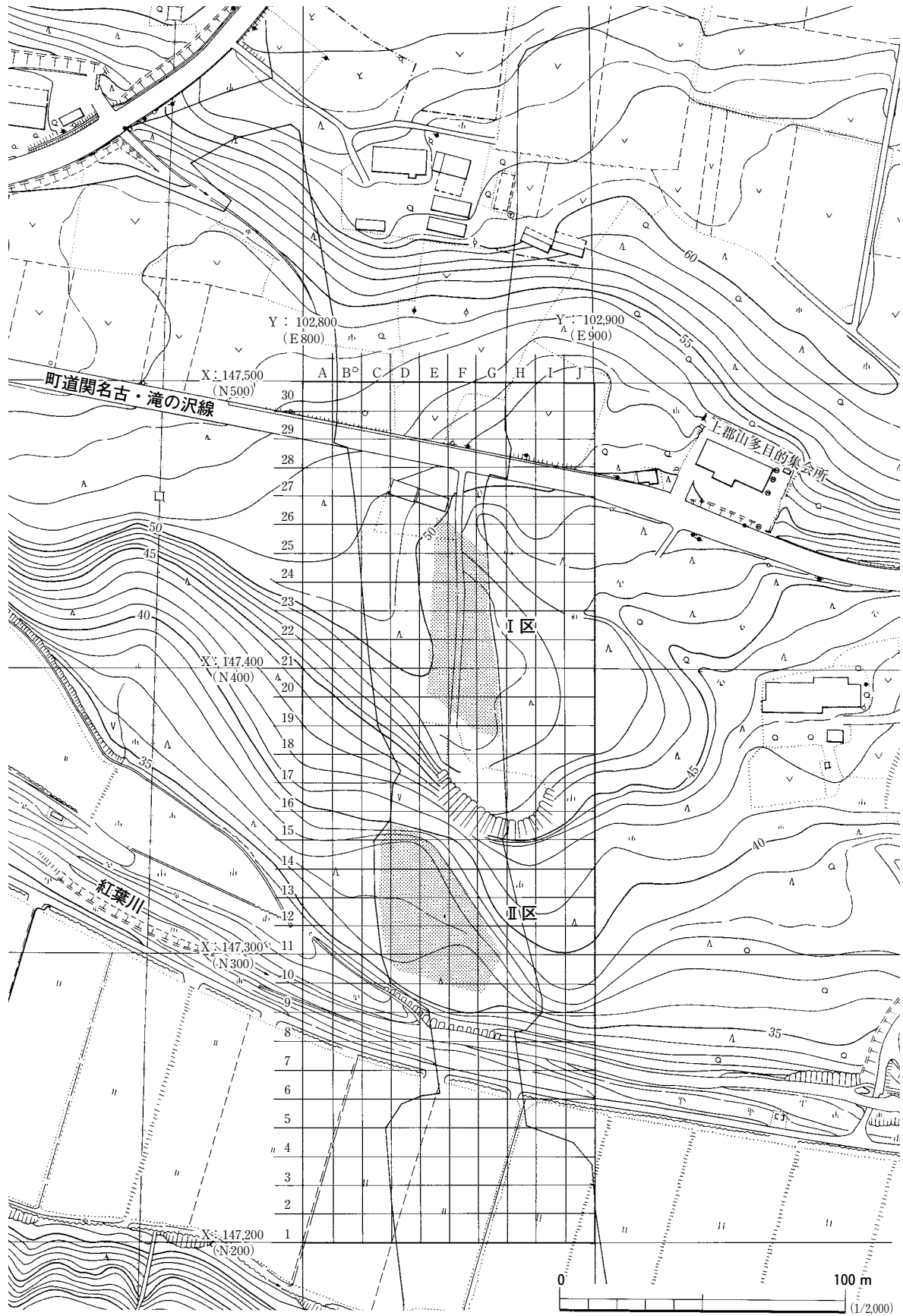


図1 上郡B遺跡グリッド設定と調査位置図

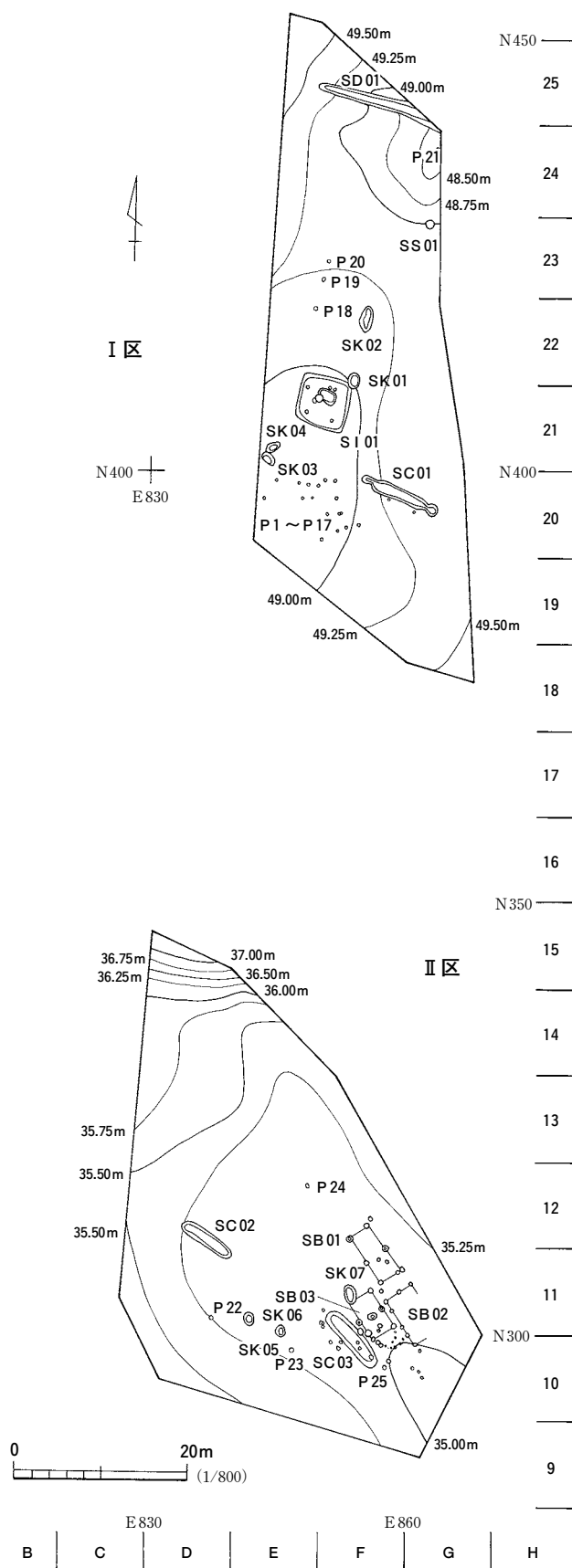


図2 遺構配置図

記録が必要となる場合は、1/10の縮尺で随時作成した。また、調査区内の地形図や遺構配置図は、1/200の縮尺で作成した。地形測量に際しては、平板を使用して25cmコンター図を作成した。

土層観察における色調の注記は、『新版標準土色帖』（小山・竹原1997）を用いた。

調査現場での写真撮影は、35mm小型一眼レフカメラと6×4.5判の中型一眼レフカメラを併用して行った。また、調査期間中、ラジコンヘリによる空中写真撮影を実施し、遺跡の全景や調査区の遺構の撮影を行った。（門 脇）

参考文献

小山正忠・竹原秀雄 1997 『新版標準土色帖（19版）』日本色研事業株式会社
 福島県教育委員会 1995 『福島県内遺跡分布調査報告1』
 福島県教育委員会 1997 『福島県内遺跡分布調査報告3』



II区作業風景

第2章 遺構と遺物

上郡B遺跡では、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡3棟、木炭窯跡3基、土坑7基、集石遺構1基、溝跡1条、ピット群を検出した。本遺跡の調査区は、比高差15mの段丘崖を隔ててⅠ区とⅡ区に分かれる。中位Ⅳ段丘面に位置するⅠ区には竪穴住居跡1軒、木炭窯跡1基、土坑4基、溝跡1条、集石遺構1基、ピット群が調査区内の平坦面に散漫に分布していた。低位Ⅰ段丘面に位置するⅡ区には掘立柱建物跡3棟、木炭窯跡2基、土坑3基、ピット群が調査区内の南半部を中心に分布していた(図2)。遺構内および遺構外から出土した遺物は、縄文土器片50点、弥生土器片2点、土師器片732点、須恵器片2点、土製品1点、石器類5点、それに時期不明の破片資料32点の総数824点である。また、表1には土師器のみについて法量・特徴等を掲載した。

第1節 基本土層

上郡B遺跡は、北側の中位Ⅳ段丘面(Ⅰ区)と南側の低位Ⅰ段丘面(Ⅱ区)に位置するため、両調査区の基本土層を対比させる必要があった。そこで両調査区境や調査区内に設置したグリッド杭の脇で土層観察を行い、それぞれ6地点で記録を行った(図3)。その結果、両調査区とも段丘面上に立地しているため、基本的な層相は類似しており、同じような堆積環境にあったと推察された。そこで調査では両調査区に共通する基本土層を定めた。

- LⅠ 表土。層厚は10~20cm程度、草根を含む、腐食土である。
- LⅡ 褐色土(10YR 4/6)。層厚15~30cm。段丘礫層に由来する真砂を含む。Ⅰ区・Ⅱ区の調査区全域に分布する。Ⅰ区南半部では炭化物粒を含んでいる。Ⅱ区の北側では崖錐性の堆積状況を見せ、礫を多く含んでいた。
- LⅢ a 黒褐色土(10YR 3/1)。層厚30cm。有機質の土壤で、炭化物を含む。締まりは弱く、粘性も低い。LⅢ bが土壤化したものと推察される。Ⅰ区では調査区北東部E23~24・F23~24グリッドに分布する。Ⅱ区では調査区全域に分布する。Ⅰ区・Ⅱ区とも南側に向かうほど層厚は薄くなり、Ⅰ区南半部では確認していない。
- LⅢ b 暗褐色土(10YR 3/3)。層厚10~30cm。有機質の土壤で、炭化物を含む。LⅢ aよりやや締まりがある。LⅣ塊を含んでいる。Ⅰ区ではLⅢ aの分布域より北側、E24・E25・F24・F25グリッドを中心に堆積している。Ⅱ区では調査区全域に分布している。
- LⅣ 黄褐色土(10YR 5/6)。遺構はこの層の上面で検出した。段丘礫層に由来する花崗岩礫が露出している箇所が認められ、下部に向かって礫層へと漸移的な変化を見せる。Ⅱ区では部分的に細砂を含んでいる。無遺物層である。(門脇)

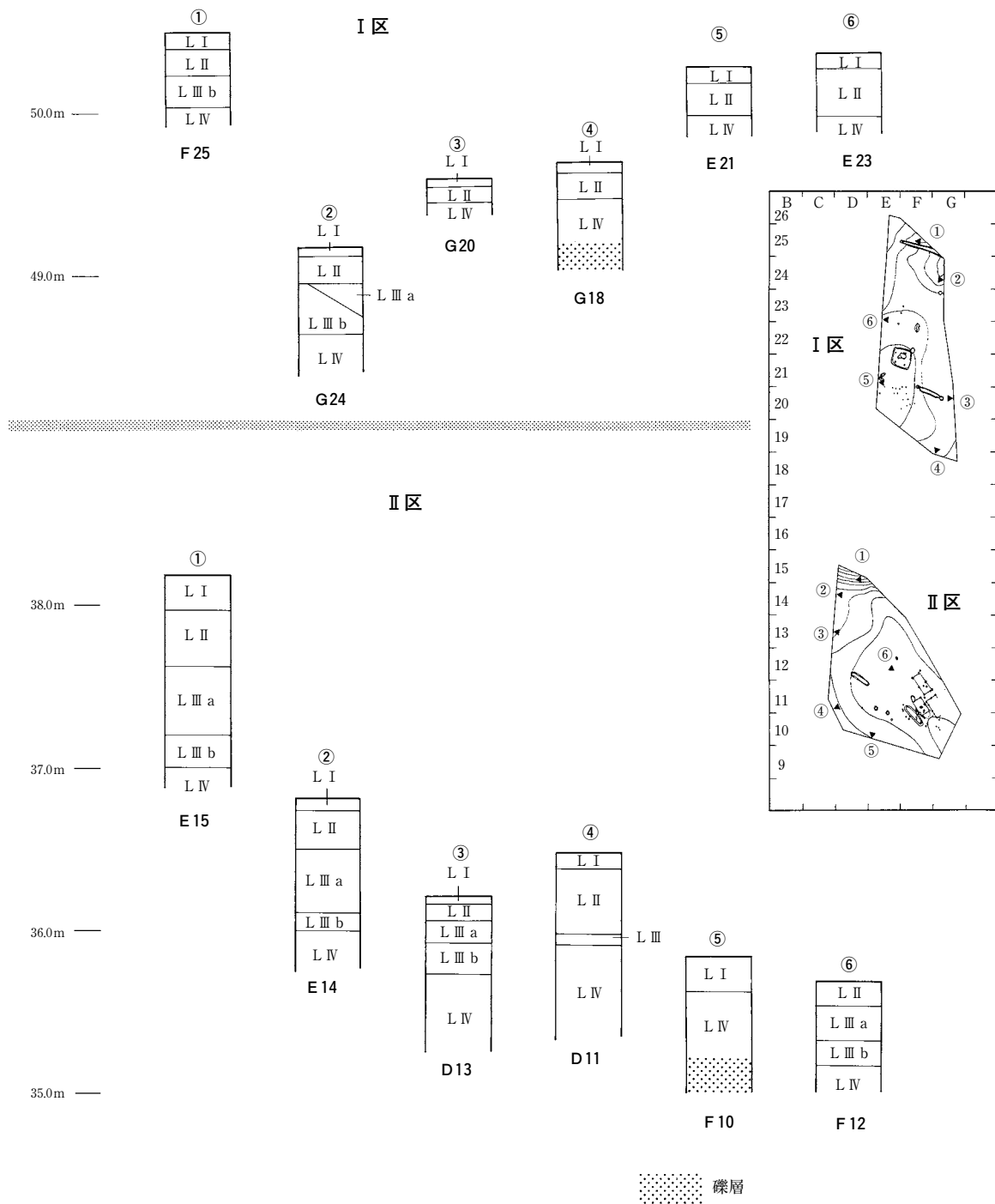


図3 基本土層

第2節 竪穴住居跡

1号住居跡 S I 01

遺 構 (図4, 写真3・4)

本住居跡は、I区中央部の南西寄り、E～F21・22グリッドに位置する。検出面はLIV上面である。重複関係は、北東隅で1号土坑と重複しており、本遺構の方が古い。遺構内堆積土は5層に分けられる。 $\ell 1$ は黒褐色土で、土色や含有物の特徴からLIIIbに起因するとみられる。その下位と外側に炭化物や礫を含む褐色土主体の $\ell 2$ が、遺構内全域に堆積している。 $\ell 3$ ～ $\ell 5$ は最も遺存状況の良い西壁付近に見られる堆積層で、壁際からの流れ込みが観察された。また、中央部がくぼむ堆積状況を考慮すると、本遺構の堆積土は自然の営利によるものと考えている。

遺構の平面形は隅丸方形を呈する。その規模は南北軸6.2m、東西軸6.1mと比較的大形である。南北軸はN10°Eを示す。周壁は西壁中央で52°、南壁中央で47°と緩やかに立ち上がっている。壁高は浅く、約15cmである。東壁付近は特に礫の分布が密で、平面形が東にやや張り出すことから、壁が崩落した可能性がある。

床面はおおむね平坦ではあるが、礫を多く含むLIVに構築されているために細かな凹凸がある。床面から検出したピットは、P1～8の8基である。P1～4・8はほぼ円形を呈するピットである。その内P1(直径50cm)・P2(直径50cm)・P3(直径45cm)は、その位置や深さから主柱穴の可能性が考えられる。P4(直径45cm)・P8(直径35cm)も平面形や深さから柱穴とみている。P5～7は中央やや北側に構築されたピットで、重複している。P5(直径70cm)は不整形円形である。P6は東側をP5に壊されているが、楕円形で長径は60cmを測る。P7は不整形長方形で長径180cm、短径120cmで南西部分をP5に壊されている。P5～7の性格については、不明である。

遺 物 (図5, 写真17)

本遺構からは、土師器片117点が出土した。出土遺物のうち、6点を図化した。1は $\ell 1$ から、2・4・6は $\ell 2$ から出土している。3は $\ell 1$ と $\ell 2$ 、5は $\ell 2$ とLII・III出土遺物が接合した資料である。出土遺物は、住居廃絶後の堆積過程で流れ込んだものである。

図5-1～6は土師器である。1はほぼ完形の椀である。外面は底部に横方向のナデが施され、口縁部付近ではわずかに粘土紐の積み上げ痕が残る。オサエと見られる調整が認められるが、不明瞭である。内面はヘラナデによる調整が底部中央から口縁部に向けて放射状に施されている。口唇部は非常に薄いつくりであるが、部分的に内側に折れ曲がっている状況が観察される。2・3はほぼ完形の小型丸底壺である。2の器面は摩滅が著しく調整の観察は難しいが、外面底部付近にわずかにヘラケズリが認められる。口縁部にはヨコナデらしき調整が認められるが、不明瞭である。内面には胴部～底部にかけて赤彩が認められる。3の外面はヨコナデを施した後、口縁部中ほどから頸部にかけて縦方向のハケメの後、さらに、胴部から底部にかけては横方向のハケメを丁寧にし

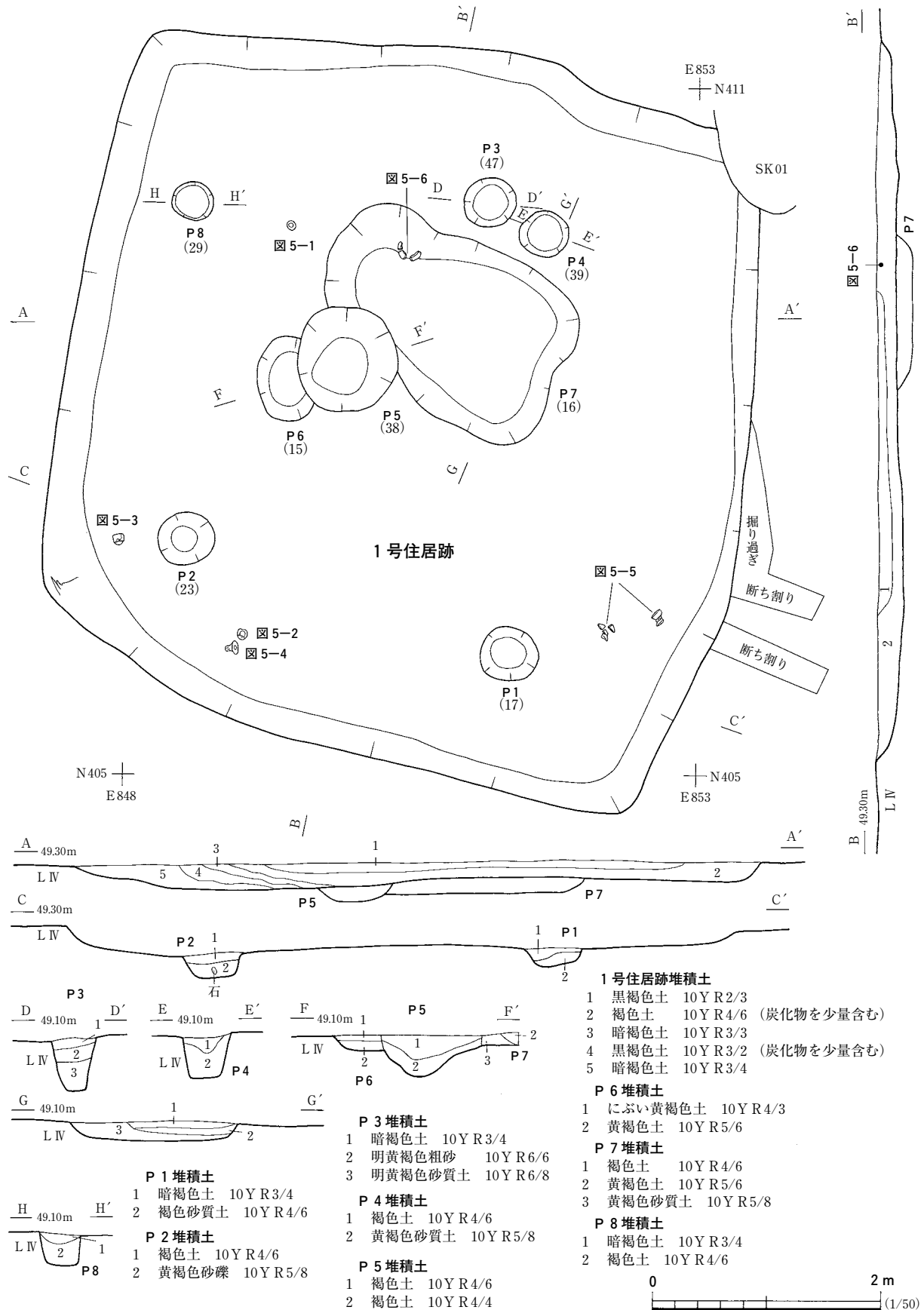


図4 1号住居跡

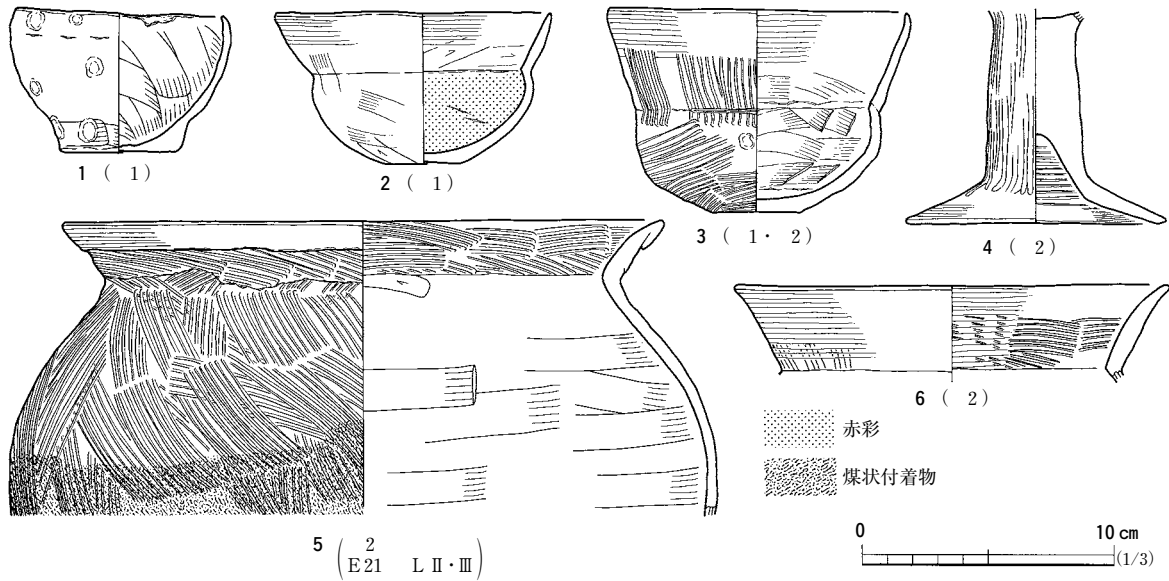


図5 1号住居跡出土遺物

ている。内面は底部から頸部にかけて横方向のヘラナデ、口縁部にはヨコナデ・ヘラナデが観察される。なお頸部の内外面および内面の底部付近には粘土紐の積み上げ痕が残る。4は高杯の脚部片である。外面は縦方向のヘラミガキ、脚据部の内面は横方向のヘラナデが認められる。その後、脚部内面をハケメ状の工具で円錐状に調整しているが、その意識はヘラナデに近いと推察される。5は甕もしくは壺の口縁部から胴部にかけての破片である。外面の調整は、まず頸部にハケメを入れた後、口縁部に粘土を付け足している。その次に粘土の上には横方向にハケメを、頸部から胴部にかけては斜め方向にハケメを施している。最後に口唇部を折り返し、ヨコナデによって仕上げている。内面の調整は頸部から胴部上位にかけてわずかながらケズリが、胴部には横方向のヘラナデが認められる。口縁部は、横方向のハケメによって仕上げている。また外面の胴部中位から下には煤状の付着物が認められる。6は甕の口縁部の破片である。外面の調整は頸部に縦方向のハケメを施した後、口縁部をヨコナデによって仕上げている。内面は横方向にハケメを施した後、口縁部をヨコナデにより仕上げている。

まとめ

本遺構は、隅丸方形を呈する竪穴住居跡である。床面やピットから出土した遺物はないが、 l 2より完形に近い土師器が比較的まとまって出土した。図示しなかった土師器甕の小破片についてもハケメによる調整技法を伴うものが多く、本住居跡の出土遺物は同時期の所産の可能性が高い。

本住居跡の所属年代は出土した遺物から判断して、古墳時代前期と考えられる。(門 脇)

第3節 掘立柱建物跡

本遺跡からはII区の南東部に集中して3棟の掘立柱建物跡が検出された。いずれも長辺の軸線は真北から西へ 35° 傾いている。

1号建物跡 S B01

遺 構 (図6・写真5)

本遺構はⅡ区南東部F11～12グリッドに位置し、LⅣ上面で検出した掘立柱建物跡である。遺構の重複関係はないが、南東方向の延長上に2号建物跡、そして南側には3号建物跡があり、本遺構と主軸方位(N35°W)をそろえている。検出面は南側に緩やかに傾斜しているものの、ほぼ平坦といえる。本遺構の北東側約5mで調査区境となり、それに沿って段丘崖の急斜面となる。この等高線の配列と本遺構および2・3号建物跡の主軸方位は並行している。

本遺構は1×2間の規模を有する側柱建物跡である。四隅の柱穴の芯々間距離は、P1-P3間が北から3.3m+3.0mで全長6.3m、P3-P4間が2.8m、P4-P6間が南から2.8m+3.4mで全長6.2m、P6-P1間が2.6mを測り、統一性に欠く。平面形は、長方形を基調とするが、P3-P4間がP1-P6間より若干長くなっているため、やや台形状を呈している。これらの柱穴で囲まれた内側の面積は16.8㎡である。掘形の平面形は円形・楕円形を呈し、その直径は45～70cm程と比較的小規模である。検出面からの深さは約15～20cmと総じて浅い。P5のℓ1からは、土層断面で柱痕が確認された。柱痕は締まりの弱い暗褐色土からなり、直径15cmの円形を呈している。またP1・P2のℓ1・ℓ2も土色がP5のℓ1と類似することから、柱痕の可能性はある。その他の柱穴の埋土は、褐色土を主体とし、LⅢ粒を含んでいた。本遺構からは、遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は1×2間の小型の掘立柱建物跡である。掘形の深さが総じて浅いことから、検出面より上位に本来の生活面の存在が予想される。しかし今回の調査でそれを見出すことはできなかった。また遺物が出土していないことから年代を直接示す資料はないが、近接する3号建物跡の年代観を支持すると9世紀中葉頃と考えている。

(門 脇)

2号建物跡 S B02

遺 構 (図7・写真6)

本遺構はⅡ区南東部のF11・G10～11グリッドに位置し、LⅣ上面で検出した掘立柱建物跡である。遺構の重複関係はないが、北西方向の延長上に1号建物跡、西側に3号建物跡があり、本遺構と主軸方位(N35°W)をそろえている。検出面は、本遺構の東側が崖線から流れ出る湧水の流路となり、緩やかに西から東側に向かって傾斜している。

本遺構は北西側2間、南西側4間の計7基の柱穴を確認した側柱建物跡である。北東列と南東列の柱穴は検出されなかった。これは本遺構の東側が段丘崖から崩落したとみられる礫が検出面に混在していたことと、崖線からの湧水のために検出面が削平されていたことに起因すると考えている。各柱穴の芯々間距離は、P1-P6間が東から1.75m+1.95mで全長3.7m、P6-P2間が北から1.35m+2.2m+1.15m+1.5mで全長6.2mを測り、統一性に欠いた配列である。平面形は長方形を

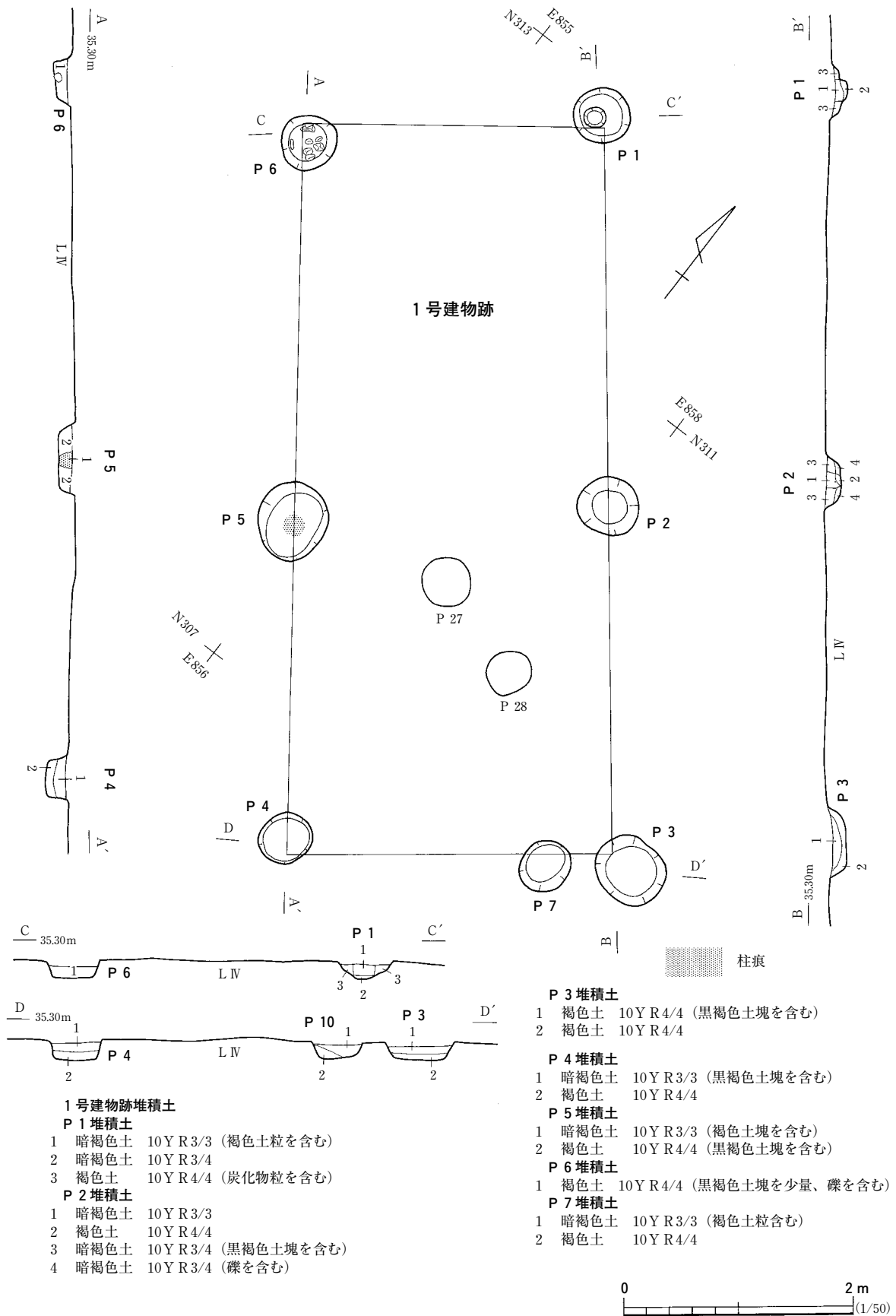


図6 1号建物跡

呈すると推定している。掘形の平面形は円形もしくは楕円形を呈し、その直径は40~60cm程と比較的小規模である。検出面からの深さは16~25cmと総じて浅い。柱痕はP3・P4・P5で確認した。柱痕は締まりの弱い暗褐色土からなり、P3・P4で直径20cm程、P5で直径12cm程の円形を呈している。またP1の底面からは直径18cm、深さ10cm程の円形の小ピットを検出し、その埋土はこのピットの $\ell 2$ であった。このことからP1は、一度、柱材が抜き取られた後、 $\ell 1$ は自然為に、 $\ell 2$ は掘形埋土が堆積したものと考えている。P1・P2・P6・P7の掘形内堆積土は、 $\ell 1$ がLⅢbを主とする暗褐色土、 $\ell 2$ が褐色土からなり、P2・P7では壁際からの流れ込みが確認された。このことからこれらのピットの $\ell 1$ はLⅢb形成時に自然堆積したものと考え、 $\ell 2$ は掘形埋

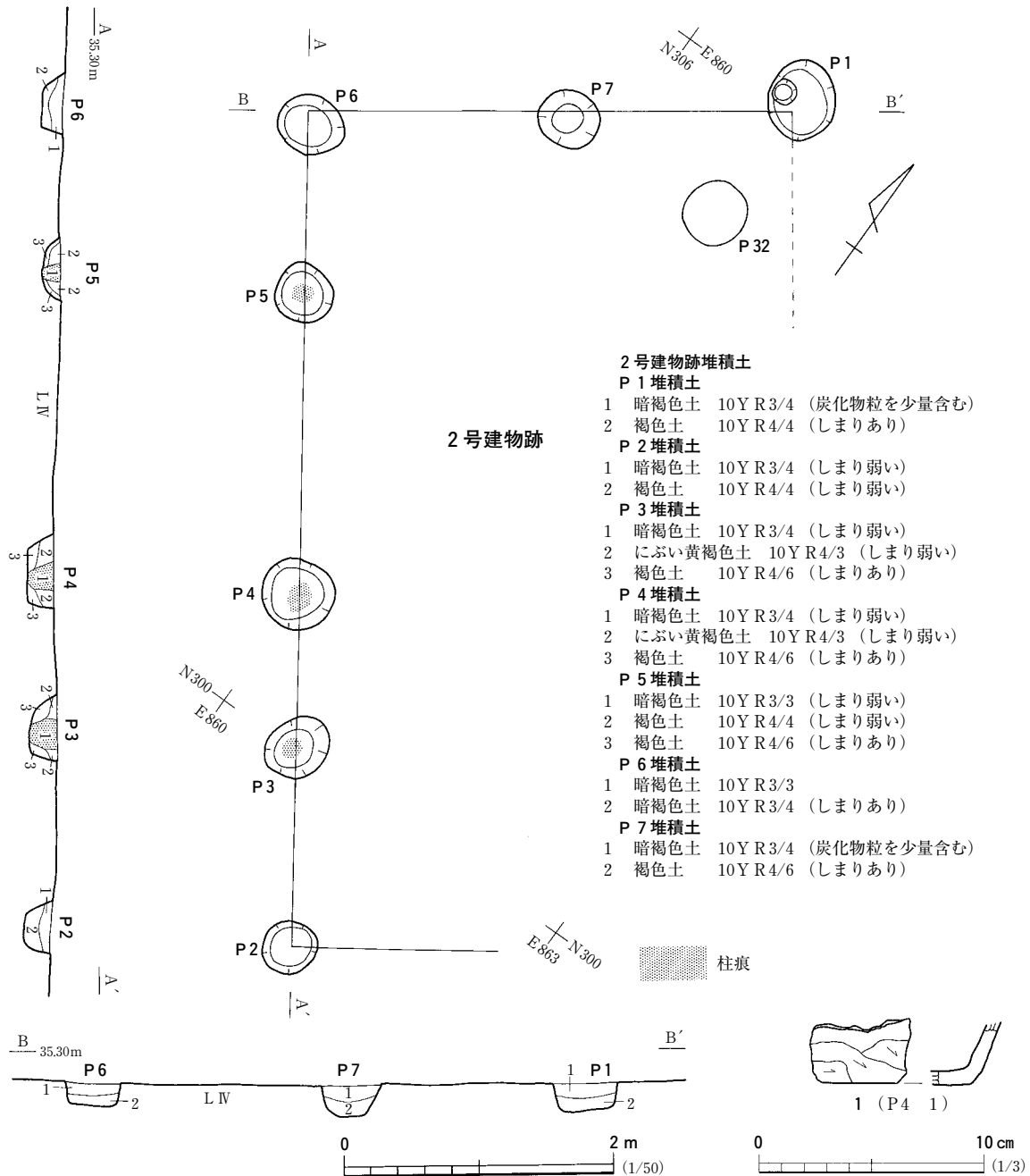


図7 2号建物跡と出土遺物

土と推察している。

遺物 (図7)

本遺構のP4ℓ1からは、土師器の杯の底部片が1点出土している。この土師器の調整は、外面体部下端から底部周縁にかけて手持ちヘラケズリによる再調整が見られ、内面はヨコナデにより整えられている。ロクロ痕は観察されないが、ヘラケズリの再調整から推察してロクロ整形の土師器である可能性が高い。

まとめ

本遺構は2×4間の小型の掘立柱建物跡である。本遺構では北東列と南東列の柱穴を確認することができなかったが、1・3号建物跡と柱穴の規模が類似することから、平面規模を同じくすると考えている。また年代については、出土遺物や3号建物跡の年代観から9世紀中葉頃と考えている。

(門 脇)

3号建物跡 SB03

遺構 (図8, 写真6)

本遺構はⅡ区南東部のF10~11グリッドに位置し、LⅣ上面で検出された掘立柱建物跡である。重複する遺構はないが、北東側に1号建物跡、東側に2号建物跡があり、本遺構と主軸方位(N35°W)をそろえている。本遺構の北西隅には7号土坑が接し、西側には3号木炭窯跡が本遺構の主軸方位にほぼ並行するかたちで存在する。また本遺構の南東列に接するように小ピット(P36~48・55)が半円形に配列している。検出面は南東側に緩やかに傾斜しているものの、ほぼ平坦といえる。

本遺構は基本的に1×2間の規模を有する側柱建物跡である。P1~6の計6基のピットの配置や堆積土から本遺構に伴う柱穴と判断した。しかしながら北西隅については、礫が検出面に混在していたことからピットの輪郭を検出することはできなかった。また南西列のP5についても、北東列に対応するピットはなかった。各柱穴の芯々間距離は、P1-P3間が北から2.5m+2.4mで全長4.9m、P3-P4間が2.9m、P4-P6間が南から0.9m+1.7mで全長2.6mを測り、統一性に欠く。平面形は、2.9m×4.9mの長方形を基調とする。

掘形の平面形は円形・楕円形のもが主体であるが、P5のみ隅丸方形を呈する。各掘形の規模は約40~80cm程と比較的小規模である。検出面からの深さは約20~40cmを測り、他の掘立柱建物跡の柱穴に比べ総じて深い。明確な柱痕は認められなかったが、P2・P3の底面からは直径18cm、深さ10cm程の円形の小ピットを検出した。これらのピットのℓ1は炭化物を含む黒褐色土でしまりがなく、柱痕の可能性はある。一方、P2・P3のℓ3・4はℓ1に比べ土質に締まりがあり、掘形埋土と推察される。またP1・P5の底面からは人頭大の扁平礫が出土し、柱材の基礎と推察される。P5・P6では壁際からの流れ込みが確認され、自然堆積したものと考えた。

遺物 (図8, 写真18)

本遺構のP5ℓ2から土師器28点、縄文土器片1点、石器類2点が出土した。その内22点が接合

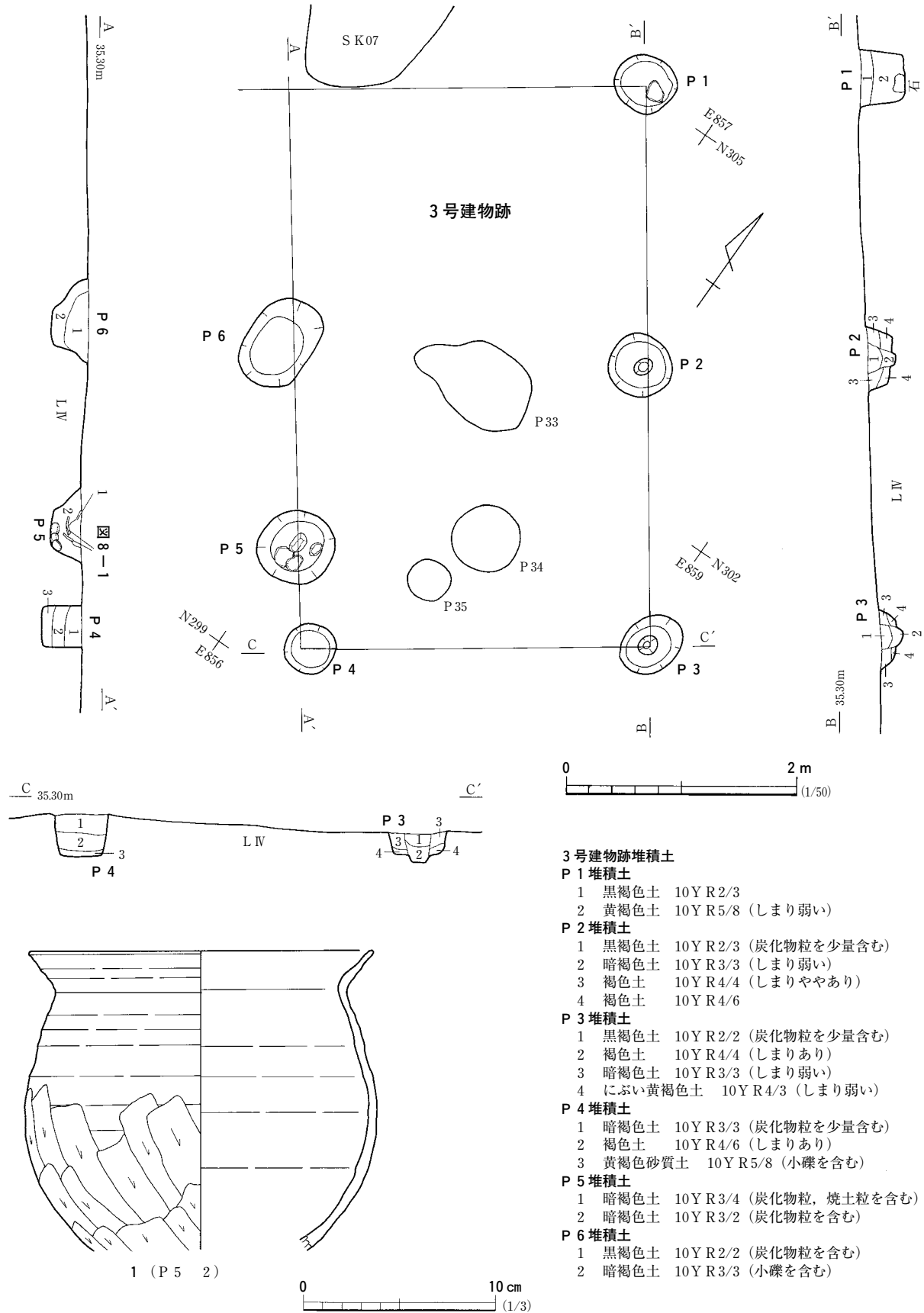


図8 3号建物跡と出土遺物

し、図8-1に示す土師器の甕に復元した。1個体分の約半分、口縁部から胴部下部にかけての破片が $\ell 2$ 上面より出土している。

1はロクロ整形の土師器甕である。器形は球胴形を呈する。口縁部は外傾しながら立ち上がり、端部を丸くおさめている。外面の胴部中位から底部にかけては、ロクロナデの後、斜め方向にヘラケズリによる再調整が認められる。内面は基本的にロクロナデによる調整痕をとどめるが、胴部中位から底部にかけてアバタ状に剥落していることから、使用の痕跡とみられる。

ま と め

本遺構は1×2間の小型の掘立柱建物跡である。本遺構では北西隅の柱穴を確認することができなかったが、1・2号建物跡と柱穴の規模が類似することから、平面規模を同じくすると考えている。また年代については、出土遺物の年代観から9世紀中葉頃と考えている。(門 脇)

第4節 木炭窯跡

本遺跡からは、3基の木炭窯跡を検出した。これらの遺構の共通点は、長大な隅丸長方形を呈し、その埋土からは大量の木炭が出土していることである。一般的な木炭窯跡とはかなり形態が異なるが、天井の部材や焼土が埋土に含有されていることから、木炭を焼成した可能性は高い。そのため、本報告にあたっては木炭窯跡として取り扱う。

1号木炭窯跡 SC01

遺 構 (図9, 写真9・10)

本木炭窯跡は、I区のF11~12グリッドのLII精査中に他グリッドに比べ密集した木炭の分布が認められたため、さらに詳細な検討を進めた結果、判明した遺構である。LIV上面において黒褐色を呈する遺構の輪郭を把握することができた。重複する遺構はない。周囲の地形は東から西にかけて緩やかに傾斜し、検出面での東端と西端との比高差は31cmを測る。

本遺構は全長9.45m、幅1.4mと長大で、東西両側に張り出し部を有する構造であることがわかった。これは東西に長い隅丸長方形を呈する中央部と、その両側に不整形を呈する東側張り出し部と、隅丸長方形を呈する西側張り出し部からなる。長軸方向はN68°Eで、等高線とほぼ直交する。

中央部は、長軸6.7m、短軸1.2m、深さ14~15cmと浅い。堆積層は $\ell 5$ ~ $\ell 8$ である。 $\ell 6$ は1cm程度の木炭片を多量に含む層で、中央部全域に堆積している。 $\ell 8$ は壁際に沿って見られた堆積層で $\ell 6$ より木炭の割合が少なく、LIV粒や焼土粒を含んでいる。 $\ell 5$ ・ $\ell 8$ は、西側張り出し部と接する箇所に部分的に認められた。周壁は中央付近で緩やかに立ち上がり、東西両端部はやや急峻に立ち上がる。中央部の床面は、LIVに含まれる礫が部分的に露出しているが、ほぼ平坦である。周壁や床面には、被熱を直接示すような痕跡は認められなかった。

東側張り出し部は、長軸1.3m、短軸1.2m、深さ8~10cmと浅い。堆積層は $\ell 1$ ~ $\ell 4$ に分けられ、

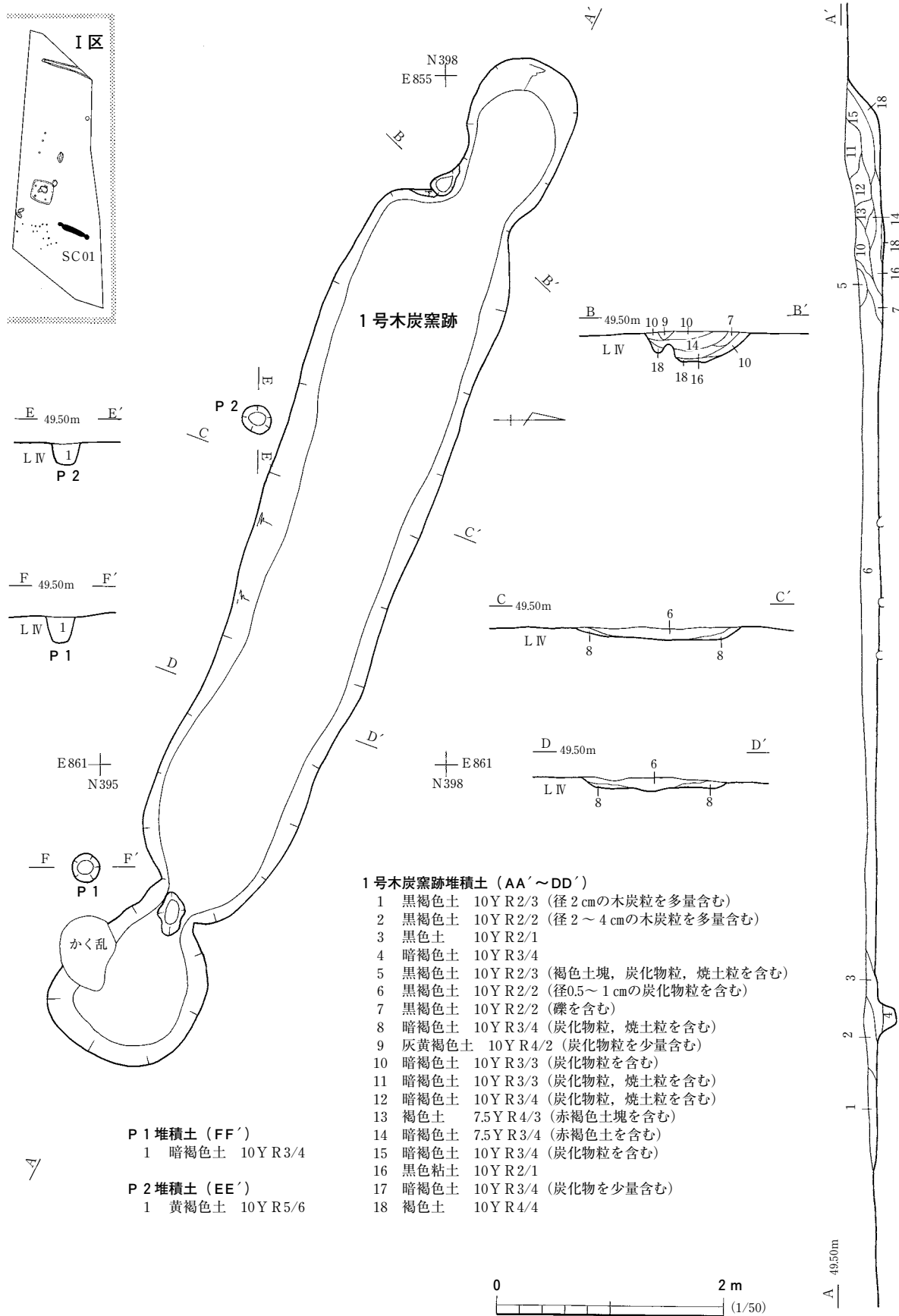


図9 1号木炭窯跡

ℓ 1～3には2～4cm大の木炭を多量に含んでいた。中央部と接する箇所には長軸40cm、短軸20cm、深さ15cm程のピット状のくぼみが認められた。東側張り出し部の周壁の立ち上がりは、緩やかで、皿状を呈する。

西側張り出し部は、長軸1.5m、短軸0.9m、深さは西端部で30cmを測る。堆積層はℓ 9～ℓ 18に分けられた。その内ℓ 16は本遺構のなかで最も木炭が密集した堆積層で、直径2～4cm大の木炭片を多く含んでいる。ℓ 9からℓ 15はℓ 16を被覆する堆積層で焼土粒や焼土塊を多く含んでいた。ℓ 9は灰黄褐色を呈する粘土塊で、下面が若干、赤褐色を呈していた。西側張り出し部と中央部はやや北側によって接している。この接する箇所の南壁沿いには、幅15cm、深さ10cm程の小さなくぼみが認められた。また、周壁は中央部に接する箇所が最も急峻に、西端部にかけては徐々に緩やかに立ち上がっている。

以上のことから、本遺構の堆積層を整理すると、木炭の密集度や形状から判断してℓ 16のみが窯として機能した際に焼成された木炭とみられ、ℓ 9～15は粘土塊・焼土塊を多く含むことから、機能時に木炭を被覆していた層と推察される。中央部全域に分布するℓ 6に含まれる木炭片は、ℓ 16のそれに比べ細片化している。また、前述のℓ 9～15より上位に堆積していることから、廃絶後、二次的に堆積したと考えられる。なお壁際や底面直上に堆積していたℓ 8やℓ 18はLⅣ粒を含むことから、壁の崩落土の可能性はある。

本遺構の南側には、直径25cm程度のピット2基が認められた。このピットは、本遺構の主軸方向に並行して配置されており、付属ピットと判断している。

本遺構から出土した木炭の形状のわかるものは径2～3cm程の枝状のものがほとんどで、太い幹を小割にしたようなものはなかった。これらの樹種は、クマシデ属イヌシデ節やコナラ属クヌギ節の分析結果（付編1）が得られている。

なお、本遺構からは土師器片2点がℓ 5より出土したが、摩滅が著しく器形や時期の判別はできなかった。

ま と め

本遺構は全長9.45mの木炭窯跡で、東西に張り出し部を有する構造である。検出面から底面までの深さは総じて浅く、上部の構造については不明である。また底面にも被熱の痕跡が認められず、木炭の焼成方法については不明な点が多い。また西から東に緩やかに傾斜していることから、中央部が焼成部、西側張り出し部が煙出部、東側張り出し部が焚口部であった可能性がある。本遺構の年代については、出土遺物が希弱であることから直接明らかにすることはできない。しかしながら、後述する3号木炭窯跡と共通性が高いことから近接した時期の所産と考えられる。（門 脇）

2号木炭窯跡 S C 02

遺 構（図10、写真11）

本遺構は、Ⅱ区南西部のF11・G10～11グリッドに位置し、北から南にかけてわずかに傾斜する

平坦な場所に立地する。礫を多く含むL IV上面から検出されている。重複する遺構はない。

調査区の東側から西側に向かってL IV上面を精査する過程において確認した。しかし本遺構のℓ 1・2をL IIIと誤認したため、遺構の東半分を削平後に平面形を確認した。

本遺構の平面形は長大な隅丸長方形を呈する。長軸6.5m、短軸1.4m、検出面から底面までの深さは最深15cmと浅い。長軸方位はN55°Wを示す。遺構内堆積土は3層に分けられる。ℓ 1は1～2cm前後の木炭細片を多量に含む黒褐色土で、遺構の中央に広く分布している。ℓ 2は木炭片を少量含む黒褐色土でℓ 1の外側に分布している。ℓ 3は底面を覆うにふい黄褐色土で、焼土塊や木炭片を含んでいた。また中央の南北セクション(BB')では、壁際から流れ込んだような堆積状況が観察される。さらにℓ 1の細片化した木炭の状況から判断すると、本遺構の堆積土(ℓ 1～3)は機能時の状況を示唆する可能性は低いものと考えている。また底面は東端から西端に向かって緩やかに傾斜している。焼土塊の若干の分布は認められたが、被熱面などの機能時の状況を直接示唆するものは検出されていない。また周壁は床面から緩やかに立ち上がっている。

なお本遺構のℓ 1からは、弥生土器の甕の口縁部片が出土しているが、所属年代を示すものではないと考えている。

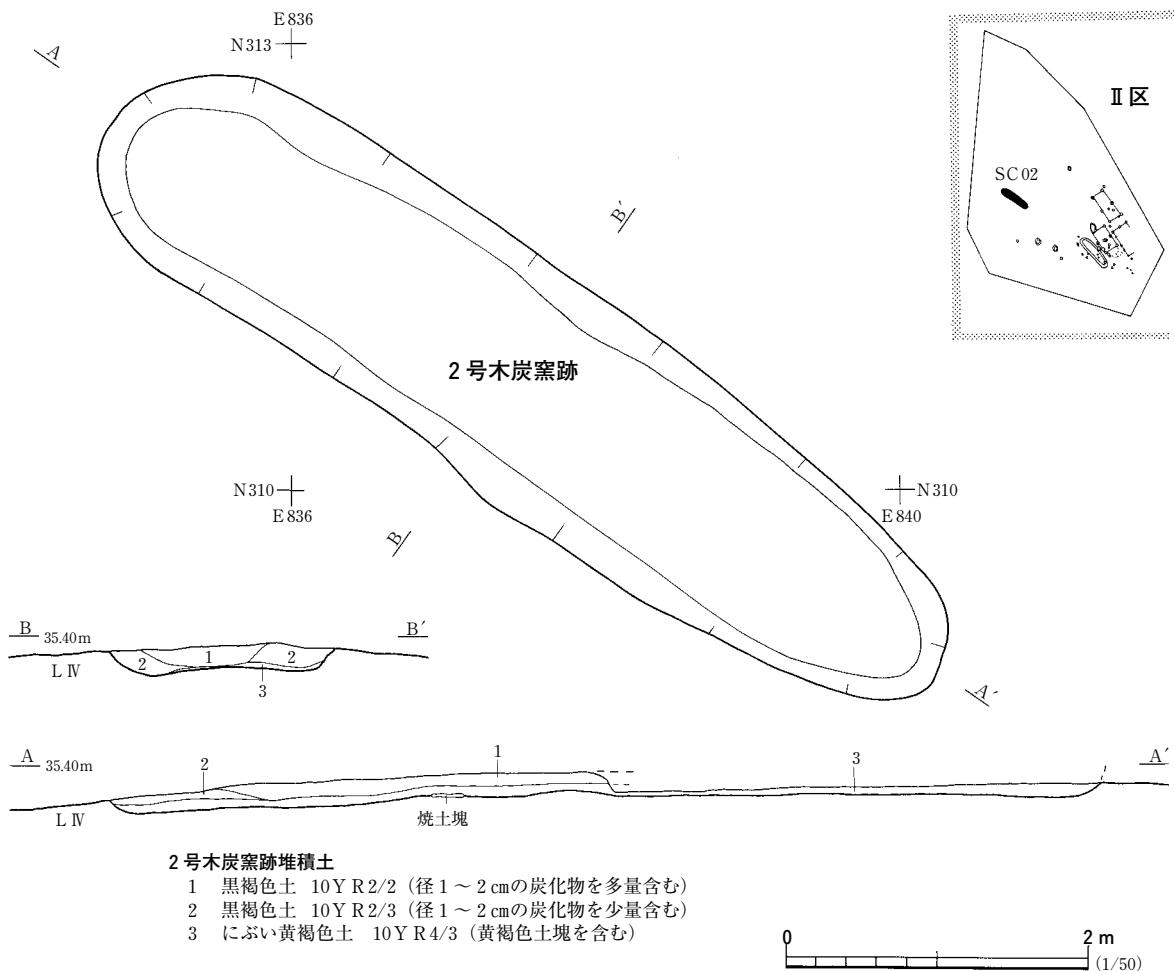


図10 2号木炭窯跡

ま と め

本遺構は長大な隅丸長方形を呈する木炭窯跡である。遺構の規模や構造が3号木炭窯跡に類似していることから近接した時期の所産と考えられる。(門 脇)

3号木炭窯跡 SC03

遺 構 (図11, 写真12)

本遺構は、Ⅱ区のF10～11グリッドに位置する。同グリッドのLⅢ精査中に木炭や土師器片が出土したことから、さらに調査を進めた結果、LⅣ上面において遺構の輪郭を確定した。P25・56・57と重複し、本遺構の方が古い。近接して1～3号建物跡が、本遺構の長軸方位(N40°W)にほぼ並行するかたちで存在する。

遺構の平面形は長大な隅丸長方形を呈する。長軸7.9m、短軸2.1m、検出面から底面までの深さは最深で18cmと浅い。周辺地形はほぼ平坦である。遺構内堆積土は2層に分けられる。ℓ1は5cm程度の木炭細片を多量に含む黒色土で、遺構内の中央に分布している。ℓ2はℓ1の外側および下位に堆積した暗褐色土で、ℓ1より木炭の含む割合は低い。底面はLⅣで北隅では礫が多く露出している。底面や露出した礫には被熱した痕跡はなく、焼け面も存在しなかった。このことから2号木炭窯跡同様、機能時の状況を直接示唆するような堆積物はないものと考えている。また周壁は床面から緩やかに立ち上がっている。

本遺構から出土した木炭の形状のわかるものは径2～3cm程の枝状のものがほとんどで、太い幹を小割にしたようなものはなかった。これらの樹種は、コナラ属クヌギ節の分析結果(付編1)が得られている。

遺 物 (図11, 写真18)

本遺構のℓ1からは縄文土器片4点、土師器片24点が出土している。ここでは3点を図示した。1はロクロ土師器の杯である。内面はヘラミガキの後、黒色処理がなされている。底部は回転糸切りの後、手持ちヘラケズリにより再調整されている。2・3は筒形土器の破片である。ともに外面はユビオサエ、内面はヘラナデによる調整痕が見られる。なお、2の内面の口縁部にはユビナデの痕跡も認められる。

ま と め

本遺構は長大な隅丸長方形を呈する木炭窯跡である。本遺構の埋土を掘り込んでP25・56・57・58が構築されている。その内、P25からはロクロ土師器がまとまって出土し、その年代観は9世紀中葉頃と考えられる。したがって、この頃までには本遺構は埋没していたと考えられる。さらに、本遺構のℓ1から出土した遺物も9世紀中葉頃とみられ、遺構の年代の上限を示すものとみている。

(門 脇)

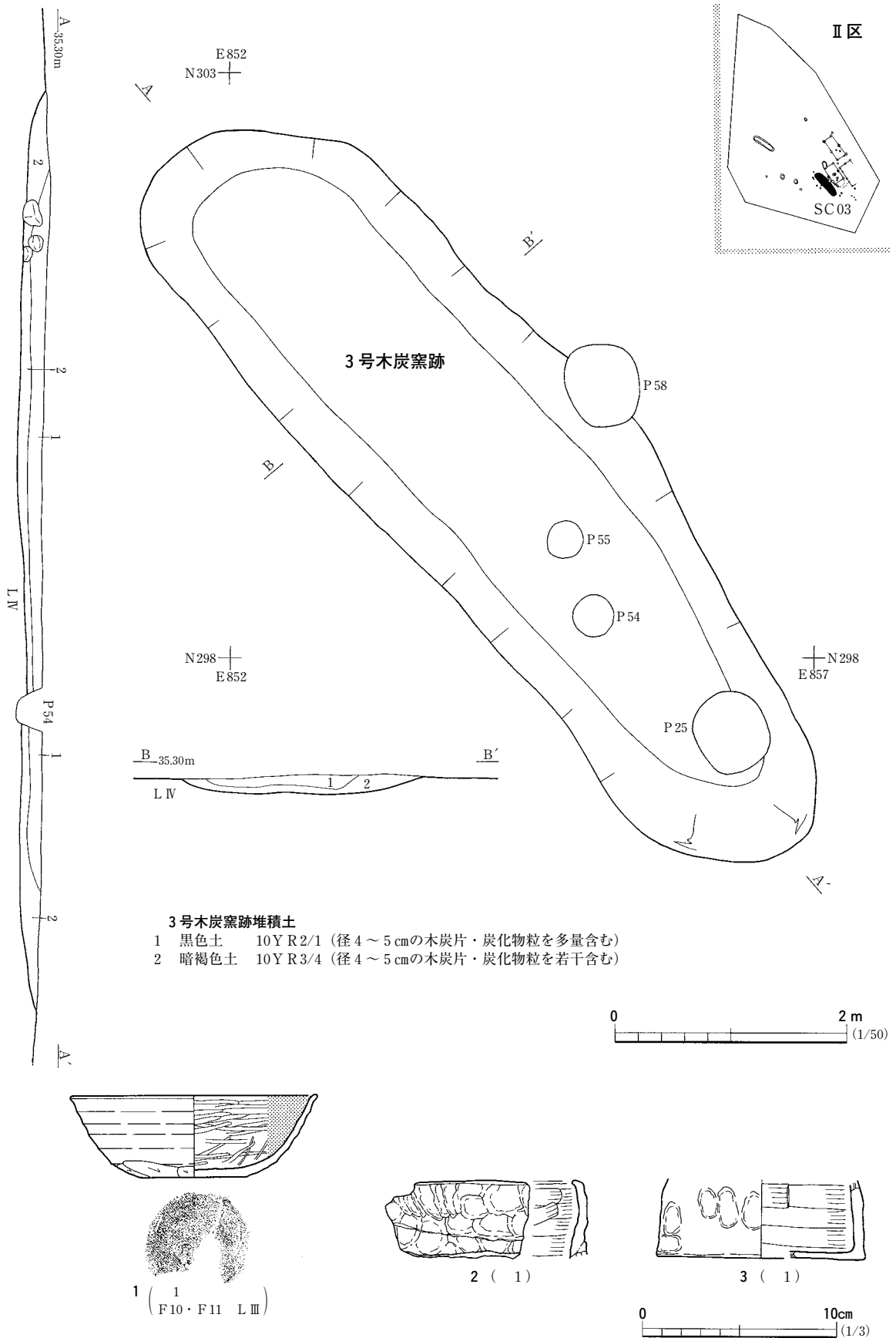


図11 3号木炭窯跡と出土遺物

第5節 土 坑

1号土坑 SK01 (図12, 写真13)

I区の中央部やや南寄りのF22グリッドに位置する。地形は、南西方向へ緩やかに傾斜するものの、ほぼ平坦な場所である。LIV上面から検出された。1号住居跡と重複し、本遺構の方が新しい。平面形は円形に近い楕円形で、規模は長径1.69m、短径1.20mを測る。長軸方向の軸線はほぼ真北を示す。検出面からの深さは最大で0.22mである。周壁は底面から55~70°の角度で立ち上がる。堆積土は2層に分かれる。ℓ1は炭化物粒を含み、LIIIbに由来する暗褐色土である。ℓ2はLIVに達していて、礫を含む暗褐色土である。いずれもレンズ状の堆積状態で、自然堆積と考える。

遺物の出土は認められなかった。

本遺構は、出土遺物もなく正確な時期を特定することはできないが、重複する1号住居跡よりは新しい所産と判断される。遺構の性格・用途については不明である。(鈴木)

2号土坑 SK02 (図12, 写真13・18)

I区のほぼ中央部F22グリッドに位置し、LIV上面で検出された。重複する遺構はない。周囲は、南西および北西方向へわずかに傾斜するほぼ平坦な部分であるが、本遺跡の中で最も標高の高い場所である。平面形は不整楕円形を呈し、長軸方向の最大値は2.94m、それと直交する線の最大値は1.45mを測る。長軸方向は真北から9°東へ傾いている。深さは検出面から0.48mを測る。周壁の立ち上がりは一定ではない。底面はLIVの礫層に達していて、明確に判断できない状況であった。堆積土は9層に細分した。いずれもレンズ状堆積を示し、特に東側から流れ込んだ状況がみられる。このことから自然堆積と判断した。ℓ1からは遺物が出土しているが、すべて周囲からの流れ込みと考えられる。

遺物はℓ1から土師器片22点(口縁部3点・胴部19点)が出土している。図12-1は土師器の甕で、ℓ1から出土した。外面は頸部に縦方向のハケメを施した後、ヘラケズリが行われている。口縁部は中ほどまでヨコナデが施されている。体部は頸部からの連続で縦方向主体のケズリが施されている。内面は口唇部にハケメ、そして横方向主体のヘラケズリを施している。胴部は摩滅が著しく調整の痕跡があまり残っていないものの、わずかに横方向のヘラナデが認められる。

遺物が検出面付近から出土しているため、本土坑の機能時期を特定する資料とはならないものとする。したがって、本土坑の所属時期は不明である。(鈴木)

3号土坑 SK03 (図12, 写真13・18)

I区南西部のE21グリッドに位置する。ここはI区調査範囲の西縁で調査区の中央部から南西へ向かってわずかに傾斜する平坦面にあたる。北側で4号土坑と隣接するが、重複関係はない。平面

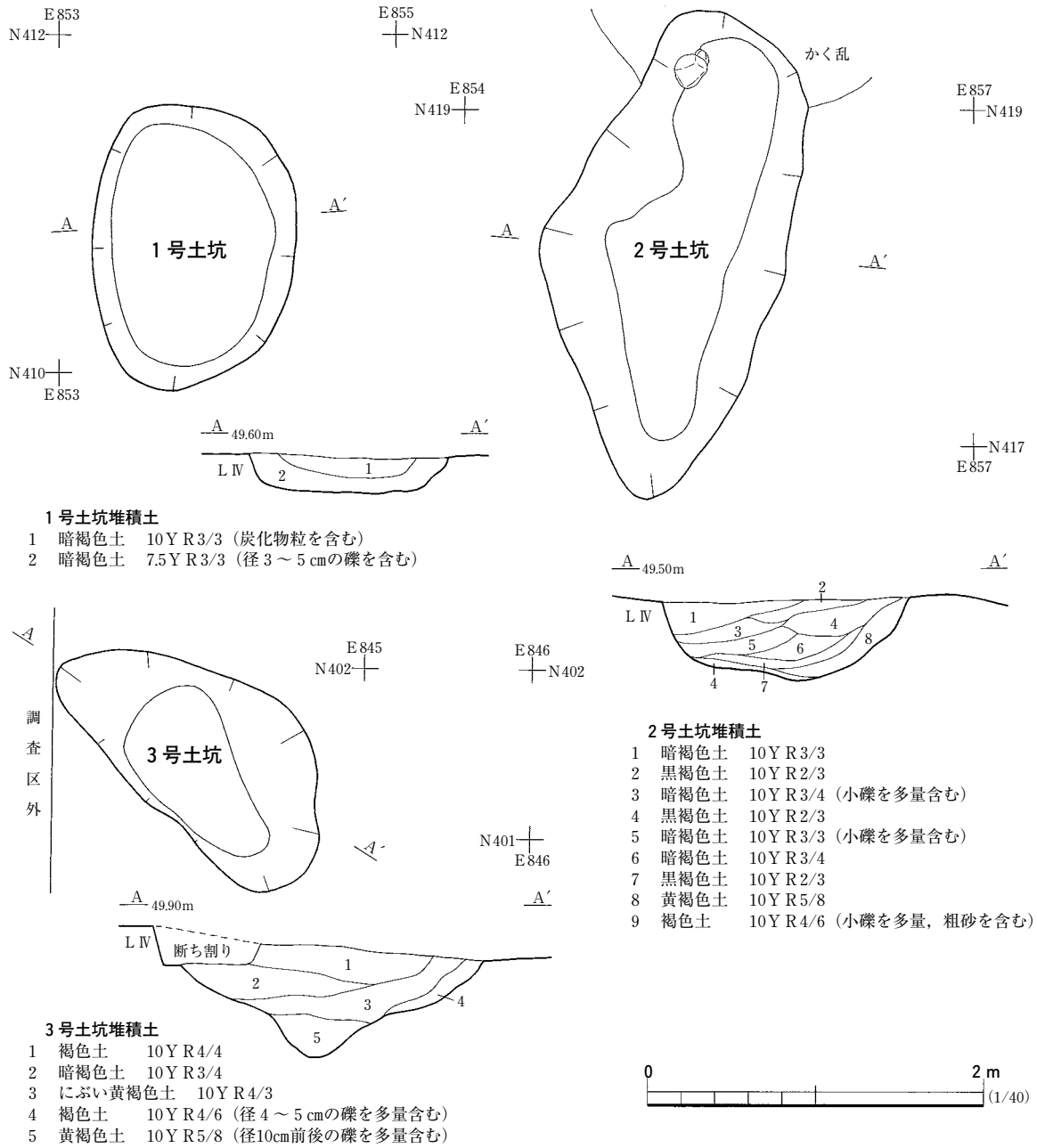
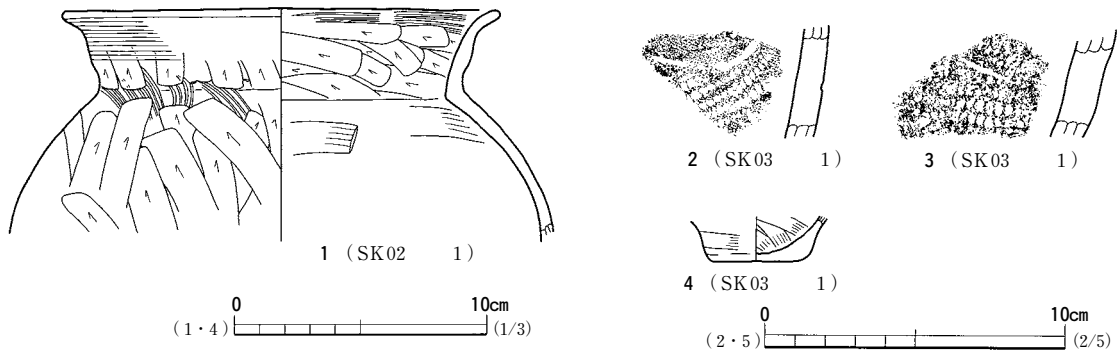


図12 1~3号土坑と出土遺物



形は不整楕円形を呈し、長径1.90m、短径0.93mを測る。長軸方向は真北から西へ51°傾いている。検出面からの深さは最も深いところで0.67mである。周壁の立ち上がりは南西部が急で、他は概してなだらかで、全体的に一定していない。底面はLⅣ下層の礫層に及んでいる。堆積土は5層に分けた。ℓ1はLⅡに相当する褐色土である。ℓ2は暗褐色土、ℓ3はにぶい黄褐色土である。ℓ4・5はそれぞれ褐色・黄褐色の小礫層である。ℓ3・4は東側から流れ込んだ様子がうかがえる。他も基本的にレンズ状堆積を示し、自然堆積と判断した。

遺物はいずれもℓ1から縄文土器3点と土師器片15点、そして時期不明の土器片1点が出土した。図12-2、3は縄文土器の胴部片で2は上半、3は下半である。ともに、胎土には長石粗砂粒が認められる。2は地紋に単節LRの原体を横位回転していて、沈線が認められる。磨消縄文の特徴がみられ、縄文時代後期後半の資料とみられる。加曾利B2式頃のものである。3は斜縄文が施されていて、粗製土器である。時期は不明である。図12-4は土師器の底部である。上半部が遺存していないため、全体の形状は不明であるが、小型の鉢の資料と考えられる。検出面付近から出土しているため本土坑の所属時期を判断できるものではないと考えた。(鈴木)

4号土坑 SK04 (図13, 写真13)

I区南西部のE21グリッドに位置し、すぐ南に3号土坑がある。重複する遺構はない。平面形は楕円形を呈し、長径1.78m・短径1.00mを測る。長軸方向は真北より東へ61°傾いている。底面の北東部をさらに楕円形に一段掘り窪められた形をしている。その大きさは、長径1.08m、短径0.78mである。深さは検出面から中段までが0.3m、底面までは0.6mを測る。周壁はなだらかな立ち上りを示す。堆積土は6層に分けた。ℓ1は黄褐色土、ℓ2は褐色土、ℓ3は明黄褐色土で炭化物を含まない。ℓ4はLⅢに近似する黒褐色土で炭化物粒をわずかに含む。ℓ5は暗褐色土で同様に炭化物粒をわずかに含む。ℓ6は黄褐色土である。大きく分けて中段より下層に炭化物粒を含む層があることになる。遺物は出土していない。

所属時期・性格は、遺物が出土していないため不明である。(鈴木)

5号土坑 SK05 (図13, 写真14)

II区南部のE11グリッドに位置する。LⅣ上面で検出され、重複する遺構はない。掘立柱建物跡や小ピットが集中する場所より西側にあたるが、標高はほぼ同じで平坦な位置に所在する。平面形はほぼ円形で直径1m、検出面からの深さは0.92cmを測る。周壁は急な角度をもって立ち上がり、断面形は筒型に近い形である。堆積土は4層に分けた。ℓ1・2はLⅢbに由来する黒褐色土である。ℓ3は暗褐色土、ℓ4は砂混じりの褐色土である。基本的にレンズ状に堆積しているので、自然堆積と判断した。

遺物は出土しておらず、所属時期は不明である。(鈴木)

6号土坑 SK06 (図13, 写真14)

Ⅱ区南部のE10~11グリッドに位置する。LⅣ上面で検出された。堆積土は2層に分層できた。
 ℓ1は褐色土, ℓ2は暗褐色土で, 水平に堆積している。

平面形は, 楕円形を呈し, 規模は長径1.32m, 短径1mを測る。検出面からの深さは20cmを測る。
 長軸方向はほぼ真北を示す。壁はなだらかに立ち上がる。本遺跡で検出された土坑の中で最も浅いものである。

出土遺物は認められず, 所属時期は不明である。

(鈴木)

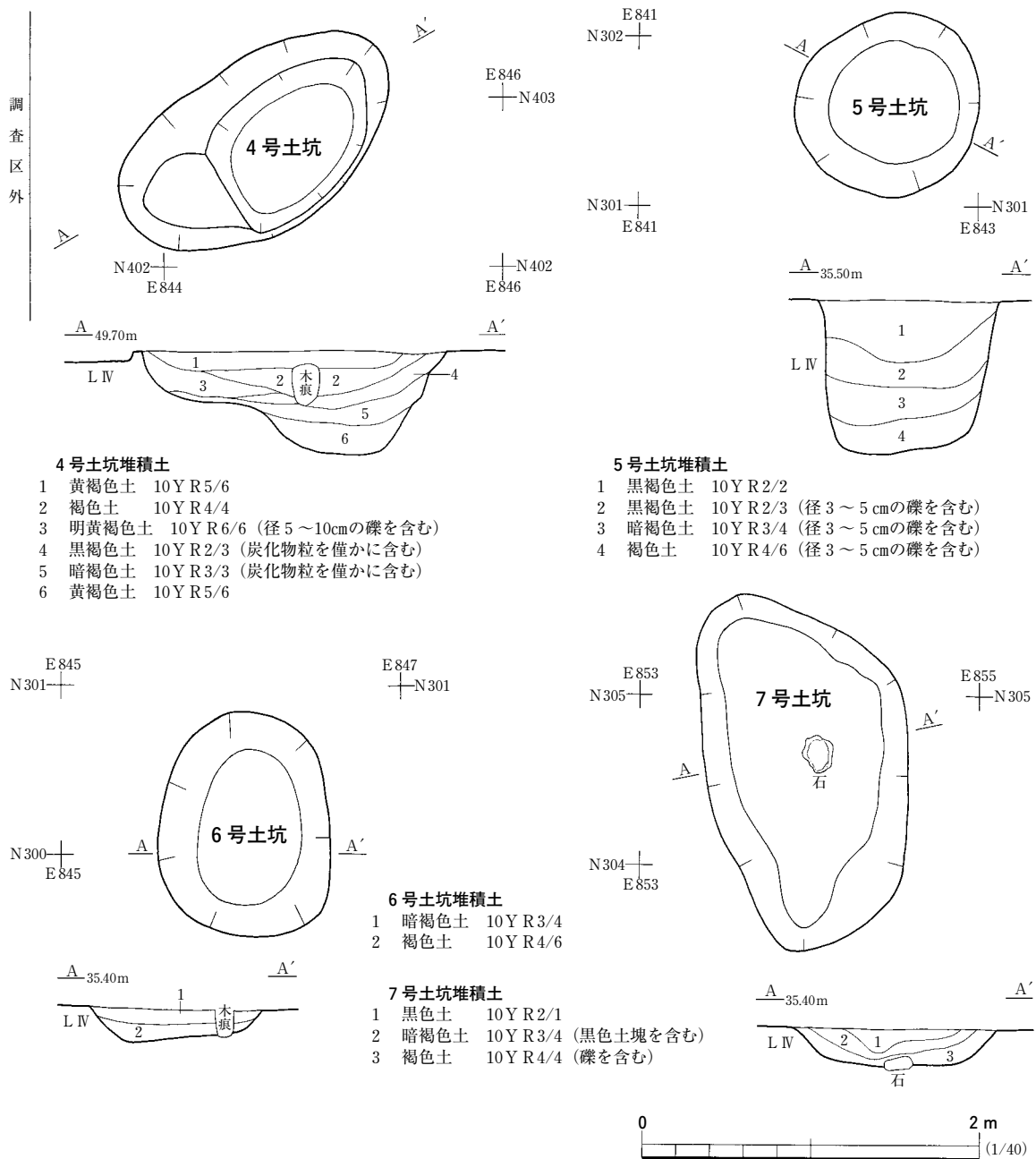


図13 4~7号土坑

7号土坑 SK07 (図13, 写真14)

Ⅱ区南東部のF11グリッドに位置する。周辺の地形はほぼ平坦で、遺構の集中する場所にあたる。3号建物跡の北西隅付近であるが、重複関係はない。その他、1・2号建物跡や3号木炭窯跡が近接している。堆積土は3層に分けた。ℓ1はLⅢに起因する黒褐色土、ℓ2は黒褐色土を塊状に含む暗褐色土、ℓ3は褐色土である。レンズ状の堆積状況を呈しているため、自然堆積と考えた。

平面形は不整楕円形で、長径2.12m、短径1.22mを測り、長軸方向は12°西へ傾いている。検出面からの深さは0.22mを測る。壁の立ち上がりは一定ではないが、いずれもなだらかである。底面はLⅣの礫層に達していて、細かな凹凸がある。

出土遺物は認められず、所属時期は不明である。(鈴木)

第6節 集石遺構

1号集石遺構 SS01

遺 構 (図14, 写真15)

I区北部の調査区東側のG23グリッドに位置し、地形は北に向かって緩やかに傾斜する。周辺は他の遺構も希薄で北側に1号溝跡があるのみである。本遺構は、LⅣ上面で礫の分布状況や掘形の確認を行ったが、実際はLⅢaの中位から下位にかけて、10個以上の大小の礫が出土している。集められた礫は、花崗岩の円礫もしくは亜円礫で、LⅢaを取り除いた時点で大小約100個の礫が検出された。これらはほぼ円形に配置され、直径は1.03mを測る。

この礫の分布範囲に沿って、円形の掘形が確認された。検出面から掘形底面までの深さは0.35mを測り、堆積土は2層に分けることができた。ℓ1はしまりの弱い暗褐色土で上部に礫が配されていた。細かい炭化物が少量出土した。ℓ2は褐色土を主体とし、黄褐色土粒を含む。いずれも集石を構築する際に人為的に堆積した層と考えている。掘形の周壁は、底面から緩やかに立ち上がり、すり鉢状を呈する。

遺 物 (図14, 写真19)

本遺構からは、土師器片16点がℓ1の礫に混入する状態で出土した。内訳は、口縁部1点・胴部13点・脚部2点で、その内1点を図示した。1は非ロクロ整形の高杯の脚部片である。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラナデによって調整している。上端部は杯部との接合面とみられ、若干くぼんでいる。これは杯部底部を脚部に埋め込んで接合したものと推察される。

ま と め

本遺構は上部に円形状に礫を配列し、下部にすり鉢状の掘形をもつ。本遺構の性格については不明であるが、礫に混入する状態で高杯の脚部片が出土していることが何らかの機能を反映している可能性がある。なお本遺構が位置するG23グリッドでは遺構外であるが、非ロクロ土師器の高杯(図

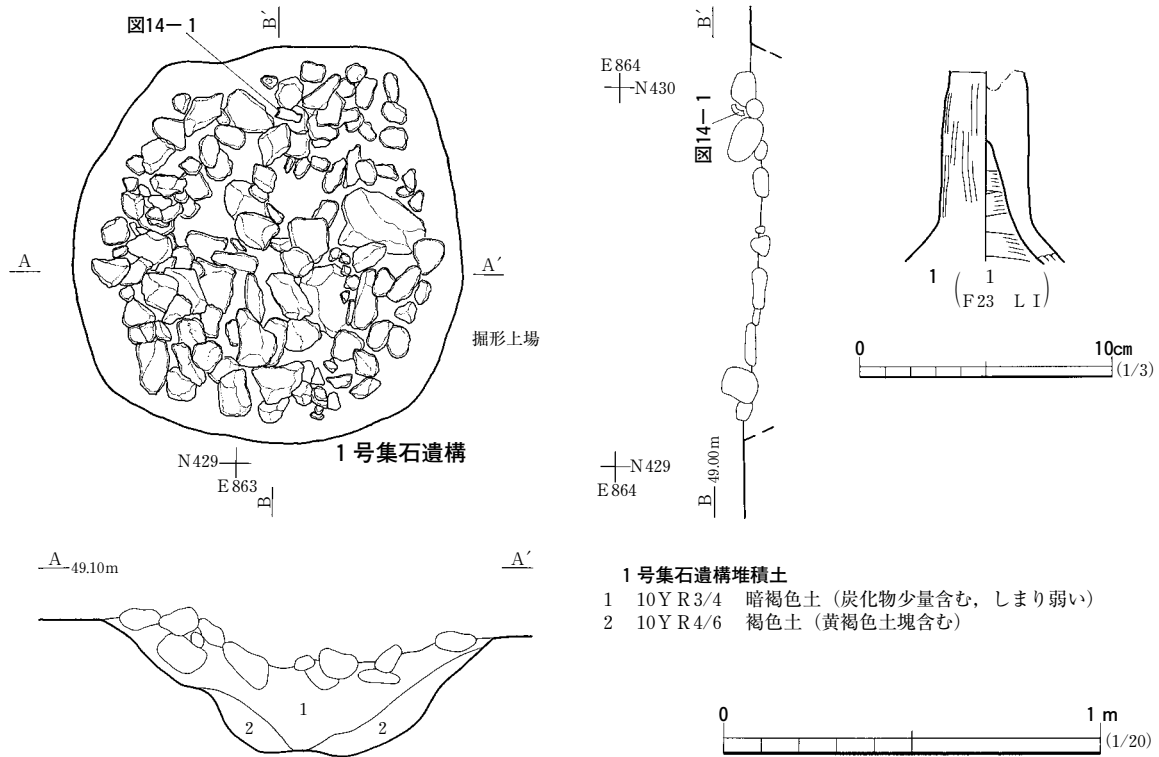


図14 1号集石遺構と出土遺物

21-22・23) が比較的まとまって出土している。本遺構の所属年代は、出土遺物の年代観から古墳時代前期と考えられる。(門 脇)

第7節 溝 跡

今回の調査で溝跡1条を検出した。I区の最も北側に位置し、本遺跡でも遺構の希薄な部分で、単独で検出された。

1号溝跡 S D01

遺 構 (図15, 写真15)

I区北部のE~G25グリッドに位置する。検出面はLIV上面であるが、西側の調査区境でLIIから掘り込まれている状況が観察された。重複する遺構はないが、本遺構南側に近接してP21がある。堆積土は3層に分けた。ℓ1は黒褐色土、ℓ2・3は褐色土でℓ2には径1cm程度の小礫が混入していた。いずれもレンズ状の堆積状況が観察され、土質・層相から自然堆積と判断した。

規模は、調査区内で確認された部分で、長さが14m、最大幅が1.4mである。本遺構の底面は地形に沿って西から東へ緩やかに傾斜しており、西端と調査区境東端との比高差は0.77mである。検出面からの深さは0.20mほどである。溝跡の西端付近には湧水が認められ、調査区外の東側下位斜面部へさらに延長するものと考えられる。本遺構からの出土遺物はなかった。

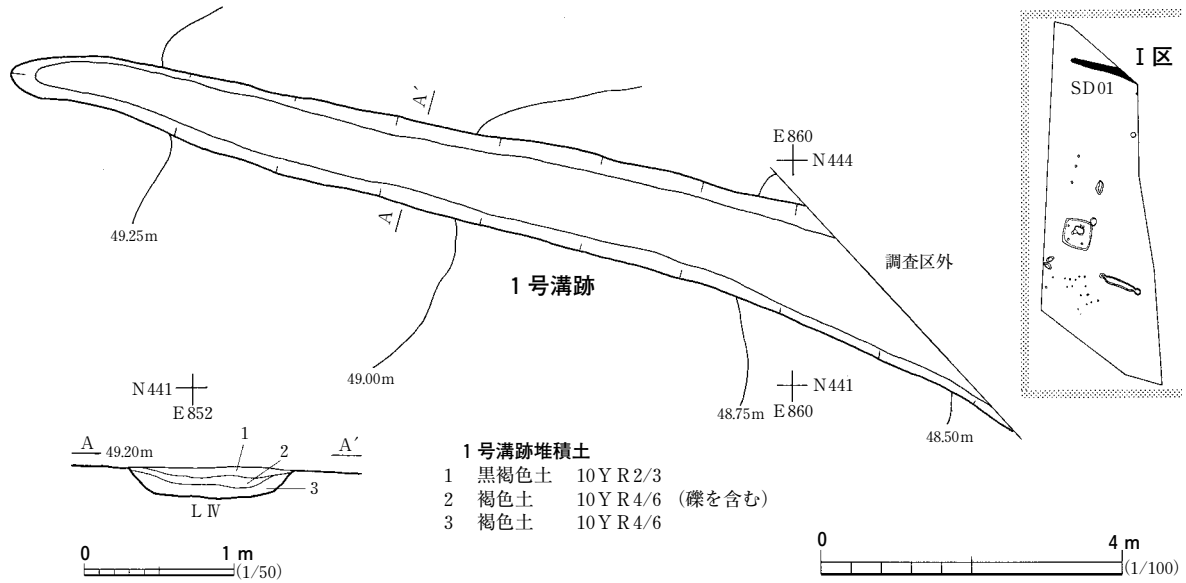


図15 1号溝跡

ま と め

本遺構の性格は明確には判断し得ないが、土層の堆積状況や規模から考えて、人為的な区画溝とは考えにくく、自然流路と判断している。所属時期は出土遺物がないため不明である。しかし、西側調査区境において、古墳時代～古代の遺物を包含するL II上面で検出されていることを考慮すると、古代以降の所産と判断できる。 (鈴木)

第8節 ピット群

今回の調査ではI区から23基、II区から64基の合わせて87基の小ピットを検出した。本節で報告するピット群は、調査区内に散在して認められており、建物跡や柱列跡、各遺構に付随するピットとして認識できなかったものである。P 66～85の20基は、掘立柱建物跡として調査した。P 22～65は、第18図の断面図を作成した方向、それとともに写真を撮影した方向を、▲印の先端が指す方向をもって示した。

I区の小ピット群 (図16, 写真8)

I区で検出された23基の小ピットのうち、南西部のE～G・19～20グリッドからは17基の小ピットが比較的まとまった状況で確認され、2基が1号木炭窯跡付近から検出された。調査区中央部のやや西よりE～F・22～23グリッドからは、P 18～20の3基の小ピットが列をなす形で検出されている。P 21は調査区北東部のG 24グリッドから単独で検出した。

E～G・19～20グリッド 東側部分から17基の小ピットが確認され、P 1～17と番号を付した。検出面はL IV上面である。周囲に分布する遺構として、北へ5m程離れて1号住居跡・1号土坑、北西には3・4号土坑、東には1号木炭窯跡がある。1号木炭窯跡の南側にはP 86, P 87の2基の小ピットが検出された。これら2基については1号木炭窯跡の付随施設として報告した。平面形はいずれ

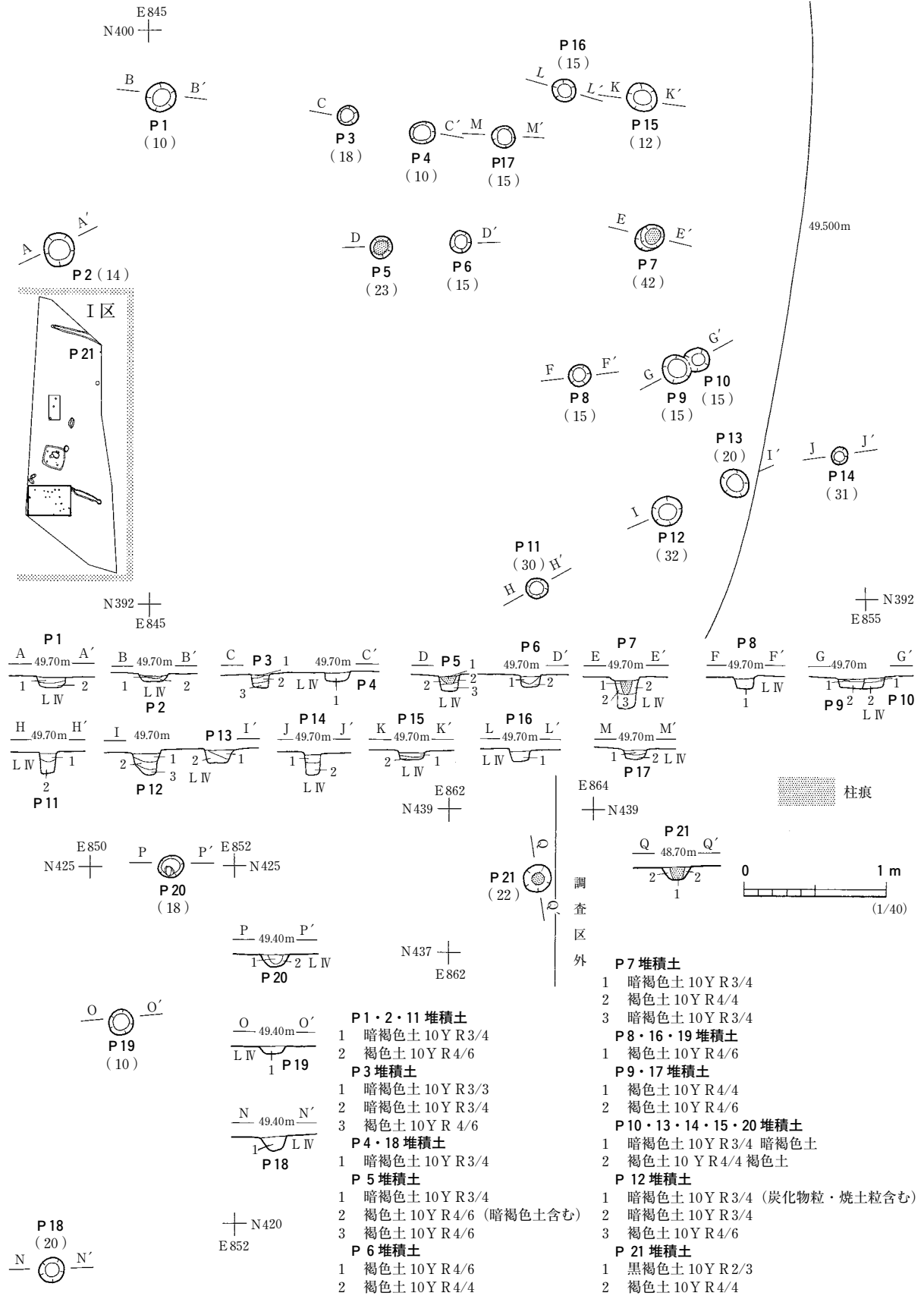


図16 I区ピット群

も円形を基調とする。直径は25～46cm, 検出面からの深さは10～42cmを測る。P 9 と P10は重複関係にあるが, P 9の方が新しい。堆積土は暗褐色土が大半を占める。底面に近い部分の多くには褐色土が観察された。P 5・P 7は断面で柱痕が確認された。P 7は検出面からの掘り込みも深い。

P 12・P13からは炭化物の塊が出土した。特にP13からは3cm程の木炭の碎片多数と, 直径6cm長さ15cmを測る幹の形状を残した木炭が出土した。また, 同じくP12・P13からは焼土粒も確認されている。ピット群の東には1号木炭窯跡があり, この2基のピットは位置的にも近いので関連性も考えられる。P 5からは土師器が6点出土した。いずれも小片のため, 図示し得なかった。P 5には柱痕も確認されていて, 建物等を構成したピットと推定される。

E～F・22～23グリッド 3基のピットがほぼ一直線に並んで検出され, P18～20の番号を付した。検出面はLⅣ上面である。平面形はほぼ円形でいずれも直径は35cm前後である。検出面からの深さはP18・20が約20cm, P19は10cmを測る。堆積土は暗褐色土および褐色土である。列をなすような形で位置するが, P18－P20の中心間距離は5.95mを測る。同様にP19はP18－P20を結ぶ線上からわずかに西へずれるものの, P18－P19間が3.60m, P19－P20間が2.28mである。P20の底面からは石も検出された。

G24グリッド P21が単独で検出された。検出面はLⅣ上面である。平面形は円形で, その直径は38cmを測る。検出面からの深さは21cmである。柱痕も確認された。柱痕にあたる ℓ 1はLⅢに相当する黒褐色土である。他の堆積土は褐色土である。F20グリッド周辺から検出された17基の一群と標高はほぼ同じである。北側には1号溝跡があり, 東側調査区外へ延びる様相を呈している。同様に東方向へ関連するピットの存在が予想される。

Ⅱ区のピット群 (図17～19, 写真7・15・18)

調査区南東部で最も標高が低く平坦なところに集中的に小ピットが検出された。Ⅱ区のピット群はP22～P85の番号を付した。ここでは, P22～P65について説明する。

いずれも平面形は円形を基調としている。このうちP22～24・26の4基は小ピットが集中的に検出されたところからやや外れる場所に位置する。多くが単独で検出されているが, 重複しているものについて新旧関係を確認した。G11グリッドのP29とP30ではP29の方が新しい。F11グリッドのP36～39は4基が重複している。新旧関係をみると, P36>P37, P37>P38, P39>P38が観察された。P38が最も古いことになる。P36とP39の新旧関係は不明である。P63とP64ではP63の方が新しい。

P59とP65は3号木炭窯跡付近に位置する。これらは木炭窯跡の長軸と短軸の延長線上にある。そして, P65は柱痕から木炭窯跡の方へ傾いた状況がみられた。ほかにも近くにピットは多数あるが, この2基については3号木炭窯跡と関連があるものと考えた。

P36～48とP55は3号建物跡の南東辺に対して, 半円の弧を描くように配置されていて, 付随する施設を構築していたことも考えられる。これらは平面形の規模についてみると, 大きく二つのグループに分けられる。P37～39とP46は直径が35～55cm, 検出面からの深さが16～20cmを測る。これ

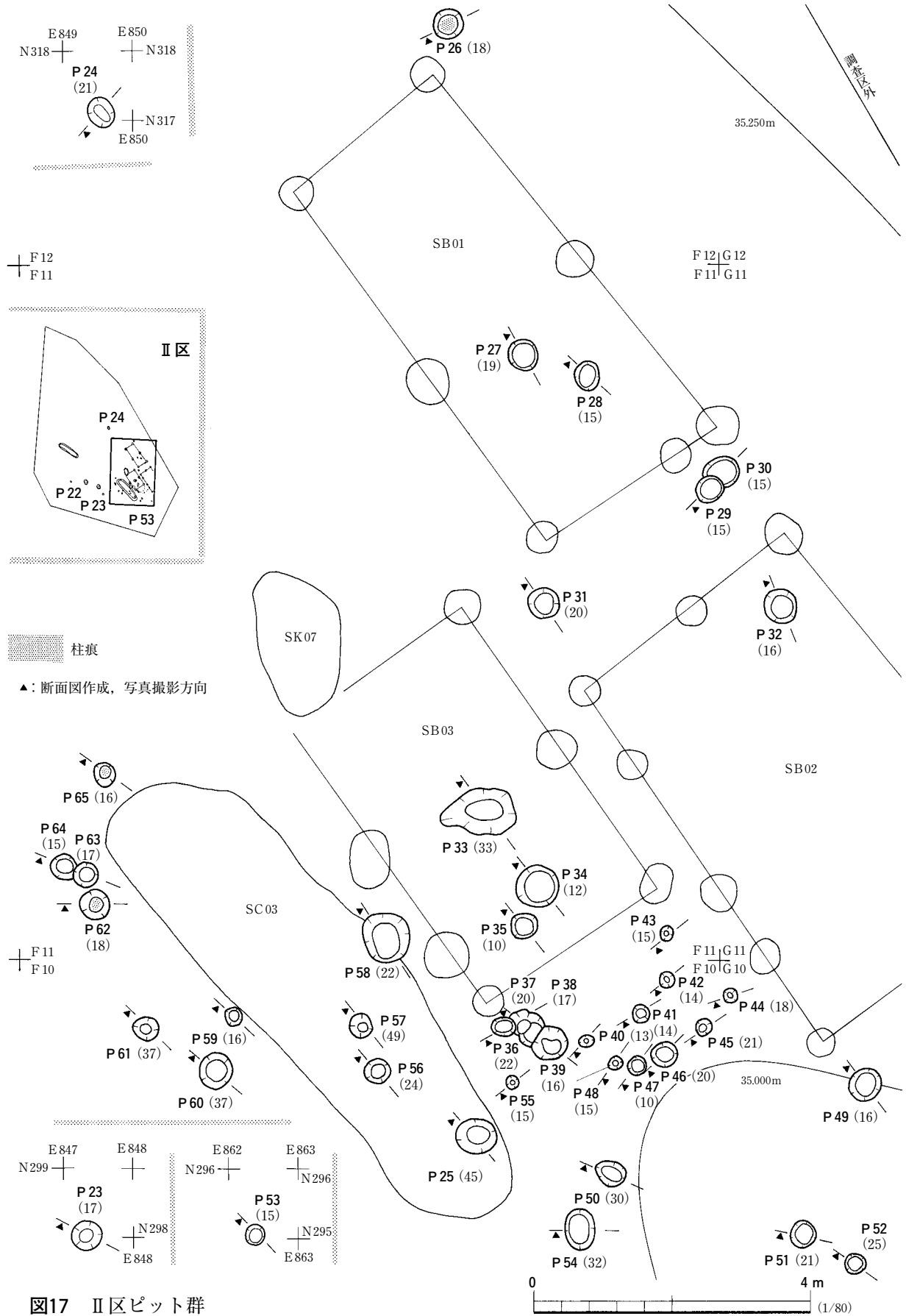
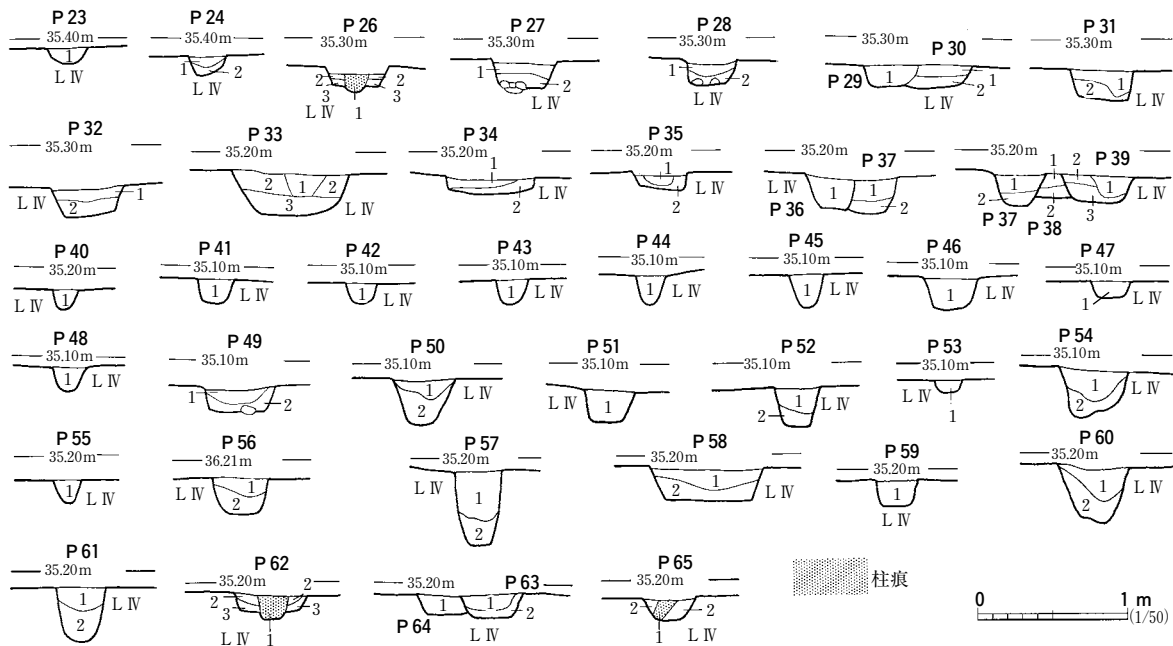


図17 II区ピット群

らに対してもう一方のグループは直径が15~22cm, 深さが14~22cmと小規模である。堆積土はLⅢに相当する黒褐色土である。

P33は平面形が不整楕円形で規模も大きく, 他のピットと異なる。規模は長径107cm, 短径67cmを測り, 検出面からの深さは33cmである。堆積状況を見ると, ℓ1黒色土とℓ2暗褐色土が上層, ℓ3褐色土が下層にみられた。ℓ1は平面で見るとピットの中央部付近に分布していた。また, 3号建物跡のちょうど中央付近に位置しているが, 関連するものかどうかは不明である。

P22とP25からは, 本遺跡の中でも比較的多量の土器片が出土し, その多くは接合した。D11グ



P23・36・40・41・42・43・44・46・51・53・56・63 堆積土

1 黒褐色土 10Y R2/3

P24・35・61 堆積土

1 黒褐色土 10Y R2/3

2 暗褐色土 10Y R3/4

P26 堆積土

1 暗褐色土 10Y R3/3

2 褐色土 10Y R4/4 (LⅢブロック含む)

3 褐色土 10Y R4/4

P27・28・31・32・37・38・49 堆積土

1 暗褐色土 10Y R3/3

2 褐色土 10Y R4/4

P29・45・47・48・55 堆積土

1 暗褐色土 10Y R3/3

P30 堆積土

1 褐色土 10Y R4/4

2 暗褐色土 10Y R3/4

P33 堆積土

1 黒色土 10Y R2/1

2 暗褐色土 10Y R3/4

3 褐色土 10Y R4/4

P34 堆積土

1 暗褐色土 10Y R3/4

2 褐色土 10Y R4/6

P39 堆積土

1 黒褐色土 10Y R2/3

2 暗褐色土 10Y R3/3

3 褐色土 10Y R4/4

P50 堆積土

1 褐色土 10Y R4/4 (黒褐色土含む)

2 褐色土 10Y R4/4

P52 堆積土

1 黒褐色土 10Y R2/2

2 にぶい黄褐色土 10Y R5/4

P54 堆積土

1 暗褐色土 10Y R3/3

2 黄褐色土 10Y R5/6

P57 堆積土

1 黒褐色土 10Y R2/3

2 暗褐色土 10Y R3/3

P58 堆積土

1 暗褐色土 10Y R3/4

2 褐色土 10Y R4/4

P59 堆積土

1 黒褐色土 10Y R2/2

P60 堆積土

1 黒褐色土 10Y R2/2

2 褐色土 10Y R4/4

P62 堆積土

1 黒褐色土 10Y R2/3

2 暗褐色土 10Y R3/4

3 暗褐色土 10Y R3/3

P64 堆積土

1 暗褐色土 10Y R3/4

P65 堆積土

1 黒褐色土 10Y R2/2

2 暗褐色土 10Y R3/4

図18 II区ピット群断面図

リッドのP22は平面形がほぼ円形で、直径は48cmを測る。検出面からの深さは15cmである。堆積土は2層に分けた。ℓ1は炭化物を含んだ褐色土で、ℓ2は黄褐色土で径5~10cmの礫を含んでいた。出土した遺物は筒形土器片65点である。F10グリッドのP25は3号木炭窯跡を壊す状態で作られている。平面形は楕円形で直径は55cm、検出面からの深さは21cmを測る。堆積土は2層に分けた。ℓ1は黒褐色土、ℓ2は暗褐色土でいずれも炭化物粒を含んでいた。出土した遺物は土師器片45点と筒形土器片21点である。

上記以外のⅡ区から検出されたピットは大きさが23~60cm、検出面からの深さは10~42cmである。

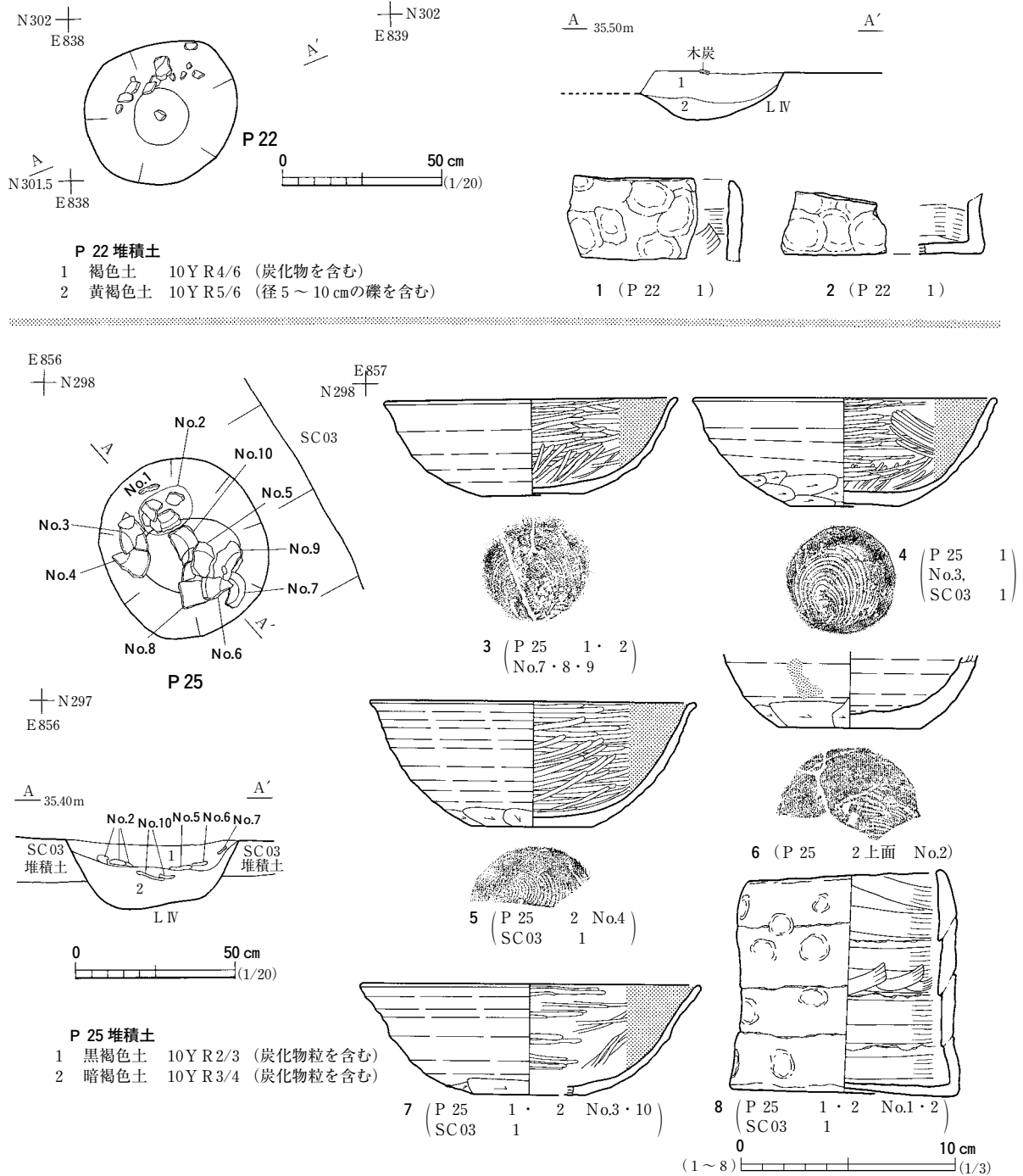


図19 P22・25と出土遺物

堆積土はほとんどが単層か2層で、検出面に近いところで黒褐色土や暗褐色土、底面に近いところで褐色土などの明るめの土が観察された。

P22・P25の出土遺物 D11グリッドのP22から出土した遺物は、筒形土器2点が図示できた。図19-1は口縁部である。外面はユビオサエ、内面はヘラナデが施されている。また、下端部は輪積みが剥離した痕跡がみられた。図19-2は底部の資料である。1と同様の調整が施されている。

同じく調査Ⅱ区F10グリッドのP25から出土した遺物は6点図示した。図19-3～5と7は土師器の杯である。3はほぼ完形に近い。いずれもロクロ整形によるもので、法量的にほぼ同じである。外面はロクロナデが施され、手持ちヘラケズリで再調整が行われている。内面は黒色処理されている。図19-6は土師器の底部資料であるが、やや厚みがあるので鉢とみられる。外面はロクロナデの後手持ちヘラケズリで再調整されていて、表面には粘土の付着があった。底部は回転糸切りの痕跡が残り、周辺部は手持ちヘラケズリにより再調整されている。図19-8は筒形土器である。外面調整はユビオサエがわずかに認められる。内面はヘラナデを施している。内外両面から粘土紐積み上げ痕が明瞭に認められる。底部の調整は不明である。いずれの資料も掘立柱建物跡から出土したものと特徴が似ている。

ま と め

本遺跡は全体的に遺構数も少なく、検出されたピットの数もそれほど多くはない。しかし、調査した小ピットは一部を除いて比較的まとまって検出されている。すべてのピットが同時期に機能していたとはいえないが、付近の遺構と関連が考えられるピットも数基あった。Ⅱ区のピットについては建物跡の時期と近いものも存在すると考えられる。なかには建物跡より新しい時期のものも含まれること予想される。また土師器杯・筒形土器が出土したP25は、3号木炭窯跡より新しいことがわかった。

P22とP25の大きな違いはP22から出土した遺物は筒形土器片で、一方P25についてはほとんどが土師器の杯である点である。いずれのピットとも、北東側に位置する掘立柱建物跡から出土した遺物と特徴が似ていて、9世紀中葉頃に属すると考えられる。しかし、これらのように限られたピットからのみ遺物が認められた理由は不明である。 (鈴木)

第9節 遺構外出土遺物

今回の上郡B遺跡の調査では、遺構外から計446点の遺物が出土している。Ⅰ区では102点、Ⅱ区では344点の破片資料が認められた。内訳は、縄文土器片43点・弥生土器片1点・土師器片371点・須恵器片2点・土製品1点・石器類2点・それに時期不明の破片資料27点が出土している。

層位別の出土状況は、LⅡから140点、LⅢから306点が出土している。遺物の多くがLⅢからの出土であり、すべてが混在した状況で出土している。図20に示したグリッド別の分布状況を見ると、Ⅰ区ではF21・G31グリッド付近、Ⅱ区ではF10・F11グリッド付近からまとまって出土しており、

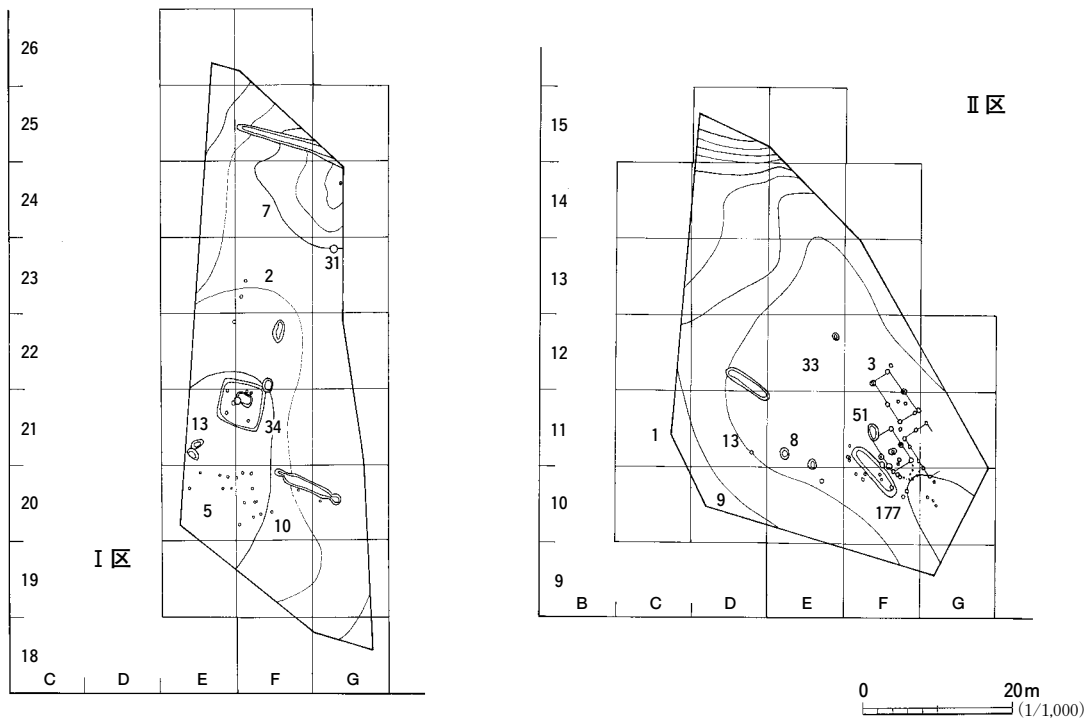


図20 遺構外出土遺物分布図

遺構の分布とほぼ一致していることがわかる。遺物の大半は摩滅が著しい破片資料であり、全体の器形を把握できたものは少ないが、底部片は17点認められた。細片化も進んでいることから、遺物は埋没過程で原位置を大きく遊離したものと推察される。図21に抽出して図示した遺物は、縄文土器17点、弥生土器1点、土師器8点、須恵器1点、土製品1点の計28点である。

縄文土器 (図21-1~16・19)

I区から5点、II区から38点の縄文土器が遺構外から出土している。II区ではD11グリッドから多く出土している。1は、尖底深鉢形土器の底部付近の資料である。外面には撚糸文、内面には条痕が認められる。二次的に被熱を受けた痕跡が観察される。胎土には繊維混和痕が認められ、厚さは1.2cmである。縄文時代早期末～前期初頭に比定されるものであろう。

2～9・14・19は縄文時代後期に比定される資料である。2・4・8は口縁部片、3・5～7・10は頸部から胴部上半の資料である。これらの資料の胎土には、石英・長石の粗砂粒を含んでいる。2は羽状風に回転施文している。口縁部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は厚手である。3は外面には単節斜縄文と断面「U」字状を呈する2本1組の沈線文が認められる。1.2cmと比較的厚手で、胎土には長石の粗粒のほかに雲母を含んでいる。外面には斜縄文と2本1対による沈線文が認められる。沈線の断面はU字状を呈している。4は、横位沈線によって区画された幅の狭い口縁部に単節斜縄文が施文されている。5・6は器形的に壺あるいは鉢形土器と思われる。磨消縄文が施され、6には刺突列が認められる。7は断面三角形の横位隆帯の下位に斜縄文が施文されている。8・9は同一個体の深鉢形土器である。外面には櫛歯状工具による条線文が認められる。厚さが0.7cm

と薄く、胎土には長石の粗粒が多く含まれている。19は台付鉢の胴部下端から高台部の資料である。文様や施文技法の特徴から、3が加曾利B2式、2・5・6が加曾利B3式に比定されるものであろう。

10・12・15は縄文時代晩期に比定される資料と思われる。10は地文LR原体の斜縄文に横位の区画沈線とS字状の結節文が認められる。内面にはタール状の付着物が認められる。大洞BC式頃に比定されるものであろう。12は撚糸文、15は外面に網目状撚糸文が認められる。

11・13は多方向からの施文により、部分的に条が重なりあっている。

弥生土器 (図21-17)

調査区内ではごくわずかの出土であり、1点のみ図示した。17は口頸部が「く」の字状に湾曲する甕形土器である。胴部には0段多条の原体が横位方向へ回転施文され、頸部には長軸長6mm、短軸長3mmの粉殻痕が認められる。

土製品 (図21-18)

18は形態の特徴からスタンプ形土製品あるいはキノコ形土製品と判断され、第二の道具としての儀器・呪術具と思われる。検出状況は特異なものではなく、他の土器や石器類と同様に出土したものであり、1点のみ出土した。先端の尖った工具により刺突文が施され、つまみ部分には径0.3cmの穿孔が加えられている。推定径4.4cmの裏面には幅0.3cm程の沈線が認められる。三十稲場式に比定されるものであろう。

土師器・須恵器 (図21-20~28)

22~25は非ロクロ、20・21・26はロクロ整形の土師器である。非ロクロ土師器は主にI区F21・G23グリッドから多く出土し、II区からはあまり出土していない。ロクロ土師器はII区F10・F11グリッドから多く出土し、I区からは出土していない。22は杯身、23は高杯の脚部である。22は内外面に、23は外面のみにヘラミガキによる調整が見られる。23の内面は、棒状の工具を用いて中空状に仕上げている。22は23と胎土や調整技術が類似していることから判断すると高杯の杯部の可能性が高く、これらの資料は塩釜式期土器に比定されるものであろう。24・25は甕の底部である。24は外面にヘラケズリ、内面はヘラナデの痕跡が見られる。25の外面はヘラケズリの後、ヘラミガキを施している。内面は摩滅が著しく、調整の観察が困難である。

20は杯である。外面体部下端には手持ちヘラケズリ再調整の跡が見られる。内面は2次的な被熱により黒色処理が失われている。21・26は甕の口縁部の破片である。21の口縁部は丸味を帯び、緩く外反している。26の口縁部は鋭角的に上方につまみあげられている。

27は筒形土器の口縁部である。内外面には粘土紐の積み上げ痕とユビオサエ痕が顕著に認められる。28は須恵器甕の胴部片である。外面には平行するタタキ目が認められ、内面にはアテ具痕をとどめる。

(門 脇)

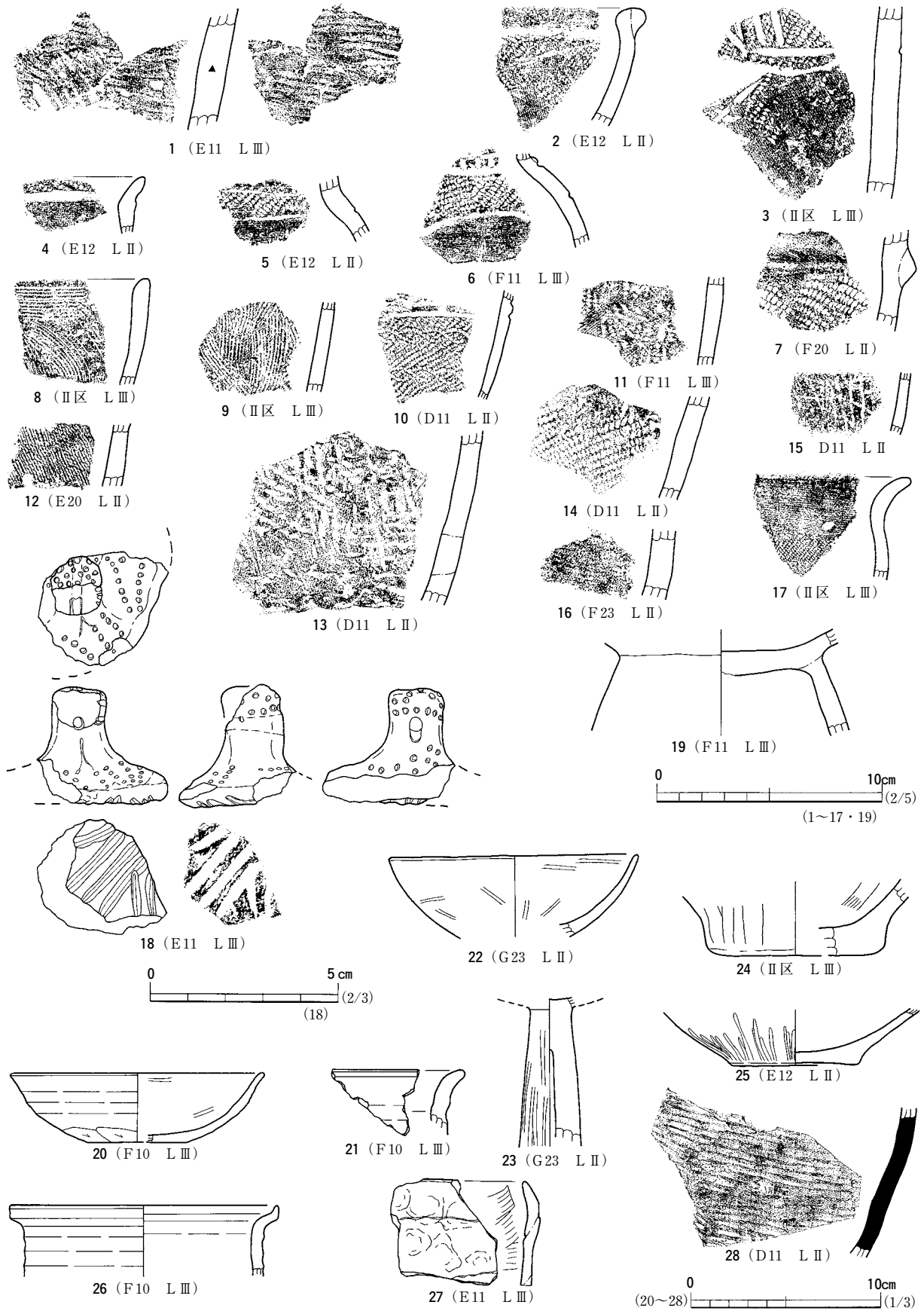


図21 遺構外出土遺物

表1 上郡B遺跡出土の土師器一覧

注：()…推定値, []…残存値

挿図番号	器種	出土地点	口径	底径	器高	遺存度(%)	外面の特徴	内面の特徴
図5-1	椀	S I 01 ℓ 1 No.4	8.1	4.5	5.6	75	ナデ	ヘラナデ
図5-2	小型丸底壺	S I 01 ℓ 2 No.1	10.8	2.9	5.9	85	ヘラケズリ	赤彩
図5-3	小型丸底壺	S I 01 ℓ 1・2	11.6	3.4	8.0	85	ヨコナデ, ハケメ	ヨコナデ, ヘラナデ
図5-4	高杯	S I 01 ℓ 2 No.2	-	10.0	[8.3]	40	ヘラミガキ	ヘラナデ, ハケメ
図5-5	甕	S I 01 ℓ 2 No.6・7 E 21 L II・L III	23.6	-	[11.6]	20	ハケメ, ヨコナデ	ハケメ, ヘラケズリ, ヘラナデ
図5-6	甕	S I 01 ℓ 2 No.5	(17)	-	[3.8]	5	ハケメ, ヨコナデ	ハケメ, ヘラナデ
図7-1	杯	S B 02 P 4 ℓ 1	-	-	[2.8]	5	ロクロナデ, ヘラケズリ	ヨコナデ
図8-1	甕	S B 03 P 5 ℓ 1	(17.6)	-	[15.4]	40	ロクロナデ, ヘラケズリ	ロクロナデ
図11-1	杯	S C 03 ℓ 1・ F 10 L III・F 11 L III	12.4	5.3	4.2	70	ロクロナデ, ヘラケズリ	ヘラミガキ, 黒色処理
図11-2	筒形土器	S C 03 ℓ 1	-	-	[3.9]	5	指オサエ	ヘラナデ, 指ナデ
図11-3	筒形土器	S C 03 ℓ 1	-	(10.6)	[4.0]	10	指オサエ	ヘラナデ
図19-1	筒形土器	P 22 ℓ 1	-	-	[3.8]	5	指オサエ	ヘラナデ
図19-2	筒形土器	P 22 ℓ 1	-	-	[2.9]	5	指オサエ	ヘラナデ
図19-3	杯	P 25 ℓ 1 No.7・9, P 25 ℓ 2 No.8	13.6	4.7	4.4	90	ロクロナデ	ヘラミガキ, 黒色処理
図19-4	杯	P 25 ℓ 1 No.3, S C 03 ℓ 1	14.0	5.1	5.0	65	ロクロナデ, ヘラケズリ	ヘラミガキ, 黒色処理
図19-5	杯	P 25 ℓ 2 No.4, S C 03 ℓ 1	(15.0)	(5.6)	5.8	30	ロクロナデ, ヘラケズリ	ヘラミガキ, 黒色処理
図19-6	鉢	P 25 ℓ 1・2 No.2	-	6.6	[3.4]	15	ロクロナデ, ヘラケズリ	ロクロナデ
図19-7	杯	P 25 ℓ 1 No.3, ℓ 2 No.10, S C 03 ℓ 1	(15.8)	(5.0)	5.1	50	ロクロナデ, ヘラケズリ	ヘラミガキ, 黒色処理
図19-8	筒形土器	P 25 ℓ 1 No.1・ℓ 2 No.2, S C 03 ℓ 1	8.6~9.5	10.6	10.5	80	指オサエ	ヘラナデ
図21-20	杯	F 10 L III	(13.2)	(5.1)	3.6	20	ロクロナデ, ヘラケズリ	ヘラミガキ
図21-21	甕	F 10 L III	-	-	[3.4]	5	ロクロナデ	ロクロナデ
図21-22	杯	G 23 L II	(13.0)	-	[4.2]	15	ヘラミガキ	ヘラミガキ
図21-23	高杯	G 23 L II	-	-	[7.7]	15	ヘラミガキ	-
図21-24	甕	L III	-	(8.6)	[3.9]	5	ヘラケズリ	ヘラナデ
図21-25	甕	E 21 L II	-	6.6	[2.8]	5	ヘラミガキ	-
図21-26	甕	F 10 L III	(13.9)	-	[3.7]	5	ロクロナデ	ロクロナデ
図21-27	筒形土器	E 11 L III	-	-	[5.4]	5	指オサエ	ヘラナデ

表2 上郡B遺跡ピット一覧

(単位：cm)

グリッド	ピットNo.	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備	考		
E10	D11	22	48	45	15	円形				
	E10	23	43	43	17	円形				
	E11	31	42	40	20	円形				
	E12	24	45	36	21	楕円形				
	E20	1	46	42	14	円形				
		2	40	38	10	円形				
		3	27	27	18	円形				
		4	35	32	10	円形				
		5	29	29	23	円形				
		6	29	29	15	円形				
		17	32	31	15	円形				
		18	34	33	20	円形				
		F10	25	55	51	21	円形			
			45	25	25	21	円形			
	46		37	35	20	円形				
	47		25	25	10	円形				
	48		19	19	15	円形				
	50		46	36	30	楕円形				
54	62		43	32	楕円形					
55	18		18	15	円形					
56	35		35	24	円形					
57	32		32	49	円形					
59	26		25	16	円形					
60	48		46	37	円形					
61	38		34	37	円形					
83	44		43	35	円形					
84	62		62	27	隅丸方形					
F11	27		42	42	19	円形				
	28		40	36	15	楕円形				
	33		107	67	33	不整楕円形				
	34	57	57	12	円形					
	35	36	35	10	円形					
	36	—	26	22	楕円形					
	37	—	—	20	—					
	38	55	45	17	楕円形					
	39	50	48	16	円形					
	40	17	15	13	円形					
	41	25	24	14	円形					
	42	20	20	14	円形					
	43	18	18	15	円形					
	58	71	65	22	楕円形					
	62	45	43	18	円形					
	63	35	35	17	円形					
	64	39	37	15	円形					

グリッド	ピットNo.	長軸	短軸	深さ	平面形	柱痕	備	考	
F11	65	34	31	16	円形	有			
	67	54	51	15	円形			SB01P2	
	69	47	45	19	円形			SB01P4	
	70	69	60	15	楕円形	有		SB01P5	
	72	48	41	15	楕円形			SB01P7	
	76	53	51	21	円形	有		SB02P4	
	77	44	41	16	楕円形	有		SB02P5	
	78	49	46	18	円形			SB02P6	
	79	45	44	25	楕円形			SB02P7	
	80	51	49	40	楕円形			SB03P1	
	81	60	55	24	円形			SB03P2	
	82	57	45	22	楕円形			SB03P3	
	85	81	57	22	楕円形			SB03P6	
	26	42	42	18	円形	有		SB01P1	
	66	50	48	15	円形			SB01P6	
	71	49	49	16	円形			土器出土	
	F12	7	42	34	42	楕円形	有		
		8	30	29	15	円形			
9		40	39	15	円形			P9 > P10	
10		34	32	15	円形			P9 > P10	
11		30	28	30	円形				
12		40	39	32	円形				
13		42	36	20	楕円形				
14		23	22	31	円形				
15		40	38	12	円形				
16		30	30	15	円形				
87		26	24	19	円形			SC01P2	
F23		19	35	34	10	円形			
		20	35	31	18	円形			石含む
G10		44	21	20	18	円形			
		49	47	45	16	円形			土器出土
		51	38	36	21	円形			
		52	29	28	25	円形			
		53	30	27	15	円形			
	74	41	39	21	円形			SB02P2	
G11	75	48	42	22	楕円形	有		SB02P3	
	29	39	36	15	円形			P29 > P30	
	30	51	45	15	楕円形			P29 > P30	
	32	50	49	16	円形				
	68	62	56	15	楕円形			SB01P3	
	73	62	49	21	楕円形			SB02P1	
G20	86	24	24	22	円形			SC01P1	
	21	38	37	22	円形	有			

※柱痕：確認された場合のみ「有」を表記。
※重複関係：AがBより新しい場合、A > Bと表記。

第3章 ま と め

今回の発掘調査の結果、上郡B遺跡は縄文時代から古代にわたる複合遺跡であることがわかった。検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡3棟、木炭窯跡3基、土坑7基、集石遺構1基、溝跡1条、ピット群2カ所である。遺構内および遺構外から出土した遺物は、縄文土器片50点、弥生土器片2点、土師器片732点、須恵器片2点、土製品1点、石器類5点それに時期不明の破片資料32点の総数824点である。ここでは、前章で行った事実報告をふまえ、時代ごとにまとめてみる。

縄文時代・弥生時代

今回の調査では、縄文土器片50点、弥生土器片2点が出土したが、当該期の遺構は検出されなかった。出土した縄文土器を見ると、本遺跡では縄文時代早期末から晩期まで断続的に生活が営まれていたと推察される。最も古い資料としては、早期末から前期初頭に位置づけられる図21-1がある。その後、縄文前期の資料はなく、後期前半になって再び人類の活動痕跡が残される。該期の資料としては、三十稲場式に比定される土製品（図21-18）がある。後期後半には、加曾利B2式（同-3）や加曾利B3式（同-2・5・6）に比定される資料がやや多く認められる。晩期の資料としては、大洞B C式頃に比定される図21-10や粗製土器の同-15などが認められたが、希少である。

いずれの時期も資料数は少なく、該期の遺構が検出されなかったため、本遺跡の集落景観を復元するには至らない。しかしながら、縄文土器の多くが調査Ⅱ区から出土している点を考慮すると、調査Ⅱ区外の西側、紅葉川の低位段丘面上に居住域が立地している可能性がある。また、極めて断片的な資料ではあるが、弥生土器2点が認められた。これ以降、4世紀までの資料は認められない。

古墳時代

本遺跡において生活の痕跡が認められるようになるのは、古墳時代前期、4世紀に至ってである。当該期の遺構は、Ⅰ区で検出された竪穴住居跡1軒と集石遺構1基である。1号住居跡からは、古墳時代前期に位置づけられる塩釜式土器がまとまって出土した。遺構の平面形は隅丸方形を呈し、その規模は6.2×6.1mを測る。住居内の施設については、支柱穴と考えられるピットが認められたが、床面から炉跡は検出できなかった。出土した土器は一括資料ではないが、1号住居跡のおおよその年代観を示すものと考えている。そこで、これらの土器の編年的な位置づけをこれまでの研究成果をもとに考えてみたい。

塩釜式土器の編年案は、次山淳氏による6段階区分（次山1992）、辻秀人氏による3段階8時期区分（辻1995他）などが示されている。1号住居跡から出土した土器には、椀・小型丸底壺・高杯・甕がある。これらの土器組成の特徴としては、①椀・小型丸底壺ではヘラナデやハケメを主とし、ミガキによる調整は認められないこと、②小型丸底壺は、外面下端から底部にかけて面取り状のヘラケズリを施し、丸底風の底部に仕上げていること、③高杯は中実棒状の脚部に、「八」字状に開く脚

据部がつくものであること、④甕の外にはハケメの痕跡をとどめていることなどがあげられる。これらの諸特徴を従来の編年案にあてはめると、次山編年では5段階、辻編年ではⅢ-4期に位置づけられる。また、2号土坑や1号集石遺構から出土した塩釜式土器（図12-1・図14-1）についても、同様の位置づけが可能であろう。

今回の調査で検出した古墳時代前期の竪穴住居跡は1軒のみである。調査区幅が20m程の狭い範囲であったため、単独あるいは数軒の小規模な集落構成であったかどうかはわからない。地形・立地的には、今回の調査I区の東側に広がる平坦面に、当該期の主体的な居住域が展開する可能性は十分ある。

古代

古墳時代前期以降、平安時代に至るまでの資料は調査区内では見つかっていない。平安時代の遺

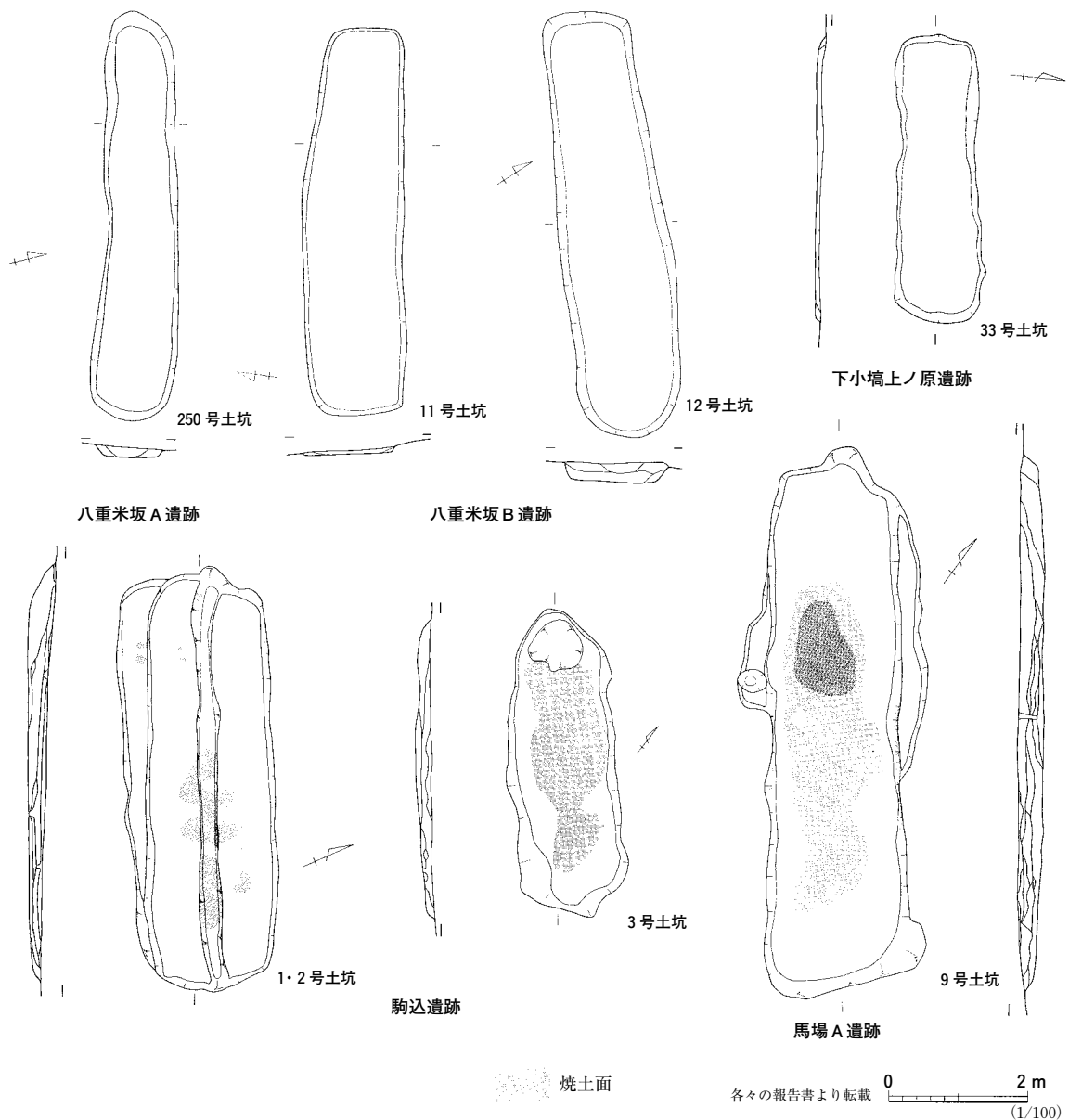


図22 伏焼法タイプの木炭窯跡の類例（浜通り地方）

構や遺物は、Ⅱ区の南半部で見ついている。3棟の掘立柱建物跡は、長軸方位が一致することから、同時期の所産と考えられる。しかしながら、各建物跡間の距離が密接していることや庇構造を考慮すると、3棟が同時併存した可能性は極めて低い。そのため、隣接する区域で数回の建て替えを行ったものと判断される。建物跡の性格は、平面規模や柱穴等の特徴から判断して、作業小屋などの小規模な建物跡と推定される。3号木炭窯跡がほぼ長軸方位を一致させ、近接して存在していることを考慮すれば、本木炭窯跡に関連する施設であった可能性が高い。

本遺跡で検出された木炭窯跡は、一般的な木炭窯とは形態が異なる。特徴をあげると、①平坦面に立地していること、②規模が全長6.5mを超え、平面形が長大な隅丸長方形を呈すること、③検出面からの深さは約10～15cmと非常に浅いこと、④覆土中に多量の木炭を含み、焼土粒なども見られたことなどである。このような特徴をもつ遺構は、福島県浜通り地方ではいわき市駒込遺跡（石本^他1995）、いわき市馬場A遺跡（佐藤^他1995）、檜葉町下小塙上ノ原遺跡（吉田^他2000）、原町市八重米坂A・B遺跡（藤谷^他1994）などが知られる。これらの年代観については、伴出遺物などが少なく、明確な時期までは言及されていない。今回の調査では、3号木炭窯跡の覆土を掘り込んだピット（P25）の中から、9世紀中葉頃に比定される土師器杯・筒形土器がまとまって出土している。このことから、所属時期は少なくとも9世紀中葉頃は下らないと考えられる。また駒込・馬場A遺跡の報告では、特別に天井構造を設けない開放窯タイプの木炭窯跡（焼成土坑）での焼成法について「伏焼法」の可能性を指摘している。伏焼法とは、薪の上に枝や葉などの可燃物を重ねて、さらにオガ屑などを混ぜた土で覆って外気を遮断する炭焼きの方法で、焼成された木炭は近世においては家庭用や製鉄用の木炭として使用されたという（岸本1976）。

本遺跡では、9世紀代に伏焼法的な焼成技術を用いて木炭窯が営まれていた可能性が高く、これに伴う作業小屋として掘立柱建物群が建てられていたと想定できる。（門 脇）

引用・参考文献

- 石本 弘^他 1995 「駒込遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告4』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター・日本道路公団
- 佐藤 啓^他 1995 「馬場A遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告4』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター・日本道路公団
- 岸本 定吉 1976 『炭』丸の内出版
- 次山 淳 1992 「塩釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集
- 辻 秀人 1995 「東北部における古墳出現期の土器編年その2」『東北学院大学論集歴史学地理学』第27号
- 藤谷 誠^他 1995 「八重米坂A遺跡」「八重米坂B遺跡」『原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅳ』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター・東北電力株式会社
- 吉田 功^他 2000 「下小塙上ノ原遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告20』福島県教育委員会・（財）福島県文化センター・日本道路公団

第2編 もと まち にし 本町西 A 遺跡

遺跡記号 TO-MMN・A
所在地 双葉郡富岡町大字本岡字本町西
時代・種類 旧石器・縄文・弥生時代，中世
集落跡
調査期間 平成12年4月17日～8月11日
調査員 能登谷宣康・菊田 順幸
千葉 秀樹・堀川 雄二
三浦 武司

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 遺跡の位置と地形 (図1, 写真1～3)

本町西A遺跡は、双葉郡富岡町大字本岡字本町西地内に所在し、JR常磐線富岡駅から西北西へ約3km、国道6号線より西に約2km、主要地方道いわき・浪江線(県道35号)より東に約3kmの地点に位置している。

本遺跡は、本岡地区南部を北西から南東に流れる富岡川の右岸に発達した、東方へ舌状に張り出す河岸段丘上に立地している。この段丘上には段丘面が上下2面あるが、標高45～52mの上位面は中位Ⅲ段丘(久保他1994)に当り、その東方に広がる標高31～33mの下位面は低位Ⅰ段丘(久保他1994)に当る。平成6年度の表面調査で両面とも遺跡と推定されている。遺跡範囲は東西長675m、南北長250mの約123,000㎡で、各段丘面とも西から東に向かって緩く傾斜している。今回の調査区は上位の中位Ⅲ段丘に所在する。なお、遺跡の南北両端は急崖となっているが、南は富岡川支流の遅沢川に面した段丘崖であり、北は段丘面形成後に浸食を受けて形成された沢である。

本遺跡の現況を見てみると、遺跡南部を町道門口-赤木線が東西に横切り、町道より北側部分は主に桑畑・蔬菜畑・宅地として利用され、一部山林を残している。一方、南側部分は一部に桑畑がみられるものの、大半は山林である。常磐自動車道の路線が遺跡の西端付近を南北に通過する計画であることから、今回の調査区は遺跡の西端付近に当る。

本遺跡の近隣に位置する遺跡として、本遺跡の北の沢を挟んで本遺跡よりも高位置に存在する中位Ⅱ段丘上には、本遺跡とほぼ同時期の縄文時代前期後半に集落が営まれていた上本町G遺跡が存在し、その段丘の先端には中世の城館跡と考えられる諸沢館跡が所在する。さらに、その北方には上本町A・B・C遺跡の3遺跡が存在し、その北西には上本町D・E・F遺跡が所在する。一方、本遺跡の南方には遅沢川右岸の低位Ⅰ段丘上に本町西B遺跡、その南に広がる中位Ⅲ段丘上に本町西C・D遺跡が所在する。

(千葉)

第2節 調査経過

本町西A遺跡は、平成6年度に財団法人福島県文化センターが福島県教育委員会の委託を受けて実施した常磐自動車道いわき市四倉～富岡町間の表面調査の際に再確認された遺跡である。富岡町本岡字本町西地区では、本町西遺跡と遅沢遺跡が周知の遺跡であった。昭和59年刊行の『福島県埋蔵文化財分布図』及び『福島県埋蔵文化財一覧表』には遅沢遺跡のみが登録されており、昭和62年刊行の『富岡町史 第三巻 考古・民俗編』では本町西遺跡が掲載され、平成2年刊行の『富岡町の文化財』では昭和62年1月に行政区画変更により遅沢遺跡を本町西遺跡に改称したことが記載さ

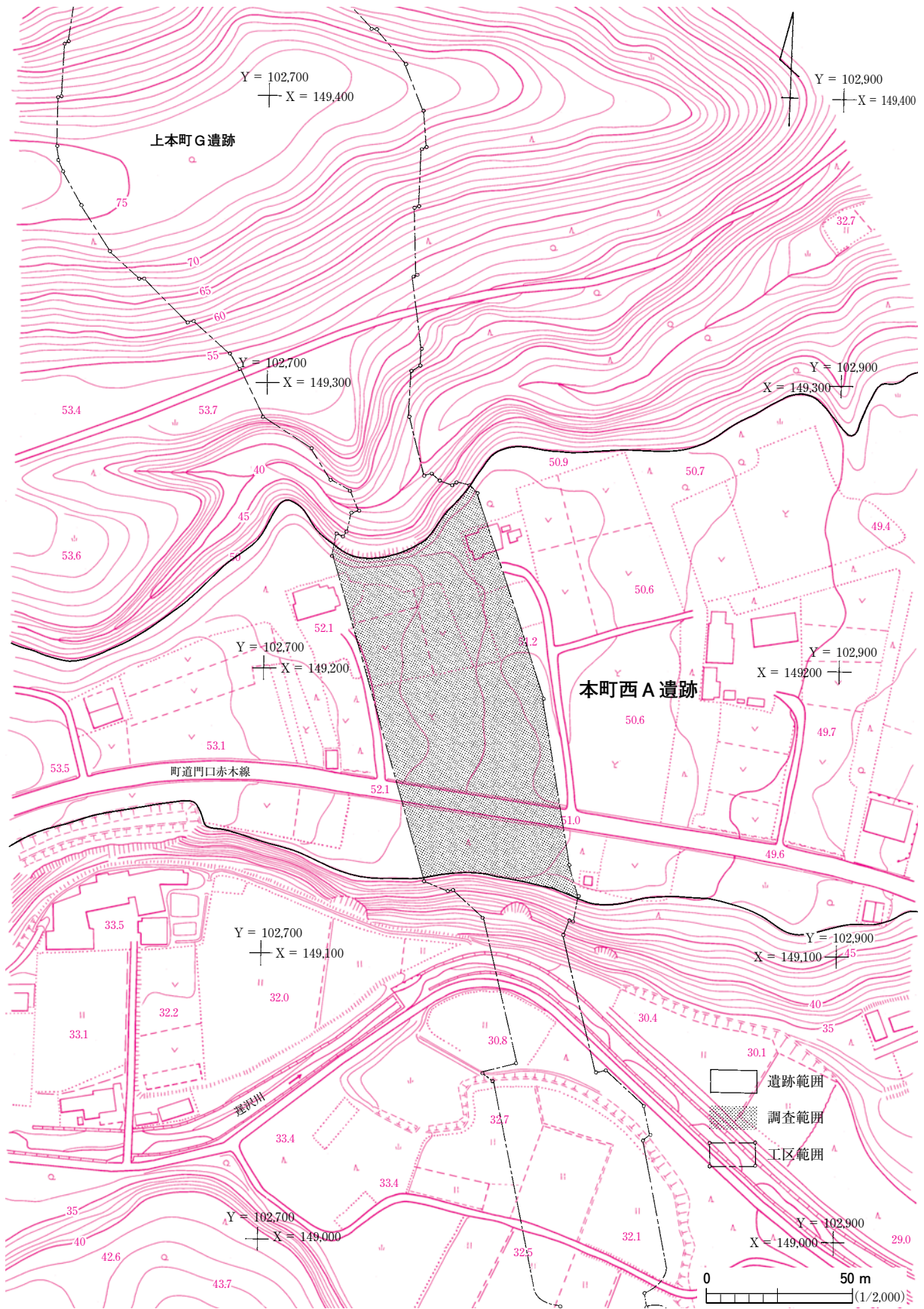


図1 本町西A遺跡調査区位置図

れている。つまり、平成6年度の表面調査の段階では本町西遺跡のみが周知の遺跡ということになり、この表面調査によって、さらに4箇所（本町西B～E遺跡）が確認されたことから、周知の本町西遺跡に関して「本町西A遺跡」と名称が変更され、遺跡の面積は123,000㎡と推測された。なお、平成8年刊行の『福島県遺跡地図』では、遅沢遺跡を「本町西A遺跡」とし、平成6年度の表面調査で名称変更した「本町西A遺跡」に関しては、「本町西F遺跡」と間違って掲載されている。

この表面調査の結果を受けて、福島県教育委員会は財団法人福島県文化センターに委託して平成7・8年度に試掘調査を実施し、調査の結果、堅穴住居跡と推測される遺構や土坑などが検出され、縄文土器片や石器類が出土した。平成8年度には、日本道路公団東北支社いわき工事事務所より予定工区が提示され、工区内の6,800㎡に関して保存措置が必要となったことから、福島県教育委員会は財団法人福島県文化センターに委託して平成12年度に発掘調査を実施することにした。

財団法人福島県文化センターでは本遺跡の調査に当たり、調査員5名を配し、4月17日より調査を開始した。まず最初に、重機により調査区の表土剥ぎを行い、4月25日からは表土剥ぎが終了した町道から北側の調査区に関して、人力による遺構検出作業にも取り掛かった。なお、現地事務所・作業員休憩所・器材置場及び駐車場の用地に関しては、調査区付近の常磐自動車道建設工区内に設定できないことから、富岡町役場の協力を得て、調査区に隣接する区域を借地して対応することとし、重機による表土剥ぎの際の排土の一部をこの借地部分の整地土に利用した。

4月中は調査の初期ということもあり、作業員の雇用手続きや新規雇用作業員の安全教育、借地手続き、調査区周囲の安全確保などの準備作業に多くの時間が費やされたが、5月に入ると調査は順調に推移するようになり、町道から北側の調査区北半から堅穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑などの遺構が検出され始め、検出した遺構の精査も並行して行うことにした。その後の調査により、検出した堅穴住居跡及び土坑は縄文時代早期後半から前期後半にかけての遺構であることが判明し、掘立柱建物跡は中世のものであることが判明した。また、5月22日からは調査区内に仮置きした排土を工事側より指定された遺跡外の上本町地内及び前川原地内に随時搬出した。なお、楢葉町小山B遺跡の調査の緊急性から、1名の調査員が5月29日よりそちらの調査に当たった。

6月以降には、雨により作業が中止になる事がしばしばあり、特に、7月8日の台風3号に伴う大雨では調査区北辺の崖面が地すべりを起こすという事態が発生した。財団法人福島県文化センターでは、この事態を受けて、地すべり箇所を中心としてシート養生し、地すべり箇所の拡大と土砂流出の防止に努めた。

7月に入り、遺跡を横断している町道部分の調査に関しては、町道付近の遺構の分布が散在的であることから、工事中の立会調査とすることになった。これにより、7月中旬には本遺跡の調査終了の目途が立ち、8月4日にラジオコントロールヘリコプター搭載カメラによって、遺跡全景や調査区各部の空中撮影を実施し、8月11日には全ての器材を撤収して本遺跡の調査を終了した。さらに、その後、8月28日に工事側に対して現地引渡しを行い、借地部分に関しても盛土を除去した後、富岡町役場立会いの下、現状復元して地権者に返却した。

なお、町道から北側の調査区北東部より調査中に旧石器時代のナイフ形石器が1点のみであるが出土したことから、7月17日に東北大学総合学術博物館柳田俊雄教授より本遺跡の基盤層についての現地指導を受けた。さらに、平成13年2月22日には本遺跡及び周囲の遺跡の段丘区分調査を実施し、福島大学の吉田義非常勤講師より本遺跡が中位Ⅲ段丘（久保^他1994）上に形成されているという現地指導を受けた。（能登谷）

第3節 調査方法（図2）

財団法人福島県文化センターでは、本町西A遺跡の発掘調査を行うにあたって、工事側の工区を示す幅杭をもとに調査区を設定し、その幅杭の国土座標（公共座標第Ⅸ系）をもとに調査区全体をカバーする10m四方のグリッドを設定した。国土座標軸をもとにしたのは、本遺跡の北に隣接する上本町G遺跡や南に隣接する本町西B・C・D遺跡との位置関係を正確に把握するためである。なお、このグリッドの原点は、調査区外の国土座標 $X=149,300$ 、 $Y=102,700$ に位置する。各グリッドには個別の番号を与え、東西方向に西から東へA・B……Lというようにアルファベットの大文字を付し、南北方向に北から南へ1・2……20というように算用数字を付してC7グリッドなどと呼称した。このグリッド番号は、遺構のおおまかな位置表示を行ったり、遺構外出土遺物の出土位置を表示するのに使用した。また、遺構平面図を作成するための水系ラインを1m方眼で規定した。水系ラインの方向はグリッドの分割線の方向と一致しており、その原点はA11グリッドの北西杭である。この原点の国土座標は $X=149,200$ 、 $Y=102,700$ である。そして、この原点を通る東西方向の水系ラインをNS00とし、北及び南へ1mごとにN01、N02……、S01、S02……、と番号を付け、南北方向の水系ラインにはその原点を通るものをE00とし、東へ1mごとにE01、E02……と番号を付けた。

発掘作業に際しては、重機により調査区の表土を除去し、その後、人力により遺構の検出作業・精査を行った。検出した遺構に関しては、遺構の種別ごとに検出した順に遺構番号を付けた。遺構の掘り込みは、2分割法を基本とし、堅穴住居跡などの大型遺構では4分割法あるいは6分割法を行った。4分割法及び6分割法の場合、北西区画から時計回りにa～d（f）区と表記することとした。遺物の取り上げに際しては、遺構内の遺物は上記の区画ごと、遺構外の遺物はグリッドごとに取り上げ、土層番号は、基本土層をLとローマ数字を組み合わせてLⅠ、LⅡ……と表し、遺構内の層序は ℓ と算用数字の組み合わせで $\ell 1$ 、 $\ell 2$ ……と表した。

調査の記録は、実測図作成及び写真撮影により行った。遺構図は基本的には1/20縮尺で平面図と断面図を作成し、遺構の細部や遺物の出土状態などの実測図は1/10縮尺で作成した。また、調査区の地形図は1/200縮尺で作成した。写真は、検出状況・土層堆積状況・遺物出土状態・完掘全景などについて、35mm判及び6×4.5cm判のモノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムを併用して随時撮影し、調査終了時にはラジオコントロールヘリコプター搭載カメラによって、遺跡全景や

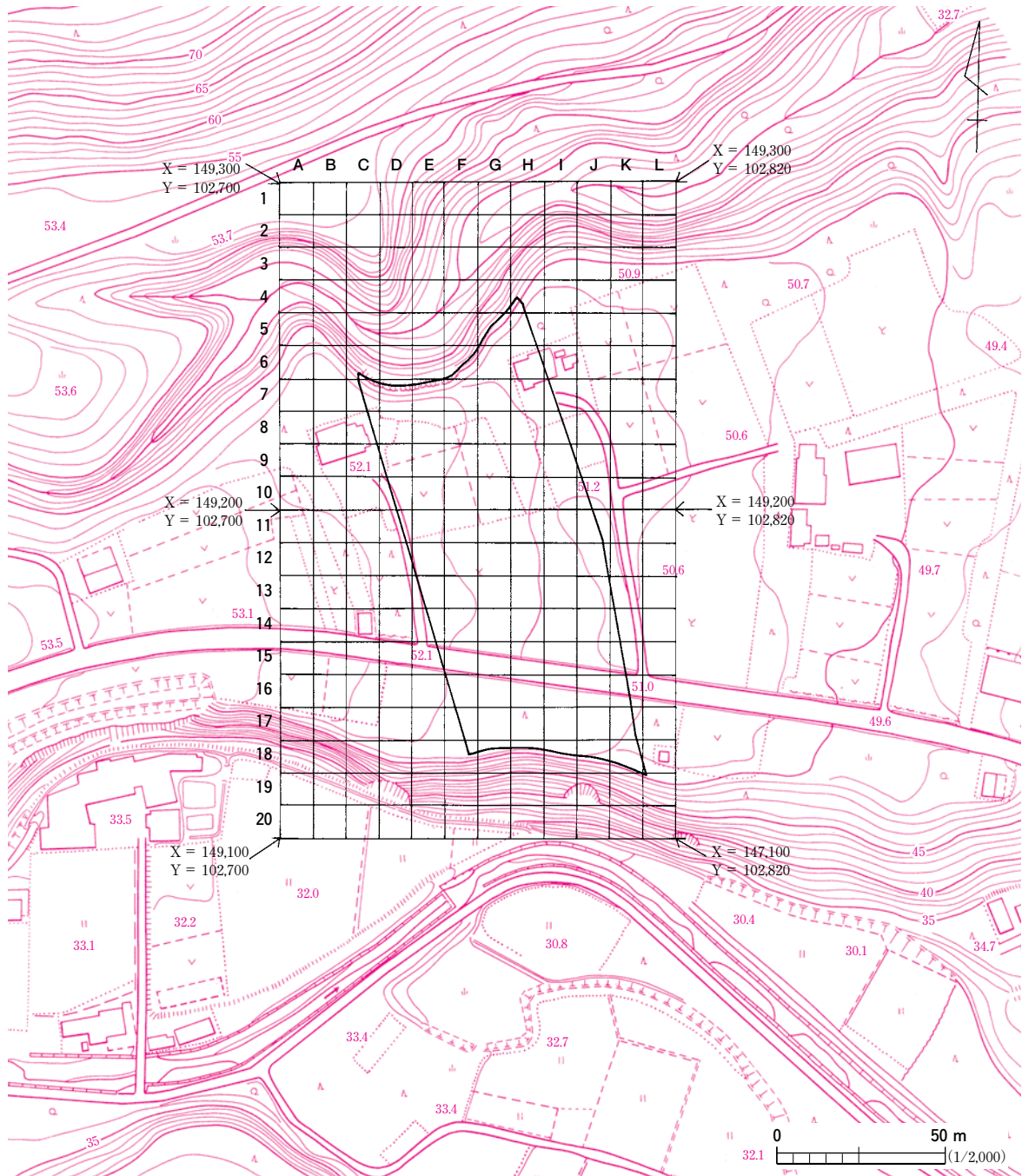


図2 国土座標とグリッドの関係

調査区各部の空中写真撮影も実施した。

調査において出土した遺物は、財団法人福島県文化センターに持ち帰り、水洗を行い個々に出土地点を記録して、整理（接合・図化・写真撮影）・分類した。（能登谷）

第2章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と基本土層

1. 遺構の分布 (図3, 写真3)

本町西A遺跡からは、竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡2棟、土坑34基、焼土遺構2基、ピット21基が検出され、縄文・弥生土器片7,920点、石器・剥片類527点、土製品3点、中世陶器片109点が出土した。土器は、縄文時代早期・前期の土器が主体であり、縄文時代中期・晩期の土器および弥生土器が僅かに混入する程度である。

町道北側の調査区南半分は桑畑の耕作の際に重機により破壊されていたため、遺構・遺物とも希薄であるが、町道北側の調査区北半分は深い後世の削平を受けていないことから、遺構の遺存が良く、遺構が集中して検出された。遺構の多くは調査区北東部に集中するが、縄文時代の竪穴住居跡の占地は異なり、早期末葉～前期初頭の住居跡は調査区中央に位置し、前期後半の住居跡は北東部に位置する。なお、前期後半の3軒の大型住居跡は長軸を同一方向に向け、一定の距離を保って位置している。土坑は時期が限定できるものが少なく、規則性もなく点在しているが、おおよそ、縄文時代早期末葉から縄文時代前期後半の土坑と推測される。また、調査区北東部からは主軸線が直交する中世の掘立柱建物跡が2棟検出されている。

町道の南側の調査区では落とし穴状土坑を3基検出したのみで、他に遺構は発見していないが、この3基の落とし穴状土坑は標高51.1mの等高線に沿って配置されている。

遺物の出土分布は遺構の分布に比例し、町道の北側の調査区の北半部での出土量が多い。

2. 基本土層 (図4, 写真3)

本調査区は東西に延びる段丘上に立地し、標高は50.2～51.5mである。調査前の現況は、山林・畑・宅地であった。町道の北側の畑地部分には、重機による大規模な南北方向の攪乱穴が見られ、基盤層上に直に耕作土が堆積している状態であったために、後世の削平を深く受けていない北側の地点で土層を観察することにした。基盤層より上位の基本層序は調査区北東部の調査区境の壁(図3の基本土層A)で観察し、基盤層の基本層序はG5グリッドに設定した深掘りトレンチ(図3の基本土層B)において観察した結果、LⅠ～Ⅷの8層を確認した。LⅠ～Ⅳは色調や含有物の違いにより分層され、LⅤ～Ⅷは僅かな色調の差や固さによって分層した。

LⅠ : 暗褐色土(7.5YR 3/4) 現表土で、調査区全域に堆積している層である。上面は調査以前は住宅地や畑であった。層厚18～41cmを測る。遺物出土。

LⅡa : 黒褐色土(7.5YR 2/2) 調査区北東部にのみ認められる層で、炭化物粒を微量に含んでいる。8～29cmの厚さで堆積する。遺物出土。

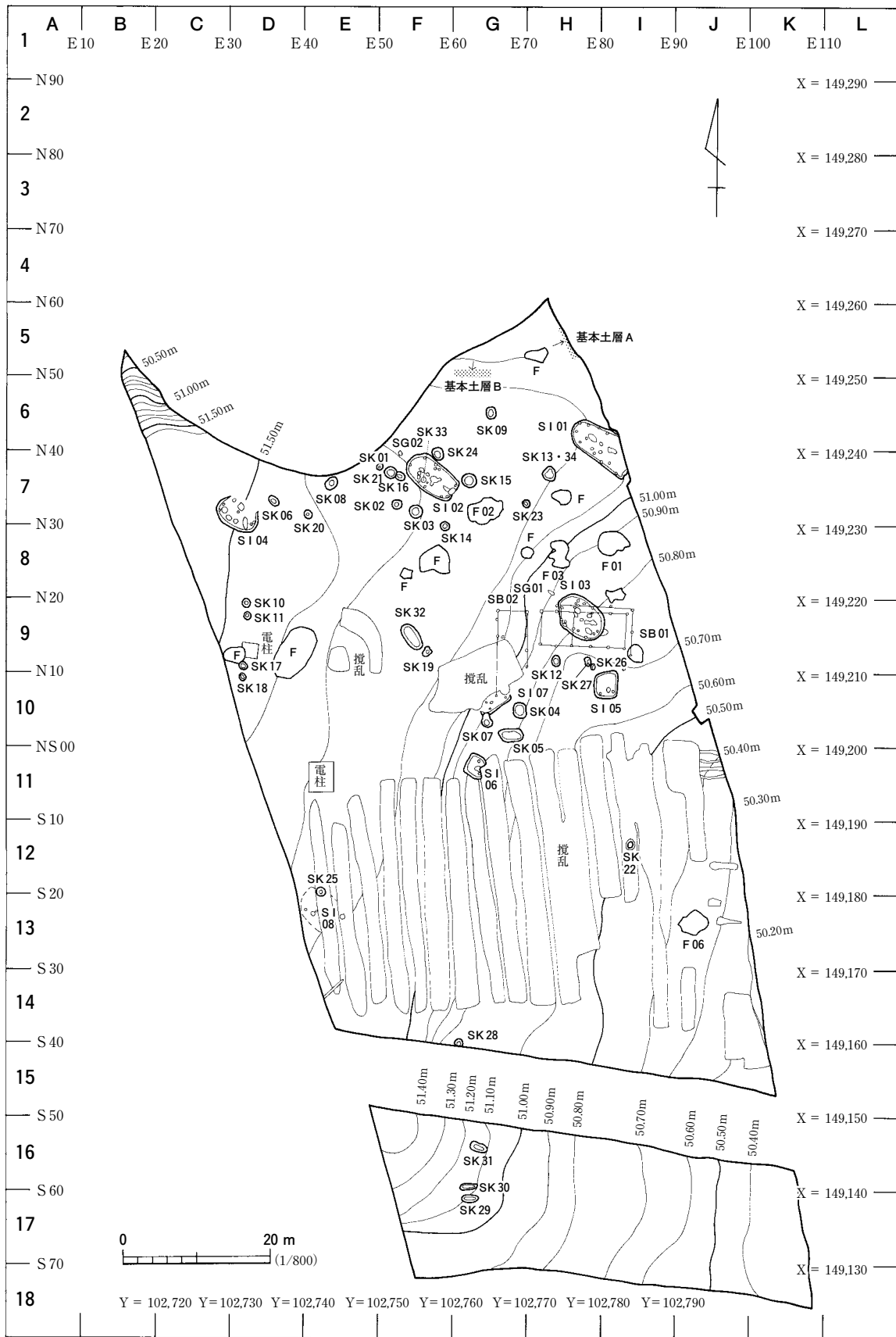


図3 本町西A遺跡遺構配置図

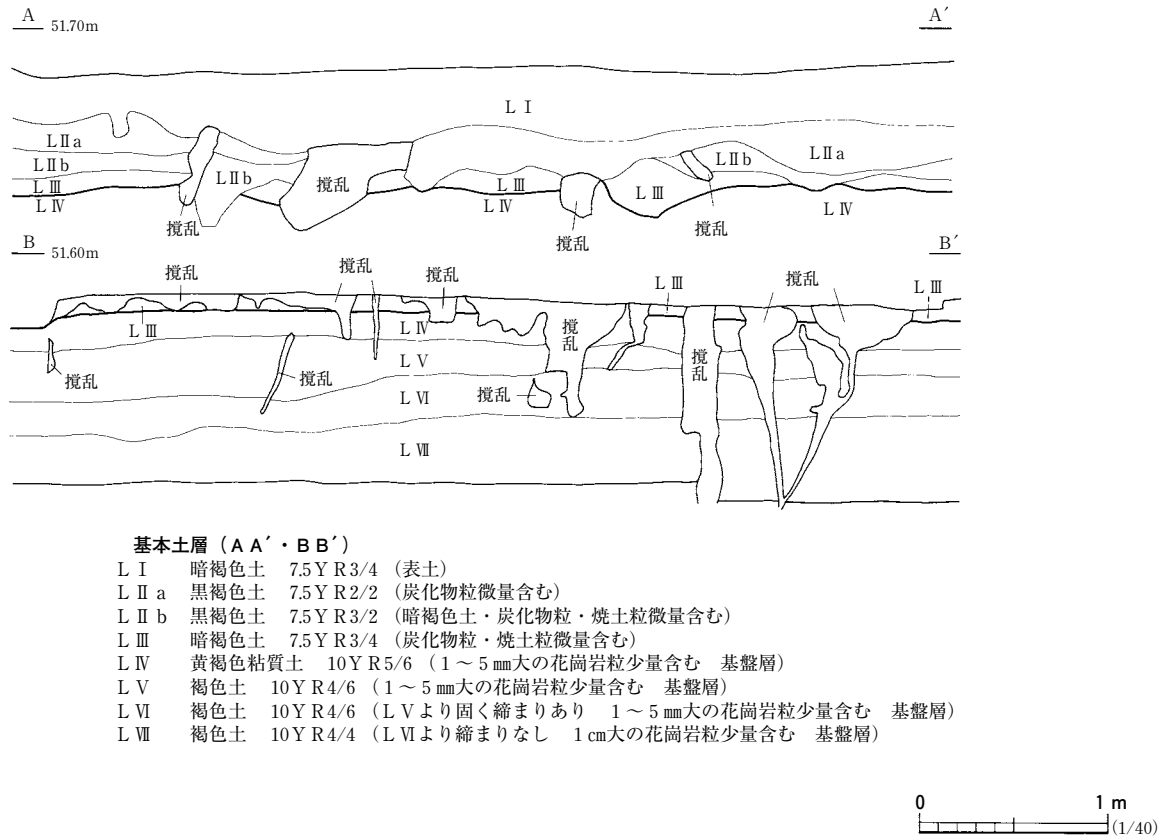


図4 基本土層図

L II b : 黒褐色土 (7.5Y R 3/2) 調査区北東部にのみ認められる層で、暗褐色土・炭化物を含んでいる。層厚は14cm程度である。遺物出土。

L III : 暗褐色土 (7.5Y R 3/4) 調査区北側では10cm程度で薄く堆積している。調査区西側では東側よりも若干厚く堆積する。この層の上面で遺構の検出が可能である。遺物出土。

L IV : 黄褐色粘質土 (10Y R 5/6) 調査区全域に確認できる基盤層である。1~5mm大の花崗岩粒を少量含む。L III上面で検出が不明瞭な遺構については、本層上面まで下げて検出を行っている。

L V : 褐色土 (10Y R 4/6) 基盤層である。1~5mm大の花崗岩粒を少量含む。上位に始良Tn火山灰(AT)を視認している。関東地方の黒色帯に相当する層である。

L VI : 褐色土 (10Y R 4/6) 基盤層である。1~5mm大の花崗岩粒を少量含む。L Vよりも硬く締まりがあり、やや暗く見える。関東地方のハードロームに相当する層である。

L VII : 褐色土 (10Y R 4/4) 基盤層である。1cm大の花崗岩粒を少量含む。L VIよりも締まりがなく、軟らかく感じられる。関東地方のソフトロームに相当する層である。

L VIII : 段丘礫層 14・17号土坑の底面で確認される。

3. 遺跡の年代と土器分類

本遺跡より出土した土器を便宜上、下記のように大きくI~V類に分類した。さらに、各類を時

代差や地方差を示す型式をもとに細分した。本遺跡出土土器の大半は、縄文時代前期の花積下層式土器併行期及び縄文時代前期後半の土器に比定される。

I 類土器 縄文時代早期後半の土器

II 類土器 縄文時代早期末葉から縄文時代前期初頭にかけての土器

II-1 類 縄文条痕文土器

II-2 類 花積下層式土器

II-3 類 II-1・2 類に該当すると思われる底部資料

III 類土器 縄文時代前期後半の土器

III-1 類 大木式土器

III-2 類 諸磯式土器

III-3 類 浮島式土器

III-4 類 III-1・2・3 類に該当すると思われる底部資料

IV 類土器 縄文時代中期～弥生時代の土器

IV-1 類 中期の土器

IV-2 類 晩期の土器

IV-3 類 弥生土器

V 類土器 中世陶器

以上の大まかな分類に基づいて、出土遺物の年代観を推定するとともに、検出した遺構の年代観、更には本遺跡の年代観を推定することとした。なお、各分類は年代的な細分ではなく、型式に基づく分類であり、分類によって年代幅があることは断っておく。 (三 浦)

第2節 竪穴住居跡

今回の調査において、竪穴住居跡が調査区北半部から7軒、調査区南半部から1軒の合計8軒検出された。いずれも平坦面から検出され、後世の耕作等の影響を受けたのか、床面までの深さが浅いものが多く、8号住居跡では周壁が確認できなかった。また、6～8号住居跡は後世の攪乱穴や溝によって大きく削平されている。

検出した竪穴住居跡は、楕円形で大型のもの（1～4号住居跡）と方形基調のもの（5～7号住居跡）とに大別され、前者はほぼ主軸方位を同じくし、その配置状況においても規則性が伺える。なお、それぞれの機能時期に関しては、前者が縄文時代前期後半、後者が縄文時代早期末葉から前期初頭と推測される。

以下において、検出した竪穴住居跡について遺構番号順に報告していくが、各遺構に付した遺構番号は、調査時において検出した順に付した番号であり、機能時期・形態・規模等を考慮したものではない。

1号住居跡 S I 01

遺 構 (図5・6, 写真4~7)

本遺構は調査区北東部の平坦面に存在し、H 6・7グリッド、I 6・7グリッドに位置している。本遺跡が所在する段丘面の北側落ち際からは約16m南方の地点に当たる。表土除去後の遺構検出中に、L IV上面において北西-南東主軸の大型の落ち込みを確認したことから、2基以上の遺構が重複している可能性も考慮し、平面観察による重複遺構の確認を丁寧に行ったが、重複遺構が確認できないことから、土層観察ベルトを長軸方向に1本と短軸方向に2本設定し、遺構を6区画に分けて掘り込みを実施した。各区画を約15cm程掘り下げたところ、各区画から周壁と連続する平坦なL IV層が検出され、長軸方向の土層観察用ベルトの脇に炉の存在を推測させる焼土面も検出されたことから、この平坦なL IVを床面と判断した。また、床面には段差は認められず、堆積土の断面観察においても、遺構の重複が認められないことから、本遺構は単独の遺構と判断した。土層観察用ベルトの記録を取った後に、この土層観察用ベルトを除去し、床面の精査を実施した。なお、本遺構の東部は調査区外に更に延びている。

平面形は北西-南東主軸の不整長楕円形で、南隅が直角であることから、楕円形と長方形が合体したような平面形である。上端の長径は8.9mと推定され、上端の短径はほぼ中央部で最大4.3mを測り、炉1の熱変化範囲の北西部を通るラインでは3.5mを測る。

遺構内堆積土は長軸方向に設定した土層観察用ベルトのAA'・BB'では8層に、CC'では10層に分層された。堆積土の平面的な分布が一様でなく、各ベルトごとの土層対比も困難であることから、各ベルトごとに土層番号を付したが、AA'のℓ4とBB'のℓ5、AA'のℓ5とBB'のℓ6、AA'のℓ2とCC'のℓ5、AA'のℓ3とCC'のℓ6、AA'のℓ7とCC'のℓ10はそれぞれ同一層である。また、c区からは2個の花崗岩(20×18×8cmと17×12×7cm)と1個の緑色安山岩(26×19×8cm)が床面上ないしは床面に近い堆積土中より出土した。堆積状況は各ベルトとも遺構外からの自然流入を推測させるような状況ではなく、不規則な堆積状況であることから、人為的な堆積と判断した。

周壁は、南東壁の東半と北東壁の東半は調査区外に存在していることから不明であるが、検出した部分においては全てL IVで、その立上りは、北西壁からP 7付近の南西壁では緩く、それより南の南西壁と南壁では急である。また、北東壁ではP 2付近で急である以外は緩い立上がりで遺存していた。壁高は北西端で最小10cmを測り、P 7付近で最大18cmを測る。

先述のように、床面もL IVで、全体的には不整であり、中軸線に向かって緩く下降している。なお、炉1の周囲には踏み締まり範囲が確認できたが、その範囲は明確にできなかった。床面の規模は、長径が8.65mと推定され、短径はほぼ中央部で最大4.2mを測り、炉1の熱変化範囲の北西部を通るラインでは3.1mを測る。

床面からは焼土面が2箇所とピットが合計15基確認された。焼土面はほぼ中心軸線上に並んで検

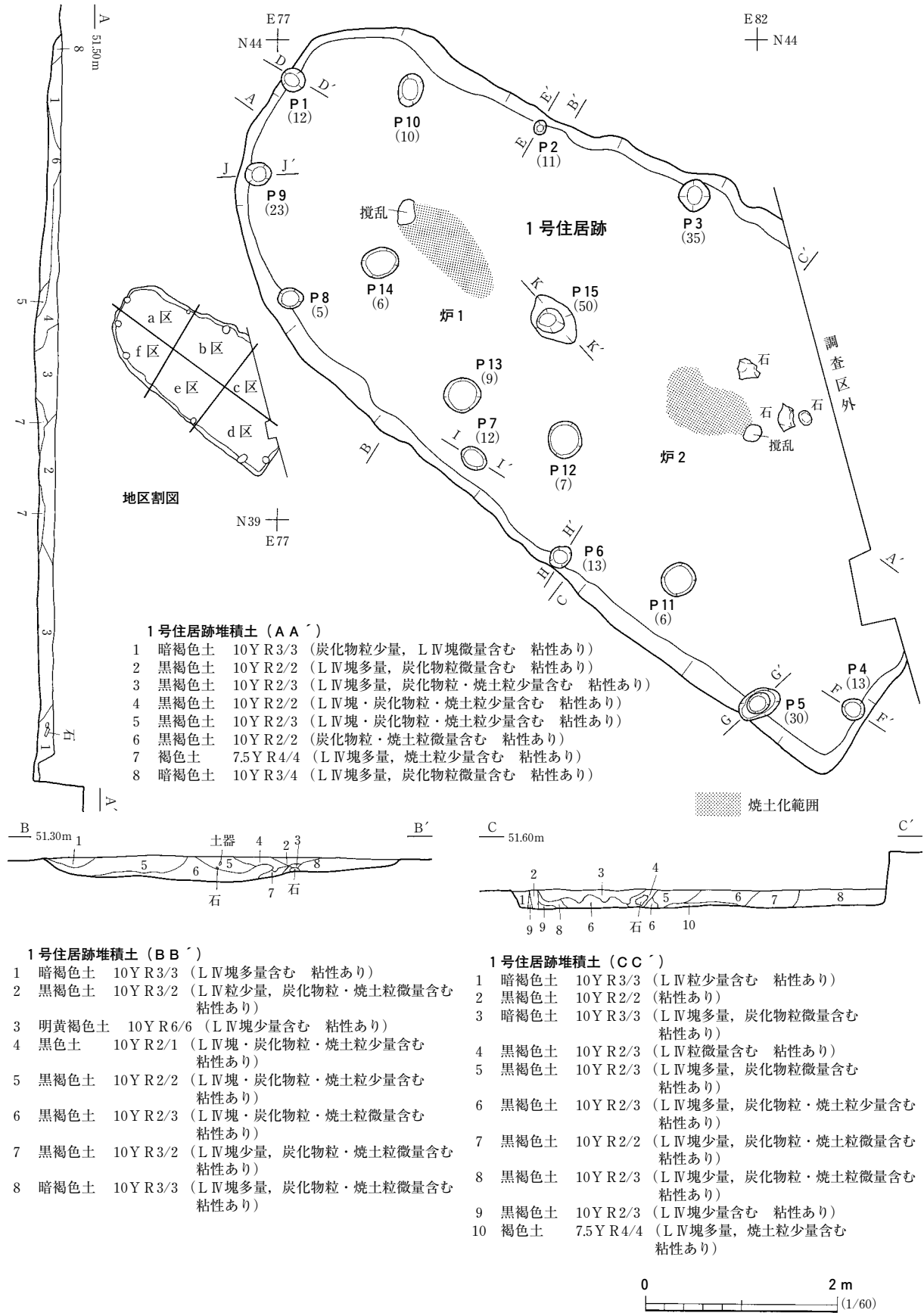


図5 1号住居跡 (1)

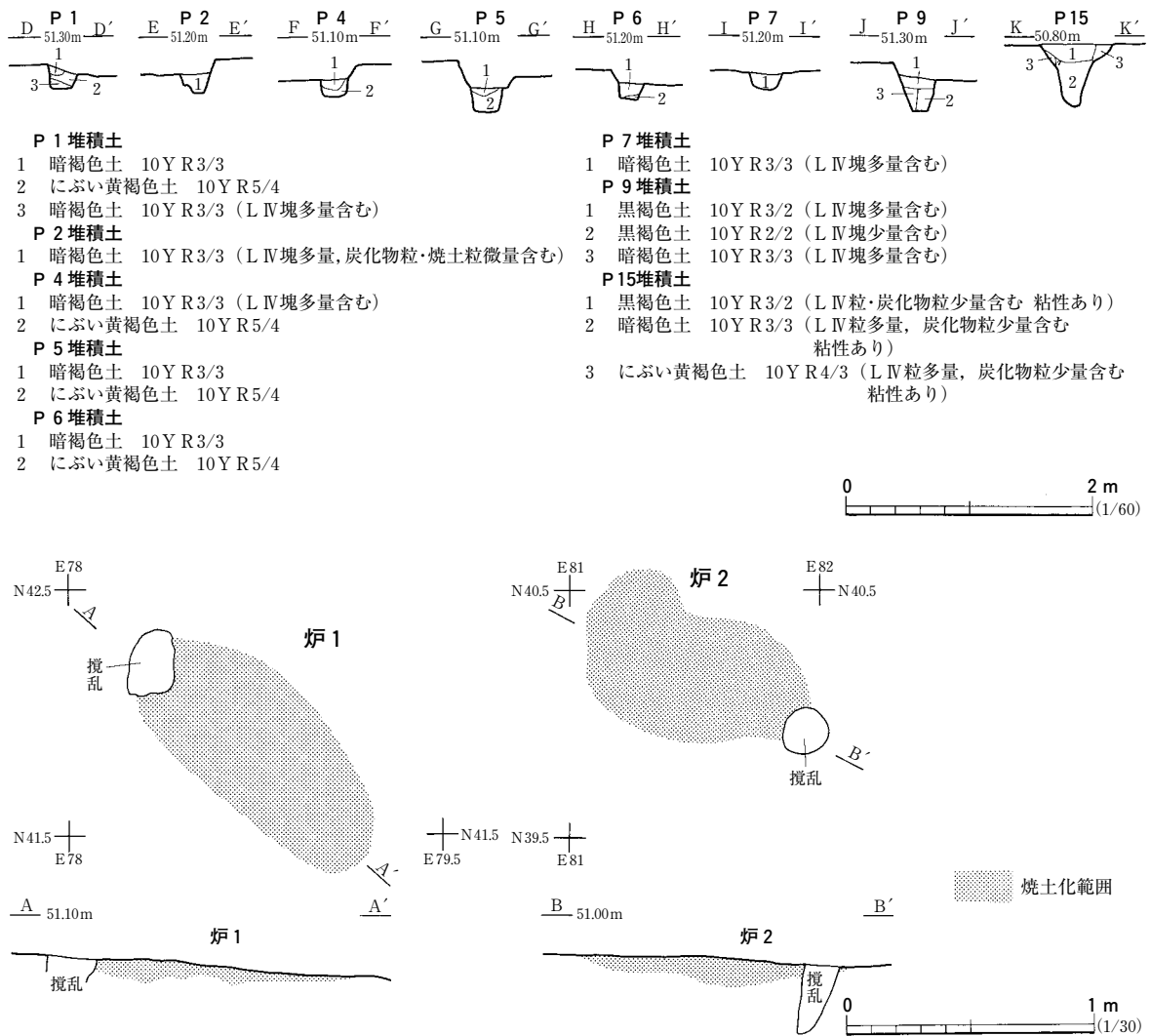


図6 1号住居跡(2)

出され、炉と推測されることから、北西のものから順に炉1・炉2と呼称した。いずれも床面上で直に火を焚いた地床炉と推測され、掘り込みや縁石は持っていない。炉1は長径1.22m、短径58cmの長楕円形で、全体的には赤褐色である。炉1を長軸方向に断ち割ってみたところ、床面から最大9cmまで熱変化が確認されたが、中心部に近いほど熱変化の度合いが強いことが観察できた。炉2は長径1.1m、短径55cmの不整長楕円形で、焼土面はにぶい赤褐色である。炉2を長軸方向に断ち割ってみたところ、床面から最大10cmまで被熱していた。

ピットは15基検出されたが、壁際ないしは壁に近いものに、北西部のものから順に時計回りに番号を付し、次に、それより内部のものに対して、同様に番号を付した。P1～10は壁際ないしは壁に近い部分から検出され、いずれも上端の平面形が長径20～33cmの円形ないしは楕円形で、全体の形状は円筒形である。深さは5～35cmと幅があり、P8が5cmと最小で、P3・5・9が20cmを超える他は10cm台のものが多い。この10基のピット内堆積土は暗褐色土とにぶい黄褐色土の2層に分層されるものが多いが、P9では黒褐色土が堆積しており、l2はl3との境が直立することから、

柱痕とも考えられる。

P11～14はP1～10よりは内側から検出された。P1～10と同様に上端の平面形が円形ないしは楕円形で、全体の形状は円筒形であるが、上端の長径は34～37cmとP1～10よりは少々大きめである。深さは6～9cmと浅く、ピット内堆積土は暗褐色土とにぶい黄褐色土の2層に分層された。

P15は床面のほぼ中央部から炭化物を含む黒褐色土の広がりとして検出された。炉1と炉2の間に当たることから、炉1・2とは形態の異なる掘り込みを持つ炉の可能性も考慮し、炉1・2とこの黒褐色土の広がりを中心を通るラインを設定して、この黒褐色土の広がり部分を掘り下げたところ、当初の予測とは異なり、本遺構では最大規模のピットであることが判明した。上端の平面形は不整形で、断面形は上位約17cmまでは緩いものに対して、それより下では急であることから、全体の形状はロート状である。規模は長径55cm、短径34cm、深さ50cmを測る。P15内堆積土はℓ1から順に黒褐色土・暗褐色土・にぶい黄褐色土に分層され、ℓ3は裏込めしたような堆積状況であることから、P15は柱穴ではないかと推測している。

遺物 (図7, 写真52・73・74)

遺構内堆積土及び床面より縄文土器片158点、石器・剥片44点が出土した。縄文土器片の内訳は、花積下層式土器を含む縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての土器が106点で、縄文時代前期後半の土器が52点(大木4式土器24点、浮島Ⅱ式土器13点、諸磯b式土器15点)である。その内、特徴的なものを図7に示した。なお、堆積土出土のものに関しては、地区ごとの土層の対比が困難であることから、出土層位を堆積土として図中に示した。

1～6は縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての土器で、いずれも深鉢形土器の破片である。1は口縁部付近の破片で、頸部には隆帯が巡っていたものと推測されるが、隆帯は剥離している。口縁部には0段多条のLR原体を横位回転施文した斜縄文が見られ、胴部には0段多条のRL原体を横位回転施文した斜縄文が見られる。2は胴部の破片で、外面には非結束の羽状縄文が見られ、各縄文帯は幅が2cmと狭い。右下がりの条の斜縄文はRL原体を横位回転施文したもので、左下がりの条の斜縄文は0段多条のLR原体を横位回転施文したものである。3も胴部の破片で、外面にはLR原体を横位回転施文した斜縄文が見られる。胎土には植物繊維が含有されている。4も胴部の破片で、外面には幅の狭い縄文帯が3段見られ、上2段はRL原体を横位回転施文した斜縄文で、一番下の段はLR原体を横位回転施文した斜縄文であり、下2段の縄文帯は羽状縄文となっている。胎土には植物繊維が含有されている。5・6は0段多条のRL原体と0段多条のLR原体を非結束で横位回転施文した羽状縄文をもつ口縁部破片である。6は縄文帯の境で屈曲している。

7・8は縄文時代前期後半の大木4式土器の深鉢形土器の破片である。7の外面には結節の0段多条のLR原体を横位回転施文した斜縄文が見られる。8は口縁部破片で、口唇に沿って半截竹管の凹部による平行沈線が引かれ、その下位はLR原体を横位回転施文した斜縄文である。

9～15は縄文時代前期後半の浮島式土器の深鉢形土器の胴部破片である。9の外面には2段の変形爪形文とその間には連続する短沈線が見られ、10の外面にも2段の変形爪形文とその間に刺突が

見られ、その下位には波状貝殻文が見られる。なお、9の変形爪形文帯はその上下よりも低くなっている。11・12では上位に変形爪形文があり、その下位には半截竹管の凹部による幅の狭い平行沈線が横走ないしは斜行している。13の外面には横走する幅の狭い平行沈線のみが見られる。それに対して、14・15の外面には幅の広い平行沈線が見られ、15の平行沈線は深い線と浅い線が一对となっている。

16・17は縄文時代前期後半の諸磯b式土器で、16は深鉢形土器の口縁部付近の胴部破片で、17は浅鉢形土器の底部破片である。16は内湾して立ち上がった後、上部は外傾しており、外面には2本一對の細い浮線による曲線的ないしは直線的な文様が描かれている。この浮線は細い粘土紐を貼り付けたものであり、幅約2mm、高さ1mmを測り、上面には浮線の方に斜行する刻みが施されている。なお、器面に縄文を施文した後に浮線が貼り付けられており、浮線に沿って撫でられている部

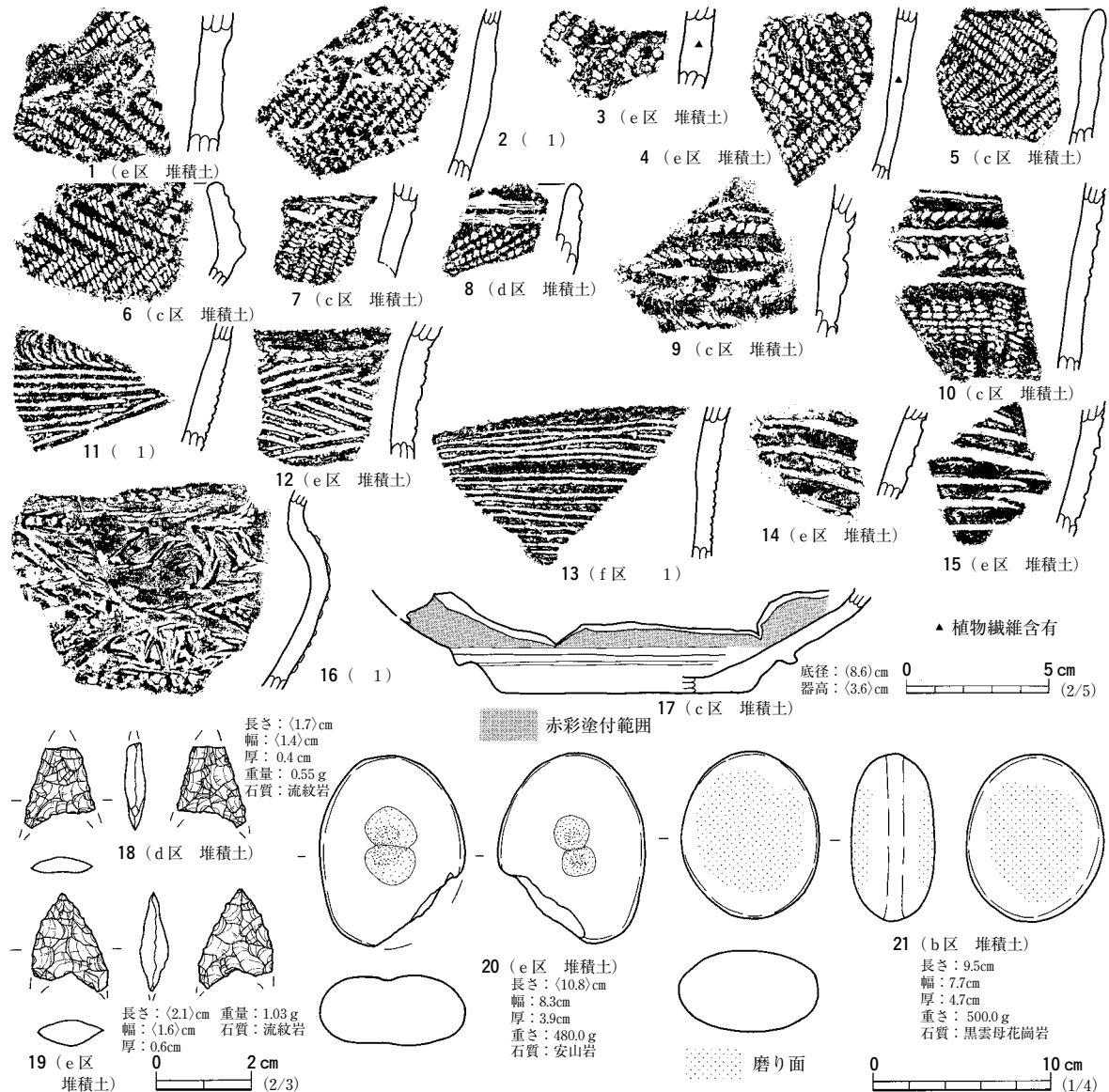


図7 1号住居跡出土遺物

分がある。17はc・d区の境の土層観察用ベルトから出土した。外面には底部に近い部分に1条の突帯が巡り、この突帯より上位には漆が塗られ、赤色塗彩もされている。

18・19はいずれも凹基無茎石鏃である。両面は丁寧に調整剥離されているが、18は尖端と基部の両端を欠失しており、19は基部の両端を欠失している。なお、18の側辺は直線的であるのに対して、19の側辺は緩く外湾している。

20・21は敲・磨石である。20は凹石で、自然礫の両平坦面の中央部にそれぞれ2箇所のくぼみを持っている。21は磨石で、自然礫の両平坦面が広く摩耗している。

ま と め

本遺構は不整長楕円形の大型の竪穴住居跡で、炉が中軸線上に並んで2基存在する。床面からは他にピットが15基確認され、床面中央部のP15以外は規模の小さいものであるが、P15も含めてこれらは柱穴であると推測しておくことにする。なお、P15のような床面中央部の柱穴と推測されるピットは2・3号住居跡からも検出されている。

本遺構の時期は、本遺跡及び他の遺跡における同様な特徴を持つ遺構の検出例や遺構内から浮島Ⅱ式土器・諸磯b式土器・大木4式土器が出土していることから、おおよそ縄文時代前期後半と推定される。

(能登谷)

2号住居跡 S I 02

遺 構 (図8・9, 写真8~11)

本住居跡は調査区北側のE・F7グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢ上面で、暗褐色の隅丸長方形として検出した。33号土坑と重複し、本遺構の検出面及び堆積土より33号土坑の堆積土が確認されず、床面より33号土坑を検出したことから、本遺構の方が新しい。本住居跡の周辺は遺構の密集する地域であり、北側には24号土坑・2号焼土遺構、東には15号土坑、南には3・4号土坑、西には1・2・16・21号土坑が隣接するが、いずれとも重複関係はない。

遺構内堆積土は3層に分層される。ℓ1は暗褐色土主体で炭化物粒・焼土粒が含まれる混土である。本遺構の底面から検出面に至るまで全体に分布する層である。ℓ2は焼土粒を含む暗褐色土で、北側の一部に見られる層である。ℓ3は北側の床面直上にも確認できる炭化物粒を含む褐色土である。いずれの層も人為堆積であると判断した。

平面形は長軸が北から60°西に傾いた隅丸長方形である。作業の進展により、南壁の両隅に比べて北壁の両隅の丸みが強いことを確認した。南壁の一部は後世の攪乱によって破壊されている。遺存規模は長軸7m、短軸3mを測る。検出面から底面までの壁高は17cmを測るが、南西隅では5cm程度しかない。周壁は50~80°の角度で立ち上がる。壁溝は確認していない。床面は僅かに凸凹があるものの、ほぼ平坦である。南西隅では床面の一部が硬化した状況が確認でき、図8においてその範囲を一点鎖線で示した。明らかに他の床面と異なり、硬化の位置や範囲より、出入口部の踏み締まり跡と考えている。

第2編 本町西A遺跡

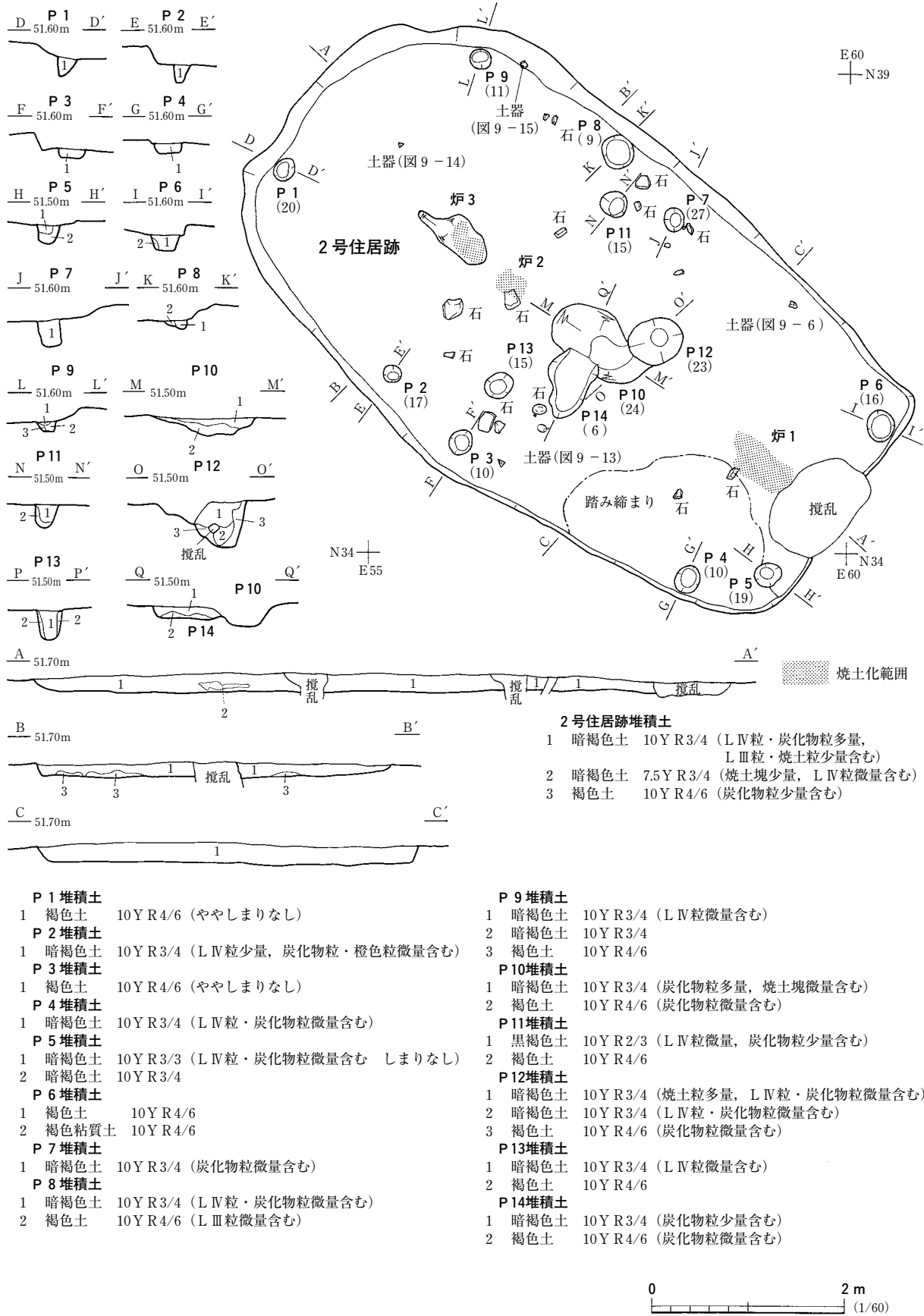


図8 2号住居跡

炉は床面の中軸線上に3基検出した。南より炉1・2・3とした。炉1・2は地床炉である。炉1は長楕円形の暗赤褐色の焼土面として認識した。焼土化した深さは8cm程度である。炉2は方形の暗赤褐色の焼土面として認識できた。焼土化した深さは4cm程度である。炉3は炭化物粒を含む暗褐色土の楕円形として検出した。当初、長径83cm、短径37cmのピットとして認識していたが、そのピットの半截中に底面で暗赤褐色の焼土化した範囲を確認した。焼土面は床面よりも2～8cm程度掘り下げた底面に形成されていた。焼土面は三日月形の平面形であり、焼土化した深さは4cm程度である。炉3の掘形北部では焼土面よりも一段低く掘り下げられている状況が確認できた。

ピットは14基検出した。P1～9は住居跡内部の床面壁際に巡ることより、壁柱穴と考えている。口径約16～35cm、深さ約9～30cmで、 ℓ 3に類似した褐色土が堆積していた。P11・13は壁柱穴と考えているピットよりもやや中央に位置する。南・北壁から3.5m前後に位置し、2基1対で上屋構造

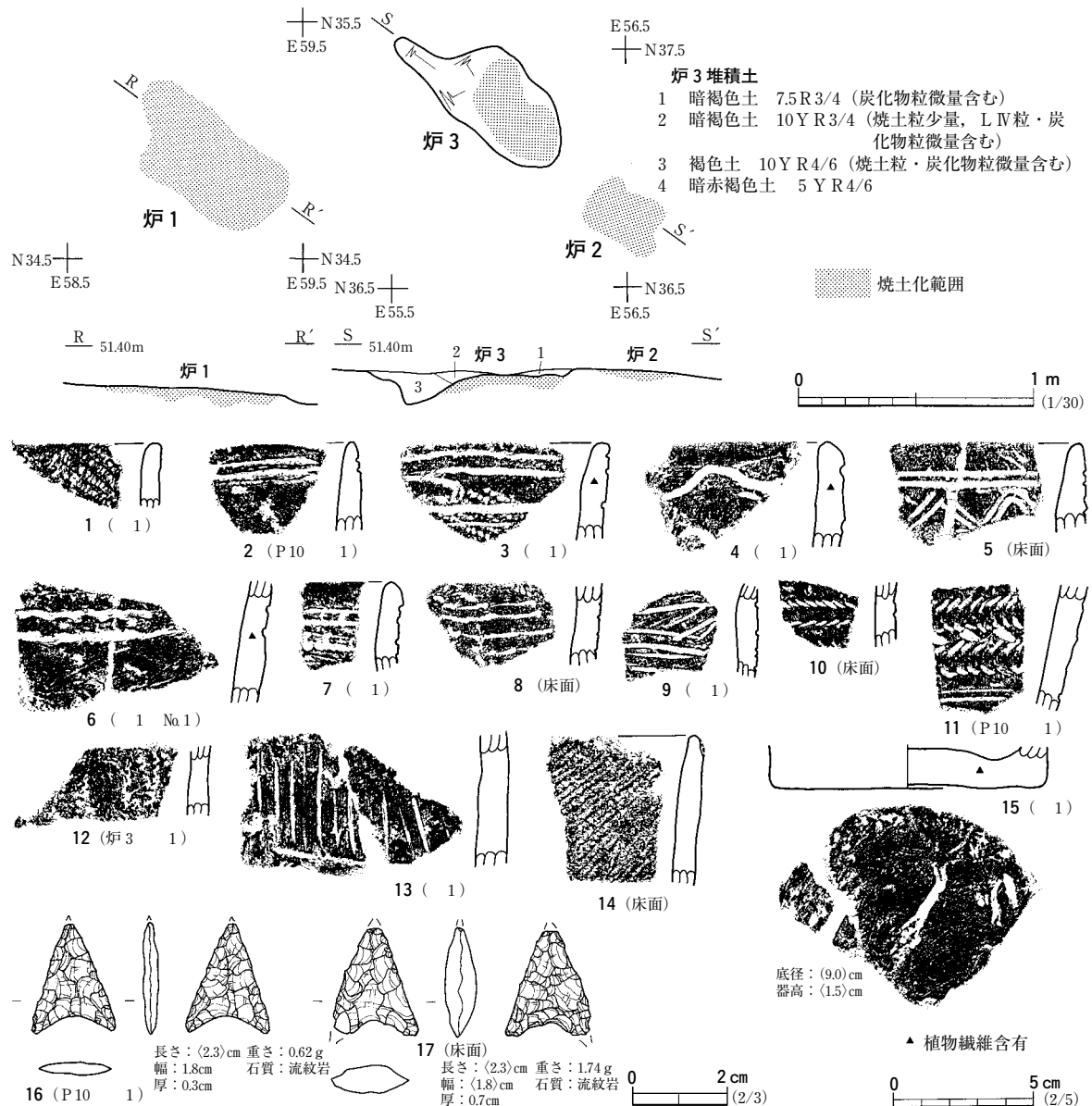


図9 2号住居跡・出土遺物

を支える支柱的な機能を果たしたピットと考えられる。

P10・12・14は暗褐色の不整な広がりとして、床面中央より検出した。検出面での堆積土の混入物の違いから3基のピットの存在が推測された。また、それぞれのピットにかかるベルトを設定し、土層断面でも重複関係を確認した。それぞれの新旧関係はP10がP12・14よりも新しく、P12とP14の関係は不明である。P10は24cmと浅く、北西-南東に長軸をもつ楕円形である。堆積土は2層に分層した。ℓ2は褐色土で床面からの流入土及び壁面崩落土と考えられる。ℓ1は遺構内堆積土ℓ1と同層であることから、P10は本遺構廃棄時まで開口していたと考えられる。P14は長径70cmの楕円形である。深さは6cmと浅く、堆積土は人為的に埋め戻された状況である。P12は直径55cmの円形で、深さ48cmを測る。底面は丸みを帯び、固く締まる。位置や規模から本遺構の中央に位置した支柱穴と理解している。なお、これら3基のピットは多少の前後はあるものの、近い時期に掘り込まれたものと考えている。

遺物 (図9, 写真53・73)

遺構内堆積土から縄文土器片が29点出土した。その内、15点を図9に示した。

1は口縁部資料で、斜縄文が確認できる。2～6は沈線文を特徴とする。2はP10ℓ1より出土した。口唇部が狭くなる器形で、口縁部に平行沈線文が施文される。3は浅い縄文地に沈線により文様を描出している。4は波状の沈線文が施文される。5は床面よりの出土である。平行沈線により山形文を描出している。6は平行沈線により波状文を施文している。7・8は半截竹管による押引文を施文している。9は菱形文をモチーフとした平行沈線文である。10・11は半截竹管による変形爪形文が施文している。10は床面より出土し、11はP10ℓ1よりの出土である。12はアナガラ属の貝殻による貝殻腹縁文を施文している。13は縦方向の沈線文が施文されている。14は床面より出土し、斜縄文が施文されている。15は底部資料である。なお、3・4・6・15の胎土には繊維混和痕が認められる。1は縄文時代前期初頭の土器で、2～15は縄文時代前期後半の土器である。

16・17はいずれも無茎凹基石鏃の欠損品で、形態は二等辺三角形である。両面とも微細な剥離を施している。16は先端を一部欠いている。石質は流紋岩である。17は先端部及び基部の一端を欠いている。厚さが7mmとやや厚い。石質は流紋岩である。

まとめ

本遺構は調査区北側の遺構が密集する地区に位置する、長軸7m、短軸3mの大型住居跡である。北西-南東方向に主軸をもち、1・3号住居跡と本遺構は主軸を同一方向に向けて位置することから、同時期に存在していたものと考えられる。

床面南西隅には出入口の可能性を示唆する踏み締まりによる硬化面が確認できた。また、床面壁際には壁柱穴と考えられる9基のピットが位置し、更に、壁柱穴よりもやや内側に2基、中軸線上に1基の柱穴と考えられるピットが位置する。炉は中軸線上に3基確認した。炉1・2は地床炉、炉3は床面より一段掘りくぼめて炉としている。

本遺構の年代は出土遺物及び遺構の平面形より、縄文時代前期後半と判断している。(三浦)

3号住居跡 S I 03

遺 構 (図10・11, 写真12~15)

本遺構は調査区北東部の平坦面に存在し、H 8・9グリッド、I 9グリッドに位置している。本遺跡が所在する段丘面の北側落ち際からは約36m南方の地点に当たる。表土除去後の遺構検出中に、L IV上面において北西-南東主軸の大型の落ち込みを確認したことから、2基以上の遺構が重複している可能性も考慮し、平面観察による重複遺構の確認を丁寧に行った。その結果、この大型の落ち込みを掘り込んでいる1号建物跡の柱穴が4基(P 3・4・12・13)検出された他に重複遺構が確認できなかったことから、土層観察用ベルトを長軸方向に1本と短軸方向に2本設定し、遺構を6区画に分けて掘り込みを実施した。各区画を約5~15cm程掘り下げたところ、1号住居跡同様、各区画から周壁と連続する平坦なL IV層が検出され、長軸方向の土層観察用ベルトの脇に炉の存在を推測させる焼土面も検出されたことから、この平坦なL IVを床面と判断した。また、床面には段差は認められず、堆積土の断面観察においても、遺構の重複が認められないことから、本遺構は単独の遺構と判断した。さらに、土層観察用ベルトの記録を取った後に、この土層観察用ベルトを除去し、床面の精査を実施した。

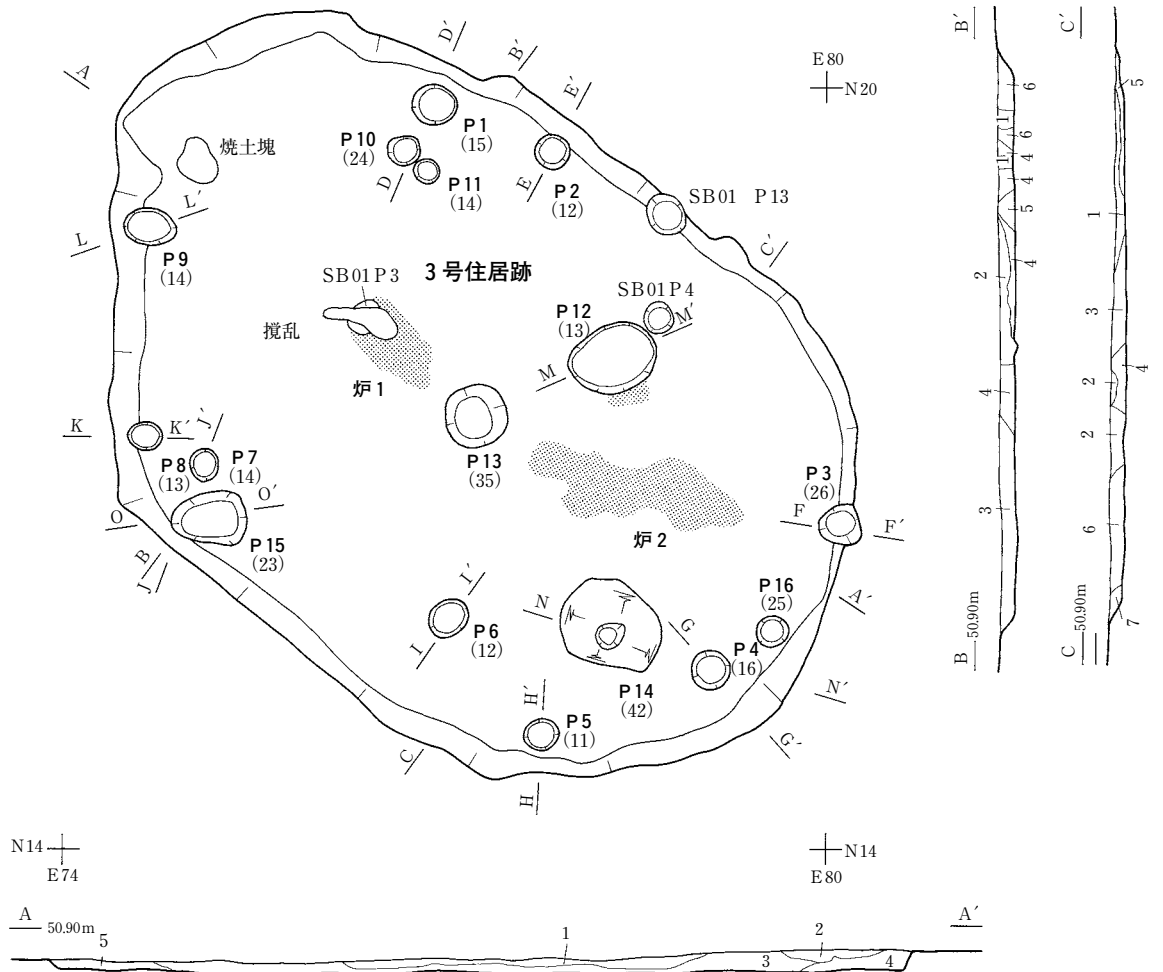
平面形は北西-南東主軸の楕円形を基調としているが、西壁が直線的であることから、不整な楕円形で、上端の規模は長径7m、短径4.6mを測る。

遺構内堆積土は長軸方向に設定した土層観察用ベルトのAA'では5層に分層され、短軸方向に設定した土層観察用ベルトのBB'・CC'ではそれぞれ6~7層に分層された。検出時における平面観察では、中央部に黒褐色土の広がりがあり、それを囲むように暗褐色土が広がっていることが確認されたが、堆積土の平面的な分布が一様でなく、各ベルトごとの土層対比が困難であることから、各ベルトごとに土層番号を付し、遺物の取り上げはAA'の層位を基準に行った。なお、AA'のℓ1とBB'のℓ2、AA'のℓ3とBB'のℓ4及びCC'のℓ3はそれぞれ同一層である。遺構内堆積土は黒褐色土ないしは暗褐色土であるが、黒褐色土は中央付近の上位に堆積しており、他は全て暗褐色土である。混入物の違いや混入割合によって分層したが、全体的に焼土粒を含んでいるのが特徴的で、a区の床面近くからはやや大きな焼土塊が1個出土した。堆積状況は、AA'のℓ4・5やCC'のℓ5・7などのように、周壁付近では遺構外からの自然流入を推測させるような状況であるが、それ以外では人為的な堆積を推測させるような不自然な堆積状況である。

周壁はL IVで、全体的に緩く湾曲して立ち上がっているが、特に、東部では緩い立ち上がりとなっている。壁高は北東壁のP 2から南東壁のP 4にかけては5cm前後と低く、P 3・4間で最小4cmを測るのに対して、それ以外の箇所では8~17cmで、北西端で最大高を測る。

床面もL IVで、若干の起伏は認められるものの、ほぼ平坦で、貼土や踏み締まりの範囲は確認できなかった。床面の規模は長径6.6m、短径4.2~4.3mを測る。

床面からは焼土面が3箇所とピットが合計16基確認された。焼土面の内、2箇所はほぼ中心軸線



3号住居跡堆積土 (A A')

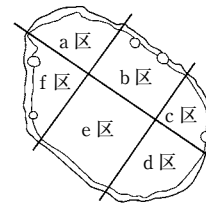
- 1 黒褐色土 10Y R2/2 (L IV粒・炭化物粒・焼土粒微量含む 粘性あり)
- 2 暗褐色土 10Y R3/4 (炭化物粒・焼土粒少量, L IV粒微量含む 粘性あり)
- 3 暗褐色土 10Y R3/3 (L IV塊・炭化物粒・焼土粒少量含む 粘性あり)
- 4 暗褐色土 10Y R3/3 (L IV塊少量, 炭化物粒微量含む 粘性あり)
- 5 暗褐色土 10Y R3/3 (L IV粒・炭化物粒微量含む 粘性あり)

3号住居跡堆積土 (B B')

- 1 黒褐色土 10Y R3/2 (L IV粒少量, 炭化物粒・焼土粒微量含む 粘性あり)
- 2 黒褐色土 10Y R2/2 (L IV粒・炭化物粒・焼土粒微量含む 粘性あり)
- 3 暗褐色土 10Y R3/3 (L IV粒・炭化物粒・焼土粒少量含む)
- 4 暗褐色土 10Y R3/3 (L IV塊・炭化物粒・焼土粒少量含む 粘性あり)
- 5 暗褐色土 10Y R3/3 (黒褐色土粒多量, L IV塊少量, 炭化物粒・焼土粒微量含む 粘性あり)
- 6 暗褐色土 10Y R3/3 (L IV粒・炭化物塊・焼土塊少量含む 粘性あり)

3号住居跡堆積土 (C C')

- 1 黒褐色土 10Y R3/2 (L IV塊少量, 炭化物粒・焼土粒微量含む 粘性あり)
- 2 黒褐色土 10Y R2/2 (炭化物粒・焼土塊少量, L IV粒微量含む 粘性あり)
- 3 暗褐色土 10Y R3/3 (L IV塊・炭化物粒・焼土粒少量含む 粘性あり)
- 4 暗褐色土 10Y R3/3 (L IV塊多量, 炭化物粒微量含む 粘性あり)
- 5 暗褐色土 10Y R3/4 (L IV塊多量含む 粘性あり)
- 6 暗褐色土 10Y R3/3 (L IV塊多量含む・炭化物粒微量含む 粘性あり)
- 7 暗褐色土 10Y R3/4 (L IV塊多量含む 粘性あり)



地区分割図

焼土化範囲

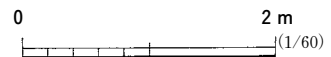
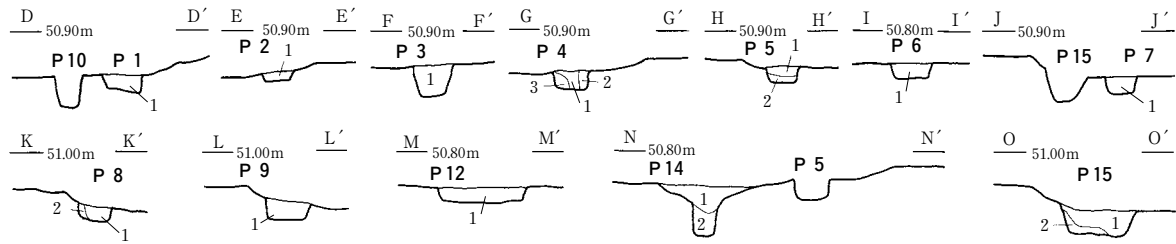


図10 3号住居跡 (1)



- | | |
|--|--|
| <p>P 1 堆積土
1 暗褐色土 10Y R3/3 (L IV塊・炭化物粒少量含む 粘性あり)</p> <p>P 2 堆積土
1 褐色土 10Y R4/6 (粘性あり)</p> <p>P 3 堆積土
1 暗褐色土 10Y R3/3 (L IV粒・炭化物粒・焼土粒少量含む 粘性あり)</p> <p>P 4 堆積土
1 黒褐色土 10Y R3/2 (L IV粒・焼土粒少量含む)
2 暗褐色土 10Y R3/3
3 褐色土 10Y R4/6</p> <p>P 5 堆積土
1 暗褐色土 10Y R3/3 (粘性あり)
2 褐色土 10Y R4/4 (粘性あり)</p> <p>P 6 堆積土
1 暗褐色土 10Y R3/3 (L IV粒・焼土粒微量含む 粘性あり)</p> | <p>P 7 堆積土
1 黒褐色土 10Y R3/2 (L IV塊少量・炭化物粒微量含む 粘性あり)</p> <p>P 8 堆積土
1 黒褐色土 10Y R3/2 (L IV粒・炭化物粒・焼土粒少量含む 粘性あり)
2 褐色土 10Y R4/6 (炭化物粒少量含む 粘性あり)</p> <p>P 9 堆積土
1 暗褐色土 10Y R3/3 (L IV塊・炭化物粒少量含む)</p> <p>P 12 堆積土
1 暗褐色土 10Y R3/3 (L IV粒・炭化物粒・焼土粒少量含む)</p> <p>P 14 堆積土
1 暗褐色土 10Y R3/3 (L IV粒・炭化物粒少量含む 粘性あり)
2 褐色土 10Y R4/4</p> <p>P 15 堆積土
1 暗褐色土 10Y R3/3 (L IV粒・炭化物粒少量含む 粘性あり)
2 褐色土 10Y R4/4 (粘性あり)</p> |
|--|--|

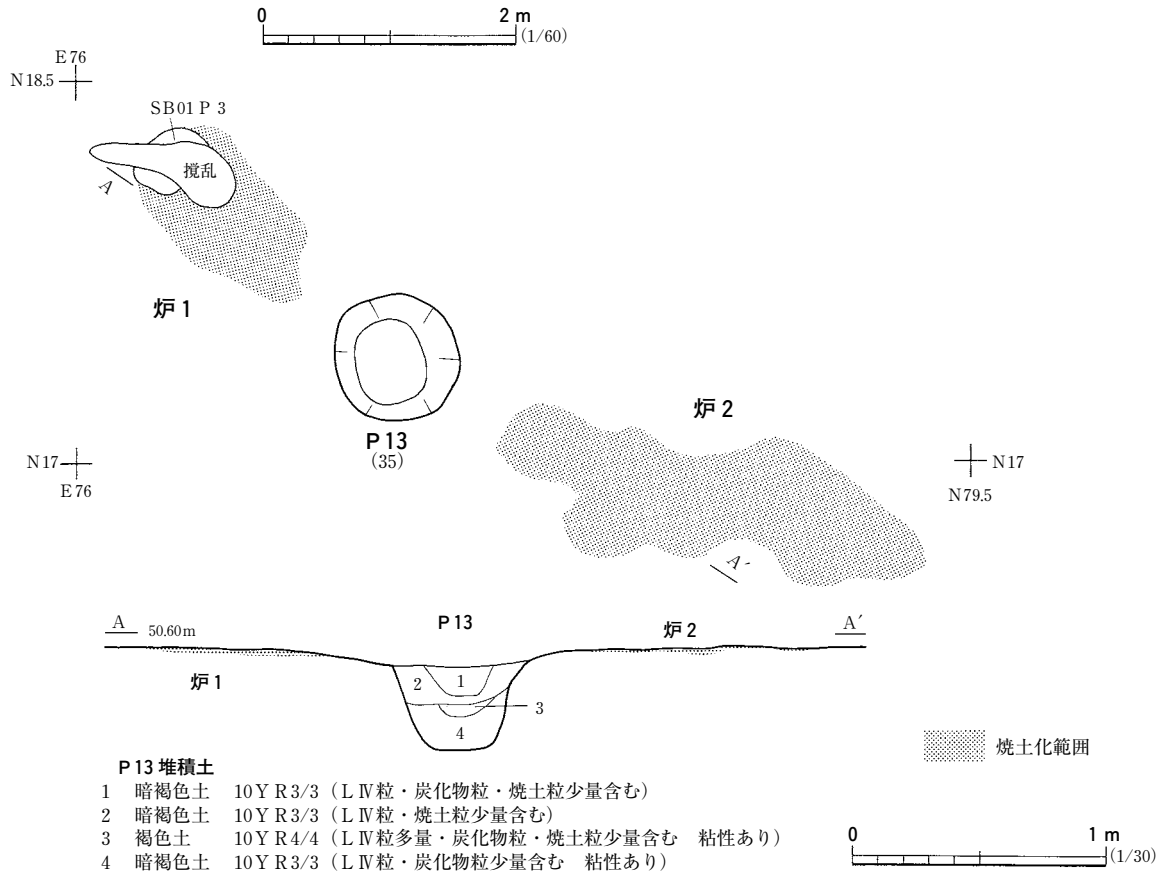


図11 3号住居跡 (2)

上に並んで検出され、炉と推測されることから、北西のものから炉1・炉2と呼称した。いずれも床面上で直に火を焚いた地床炉と推測され、掘り込みや縁石は持っていない。炉1の熱変化範囲は住居の軸線とほぼ同じ主軸の不整形で、長軸75cm、短軸42cmを測り、全体的には褐色である。この熱変化範囲を断ち割ってみたところ、床面から最大3cmまでしか熱変化が確認できず、熱変化の度合いが弱いことが観察できた。なお、炉1の熱変化範囲の北西端はS B01 P3と木の根の攪乱を受けている。炉2の熱変化範囲は、炉1の熱変化範囲の主軸よりも西に傾いた東西方向に近い主軸の不整形で、長軸1.72m、短軸30～42cmを測る。西半部の中央は明赤褐色で、それ以外は褐色である。この熱変化範囲を断ち割ってみたところ、床面から最大3cmまでしか熱変化が確認できず、熱変化の度合いが弱いことが観察できた。また、炉2の北方のP12の南東脇にも長軸32cm、短軸14cmの褐色の焼土面が確認できたが、熱変化の度合いは炉1・2に比べて非常に弱いものであった。

ピットは16基検出されたが、壁際ないしは壁に近い部分の小規模のもの（P1～11）に対して北部のものから順に時計回りに番号を付し、次に、それらよりは規模の大きいもの（P12～15）に検出順に番号を付した。なお、P16は床面精査の最後に壁際より検出された。P1～11・16は壁際ないしは壁に近い部分から検出され、いずれも上端の平面形が長径19～35cmの円形ないしは楕円形で、全体の形状は円筒形である。深さは11～26cmで、P3・10・16が約25cmである以外は11～16cmを測る。この12基のピット内堆積土は暗褐色土ないしは褐色土が主体的であるが、P4・7・8のℓ1は黒褐色土である。

P12は炉2の北方約60cmより検出された。北東－南西主軸の楕円形で、規模は長径71cm、短径49cm、深さ13cmを測る。周壁は直立気味で、底面はやや不整であり、中央に向かって緩く下降している。ピット内堆積土は焼土粒を少量含む暗褐色土である。P13は床面のほぼ中央部から検出されたが、炉1と炉2の間に当たることから、焼土粒や炭化物を含んだ落ち込みとして検出された。平面形はやや不整であるが、ほぼ円形で、規模は長径52cm、短径50cm、深さ35cmを測る。周壁は内湾気味に立ち上がった後、直線的に急に立ち上がり、底面はほぼ水平である。ピット内堆積土は4層に分層されたが、ℓ3以外は暗褐色土の似た土であり、ℓ1～3には焼土粒が含まれている。なお、ℓ3・4の上面が水平に近いことから、埋没過程には2段階あるものと推測され、人為的な堆積と推測される。P14は炉2の南方約50cmより不整楕円形の落ち込みとして検出されたが、掘り込んだところ、全体の形状はロート状であった。規模は長径75cm、深さ42cmを測り、上位19cmの周壁は緩く、下位23cmは径20cmの円筒形である。ピット内堆積土は暗褐色土と褐色土の2層に分層され、自然流入土と推測される。P15は西壁の南端部付近より検出された。東西主軸の不整楕円形で、規模は長径63cm、短径42cm、深さ23cmを測る。周壁は直線的に強く外傾し、底面はやや不整であるが、ほぼ水平である。ピット内堆積土は暗褐色土と褐色土の2層に分層され、ℓ2の堆積状況は周壁方向からの流入土と推測される。

遺物 (図12, 写真54)

遺構内堆積土及び床面より縄文土器片228点、石器・剥片18点が出土した。縄文土器片の内訳は、

花積下層式土器を含む縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての土器が107点で、縄文時代前期後半の土器が50点（大木4式土器41点、浮島Ⅱ式土器6点、諸磯b式土器3点）、時期不明の小片が71点である。その内、特徴的なものを図12に示した。

1～5・16は縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての深鉢形土器の破片である。1・2は口縁部で、1の口唇部は面取りされて断面箱形であるのに対して、2の口唇部は内削ぎとなっている。いずれも口縁部には撚糸圧痕が施されており、1では0段多条のL原体を横位と斜位にそれぞれ2本平行に圧痕している。更に、斜位の圧痕間には同じ原体を浅く圧痕しており、横位の圧痕間には0段多条で反撚りのLL原体を圧痕している。2ではL原体を口唇直下に3段に亘って圧痕している。なお、胎土には植物繊維が含有されている。3～5は胴部で、3・5の外表面には非結束の羽状縄文が見られ、4の外表面には条が右下がりの条の斜縄文が見られる。16は尖底となる底部破片である。外表面には縦位の撚糸文が施文されている。

6～11は縄文時代前期後半の大木4式土器の深鉢形土器の破片である。6・8は口縁部で、6の口唇部が断面箱形であるのに対して、8の口唇部は丸みを持って仕上げられている。いずれも地文を持たないが、6には沈線が引かれている。7・9～11は胴部で、7の外表面には半截竹管の凹部によるジグザグ文が横方向に2段に亘って描かれ、9の外表面には半截竹管の凹部によるコンパス文が縦方向に展開している。また、10・11の外表面には条の長い斜縄文が見られる。

12・13は縄文時代前期後半の浮島式土器の深鉢形土器の胴部破片である。12の外表面には上部に沈

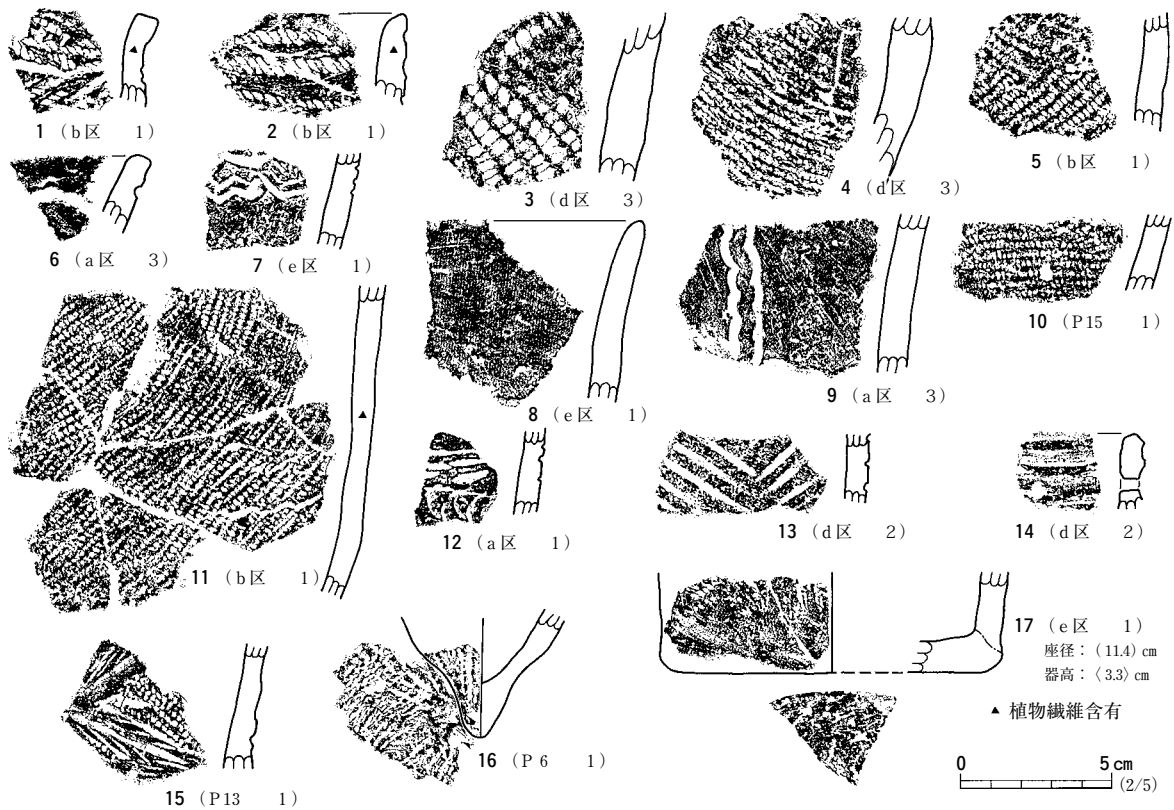


図12 3号住居跡出土遺物

線と横方向からの刺突列が見られ、下部には半截竹管の凹部による押引文が見られる。13の外面上には斜行する平行沈線が展開している。

14・15は縄文時代前期後半の諸磯b式土器で、14は浅鉢形土器の口縁部破片、15は深鉢形土器の胴部破片である。14の外面上には地文はなく、口唇に平行する2条の浮線と1条の細沈線が横走り、下位の浮線と細沈線の間には径4mmの貫通孔がある。15の外面上には浮線による文様が展開しており、浮線の上面には斜行する刻みが施されている。なお、浮線は器面に縄文を施文した後に貼り付けられており、2本の浮線が並ぶ部分では浮線間が撫でられ、浮線上の刻みは矢羽状になるように施されている。

17は縄文時代前期後半の土器の底部である。

ま と め

本遺構は不整楕円形の大型の竪穴住居跡で、炉が中軸線上に並んで2基存在する。また、床面から検出された小規模なピット12基（P1～11・16）と床面中央部のP13は柱穴と推測され、P13のような床面中央部の柱穴と推測されるピットは1・2号住居跡からも検出されている。

本遺構の時期は、本遺跡及び他の遺跡における同様な特徴を持つ遺構の検出例や遺構内から浮島Ⅱ式土器・諸磯b式土器・大木4式土器が出土していることから、おおよそ縄文時代前期後半と推定される。(能登谷)

4号住居跡 S I 04

遺 構 (図13, 写真16・17)

本遺構は、調査区北半のC7・8グリッド、D7・8グリッドに立地する竪穴住居跡である。本住居跡から北東に約2m離れた地点に6号土坑が存在する。本住居跡の立地する場所は遺物が数多く出土した地点であり、住居跡の可能性を考慮し検出作業を慎重に進めた。精査の過程で、にぶい赤褐色の楕円形の地床炉と思われる広がりを見出し、住居跡と判断した。東西南壁の検出を慎重に行った。この時、LⅣ上面での平面形は暗褐色の楕円形であった。

本遺構は北東部の周壁約4分の1が消失しており、本来の平面形は不明であるが、残存している部分から、北西-南東主軸の楕円形と推定される。上端の長径は6mで、北西壁の北端と東壁の北端を結んだ線から南西壁まで測った値を短径とした場合、短径は3.5mを測る。また、確認面から床面までの深さは4～9cmである。周壁の立ち上がりは急で、床面はほぼ平坦であるが、強い踏み縮まりは認められなかった。

遺構内堆積土は3層に分けられた。ℓ1は住居跡北側にみられる焼土粒を含む暗褐色土である。ℓ2は住居跡南側にみられる褐色土である。ℓ3は西壁際の一部にのみ確認できる褐色土であり、壁面の崩落土と考えられる。ℓ1・2に関しては検出面から浅く、表土化しつつあるために、明確に自然堆積と判断するには至らなかった。

床面からは炉跡2基、ピット9基を検出した。炉1は床面中央部北寄りに位置し、南北主軸の長

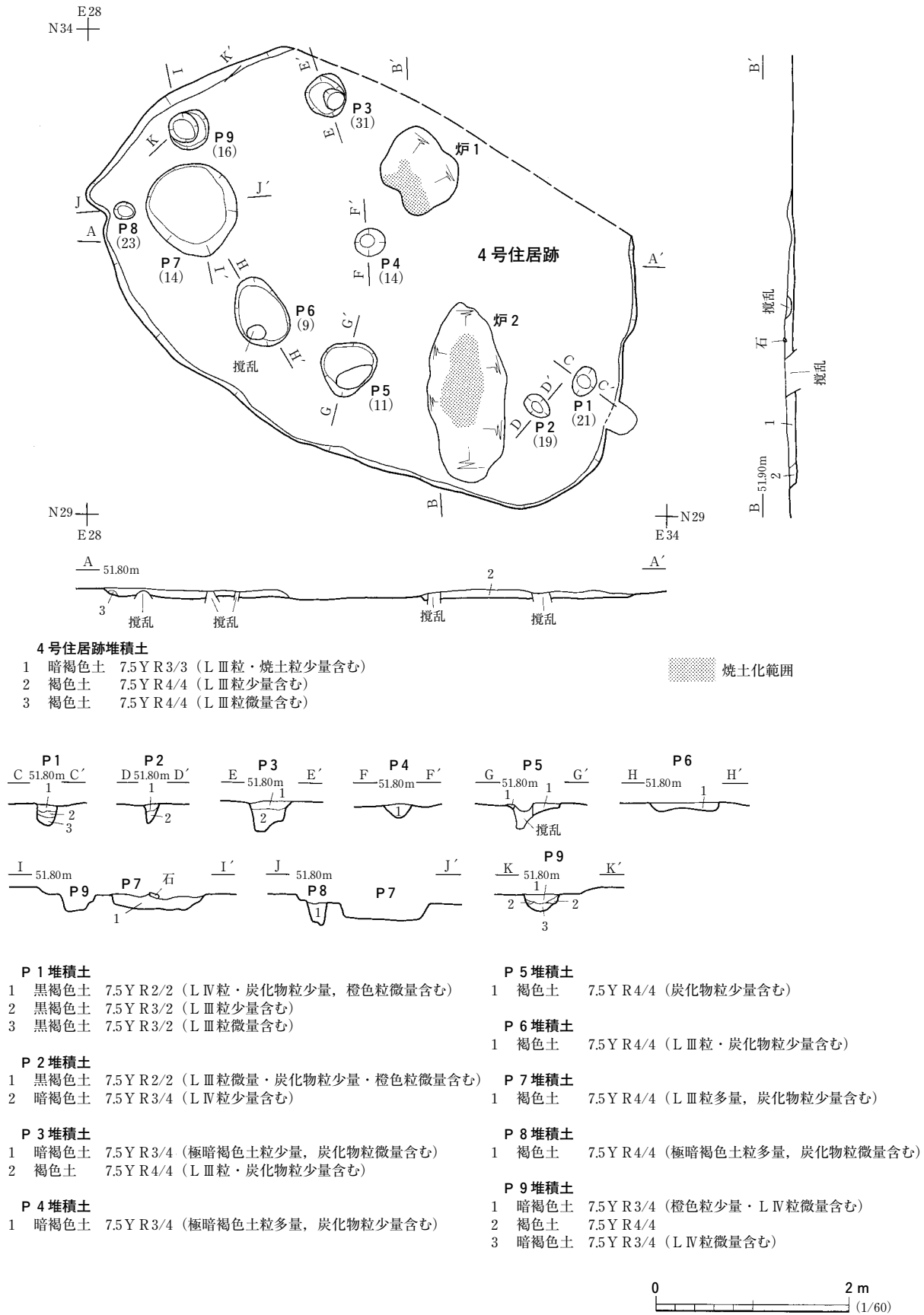


図13 4号住居跡 (1)

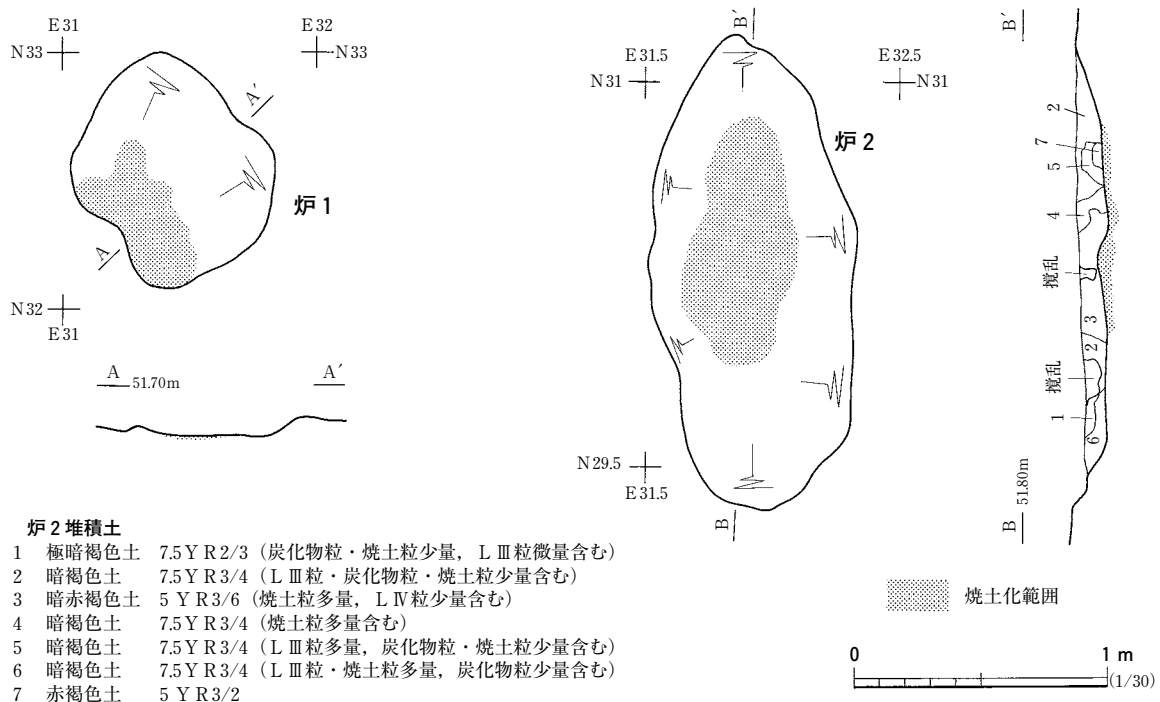


図14 4号住居跡(2)

径約90cm, 短径80cmの不整楕円形である。遺構検出時に掘り過ぎたため、炉跡の南西部分以外の焼面が消失した。断ち割りの結果、床面下2cmまで赤色変化が確認された。炉2は床面南部東寄りに位置し、焼土及び炭化粒を含む暗褐色土の不整楕円形の落ち込みとして検出された。この落ち込みを掘り下げたところ、固く締まった焼面が認められたため、炉跡と判断した。炉2の掘り込みは床面から最大で約12cmほど掘り窪められており、長径約1.85m, 短径80cmの不整楕円形である。焼面は南北主軸の長径約95cm, 短径45cmの不整楕円形で、断ち割りの結果、床面下5cmまで赤色変化が確認された。炉2の掘り込みの堆積土は7層に分けられ、いずれも炭化物粒や焼土粒, L III, L IVを含む混土であることから、人為堆積と推測される。住居跡の堆積土と類似点がないため、炉2は本住居跡が廃絶する以前に使われなくなり、埋め戻されていたと推測される。

ピットの堆積土は住居内堆積土上面からは認められず、すべて床面から検出され、遺構の残存が不良な北東部分には見つけることができなかった。9基のピットは、径が15~40cm, 床面からの深さが18~30cmを測るP 1~4・8・9と、径が58~94cm, 深さが9~14cmを測るP 5~7に大別される。P 1・2は住居跡の東壁, P 3・8・9は北西壁に沿って配置され、平面形は円形または長径と短径が近似な楕円形で、断面形が円筒状であることから壁柱穴の可能性が考えられる。また、住居跡中央に位置するP 4も前記ピットと類似した形状から柱穴の可能性が高い。一方、P 5~7は住居跡に伴うピットだが深さも浅く、その機能は不明である。

遺物 (図15, 写真55・56・73)

本遺構より出土した遺物は、縄文土器片69点である。

図15-1は大型深鉢形土器の口縁部資料である。口縁部が大きく外反する器形である。口唇部に

は僅かな突起が見られ、無文の口縁部を突起から垂下する3条の波状沈線で縦に区画している。縦位の波状沈線から派生するかのようには半截竹管による波状の平行沈線文が施文される。口縁部と胴部との境には横位に波状沈線文が3条確認できる。胎土には粗砂を含む。2は口縁部資料である。横位に撚糸圧痕後、短沈線により鋸歯文を描く。3は口縁部資料で、斜縄文が施文されている。4は胴部破片であり、平行沈線による曲線が描かれる。軟弱な胎土であるうちに施文して粘土が溢れ出た様子が伺える土器片である。5は単節のLR縄文が施された胴部破片である。6は口縁部に近い胴部資料である。口縁部が外反する器形と推測できる。口縁部側に横走する多段の結節回転文を施文している。胴部には単節の斜縄文が施される。胎土には若干の繊維混入痕が確認できる。7は口縁部に近い胴部破片で、小さい山形沈線文が2条確認できる。8は口縁部の資料である。半截竹管によりコンパス文が施文されている。9は幅6mmの半截竹管により爪形文が2条施文されている。

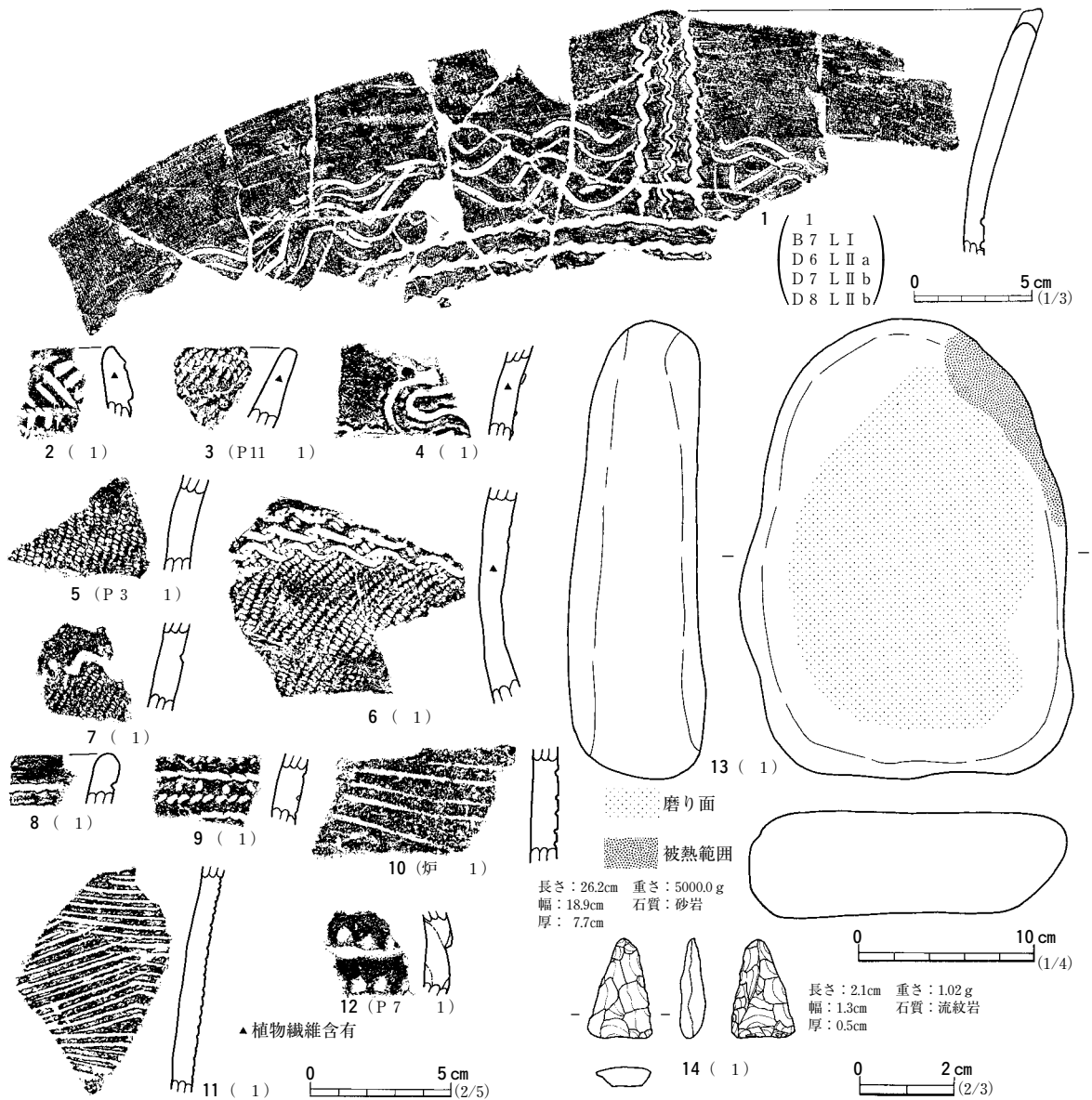


図15 4号住居跡出土遺物

10は横位に平行沈線文が施文された胴部破片である。11も平行沈線文を施文し、山形状の文様をモチーフとする。12は口縁部寄りの破片である。輪積み痕を残し、指頭により窪みをつけている。

13は炉1のすぐ北側のℓ1から出土した石皿である。偏平な自然礫を素材として用い、滑らかな摩耗面が認められる。一部に被熱した痕跡が確認できる。14は平基の石鏃である。石材は流紋岩を用いている。摩滅が著しい。

ま と め

本遺構は残存規模が長径6m、短径3.5mの竪穴住居跡である。北東壁の一部を消失している。床面には炉跡2基、ピット9基を検出した。炉1は地床炉で、炉2は床面を掘り込んで造られている。炉2は炉上に堆積していた土の堆積状況から、本遺構が廃絶する以前に使用されなくなり、埋め戻されていたと判断した。また、不規則に壁柱穴が配置されている。遺構内堆積土より出土した土器片から、本遺構の時期は縄文時代前期後半頃と考えている。(千葉)

5号住居跡 S I 05

遺 構 (図16, 写真18・19)

本遺構は調査区北東部の平坦面に存在し、H・I10グリッドに位置している。本遺跡が所在する段丘面の北側落ち際からは約50m南方の地点に当たる。

本遺構は表土除去後の遺構検出中に、LIV上面において東西主軸の長方形の落ち込みとして確認された。土層観察用ベルトを長軸方向に1本設定して、遺構を南北2区画に分けて掘り込みを実施したところ、両区画を10cm前後掘り下げた段階で、周壁と連続する平坦なLIV層が検出され、南側の区画からは炉の存在を推測させる焼土面も検出されたことから、この平坦なLIV層を床面と判断した。さらに、土層観察用ベルトの記録を取った後に、この土層観察用ベルトを除去し、床面の精査を実施した。

平面形は東西主軸の不整隅丸長方形で、北西隅が歪んでいる。上端の規模は長軸2.78mを測り、西壁から1mの地点より東方の短軸は2.2~2.25m、西壁では1.8mを測る。

遺構内堆積土は8層に分層された。黒褐色土・暗褐色土・褐色土・にぶい黄褐色土と土色は多様で、堆積状況も不規則であることから、人為的な堆積と推測される。なお、炉上のℓ5には焼土粒が多量に混入していた。

周壁はLIVで、東壁では緩いが、他では急な立ち上がりとなっている。壁高は全体的に低く、西壁では3~4cm、北壁では4~6cm、東壁では6~9cm、南壁では3~15cmを測り、南壁のほぼ中央部で最大で、南西隅で最小である。

床面は前述のようにLIVで、ほぼ平坦であるが、部分的に木の根の攪乱を受け、小さな起伏も多くあることから、全体的に不整である。また、緩く東へ下降している。なお、床面の踏み締まり範囲は確認できなかった。長軸は2.64mを測り、短軸は西壁から1mの地点より東方では2.12~2.16m、西壁際では1.76m、東壁際で1.96mを測る。

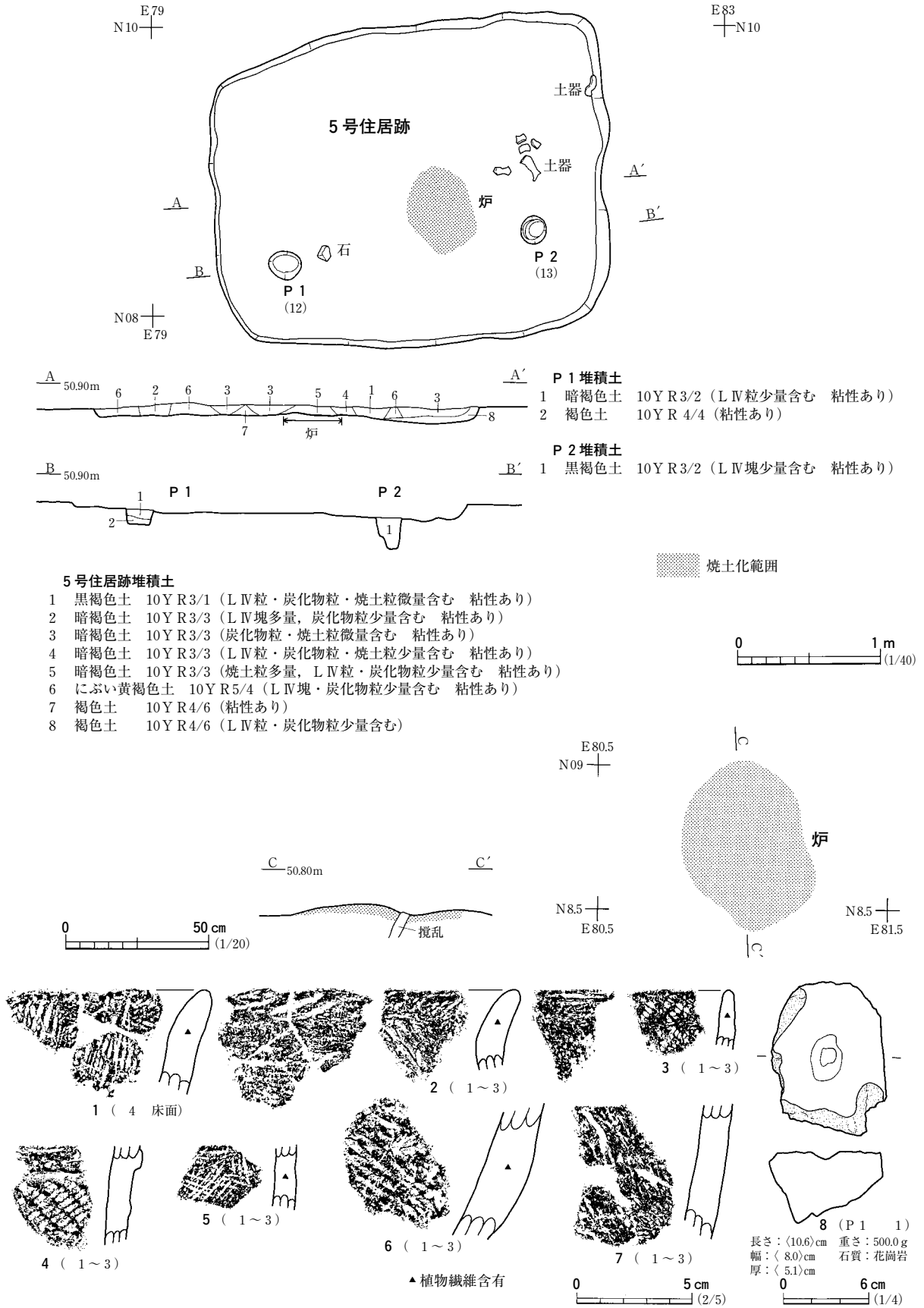


図16 5号住居跡・出土遺物

床面からは焼土面が1箇所とピットが2基確認された。焼土面は床面ほぼ中央部から検出され、中心軸線より南へ広がっている。この焼土面は床面上で直に火を焚いた地床炉と推測され、掘り込みや縁石は持たず、赤褐色に熱変化している。熱変化範囲は南北方向からやや西へ傾いた主軸の不整楕円形で、長径57cm、短径43cmを測る。この熱変化範囲を長軸方向に断ち割ってみたところ、床面から最大4cmまで熱変化しており、中央部は熱変化の度合いが強いことが観察できた。

ピットは床面南半部に東西に並んで検出され、西側のものをP1、東側のものをP2とした。いずれも円筒形であるが、P2は西壁途中に狭い段がある。P1は直径17cm、深さ12cmを測り、P2は直径15cm、深さ21cmを測る。ピット内堆積土は混入物に違いがないものの、土色に違いが見られ、P1では暗褐色、P2では黒褐色である。なお、ピット間の距離は1.55mを測る。

遺物 (図16, 写真56)

遺構内堆積土より縄文土器片119点、石器1点が出土し、床面より縄文土器片25点が出土した。特に、炉の東方と東壁北半部からは縄文土器片がまとまって出土したが、接合・復元できる資料は少なかった。なお、出土した縄文土器片は全て縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての深鉢形土器の破片である。その内、特徴的なものを図16に示した。

1・2は深鉢形土器の口縁部破片で、同一個体である。口縁部は若干外反し、口唇部は薄くなっている。外面には縦位ないしは斜位の捺糸文が施文され、口唇内面にも斜位ないしは横位の捺糸文が1cm幅で施文されている。胎土には植物繊維を多量に含んでいる。3も深鉢形土器の口縁部破片で、口縁部は直立するものと推測される。外面には非結束の羽状縄文が施文されているが、上段の斜縄文はLR原体を横位回転したもので、下段の斜縄文はRL原体を横位回転したものである。いずれも幅1.5cm弱と狭いものである。胎土には植物繊維を含んでいる。

4は深鉢形土器の頸部付近の破片で、頸部には幅約1cm、高さ2mmの隆帯が巡り、隆帯上及び胴部にはRL原体を横位回転した斜縄文が施文されている。なお、隆帯は胴部に斜縄文を施文した後に貼り付けられている。

5～7は深鉢形土器の胴部破片で、胎土には植物繊維を多量に含んでいる。5の外面には細い捺糸文が不定方向に施文され、交差している部分もある。6・7の外面には斜位の細い捺糸文が施文されている。6は底部付近の破片である。

8はP1の堆積土上面より出土した凹石である。楕円形に近い割石の上面と片方の側面の中央部に浅いくぼみがある。

まとめ

本遺構は長方形の小型の竪穴住居跡で、床面ほぼ中央部に地床炉を1基有する。また、床面南半部から東西に並んで検出されたP1・2は柱穴と推測されるが、他に柱穴と推測されるピットが床面及び掘り込みの外にも確認できなかったことから、上屋構造の復元に苦慮するところである。

本遺構の時期は、遺構内より縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての土器のみが出土していることから、おおよそ、これらの土器と近い時期と推定する。(能登谷)

6号住居跡 S I 06

遺 構 (図17, 写真20・21)

本遺構は調査区中央部からやや北寄りの平坦面に存在し、G11グリッドに位置している。本遺構が所在する段丘面の北側落ち際からは約42m南方の地点に当たる。

本遺構は表土除去後の遺構検出中に、L IV上面において、調査区南半部の広い範囲で認められる後世の耕作に伴う南北に長い攪乱穴とともに、円形に近い落ち込みとして検出された。この落ち込みは南東部を攪乱穴に切られていることから、先に攪乱穴を掘り上げ、次にこの落ち込みを4区画に分けて掘り込みを実施した。それぞれの区画を10cm前後掘り下げた段階で、周壁と連続する平坦なL IV層が検出され、南東部の区画(c区)からは炉の存在を推測させる焼土面も検出されたこと

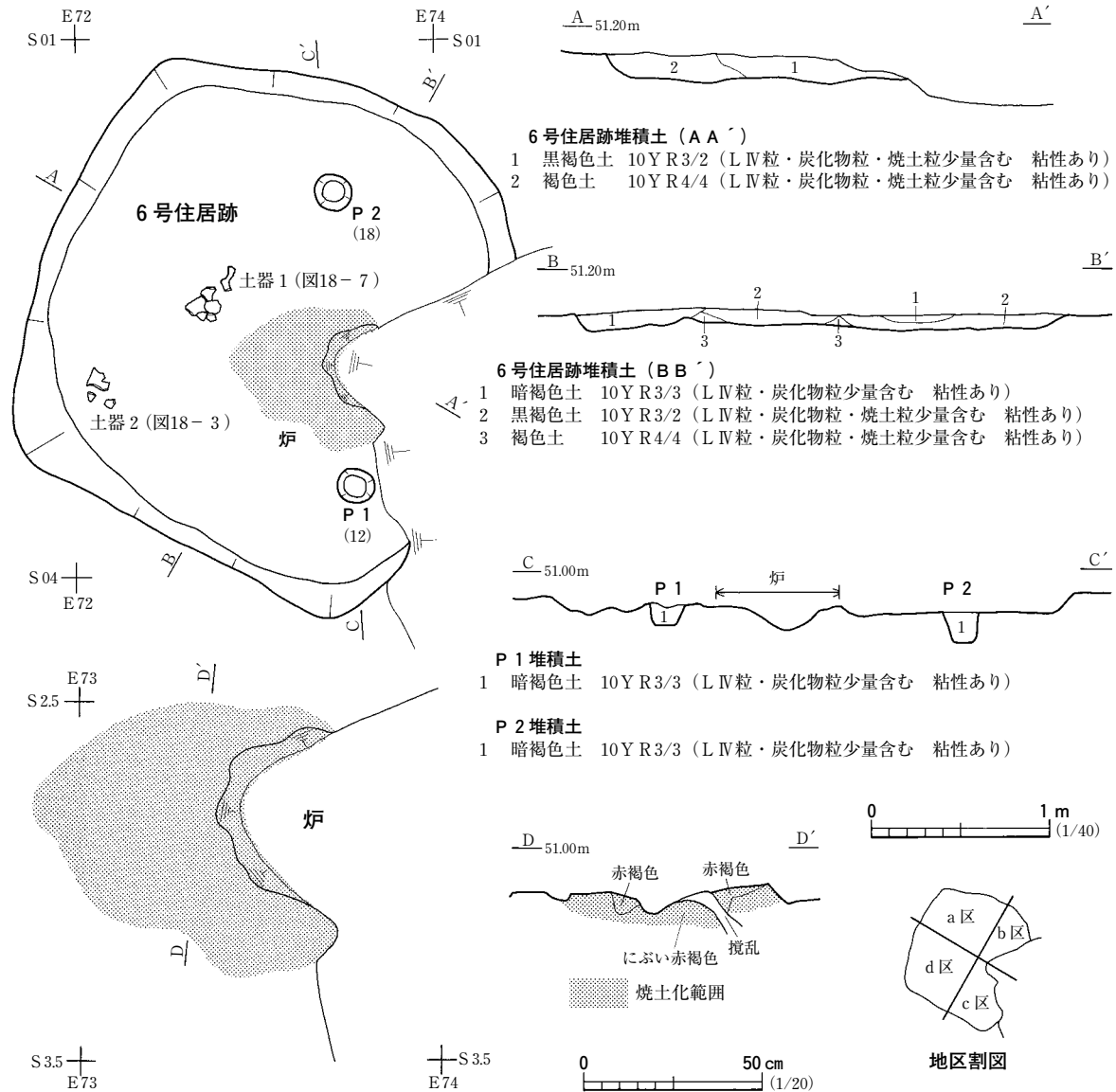


図17 6号住居跡

から、この平坦なLⅣを床面と判断した。さらに、土層観察用ベルトの記録を取った後に、この土層観察用ベルトを除去し、床面の精査を実施した。なお、南西部の区画（d区）の堆積土から土器がまとまって出土したことから、この土器に関しては出土状況の図化を行った。

前述のように、遺構の南東部を攪乱穴に切られていることから、全容は不明であるが、平面形は北東-南西主軸の方形を基調としているが、北西辺と北東辺は丸みがあり、北東隅は隅丸である。上端の規模は北東-南西軸で長さ2.7mを測る。

遺構内堆積土は土層観察用ベルトAA'では2層に分層され、土層観察用ベルトBB'では3層に分層されたが、AA'のℓ1はBB'のℓ2に対応し、AA'のℓ2はBB'のℓ3に対応することから、本遺構内の堆積土はBB'の3層を基本とし、図18に掲載した各遺物の出土層位はこのBB'の層位に対応している。なお、BB'のℓ1は後世の耕作により攪乱されている。堆積状況はAA'でみると、北西からの流入であることがわかるが、これが自然流入によるものなのか、人為的なものなのかは判断できなかった。

周壁はLⅣで、全体的に緩やかな立ち上がりとなっている。壁高は10cmを測る。

床面も前述のようにLⅣで、ほぼ水平に近いが、南半部は木の根の攪乱を受け、小さな起伏が認められ、全体的に不整である。なお、床面の踏み締まり範囲は確認できなかった。床面の平面形は上端における平面形に比べて、各辺の丸みと隅丸の度合いが大きいといえる。北東-南西軸で長さ2.52mを測る。

床面からは焼土面が1箇所とピットが2基確認された。焼土面は床面中央部南寄りから検出され、東部は攪乱穴により欠失している。この焼土面は床面上で直に火を焚いた地床炉と推測され、掘り込みや縁石を持たず、にぶい赤褐色に熱変化している。熱変化範囲は東西に長軸を持つ不整形と推測され、長軸84cm（現存長）、短軸70cmを測る。この熱変化範囲を南北方向に断ち割って見たところ、床面から最大9cmまでにぶい赤褐色の熱変化が観察でき、上部には熱変化の度合いが強い赤褐色部分が確認された。

ピットは焼土面を間にして南北に並んで検出され、南側のものをP1、北側のものをP2とした。いずれも円筒形で、P1は直径19cm、深さ12cmを測り、P2は直径20cm、深さ18cmを測る。ピット内堆積土は遺構内堆積土のℓ1と同じ暗褐色土である。なお、ピット間の距離は1.45mを測る。

遺物（図18、写真56・57）

遺構内堆積土より縄文土器片152点、剥片1点が出土した。縄文土器片の内訳は、1点のみが縄文時代前期後半の浮島Ⅱ式土器である他は、全て縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての深鉢形土器の破片である。なお、浮島Ⅱ式土器はℓ1からの出土であり、後世の攪乱により紛れ込んだものと推測される。出土した土器の内、特徴的なものを図示した。

1～3は深鉢形土器で、同一個体と推測される。口縁部は若干外反し、口唇部は丸みがあり、外面には捺糸文と部分的に条痕文が施され、内面には条痕文が施されている。外面の捺糸文は口縁部では縦位であるのに対して、胴部では斜位にも施文されており、口唇から口縁部内面にかけても横

位ないしは斜位の撚糸文が施文されている。なお、胎土には植物繊維を多量に含んでいる。

4は深鉢形土器の底部に近い部分の胴部破片で、外面には撚糸文が施文されており、胎土には植物繊維を含んでいる。5も深鉢形土器の胴部破片で、外面には条の細い撚糸文が一部交差しながら施文されており、胎土には植物繊維を含んでいる。

6も深鉢形土器の胴部破片で、外面には非結束の羽状縄文が施文されている。上段の斜縄文は0段多条のLR原体を横位回転したもので、下段の斜縄文は0段多条のRL原体を横位回転したものである。胎土には植物繊維を含んでいる。7は深鉢形土器の胴部下半の破片で、外面には4段の縄文帯が認められる。各縄文帯には条の傾きが異なる斜縄文が交互に存在し、隣り合う上下の縄文帯

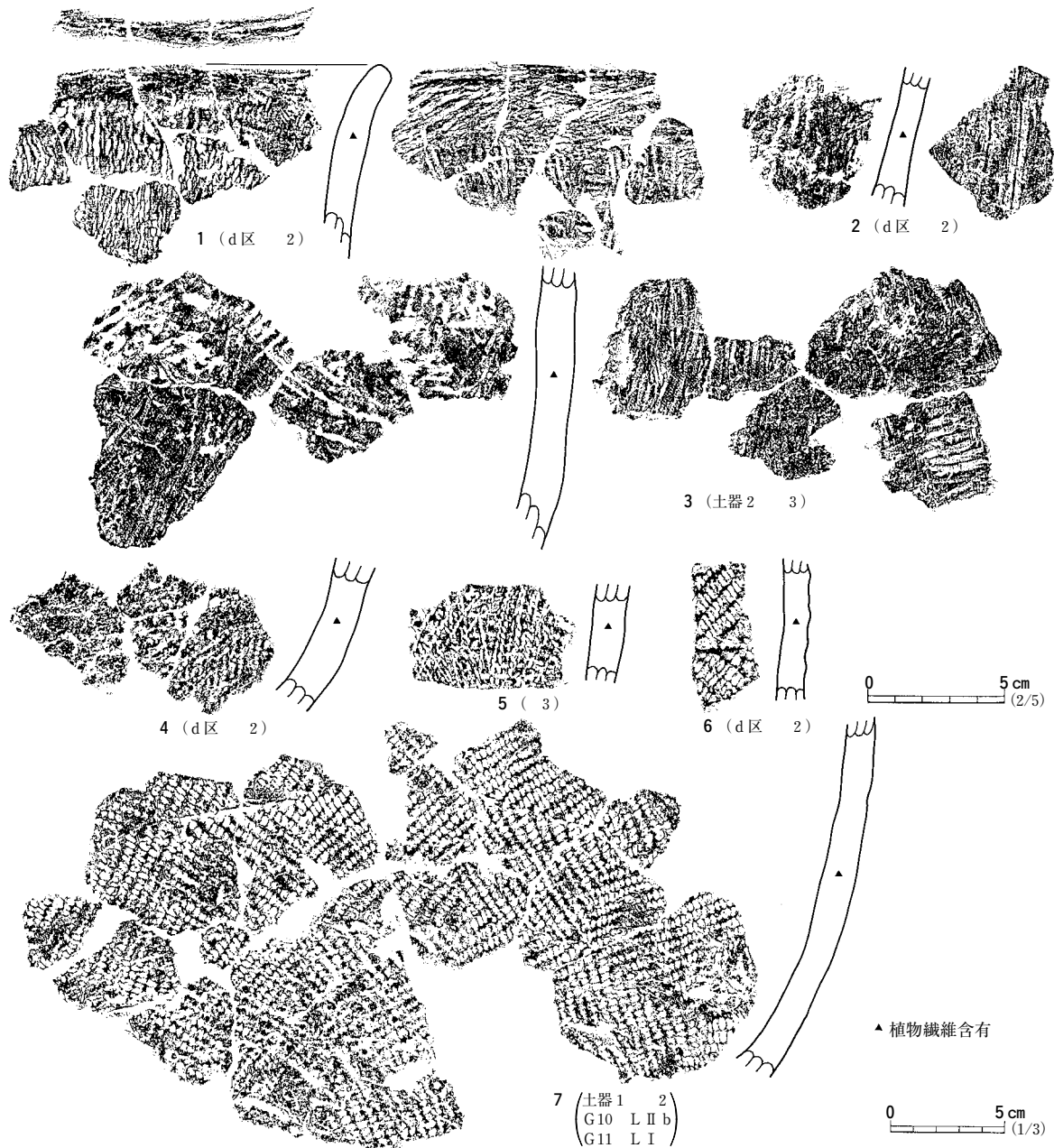


図18 6号住居跡出土遺物

でも異なる斜縄文が上下に配されていることから、羽状縄文の一種ではあるが、条により菱形文が形成されているとも見て取れる。それぞれの斜縄文の原体はR L原体と0段多条のL R原体であり、これらを非結束で横位回転している。なお、胎土には植物繊維を含んでいる。

ま と め

本遺構は方形を基調とした小型の竪穴住居跡で、床面中央部南寄りに地床炉を1基有する。また、床面東半部から南北に並んで検出されたP 1・2は柱穴と推測されるが、他には柱穴と推測されるピットを確認できなかった。

本遺構の時期は、遺構内より縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての土器が多く出土していることから、おおよそ、これらの土器と近い時期と推定する。(能登谷)

7号住居跡 S I 07

遺 構 (図19, 写真22・23)

本遺構は調査区中央部からやや北寄りの平坦面に存在し、G10グリッドに位置している。本遺跡が所在する段丘面の北側落ち際からは約36m南方の地点に当たる。

本遺構は表土除去後の遺構検出中に、L IV上面において、北東-南西主軸の長方形の落ち込みとして検出された。この落ち込みの北東部から北西部にかけては後世の大きな攪乱穴に切られ、南西部は7号土坑に切られており、さらに、ほぼ中央部では2号建物跡のP 5・10にも切られていることが確認できた。調査の順番として、最初に後世の攪乱穴の掘り上げと7号土坑の調査を行い、次に2号建物跡のP 5・10の調査を行った後に、この落ち込みの掘り込みを実施した。長軸方向に土層観察用ベルトを設定して、2区画に分けて掘り込みを行ったが、それぞれの区画を10cm前後掘り下げた段階で、周壁と連続する平坦なL IVが検出されたことから、この平坦なL IVを床面と判断した。さらに、土層観察用ベルトの記録を取った後に、この土層観察用ベルトを除去し、床面の精査を実施した。

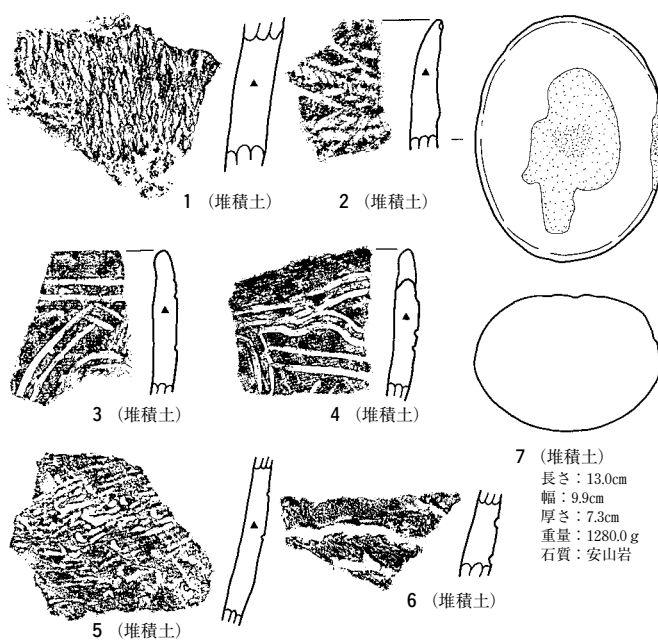
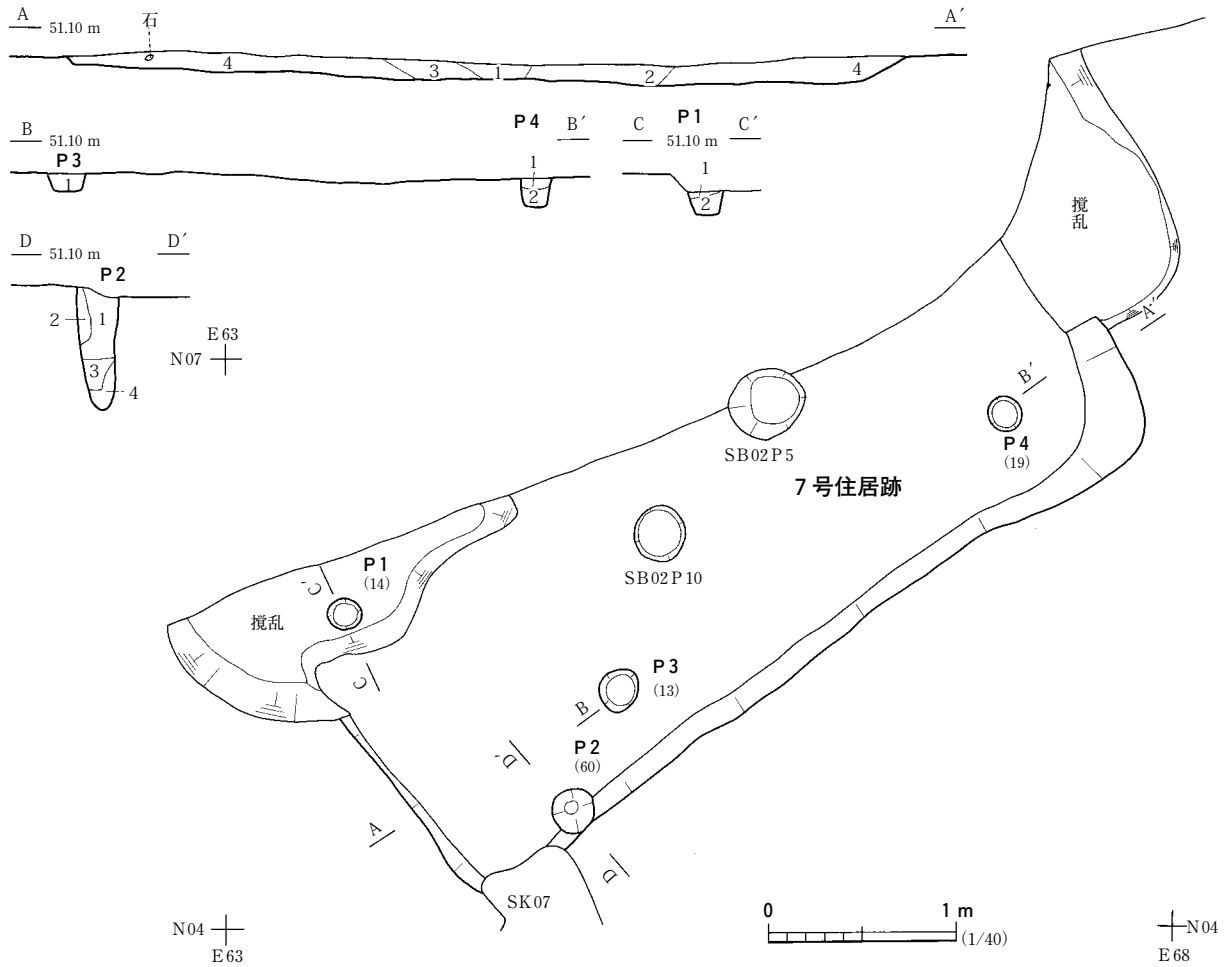
前述のように、遺構の北東部から北西部にかけては攪乱穴に切られていることから、全容は不明であるが、平面形は北東-南西主軸の方形ないしは長方形であったものと推測され、上端の規模は北東-南西軸で長さ4.46mを測り、北西-南東軸の最大残存長は1.6mを測る。

遺構内堆積土は4層に分層され、中央部のℓ 1～3は暗褐色土、壁際のℓ 4は褐色土であり、堆積状況は遺構外からの自然流入土と推測される。

周壁はL IVで、全体的に緩やかな立ち上がりとなっている。壁高は東端で最大11cm、南端で最小2cm、北西隅及び南東壁中央部で6cmを測る。

床面も前述のようにL IVで、ほぼ水平に近いが、小さな起伏が多く認められ、全体的には不整である。なお、床面の踏み締まり範囲は確認できなかった。床面の規模は、北東-南西軸で長さ4.2mを測り、北西-南東軸の残存長は北東部で1.1m、南西部で1.5mを測る。

床面からはピットが3基確認され、遺構北西部を切っている浅い攪乱穴の底面からもピットが1



7号住居跡堆積土

- 1 暗褐色土 10Y R3/3 (LIV粒・炭化物粒少量含む)
- 2 暗褐色土 10Y R3/3 (炭化物粒少量, 焼土粒微量含む)
- 3 暗褐色土 10Y R3/4 (LIV粒少量含む)
- 4 褐色土 10Y R4/4 (LIV粒・炭化物粒少量含む 粘性あり)

P1 堆積土

- 1 灰黄褐色土 10Y R4/2 (LIV粒少量含む 粘性あり)
- 2 黒褐色土 10Y R3/2 (粘性あり)

P2 堆積土

- 1 にぶい黄褐色土 10Y R4/3 (LIV粒少量, 炭化物粒微量含む 粘性あり)
- 2 褐色土 10Y R4/4 (LIV粒多量, 炭化物粒微量含む)
- 3 褐色土 10Y R4/4 (炭化物粒微量含む)
- 4 褐色土 10Y R4/4

P3 堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R3/2 (LIV塊少量含む)

P4 堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R3/2 (LIV粒少量, 炭化物粒・焼土粒微量含む 粘性あり)
- 2 褐色土 10Y R4/4 (粘性あり)

7 (堆積土)
 長さ: 13.0cm
 幅: 9.9cm
 厚さ: 7.3cm
 重量: 1280.0g
 石質: 安山岩

▲植物繊維含有

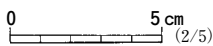


図19 7号住居跡・出土遺物

基確認された。検出順に番号を付した結果、番号の配列は逆時計回りになった。P2のみが壁際に検出され、他は壁からやや内側より検出されたが、いずれも円筒形で、P2は長径25cm、短径20cm、深さ60cmを測り、他のピットは直径19～20cm、13～19cmを測る。ピット内堆積土はP2以外では1～2層で、黒褐色土がいずれのピットにも堆積している。P2は4層に分層され、遺構外からの自然流入とは考えられない堆積状況であることから、人為的に埋め戻されたものと推測される。なお、南東壁に沿って検出されたP3・4間の距離は2.3mを測る。

遺物 (図19, 写真56・74)

遺構内堆積土より縄文土器片43点、石器1点が出土した。縄文土器片の内訳は、花積下層式土器を含む縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての土器が32点、縄文時代前期後半の土器が8点(浮島式土器1点、大木4式土器7点)で、時期不明の土器小片が3点である。その内、特徴的なものを図19に示した。

1は縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての深鉢形土器の胴部破片で、外面には縦位の撚糸文が施文されている。胎土に多量の植物繊維を含み、図示した他の土器に比べて厚手である。

2は縄文時代前期初頭の花積下層式土器の深鉢形土器の口縁部破片で、口唇部は若干外反している。口唇部には刻みが施され、口縁部には撚糸圧痕、沈線、刻みによって文様が展開しているが、撚糸圧痕は2本一対で直線的であり、口唇部に平行するものと右下がりのものがある。この撚糸圧痕はR原体とL原体を並べて圧痕したことにより、原体の節が矢羽根状になっている。沈線は右下がりの撚糸圧痕と平行に引かれており、沈線と撚糸圧痕の間には口唇と平行する刻みが充填されたかのように認められるが、刻みの一つが撚糸圧痕によって潰れていることから、これら3種の中で撚糸圧痕が最後に行われたことを伺い知れる。なお、胎土には植物繊維を含んでいる。

3～6は縄文時代前期後半の大木4式土器である。3と4は同一個体の深鉢形土器の口縁部破片で、外面には半截竹管の凹部による浅い平行沈線文が描かれている。平行沈線文は口唇部に沿って巡り、その下位では弧状や波状であり、直線的に斜行するものもある。なお、口縁は波状と推測され、胎土には植物繊維を含んでいる。5は深鉢形土器の胴部破片で、外面にはL原体を横位に回転施文した斜縄文が観察できるが、前に施文した部分に重ねて施文されたり、施文後に撫でられていることから、斜縄文は明確ではなく、原体の端部を少し曲げて回転施文したことによる端部の名残の窪みが数段にわたって観察できる。なお、胎土には植物繊維を含んでいる。6も深鉢形土器の胴部破片で、外面には半截竹管の凹部の先端を尖らして施したと推測される横位のコンパス文が描かれている。胎土には細かい砂粒を多く含んでいる。

7は本遺構を切っている2号建物跡のP5とP10の間から出土した凹石である。偏平な楕円礫の片面のみに中央部を中心に浅いくぼみが不整形に広がり、一方の側縁にも敲打痕が認められる。

まとめ

本遺構は方形ないしは長方形を基調とした竪穴住居跡であると推測されるが、後世の遺構や耕作による攪乱を受けていることから、全容は不明である。床面からは炉は検出されず、ピットが4基

検出された。これら4基のピットは柱穴と推測され、壁際のP2のみが深いのが特徴的である。

遺構内より縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての土器が多く出土しているが、縄文時代前期後半の土器も少量ながら出土していることから、本遺構の時期は、おおよそ、後者の土器と近い時期と推定される。

(能登谷)

8号住居跡 S I 08

遺 構 (図20, 写真24・25)

本遺構はE13グリッドに位置する。調査区北西部はLⅢの残りが良いのに対して、町道北側の調査区の南半分は重機により攪乱され、本遺構も削平されていた。遺構を検出する段階で、2箇所の暗赤褐色の焼土面及び付随すると推測されるピットを認めたことから、住居跡と判断した。なお、北側からは25号土坑が検出されているが、本遺構の堆積土が遺存しない状況では、遺構の重複状況や前後関係は判断できない。

床面と判断した面からは5基のピットを確認した。いずれも本遺構に伴うピットと判断したが、P3が検出面より38cmと際立って深く、本遺構に伴わないピットの可能性もある。床面と判断した面はほぼ平坦であるが、踏み締まりなどによる硬化状況は確認できなかった。

P1は炭化物粒を含む円形として検出した。直径44cmの円形で、検出面から底面までの深さは9cmを測る。堆積土は2層に分層できた。各層の土質は安定しており、自然堆積と考えられる。底面は平坦であるが、固くはない。

P2は暗褐色の円形として検出した。直径24cmで、検出面から底面までの深さは19cmを測る。堆積土は2層に分けられた。ℓ1はLⅣ粒や炭化物粒を含む暗褐色土である。堆積状況より人為堆積と考えられる。ℓ2は褐色土であり、自然堆積の可能性も考慮したい。

P3は暗褐色の楕円形として検出した。長径36cm、短径22cmを測り、検出面から底面までの深さは38cmである。堆積土は締まりのない暗褐色土1層である。

P4は攪乱の底面より暗褐色の円形として検出した。攪乱により床面は破壊されており、本ピットは床面よりも低い位置が検出面となっている。また、攪乱による破壊のため、ピット南半分も遺存していない。遺存規模は長径32cm、短径18cmである。検出面からの深さは18cmを測る。堆積土は炭化物粒を含む暗褐色土1層である。

P5は褐色土の不整円形として検出した。直径70cmで、深さ18cmを測る。堆積土は3層に分層した。ℓ1は黒褐色土及び炭化物粒を含む褐色土である。ℓ2は黒褐色土及び炭化物粒を含む暗褐色土で、遺物を混入する層である。ℓ3は炭化物粒を含む褐色土である。ℓ1・2は堆積状況よりいずれも人為堆積と考えられる。ℓ3は壁際に三角に堆積する状況から、本住居跡機能中または廃絶後すぐに溜まった自然堆積土と判断した。

P2・3・4は位置や規模より、柱穴であろう。P1は検出面から浅く、底面も平坦であり、機能は不明である。P5は規模や深さから判断して、貯蔵穴の可能性が高い。

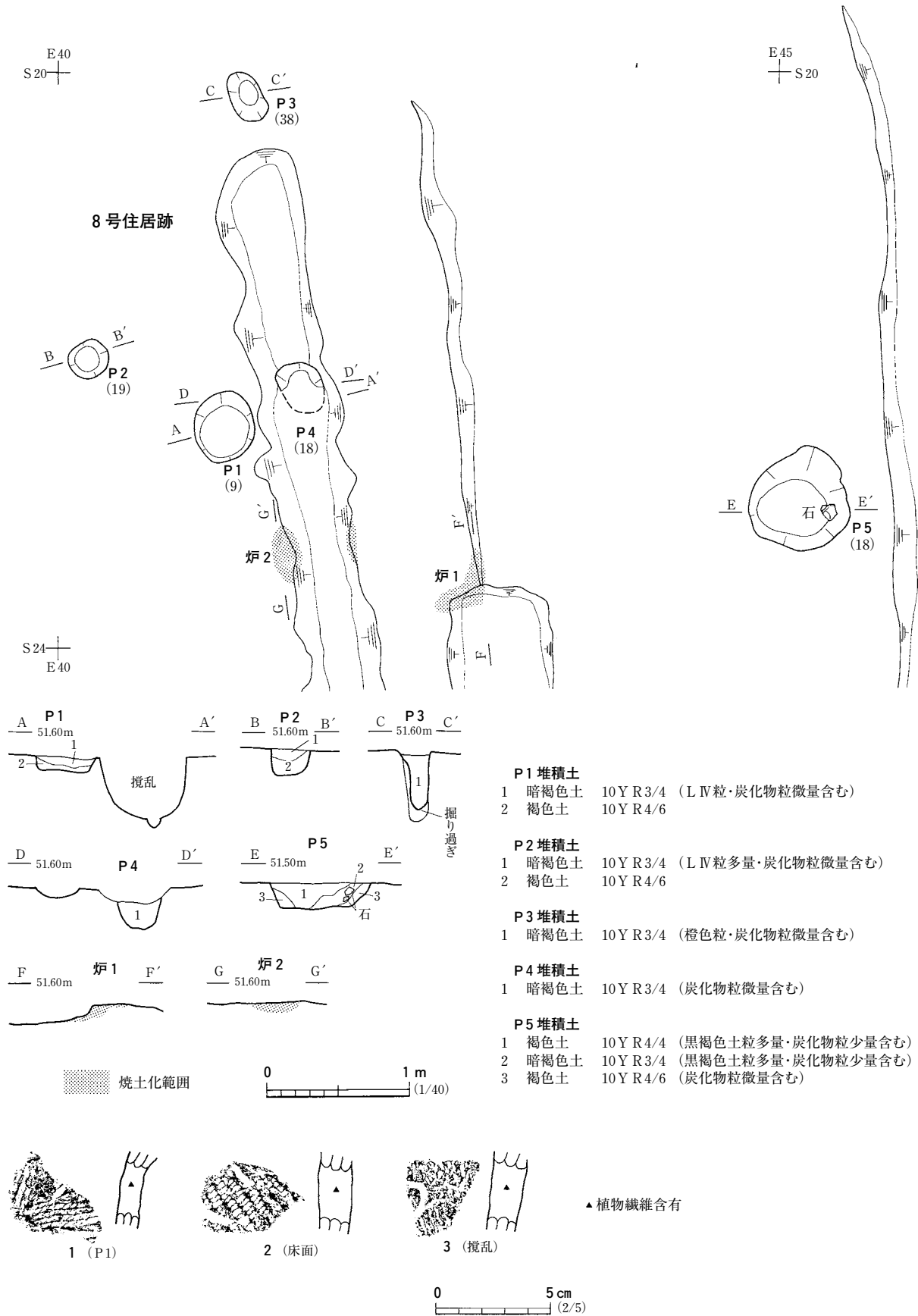


図20 8号住居跡・出土遺物

炉は2基確認した。いずれも地床炉である。炉1は炉2よりもやや南東に位置する。暗赤褐色の「ノ」の字形の焼土面を検出した。南側は攪乱に破壊されている。遺存規模は南北38cm、東西32cmを測る。焼土化した深さは8cmである。炉2は攪乱溝を挟み込むように暗赤褐色の焼土面を検出した。攪乱溝により分断されているが、土色や位置や焼土化した深さが同様のため、同一の地床炉と判断した。焼土面の南北遺存規模は40cm、東西復元規模は58cmを測る。焼土化した深さは6cmである。

遺物 (図20, 写真56)

本遺構より出土した遺物は縄文土器片23点である。図20に示した3点にはいずれも繊維混和痕が確認できる。1はP1のℓ1から出土した口縁部寄りの胴部破片で、撚糸文を施文している。2は斜縄文を施文している胴部破片である。床面よりの出土である。3は攪乱溝からの出土である。縦位の撚糸文を施文している胴部破片である。

まとめ

本遺構は遺存状況が悪い住居跡であるが、2基の地床炉と5基のピットを検出した。5基のピットの内P2・3・4は柱穴の機能を果たしたと考えられる。P5は貯蔵穴であったと判断した。攪乱や削平が多く、上屋構造の復元などには至らなかった。

本遺構の時期は、出土遺物より縄文時代早期末葉以降と考えられ、炉が2基存在するという特徴は1～4号住居跡と共通していることから、縄文時代前期後半の可能性もある。 (三浦)

第3節 掘立柱建物跡

今回の調査において、掘立柱建物跡が調査区北半部から2棟検出された。この2棟は柱列の軸線方位がほぼ一致していることから、同時期に存在したものと推測され、1号建物跡の出土遺物から、中世の建物跡と推測される。

以下において、検出した掘立柱建物跡について遺構番号順に報告していくが、各遺構に付した遺構番号は、調査時において検出した順に付した番号である。なお、各遺構の規模は柱穴の中心点を結んで計測した。

1号建物跡 SB01

遺構 (図21・22, 写真26～29)

本遺構は調査区北東部の平坦面に存在し、H・I9グリッドに位置している。本遺跡が所在する段丘面の北側落ち際からは約40m南方の地点に当たる。

H9グリッド付近には伐採後の杉の大型の根が多く残存していたことから、重機による表土除去後においても、この付近には表土が広く残存した状況にあった。人力による表土除去と平行して周囲の遺構検出を実施したところ、ある1個の杉の根元から陶器甕片がまとまって発見された。周囲

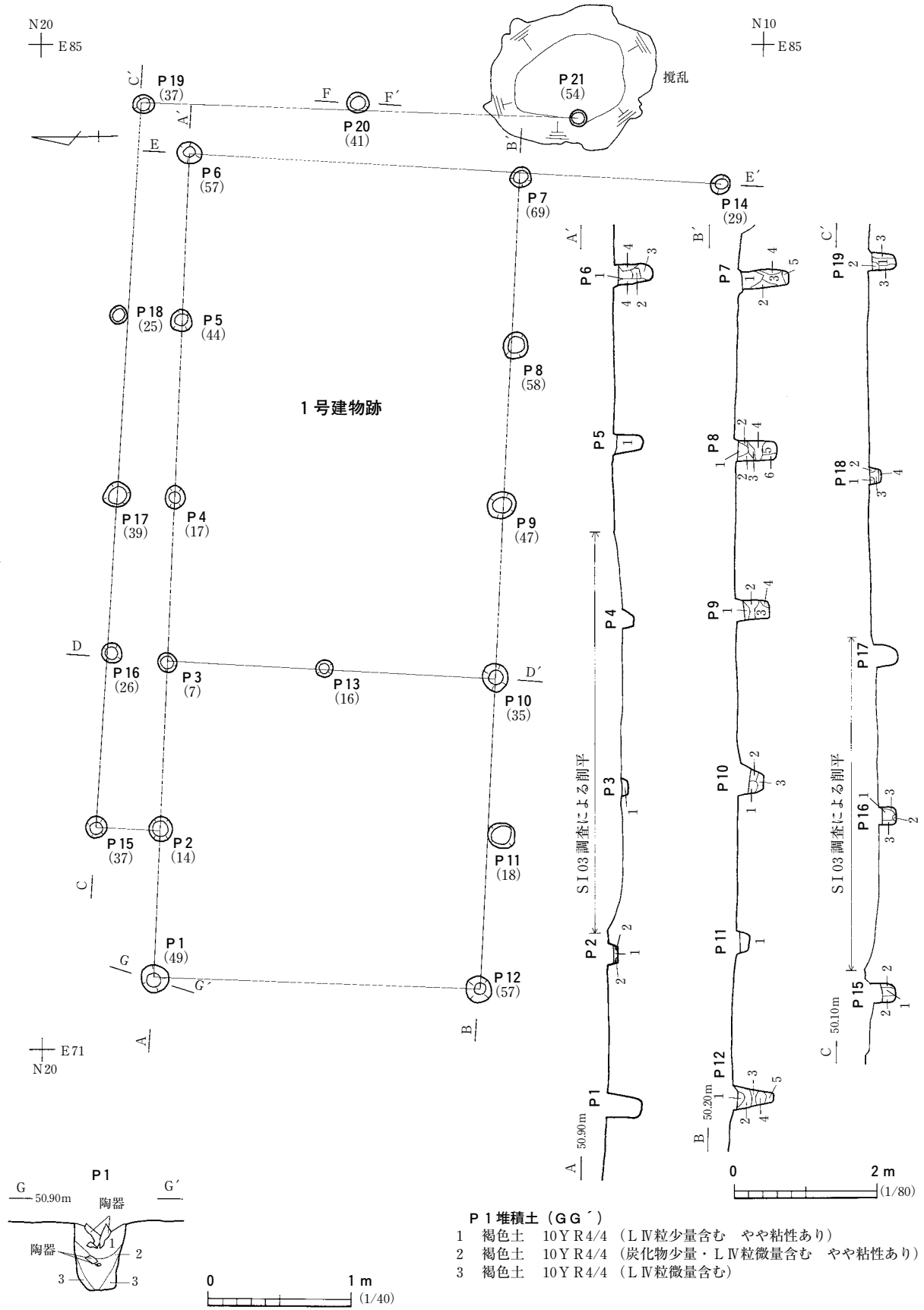
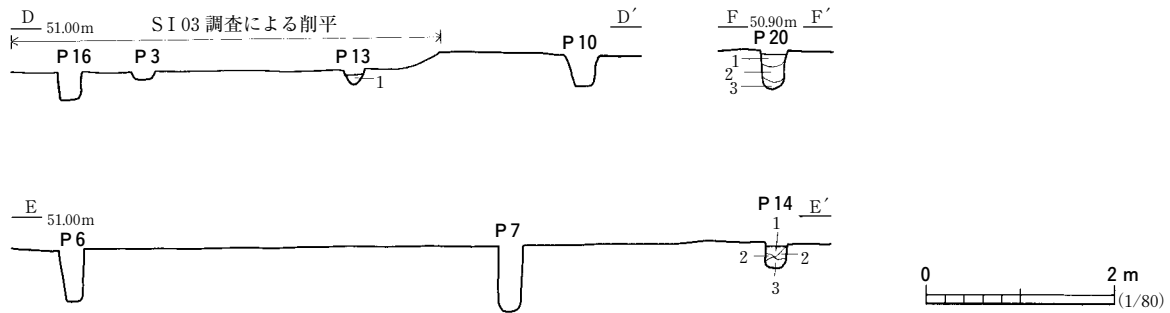


図21 1号建物跡 (1)



P 2・3・5・6 堆積土 (A A´)

P 2

- 1 黒褐色土 10Y R3/2 (炭化物粒少量含む)
- 2 褐色土 10Y R4/4

P 3

- 1 黒褐色土 10Y R3/2

P 5

- 1 暗褐色土 10Y R3/3 (LIV粒・炭化物粒少量含む 粘性あり)

P 6

- 1 黄褐色土 10Y R4/4 (LIV粒少量含む)
- 2 におい黄褐色土 10Y R4/3 (LIV粒少量含む)
- 3 におい黄褐色土 10Y R4/3 (LIV粒・炭化物粒少量含む)
- 4 褐色土 10Y R4/4 (LIV粒多量含む)

P 7～12 堆積土 (B B´)

P 7

- 1 褐色土 10Y R4/4 (LIV粒・炭化物塊少量含む)
- 2 褐色土 10Y R4/6 (LIV粒少量含む)
- 3 褐色土 10Y R4/4 (LIV粒・炭化物塊少量含む)
- 4 褐色土 10Y R4/6 (LIV粒少量含む)
- 5 におい黄褐色土 10Y R4/3 (LIV粒・炭化物粒少量含む)

P 8

- 1 におい黄褐色土 10Y R4/3 (炭化物粒少量含む)
- 2 灰黄褐色土 10Y R4/2
- 3 灰黄褐色土 10Y R4/2 (炭化物粒少量含む)
- 4 褐色土 10Y R4/4 (LIV粒少量含む)
- 5 灰黄褐色土 10Y R4/2 (LIV粒・炭化物粒少量含む)
- 6 褐色土 10Y R4/4

P 9

- 1 褐色土 10Y R4/4
- 2 におい黄褐色土 10Y R4/3 (炭化物粒少量含む)
- 3 灰黄褐色土 10Y R4/2 (炭化物粒微量含む)
- 4 褐色土 10Y R4/6

P 10

- 1 におい黄褐色土 10Y R4/3 (炭化物粒微量含む)
- 2 灰黄褐色土 10Y R4/2 (炭化物粒微量含む)
- 3 褐色土 10Y R4/4 (炭化物粒微量含む)

P 11

- 1 褐色土 10Y R4/4 (粘性あり)

P 12

- 1 灰黄褐色土 10Y R4/2 (炭化物粒少量含む)
- 2 褐色土 10Y R4/4 (炭化物塊少量含む)
- 3 におい黄褐色土 10Y R4/3 (LIV粒・炭化物粒少量含む)
- 4 褐色土 10Y R4/6 (LIV粒・炭化物粒少量含む)
- 5 褐色土 10Y R4/4 (LIV粒・炭化物粒少量含む)

P 15・16・18・19 堆積土 (C C´)

P 15

- 1 黒褐色土 10Y R3/2 (LIV粒多量含む 粘性あり)
- 2 褐色土 10Y R4/4 (粘性あり)

P 16

- 1 黒褐色土 10Y R3/2 (LIV粒多量含む 粘性あり)
- 2 黒褐色土 10Y R3/2 (粘性あり)
- 3 黒褐色土 10Y R3/2 (LIV粒少量含む 粘性あり)

P 18

- 1 におい黄褐色土 10Y R4/3 (炭化物粒少量含む)
- 2 褐色土 10Y R4/4 (LIV粒多量含む)
- 3 におい黄褐色土 10Y R4/3 (炭化物粒少量含む)
- 4 におい黄褐色土 10Y R4/3

P 19

- 1 におい黄褐色土 10Y R4/3 (炭化物塊多量含む 粘性あり)
- 2 褐色土 10Y R4/4 (LIV粒多量含む 粘性あり)
- 3 褐色土 10Y R4/4 (LIV粒少量含む 粘性あり)

P 13 堆積土 (D D´)

- 1 黒褐色土 10Y R2/2 (LIV粒少量含む)

P 14 堆積土 (E E´)

- 1 におい黄褐色土 10Y R4/3 (LIV粒少量含む)
- 2 におい黄褐色土 10Y R4/3 (LIV粒多量, 炭化物粒少量含む)
- 3 におい黄褐色土 10Y R4/3 (炭化物粒少量含む)

P 20 堆積土 (F F´)

- 1 におい黄褐色土 10Y R5/4 (LIV粒・炭化物粒少量含む)
- 2 褐色土 10Y R4/4 (LIV粒多量, 炭化物粒少量含む)
- 3 褐色土 10Y R4/6 (粘性あり)

図22 1号建物跡 (2)

の遺構検出がまだ十分でなかったことと、根の除去に際しては根元の陶器甕片が原位置を移動してしまうことから、出土した陶器に関しては出土状況の写真を撮った後に出土地点を把握するに止め、取り上げを行った。この根及び周囲の根の除去が済んだ段階で遺構検出をおこなったところ、LIV上面において3号住居跡の大型の落ち込みが検出され、これと一部重複して柱穴と推測される円形の落ち込みがほぼ東西方向に3列に並んで20基検出された。また、南側の列の東方延長から検出された木の根の攪乱の底面からも同様な落ち込みが1基検出された。それらの中には、先に陶器甕片が出土した地点も含まれており、この落ち込みにはさらに数片の陶器甕片が混入していることが確

認された。

次に、それぞれの柱穴と推測される円形の落ち込みに重複がないのか丁寧に平面観察を行ったが、重複は確認できなかったことから、陶器甕片が混入している落ち込み以外の落ち込みを約5cm程掘り下げて柱痕の検出を試みることにした。いずれの落ち込みにおいても平面観察では柱痕を確認することはできなかったが、これらが等間隔でほぼ東西方向に3列に並び、さらに、南北方向にも7列に並んでいることから、これらの落ち込みは掘立柱建物跡を構成する柱穴と推測し、それぞれに北西隅のものから順に時計回りにピット番号を付した。なお、本遺構の西方2mからは2号建物跡の落ち込みも隣接して検出されたが、東西方向にほぼ一直線状に並ぶ本遺構の落ち込みのライン上に2号建物跡の落ち込みが乗らないことから、両者は別々の掘立柱建物跡の柱穴と推測した。

また、ピット内堆積土を観察するために、P1-6を通るライン、P7-12を通るライン、P15-19を通るライン、P16-10を通るライン、P6-14を通るラインを設定し、各ピットをラインに沿って半截した。P1・20に関しては個別にラインを設定して半截した。なお、3号住居跡と重複するピットの上部は、調査の不便により、3号住居跡の調査も平行して行ったことから、削平してしまった。

本遺構は、P1~14によって構成される部分とP15~21によって構成される部分とに分かれ、P1・6・7・12を結んだ平面形は長方形である。P3・10の中間からはP13が検出され、P6・7の南方延長線上からはP14が検出された。また、P15・19・21を結んだ平面形は「L」字状で、P15~18の各ピットはP2~5の北方約80~90cmから検出され、P20はP19・21の中間点から検出された。なお、P20はP6・7の中間点とP13を結んだ線の東方延長線上にあたる。

P1~14によって構成される部分の内、長方形部分の規模は、P1-6で11.48m、P6-7で4.62m、P7-12で11.31m、P12-1で4.5mを測り、南北の柱列の柱間距離はP1-6で西から2.08+2.3+2.33+2.42+2.35m、P7-12で西から2.15+2.24+2.36+2.21+2.35mを測る。また、P3-10の柱間距離は北から2.21+2.37mを測り、P7-14の距離は2.78mを測る。

P1~14の各ピットの上端における平面形はP4が楕円形で、P11が隅丸方形である以外は円形で、全体の形状はほぼ円筒形である。規模は上端で長径19~36cmを測り、深さは7~69cmを測る。長方形となる部分の四隅のP1・6・7・12が、いずれも長径25cm以上、深さ49cm以上であるのに対して、西側のP2~4・11は3号住居跡の調査時における削平分を付け足したとしても、浅いものである。

P1~14の堆積土は土色・堆積状況とも一様ではなく、柱痕が確認できるものもある。堆積状況から判断すると、P1~3・5・11・13は自然流入土と推測され、P7~9・12・14は人為堆積と推測される。この中で、P5・8・9の堆積土とP7のℓ1~4、P12のℓ1~4、P14のℓ2・3は締まりのない土であり、P7・12の最下層のℓ5は非常に硬く締まった土である。また、P6のℓ1~3とP10のℓ1は柱痕で、P6のℓ4とP10のℓ2・3は柱を穴に据えた後の埋土と推測される。なお、P10の最下層のℓ3はP7・12のℓ5と同様な非常に硬く締まった土である。

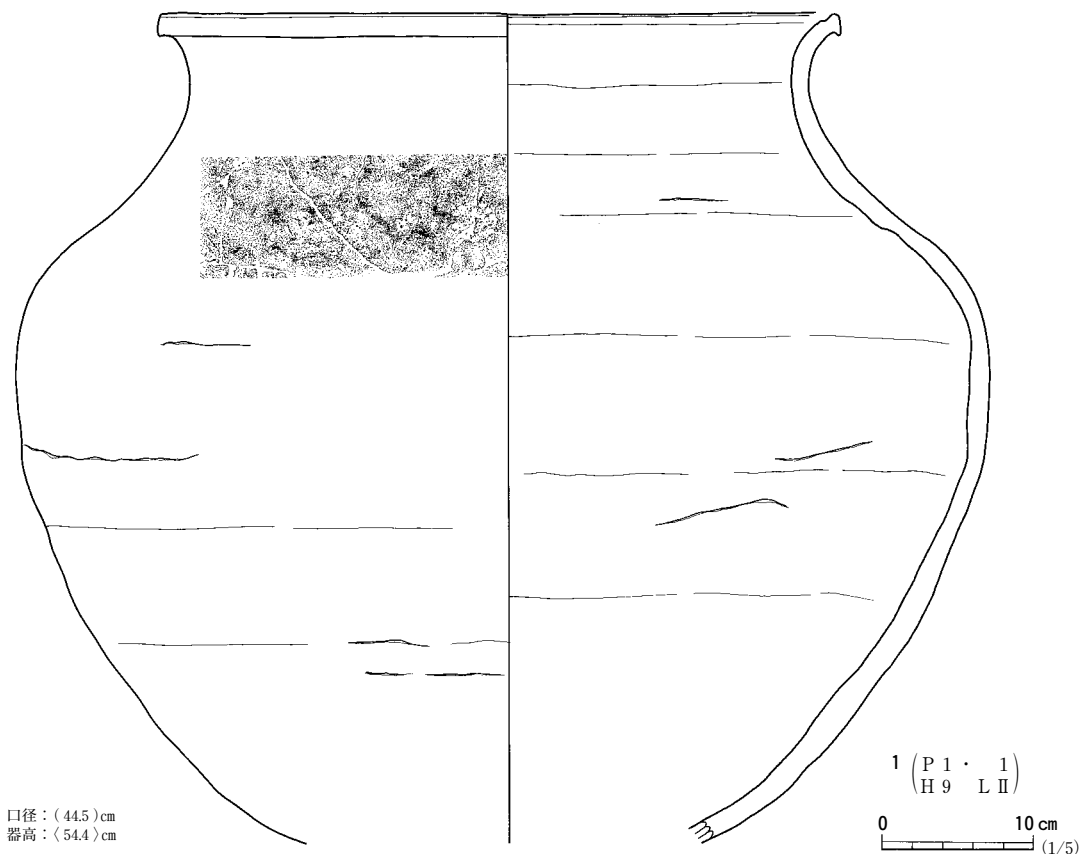


図23 1号建物跡出土遺物

P15～21によって構成される「L」字状の部分は、P1-6とほぼ平行してP1-6の北方約80～90cmに並ぶP15-19、P6-7とほぼ平行してP6-7の東方約80cmに並ぶP19-21とに分かれ、それぞれの規模は、P15-19で10.11m、P19-21で6mを測り、それぞれの柱間距離はP15-19で西から2.44+2.23+2.5+2.94m、P19-21で北から2.94+3.06mを測る。

P15～21の各ピットの上端における平面形は、P17のみが不整形である以外は円形で、全体の形状はほぼ円筒形である。上端における規模は、P17のみが径35cmを測る他は径24～28cmを測り、P21以外の深さは25～41cmを測る。P21は攪乱により上部を大きく削平されていることから、全容は不明であるが、LIV上面から底面までの深さは54cmを測る。

P15～21の堆積土もP1～14と同様に土色・堆積状況とも一様ではない。P15・16・19の ℓ 1は柱痕で、その周りの土は柱を穴に据えた後の埋土と推測される。また、P18は人為堆積と推測され、P20は自然流入土と推測される。なお、P15・19の堆積土は締まりのない土で、P18・20の最下層は非常に硬く締まった土である。

遺物 (図23, 写真57)

P1検出面及びP1・16内堆積土より陶器甕片が多量に出土した。この陶器甕片は同一個体であり、2号建物跡P1や周囲の表土・LIIから出土した陶器甕片とも接合関係にあった。出土した破片を全て集めても一個体にはならず、しかも、底部破片が1点も出土しなかった。なお、各ピット

から出土したこの陶器甕片は、人為的に埋められたものではなく、P1付近に破片状態で廃棄されていたものが自然流入したものと推測される。図23にその陶器甕を示した。

1は口径44.5cm、最大胴部径54.4cm、残存高46.5cmを測る大甕で、底部を欠失している。頸部は外反し、口縁部は垂直方向に2cm幅で面取りされ、下端は鋭く下方へ引き出されており、口唇部の内面には低い段が巡っている。肩部は撫で肩で、胴部は緩く内湾して立ち上がっている。肩部には長径約3.5cm、短径2.5cmの楕円形の押印が数個確認でき、この押印は不均等に巡っているものと推測されるが、押印が浅いのに対して、自然釉が厚いことから、押印の明確な模様や配列状況は不明である。色調は、自然釉が掛かっている口唇部付近、肩部外面、胴部内面下半部では暗灰黄色であり、自然釉が掛かっていない頸部外面、胴部外面、肩部内面では赤灰色ないしは褐灰色であり、非常に焼き締まっている感じを受ける。胎土には細かい砂粒を多く含んでいる。また、胴部下端の割れ口には一部を除いて漆が付着しており、上部と分裂した底部付近を補修（接合）して使用していたものと推測される。なお、この陶器大甕の産地を推定するために、蛍光X線分析に破片を供したところ、「西日本からの搬入品」であることが判明したが、産地は特定されなかった（本書「付編2」FBCJ0021）。常滑産とした場合、この陶器大甕は中野晴久による常滑編年（中野1995）の6a型式（13世紀第3四半期）に当るものと推測される。

ま と め

本遺構は21基の柱穴から構成されている掘立柱建物跡で、P1～13が身舎に伴う柱穴で、P15～21は庇に伴う柱穴と推測され、1間×5間の身舎の北側と東側に1間幅の庇が付く東西棟と推測される。身舎はP3～10の中間に間仕切柱（床束）と推測されるP13を持ち、桁行2間の西部と桁行3間の東部の二間取りと推測され、P3～10の各柱間距離が桁行の各柱間距離と近似していることから、身舎は2間×5間と解釈することもできる。

本遺構の時期は、P1・16より出土した常滑産の大甕の年代観から、おおよそ、鎌倉時代後半の13世紀後半から14世紀前半頃と推定される。（能登谷）

2号建物跡 SB02

遺 構（図24、写真30・31）

本遺構は調査区北東部の平坦面に存在し、G9・10グリッド、H9・10グリッドに位置している。本遺跡が所在する段丘面の北側落ち際からは約36m南方の地点に当たる。

表土除去後の遺構検出中に、G9・10グリッドのLIV上面より円形の落ち込みが7基検出された。更に、その南方からは後世の大型の攪乱穴とそれに切られる長方形の落ち込みが検出され、大型の攪乱穴の東に隣接して小型の不整形の落ち込みが検出された。この小型の落ち込みの掘り下げを行ったところ、この落ち込みは木の根の攪乱穴であることが判明し、南端底面からは先の円形の落ち込みと類似した円形の落ち込みが1基検出された。また、大型の攪乱穴に切られる南方の落ち込みの堆積土上面からも円形の落ち込みが2基検出され、合計10基の円形の落ち込みが検出された。

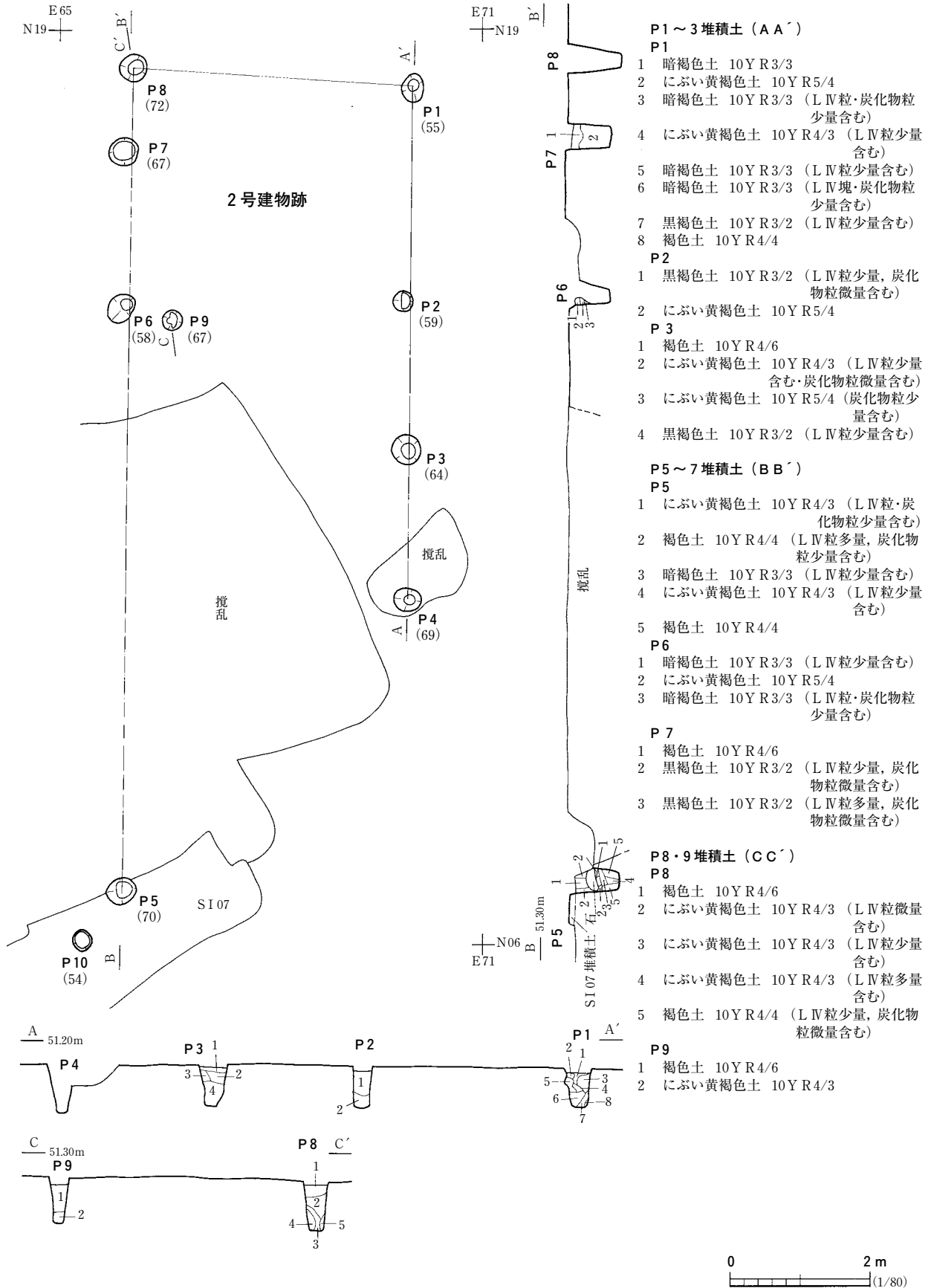


図24 2号建物跡

次に、それぞれの落ち込みに重複がないのか丁寧に平面観察を行ったが、重複が確認できなかったことから、落ち込みを約5cm程掘り下げて柱痕の検出を試みることにした。いずれの落ち込みにおいても平面観察では柱痕を確認することはできなかった。この10基の落ち込みの内7基は、ほぼ南北方向に2列に並んでおり、北の4基に関しては東西方向にも対応して並んでいる状況であることから、これらの落ち込みは掘立柱建物跡を構成する柱穴と推測し、北東隅のものから順に時計回りにピット番号を付した。なお、P7に対応する柱穴がP1-4のライン上に検出されず、P9・10もそれぞれP5・6に隣接して検出されていることから、本遺構に直接伴うのかどうかは不明であるが、伴わないという証拠もないことから、本遺構の中に含めておくことにした。

また、ピット内堆積土を観察するために、P1-4を通るライン、P5-8を通るラインを設定し、これらのピットからずれた位置にあるP9に関してはP8-9を通るラインを設定して、ラインに沿って半截した。なお、本遺構の東方2mからは1号建物跡の落ち込みも隣接して検出されたが、東西方向にほぼ一直線状に並ぶ1号建物跡の落ち込みのライン上に本遺構の柱穴が乗らないことから、これら10基の柱穴に関しては、1号建物跡とは別の掘立柱建物跡の柱穴と推測した。

P1~8をP4・1・8・5の順に結んだ形は、P1・4を結んだラインとP5・8を結んだラインが南北に平行し、P1・8を結んだラインがそれらと直交していることから、南方が開口した「コ」の字状となる。各柱列の規模は、P1-4で7.27m、P5-8で11.72m、P1-8で3.94mを測り、柱間距離はP1-4で北から3.03+2.1+2.14m、P5-8で北から3.4(1.2+2.2)+8.32mを測る。

P1~10の各ピットの上端における平面形は円形ないしは楕円形で、全体の形状は円筒形に近いものである。規模は上端で長径28~42cmを測り、深さは54~72cmを測る。

P1~10の堆積土は土色・堆積状況とも一様ではなく、堆積状況から判断すると、P2のみが自然流入土と推測され、他は人為堆積と推測される。P2以外のピットでは褐色土ないしはにぶい黄褐色土が主体的に堆積しており、P7~9は基盤層と推測される褐色土が最終的にピット内に投入されていた。このP7~9のℓ1以外の土と他のピットの堆積土は締まりのない土であり、P6では半截した際に土層断面の大半が崩落してしまった。また、P5堆積土の中位からは20×17×10cmの扁平礫が出土した。

遺物

P1ℓ6より陶器甕片1点、P7ℓ1より縄文土器片1点が出土したが、陶器甕片は1号建物跡P1出土の陶器甕片と接合した。

まとめ

本遺構は10基の柱穴から構成されている掘立柱建物跡で、その内、P1~6・8が本遺構の主体的な柱穴と推測される。南東部からは柱穴が検出されず、西側柱列の南部は後世に攪乱を受けていることから全容は不明であるが、1間×3間以上の長方形の南北棟であったものと推測され、東側柱列をみるかぎりにおいては、桁行きの南北で柱間距離が異なることが特徴である。なお、西側の

P5-6はP2-3ないしはP3-4の4間分に相当することから、P1-4の南方延長線上で西側のP5に対応した位置に浅い柱穴ないしは礎板・礎石などが存在していた可能性も考えられるところである。

本遺構は、東に隣接する1号建物跡と柱列の軸線方位がほぼ一致し、P1より出土した陶器甕片が1号建物跡P1出土の陶器甕片と接合したことから、本遺構の時期は1号建物跡と同時期と推測され、1号建物跡のP1より出土した常滑産の大甕の年代観から、おおよそ、鎌倉時代後半の13世紀後半から14世紀前半頃と推定される。(能登谷)

第4節 土 坑

今回の調査で検出された土坑は34基である。多くは町道北側の調査区の北半部から検出され、町道南側の調査区からは29・30・31号土坑の3基のみが検出された。土坑内から時期決定の根拠となるような出土遺物がほとんどないため、所属時期が明確でないものが多い。また、遺存状況も悪いものが多い。

1号土坑 SK01 (図25, 写真32)

調査区北側のF7グリッドに位置する。LⅢ上面でぼやけた暗褐色の円形の落ち込みとして検出した。重複する遺構はないが、南西に16号土坑、北に21号土坑が検出されている。遺構内堆積土は5層確認した。ℓ1・2・3は自然堆積と考えている。ℓ1はLⅢに似た土の流入土である。ℓ2は壁面崩落土及び流入土である。ℓ3・4・5はいずれも暗褐色土質であるが、ℓ4・5は締まりがないことより人為堆積の可能性がある。

平面形は長軸が南北に延びる楕円形である。長径1.2m、短径1.02m、深さ58cmを測る。底面はほぼ平坦で固く締まりがある。底面から壁面中程にかけてはややオーバーハング気味に立ち上がる。北壁の周壁中程から開口部にかけては約70°の角度で立ち上がる。

本土坑からはℓ1より縄文土器片1点が出土したが、小破片のため図示しなかった。

遺構の時期や性格は判然としないものの、形態から推測して縄文時代前期後半頃の貯蔵穴と考えている。(三浦)

2号土坑 SK02 (図25・32, 写真32)

本遺構は調査区北半のF7グリッドに位置し、検出面はLⅢ上面である。北方約3mに1号土坑、東方約2mに3号土坑が存在する。

平面形は上端では歪な円形であり、底面では南北主軸の歪な楕円形である。規模は上端では径約1.1m、底面では長径82cm、短径70cmを測り、深さは15cmを測る。周壁は西側以外ではLⅢで、西側の上位はLⅢ、下位はLⅣである。立ち上がりは東側では緩やかであり、西側ではやや急である。

底面はLⅣで平坦である。遺構内堆積土は2層に分かれ、レンズ状に堆積するℓ1と流入土と考えられるℓ2の堆積状況から自然堆積と考えられる。

本遺構のℓ2より縄文土器片24点が出土した。深鉢形土器の胴部破片3点を図示した。図32-9は平行沈線により菱形状のモチーフを描いている。同図10・11はアナダラ属の貝殻により貝殻腹縁文を施文している。

本遺構の性格については言及することが困難であるが、時期はℓ2より出土した遺物より、縄文時代前期後半と考えられる。(千葉)

3号土坑 SK03 (図25・32~34, 写真33・57)

F7グリッドのLⅢ上面で、不明瞭な暗褐色の円形の落ち込みとして検出した。重複する遺構はないが、北西に2号土坑が近接する。遺構内堆積土は4層に分層した。ℓ1・2とも暗褐色土と褐色土の混土であり、人為堆積と考えられる。ℓ2は人頭大の礫が混入し、土器片も多数出土した。ℓ3・4は壁面の土と似た褐色土であり、自然堆積と考えられる。

平面形は開口部及び底面とも円形である。開口部の直径1.56m、深さ66cmを測る。壁面は底面から約70°の角度で立ち上がっている。底面は若干の凸凹が見られるものの、ほぼ平坦である。底面には固く締まる状況が確認できた。

本土坑からは、縄文土器55点が出土した。ℓ2からの出土が多いが摩滅が激しい。ℓ1より1点、ℓ2より3点、ℓ3より1点を図示した。図32-1は波状口縁となる。口唇部に斜位に刻み目を有す。口縁部文様帯は無文地に幅1.5cmの2条の変形爪形文が施文されている。また、条間には刻み目のような刺突を施している。胎土は密で、裏面は良く磨かれている。同図12は半截竹管による平行沈線が横位や斜位に施文されている。図33-1・2・6は底部資料である。1は外面を削って整形している。復元底径は11.4cmである。2の復元底径は10.1cmである。6は底部から胴部下半にかけての資料である。ℓ2とℓ3の層境からの出土である。胴部の割れ口を上に向け、幅14cm、厚さ10cmの石が蓋のように割れ口の上に載せられていた。土器内堆積土には炭化物を多量に含んだ黒褐色土が入っていた。胴部文様は、LRの単節縄文が斜位に施文されている。胎土には繊維混和痕が僅かに見られる。図34-4はℓ2より出土した石皿である。長さ29cm、幅20cm、厚さ12cmの大型の製品である。自然礫の平坦な片面に滑らかな摩耗面が認められる。

本遺構は貯蔵用などの穴として使われていたものが、廃棄後にℓ3・4が自然堆積した時点でゴミ捨て穴として再利用されたものと考えられる。時期は出土遺物より、縄文時代前期後半頃と推定される。(三浦)

4号土坑 SK04 (図25・32・34, 写真33・74)

本遺構は調査区中央部からやや北寄りの平坦面に存在し、G10グリッドに位置している。南方約2mからは5号土坑が検出され、北西約1mからは7号住居跡が検出された。

表土除去後の遺構検出中に、LⅣ上面において南北主軸の落ち込みを確認したことから、南側半分の掘り下げを開始した。約15cm程掘り下げたところ、周壁と連続する平坦なLⅣが検出されたことから、この平坦なLⅣを底面と判断した。更に、土層断面の記録を取った後、北側半分の堆積土の除去と底面の精査を実施した。

平面形は南北主軸の不整隅丸長方形で、上端における規模は、長軸1.9mを測り、短軸は西壁南端部で最大1.7mを測る。遺構内堆積土は5層に分層され、 $\ell 1$ が木の根の攪乱である以外はいずれもレンズ状に堆積していることから、遺構外からの自然流入土と推測される。

周壁及び底面はLⅣで、周壁の立ち上がりは全体的に緩やかである。壁高は5～16cmを測り、北東隅で最小となり、南東隅で最大となる。底面は東へ緩く下降しているが、若干起伏があり、北半では不整である。底面の規模は長軸1.66m、短軸1.33mを測る。

遺物は、底面より縄文土器片11点、遺構内堆積土より縄文土器片58点、石器・剥片4点が出土した。縄文土器片は全て縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての土器である。なお、図25に出土状態を示した底面中央部の土器は尖底部で、南西部の土器は $\ell 5$ より出土した胴部破片であったが、遺物取り上げ後、いずれも碎片化し、原形に復することができなかったことから、図示することができなかった。図32・34にその他の特徴的なものを示した。

図32-2は深鉢形土器の口縁部破片で、口唇部は断面三角形であり、外面には撚糸文が斜行して施文され、口唇部の内外面には横位の撚糸文が施文されている。胎土には植物繊維を多量含んでいる。図32-13～15は深鉢形土器の胴部破片で、胎土には植物繊維を含んでいる。13の外面には0段多条の原体を回転施文した斜縄文が施され、14の外面には条痕文が施されている。15の外面には条の細い撚糸文が斜行して施文され、一部では条が交差している。図34-2は遺構南西部の $\ell 5$ より出土した凹石である。偏平な楕円礫の片面の中央よりやや上部に浅いくぼみがある。

本遺構は、出土遺物より縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての遺構と推測されるが、性格については不明である。

(能登谷)

5号土坑 SK05 (図25・32・34, 写真34)

本遺構は調査区中央部からやや北寄りの平坦面に存在し、G10グリッドに位置している。北方約2mからは4号土坑が検出され、北西約2mからは7号土坑が検出された。

表土除去後の遺構検出中に、LⅣ上面において大きな偏平礫を取り囲む東西主軸の落ち込みを確認したことから、この礫の上を通るように土層観察用ベルトを設定して南北2区画に分けて掘り下げを開始した。両区画を約10cm程掘り下げたところ、周壁と連続する平坦なLⅣが検出され、北側の区画からは焼土面が確認されたことから、この平坦なLⅣを底面と判断した。さらに、土層観察用ベルトの記録を取った後、土層観察用ベルトを除去して底面の精査を実施した。

平面形は東西主軸の長楕円形で、上端の規模は長径2.9m、短径1.57mを測り、底面の規模は長径2.7m、短径1.25mを測る。遺構内堆積土は5層に分層され、 $\ell 3$ 以外の層は自然流入の土ととらえ

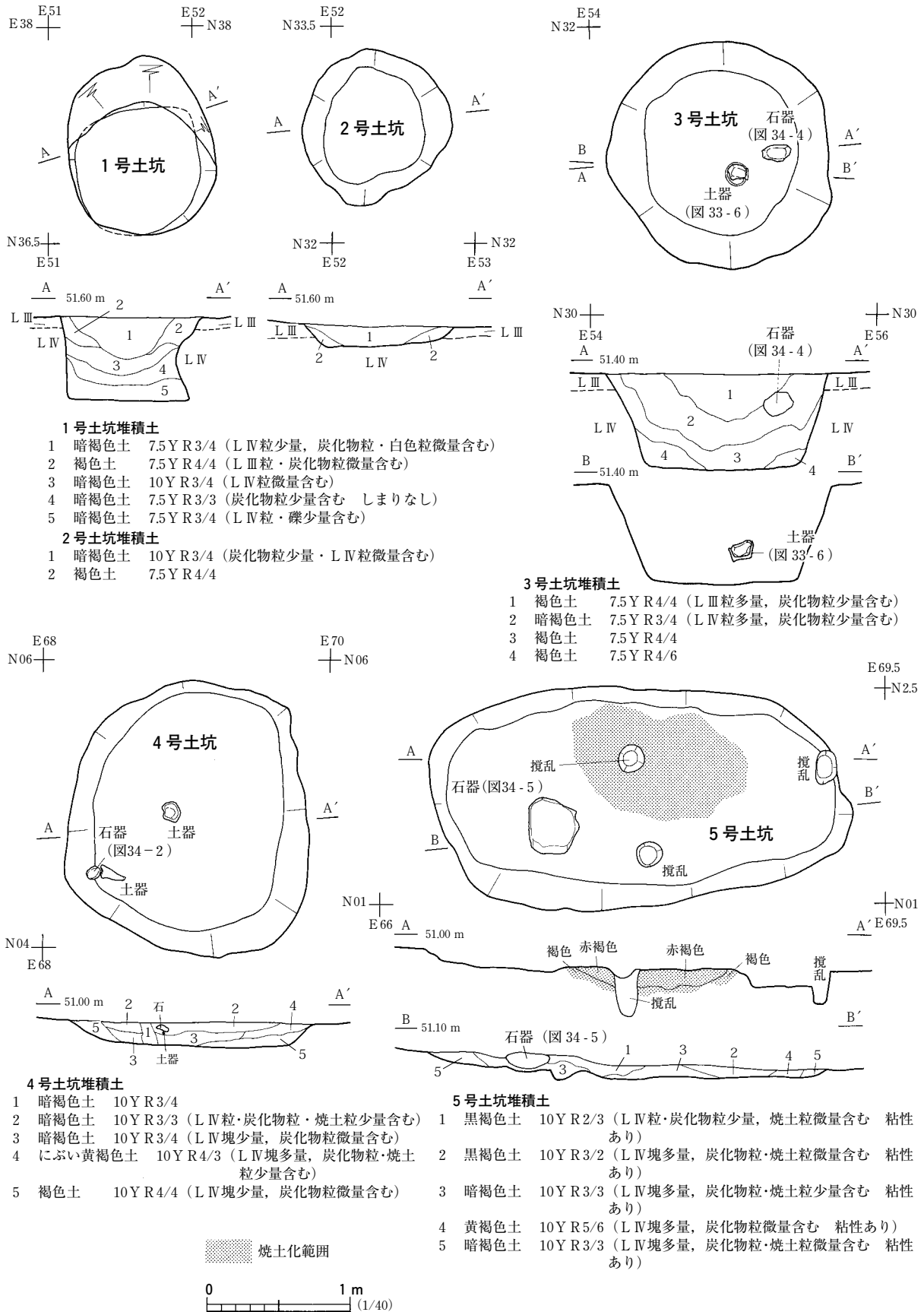


図25 1～5号土坑

ることができるが、 $\ell 3$ は堆積状況から人為的な堆積と判断した。この $\ell 3$ の上面より図34-5の台石が平坦面を上に向けて出土した。

周壁及び底面はLⅣで、周壁の立ち上がりは緩やかである。壁高は3～15cmを測り、北東部で最小となり、南西部で最大となる。底面は不整で、全体的に東へ緩く下降しており、北半中央部からは長径1.25m、短径80cmの不整楕円形の焼土面が検出された。この焼土面の部分は周囲より若干高く、台状となっており、焼土面は赤褐色であった。この焼土面を長軸方向に断ち割ってみたところ、底面から最大16cmまで熱変化が確認されたが、底面から12cmまでは熱変化の度合いが強く、その外側では熱変化の度合いが弱いことが観察できた。なお、東端部と南半部中央、焼土面の中央部西寄りの3箇所は木の根の攪乱を受けている。

遺物は遺構内堆積土より縄文土器片158点、石器・剥片3点が出土した。縄文土器片の内訳は、花積下層式土器を含む縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての土器が106点で、縄文時代前期後半の土器が52点（大木4式土器24点、浮島Ⅱ式土器13点、諸磯b式土器15点）である。

図32-16は縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての深鉢形土器の胴部破片で、胎土には植物繊維を多量含んでいる。外面には条が斜行する撚糸文が施文されている。図34-5は大型の偏平礫を転用した台石で、片面のみが平坦であり、この平坦面は広く摩耗している。

本遺構は底面に広い範囲の焼土面を持ち、人為的に投入された $\ell 3$ の上面より平坦面を上に向けた台石が出土していることが特徴的である。この台石の上面は摩耗してツルツルしており、本遺構内に設置して使用していた可能性も考えられ、焼土面は底面で直に火を焚いた地床炉と推測した場合、本遺構の性格として、縄文時代の住居跡の可能性が出てくるが、掘り込みに占める焼土面の割合が大きく、遺構内はもちろんのこと、遺構外からも柱穴と推測されるようなピットを検出しなかったことから、その可能性を否定せざるをえない。しかし、住居跡に次ぐ生活感の漂う遺構であることに違いはないようである。なお、本遺構の時期に関しては、出土遺物からも明確にできないので、不明としておくことにする。

(能登谷)

6号土坑 SK06 (図26, 写真35)

本遺構は調査区北半のD7グリッドに位置し、検出面はLⅢ上面である。最も近接している遺構は南東4mに位置する20号土坑である。

平面形は、上端では北西-南東主軸の楕円形で、底面では北東部分を掘り過ぎてしまったが上端同様の楕円形と推測される。規模は、上端で長径約1.52m、短径90cmを測り、底面では長径82cm、短径46cmを測り、深さは23cmを測る。周壁はLⅢ・Ⅳで、立ち上がりは西側で急で、東側では西側より比較的緩やかに立ち上がっている。底面はLⅣで、ほぼ平坦である。遺構内堆積土は2層に分かれ、レンズ状に堆積する $\ell 1$ と流入状態を示す $\ell 2$ の堆積状況から自然堆積と考えられる。

本遺構から遺物は出土しなかった。

本遺構の時期や性格は、出土遺物がないことなどから、不明である。

(千葉)

7号土坑 SK07 (図26, 写真35)

本遺構は調査区中央部からやや北寄りの平坦面に存在し、G10グリッドに位置している。北端は7号住居跡と重複し、南東約2mからは5号土坑が検出された。

表土除去後の遺構検出中に、LⅣ上面において南北主軸の落ち込みとそれに切られた北東-南西主軸の長方形の落ち込み(7号住居跡)を確認した。両遺構の新旧関係は平面観察で確認できたことから、本遺構の調査を先行させ、中軸線を設定して東側半分の掘り下げを開始した。北半部を約15cm程掘り下げたところ、南下がりのLⅣが検出されたが、南半部ではまだ掘り下げが可能であることから、更に掘り下げを継続した。この南半部に関して、検出面から約30cm程掘り下げたところ、周壁と連続する平坦なLⅣが検出されたことから、この平坦なLⅣを底面と判断した。更に、土層断面の記録を取った後、西側半分の堆積土の除去と底面の精査を実施した。

上端における平面形は南北主軸の不整形であるが、南半部の方形の掘り込みの北西部から北部にかけて傾斜の緩い部分が取り付いているような形状である。規模は上端で長軸1.57m、短軸1.2m、深さ30cmを測り、南半部の方形の掘り込みは上端で長軸1.1m、短軸1m、底面で長軸80cm、短軸70cmを測る。遺構内堆積土は4層に分層され、 $\ell 1$ は木の根の攪乱であり、 $\ell 2 \sim 4$ は不規則な堆積状況であることから、人為的な堆積と判断した。

周壁及び底面はLⅣである。南半部の方形の掘り込みの周壁は不整であるものの、直立気味ないしは強く外傾して立ち上がっており、北西部から北部にかけての周壁の上部は不整で、緩く立ち上がっている。方形の掘り込みの北壁の壁高は10cmを測る。底面は北端に小さな起伏がある他は平坦である。なお、遺構北半部は土層断面記録後の完掘作業の際に大きく掘り過ぎてしまった。

遺物は遺構内堆積土より縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての土器片が12点出土したが、図示した資料はない。

本遺構は方形の掘り込みを中心とした遺構で、人為的に投入された土で埋没している。遺構の時期や性格については、断定できる資料がないことから、不明としておくことにする。(能登谷)

8号土坑 SK08 (図26・32, 写真36)

本遺構はE7グリッドのLⅢ上面から暗褐色の楕円形の落ち込みとして検出した。すぐ北側には溜れ沢に落ちる急斜面が迫っている。遺構の重複は見られない。遺構内堆積土は3層に分けたが、色調の違いのみの分層であり、埋土の時期差は無いと考えている。 $\ell 1$ は黒褐色土、 $\ell 2$ は暗褐色土、 $\ell 3$ は褐色土で3層とも混土である。いずれの層も斑に褐色土・暗褐色土が混入し、締まりがない。堆積土中から5~10cm大の礫が検出されている。土色の違いはあるものの、土質が同一で締まりがないことから、3層とも人為堆積であると判断した。

開口部は南北に大きく開く楕円形で、長径1.8m、短径1mを測る。深さは1.1mである。底面は若干の凸凹はあるもの、ほぼ平坦である。底面の長軸は92cm、短軸は66cmを測る。底面の締まりは

それほど感じなかった。壁面は底面から垂直に立ち上がり、開口部よりで緩やかに立ち上がる。

ℓ1より縄文土器片が8点出土している。その内、2点を図示した。図32-17は胴部破片で、羽状縄文が施された資料である。胎土に繊維混和痕が認められる。同図22は胴部破片で、貝殻腹縁文が施文されている。施文原体は腹縁に刻みのないハマグリなどの貝殻を用いていると思われる。

本遺構は開口部は広いが、底面は狭く、深いという形態的な特徴をもっている。本遺跡より検出した土坑の中で最も深く、人為埋土の状況より墓坑の可能性が考えられる。時期は出土遺物より縄文時代前期後半頃と考えている。

(三 浦)

9号土坑 SK09 (図26・31, 写真36・58)

本遺構はG6グリッドのLⅢ上面から暗褐色の楕円形の落ち込みとして検出した。木の根による攪乱が激しい地区であり、本土坑も検出面から底面にかけて木の根による攪乱がある。攪乱により北壁の一部と底面は破壊されている。他の遺構との重複関係はない。遺構内堆積土は2層に分層した。ℓ1は炭化物を含む暗褐色土、ℓ2は褐色土である。層境に乱れがあることから、人為堆積と判断した。

平面形は南北に長い楕円形で、長軸1.4m、短軸1.12mを測る。検出面から底面までの深さは28cmである。底面は不整形で丸みを帯びている。底面の硬化状況は確認できなかった。東壁は急激に立ち上がり、南北西壁は緩やかに立ち上がる。

本遺構のℓ2から縄文土器片が19点出土した。図31-1は図上復元を試みた縄文土器である。器厚は薄く、胎土に繊維混和痕は認められなかった。内外面ともに条痕文が斜位に施文される。胴部には孔が確認できる。

本遺構は縄文時代早期後半の土器片を捨てたゴミ捨て穴の可能性が考えられる。時期は出土遺物より縄文時代早期後半であろう。

(三 浦)

10号土坑 SK10 (図26, 写真37)

本遺構は調査区北半のD9グリッドに位置し、検出面はLⅢ上面である。南方約1mに11号土坑が隣接して存在する。

平面形は円形で、上端で径約90cm、底面では径82cmを測り、深さは7cmを測る。周壁及び底面はLⅣで、周壁の立ち上がりは急である。底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は2層に分けられ、ℓ1は炭化物粒を含む暗褐色土で、自然堆積か人為堆積か判断しかねる。ℓ2は褐色土であり、自然堆積と考えている。

ℓ1より縄文土器小片が2点出土しているが、図示に堪えないので示さなかった。

本遺構は検出面からの深さが浅いが、構築当初は深さがある程度あったものと推測される。性格は不明であるが、南に隣接する11号土坑とは規模や形態が酷似することより、11号土坑と同時期に並存していたと推測される。

(千 葉)

11号土坑 SK11 (図26・32, 写真37)

本遺構は調査区北半のD9グリッドに位置し、検出面はLIV上面である。北方約1mに10号土坑が隣接して存在する。

平面形は、上端では北東-南西主軸の楕円形で、底面では主軸が南北よりやや東に傾いた楕円形である。規模は、上端で長径約1.02m、短径88cmを測り、底面では長径84cm、短径55cmを測り、深さは18cmを測る。周壁及び底面はLIVで、周壁の立ち上がりは急であるが、西壁のみ緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は2層に分けられ、 $\ell 2$ 上面が不整であることから人為堆積と考えている。 $\ell 1$ は極暗褐色土粒を多量含む。

遺物は、 $\ell 2$ より縄文土器小片が3点出土している。その内、1点のみ図示した。図32-19は3重の撚糸圧痕を施し、隙間には短沈線を施文している。

本遺構は北に隣接する10号土坑と規模や形態が類似することから、10号土坑との関連性が伺えるが、遺構の時期や性格については明確にできない。(千葉)

12号土坑 SK12 (図26, 写真38)

本遺構は調査区北東部のやや南寄りの平坦面に存在し、H9グリッドに位置している。北東約4mから3号住居跡が検出され、東方約3.5mからは26・27号土坑が検出された。

表土除去後の遺構検出中に、LIV上面において2個の大型礫を取り囲む落ち込みを確認したことから、2個の礫の上を通るように中軸線を設定して南西側半分の掘り下げを開始した。約10cm程掘り下げたところ、周壁と連続する平坦なLIVが検出され、2個の礫もこのLIVの上に乗っていることが確認されたことから、この平坦なLIVを底面と判断した。次に、土層断面の記録と2個の礫の出土状況の記録を取り、更に、この礫を除去して底面の精査を実施した。

上端における平面形は北東-南西主軸の不整長方形で、規模は上端で長軸85cm、短軸74cm、深さ10cmを測り、底面で長軸70cm、短軸64cmを測る。遺構内堆積土は2層に分層され、いずれも自然堆積と推測される。なお、 $\ell 1$ は締まりがない。

周壁及び底面はLIVで、周壁の立ち上がりは急であり、底面には緩い起伏が認められる。底面上の礫の内、北側の礫は遺構の主軸方向に長軸を合わせて出土し、南側の礫はほぼ東西方向に長軸を合わせて出土した。北側の礫は52×19×15cmの緑色安山岩で、水で洗うと表面の色が落ちた。また、南側の礫は29×25×13cmの花崗岩の大型碎片である。

本遺構は底面から大型礫が2個並んで検出されたことが特徴であるが、他に遺物は出土せず、遺構の時期や性格については不明としておくことにする。(能登谷)

13・34号土坑 SK13・34 (図26・32・34, 写真39・73)

本遺構は調査区北東部の平坦面に存在し、H7グリッドに位置している。北東約4.5mから1号

住居跡が検出された。

表土除去後の遺構検出中に、LⅣ上面において不整形の落ち込みを確認した。平面観察において、北半部と南半部では埋まっている土の色が違うことから、2基の遺構が重複していることが推測されたが、新旧関係が不明であることから、2基の遺構を通るように中軸線を設定して南東側半分の掘り下げを開始した。約20cm程掘り下げたところ、南半部より周壁と連続する平坦なLⅣが検出されたが、北半部ではまだ掘り下げが可能であることから、更に掘り下げを継続した。北半部では検出面から約30cm程掘り下げた段階で、周壁と連続する平坦なLⅣが検出された。それぞれの平坦面は底面と推測され、当初の予想通り、2基の遺構が重複しているものと推測した。ここで、土層断面の精査を行ったところ、北半部には黒褐色土のみが堆積し、北半部の底面から内湾して立ち上がるラインも確認され、2基の遺構が重複していることが確認できたことから、北半部の底面に対応する新しい落ち込みを13号土坑とし、南半部の底面に対応する古い落ち込みを34号土坑とした。なお、土層断面の記録後、13号土坑の北西部を確認しようと掘り込みを開始したが、調査の不手際から、34号土坑も一緒に完掘してしまったことから、13号土坑の平面形などは不明である。ここでは、13号土坑と34号土坑を完掘した状態を記述することにする。

上端における平面形は北東－南西主軸の不整形で、長軸方向の規模は北西壁で1.55m、南東壁で50cmを測り、短軸は1.45mを測る。また、13号土坑の深さは33cmを測り、34号土坑の深さは22cmを測る。遺構内堆積土は4層に分層され、 $\ell 1 \cdot 2$ は13号土坑の堆積土で、 $\ell 3 \cdot 4$ は34号土坑の堆積土である。 $\ell 1 \cdot 3$ には長さ10～28cmの礫が合計14個混入しており、 $\ell 2$ の堆積状況は自然流入とは解釈できないことから、 $\ell 1 \sim 3$ は人為的に投入された土と推測され、 $\ell 4$ は壁際の三角堆積により自然流入した土と推測される。なお、土層断面から13号土坑の上端の規模は90cmを測り、南壁は内湾して立ち上がっていたことが伺える。

周壁及び底面はLⅣである。周壁の立ち上がりは全体的に不整であり、南側に一部緩い部分がある以外は急である。13号土坑の底面は平坦であるのに対して、34号土坑の底面には起伏が認められる。13号土坑の底面の規模は南北長79cm、東西長72cmを測り、34号土坑の底面の規模は北東－南西長1.2m、北西－南東長85cmを測る。

遺物は、13号土坑の堆積土より縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての土器片11点と石器・剥片4点が出土し、34号土坑の堆積土より磨石の欠損品1点が出土した。図32-3・4は胎土に植物繊維を含む深鉢形土器の口縁部の破片である。3は頸部に隆帯が巡り、口縁部は緩く外反している。口縁部外面には非結束の羽状縄文が施文され、隆帯上には刻み状に撚糸圧痕が施されている。4の口縁部は3に比べて強く外反し、外面には斜行する撚糸文が施文され、口唇近くの内面には条痕文が施されている。図34-1は無茎平基石鏃で、両面とも縁辺のみに調整が施されている。

13号土坑は34号土坑の堆積土の一部を掘り込んだ遺構と推測され、 $\ell 1$ に混入している礫は本来は34号土坑の $\ell 3$ に混入していた礫ではないだろうか。いずれにしる、どちらの遺構も礫を多く混入した土で最終的に埋められているが、遺構の時期や性格については不明である。 (能登谷)

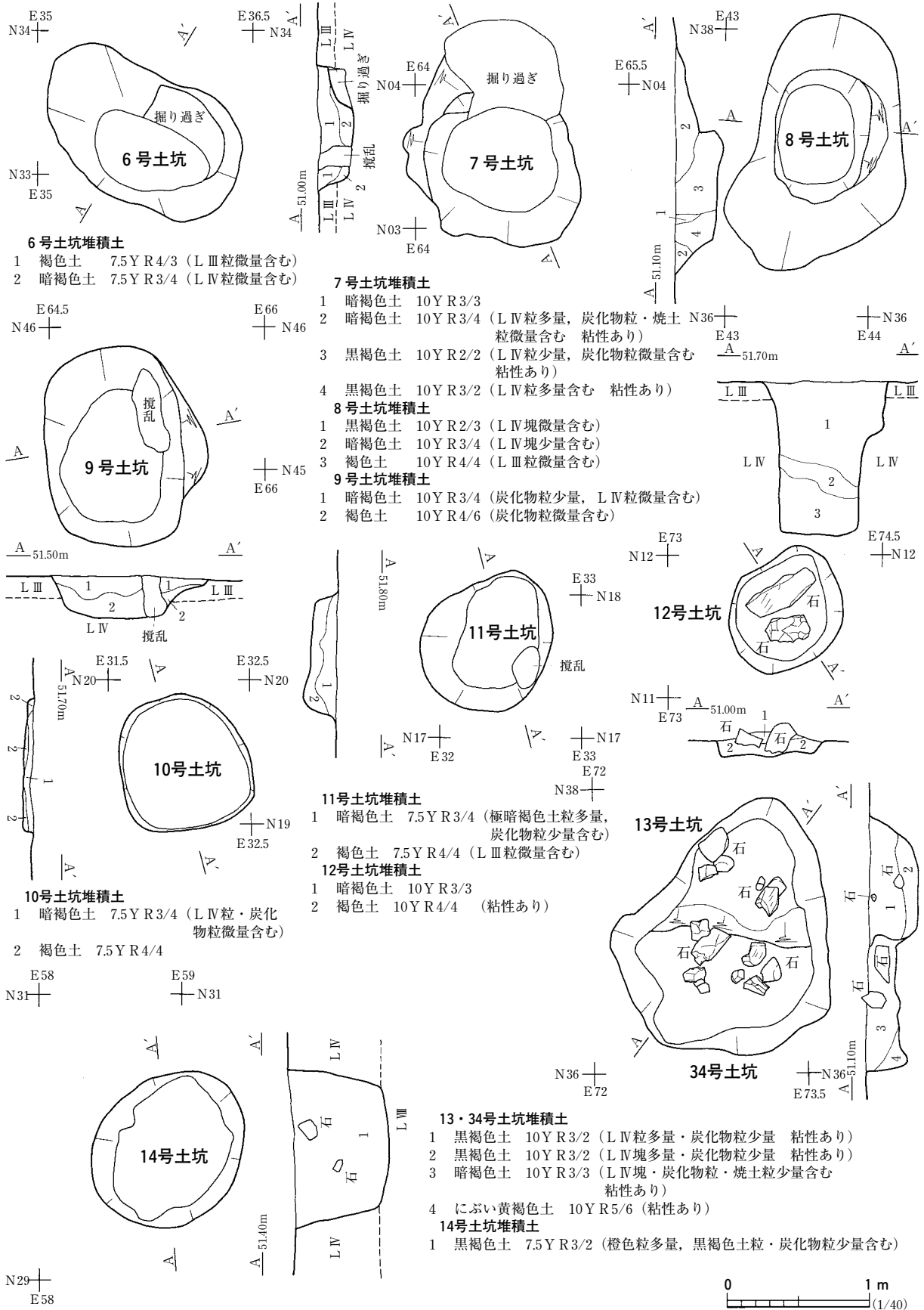


図26 6～14・34号土坑

14号土坑 SK14 (図26, 写真39)

本遺構はF7・8グリッドのLⅣ上面より黒褐色の円形の落ち込みとして検出した。重複する遺構は無いが、北に2号住居跡、北西に3号土坑が位置する。遺構内堆積土は分層できず、1層のみである。黒褐色土に褐色土が斑に入る混土であり、10cm前後の礫も混入する。埋土の状況より、検出面から底面まで時期差なく一度に埋めたものと考えられる。

平面形は長径1.3m、短径1mの楕円形である。検出面からの深さは66cmであり、礫層のLⅧ上面を底面としている。底面は礫が突出し凸凹が激しい。壁面は南北方向ではほぼ垂直に、東西方向では若干緩やかに立ち上がる。壁高は60cm前後と一定している。

遺物は縄文土器片が2点出土しているが、摩滅が著しく図示できない。

本遺構は円筒形で、17号土坑と形状・規模が似ている。また、堆積土も酷似しており人為堆積であることから、両遺構はほぼ同時期の同じ性格の遺構と考えられ、墓坑と考えられる。時期を特定できる要因が少なく、判断できないが、縄文時代前期後半と考えられる。(三浦)

15号土坑 SK15 (図27, 写真40)

本遺構はF・G7グリッドに位置する。当初、LⅢ上面より黒褐色の楕円形の落ち込みとして検出した。木の根による攪乱が著しく、平面形を楕円形と考えていたため、南東側で一部掘り過ぎていた。実際の平面形は直径1.5mの円形をしていた。

遺構内堆積土は5層に分層した。黒褐色土及び暗褐色土に褐色土が含まれる混土であり、締まりがない。いずれも人為の堆積状況を示す。ℓ1では5cm大の礫が混入する。ℓ2・3は炭化物粒が混入する暗褐色土で、炭化物粒の混入量の違いによる分層である。ℓ4は多量に炭化物が混入する褐色土で、ℓ5は焼土層である。

平面形は円形で、直径1.5mは本遺跡の円形土坑の中で最大である。底面の平面形も円形であり、若干の締まりがある。壁面は底面より急峻に立ち上がる。底面直上にℓ4・5を確認したので、底面で火を用いたものと推測していた。しかし、ℓ4・5を除いた結果、底面の熱変化は見られなかったため、ℓ4・5は投げ込まれた焼土と判断した。

遺物はℓ3より縄文土器片が2点出土したが、小破片のため図示しなかった。

本遺構は直径1.5mの大型の円形土坑で、形態・規模・堆積土の状況が3号土坑と似ていることから、この2基の遺構はほぼ同時期の同じ性格の遺構と考えられる。また、堆積土は近似する14号土坑と似ていることから、14号土坑とほぼ同時期に機能していたと考えられる。なお、時期は3号土坑が縄文時代前期後半頃と考えられていることから、本遺構もその頃と推測される。(三浦)

16号土坑 SK16 (図27・30・31, 写真41・58)

本遺構はF7グリッドのLⅣ面より黒褐色の円形の落ち込みとして検出した。本土坑の位置する

F7グリッドは遺構の密集する地区であり、多くの遺構が検出されている。近接して東には2号住居跡、西には1号土坑が位置するが重複関係はない。

遺構内堆積土は3層に分層したが、いずれの層も炭化物粒を含む混土であり、人為堆積であると判断した。ℓ1は炭化物粒及び焼土粒を含む黒褐色土である。ℓ2も黒褐色土で、2個体の縄文土器が出土した層である。ℓ3は褐色土であり、ℓ1・2よりも締まりのない層である。

本遺構の平面形は直径90cmのきれいな円形である。断面形は円柱状である。検出面から底面までの深さは72cmを測る。床面は平坦であるが、硬化状況は確認できなかった。壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がる。

本遺構からは復元可能な縄文土器が2個体出土した。いずれもℓ2よりの出土で、口縁部を底面に底部を遺構開口部に向けられた状態で出土した。図30-2は図上復元をした口縁部に隆帯をもつ深鉢形の尖底土器である。口唇部は遺存していないが、口唇部に沿って断面箱形の隆帯が巡り、口唇部と隆帯の間は無文である。隆帯上と胴部には撚りの異なる2本の0段多条原体を横位回転施文した非結束の羽状縄文が施文されている。また、内面には貝殻条痕文が施文されている。図31-2は口縁部から胴部上半にかけての深鉢形土器である。口縁部は僅かに外反し、胴部がやや張る器形である。口唇部から口縁部にはR原体の撚糸文が横位に施文され、胴部にも同一原体の撚糸文が縦位や斜位・横位に施文される。胎土には多量の繊維混和痕、5mm前後の小石が確認できる。

本遺構は円筒形の土坑で、21・33号土坑と形状や堆積土が似ていることから、これら3基の土坑はほぼ同時期の同じ性格の遺構と考えられる。ℓ2より2個体の深鉢形土器が出土しているが、口縁部を底面に向けた状態で出土していることから、遺構を埋める際に捨てられた土器であると判断した。本遺構の本来の用途は不明であるが、貯蔵穴などに使用していた土坑を最終的に土器捨て穴として再利用したと考えられる。なお、遺構の時期は、出土遺物より縄文時代早期末葉から縄文時代前期初頭にかけての時期と考えられる。(三浦)

17号土坑 SK17 (図27・32, 写真42)

本遺構は調査区北半のD9グリッドに位置し、検出面はLⅣ上面である。南方約70cmに18号土坑が隣接して存在する。

平面形は、上端では歪な円形で、底面では北西-南東主軸の楕円形である。規模は、上端で径約1mを測り、底面では長径85cm、短径70cmを測り、深さは66cmを測る。周壁はLⅣで、底面から直立気味に外傾して立ち上がる。底面はLⅧの礫層であるが、ほぼ平坦である。遺構内堆積土は土色により2層に分けられたが、ℓ1・2ともにLⅣ粒を含むことから、いずれも同時に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、ℓ2より縄文土器小片が3点出土している。その内、2点を図示した。図32-5は口縁部資料である。円形竹管による刺突、撚糸圧痕と短沈線により文様が構成されている。同図20は羽状縄文が施文された胴部資料である。

本遺構は円筒形の土坑で、14号土坑と形状が似ており、堆積土も人為的堆積であるなど共通点が見られ、14号土坑とほぼ同時期の同じ性格の遺構と考えられる。(千葉)

18号土坑 SK18 (図27, 写真42)

本遺構は調査区北半のD10グリッドに位置し、検出面はLIV上面である。北方約70cmに17号土坑が隣接して存在する。

平面形は北西-南東主軸の楕円形である。規模は、上端で長径約95cm、短径65cmを測り、底面では長径80cm、短径56cmを測り、深さは14cmを測る。周壁及び底面はLIVで、周壁の立ち上がりは緩やかであり、底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は2層に分けられ、レンズ状に堆積する $\ell 1$ と自然流入状態を示す $\ell 2$ の堆積状況から、自然堆積と考えられる。

本遺構から遺物は出土しなかった。

本遺構の時期や性格について言及できる根拠がなく、いずれも不明である。(千葉)

19号土坑 SK19 (図27, 写真43)

本遺構は調査区北半部中央の平坦面に存在し、F9グリッドに位置している。北東2mからは32号土坑が検出されている。

表土除去後の遺構検出中に、LIV上面において不整形の落ち込みを確認した。東西方向の中軸線を設定して南半部の掘り下げを開始した。約25cm程掘り下げたところ、周壁と連続する平坦なLIVが検出されたことから、この平坦面を底面と判断した。更に、土層断面の記録後、北半部の堆積土の除去と底面の精査を実施した。

平面形は、上端では南北主軸の不整形であるのに対して、底面では南北主軸の楕円形である。規模は上端で南北長1.15m、深さは最大32cmを測る。遺構内堆積土は4層に分層され、自然流入の堆積状況と推測される。

周壁及び底面はLIVである。周壁の立ち上がりは、北部と南西部で緩い他は直線的に急に外傾している。底面は平坦である。底面の規模は長径63cm、短径50cmを測る。

遺物は遺構内堆積土より流紋岩細片が少量出土しただけである。

本遺構の時期や性格については、断定できる資料がないことから、不明である。(能登谷)

20号土坑 SK20 (図27・32, 写真43)

本遺構はD7グリッドのLIV上面より検出した。調査当初、東西に長軸をもつ暗褐色の楕円形の落ち込みとして認識していたが、半截後本来の遺構の立ち上がりを確認した。したがって検出した平面形の西半分は遺構ではないと判断した。再検出後の本遺構は、南北に若干長い楕円形として検出できた。本遺構に重複関係はなく、近接して北側に8号土坑、西側に6号土坑が位置する。

遺構内堆積土は2層に分層した。 $\ell 1$ は炭化物粒を含む暗褐色土、 $\ell 2$ は炭化物粒を含む褐色土

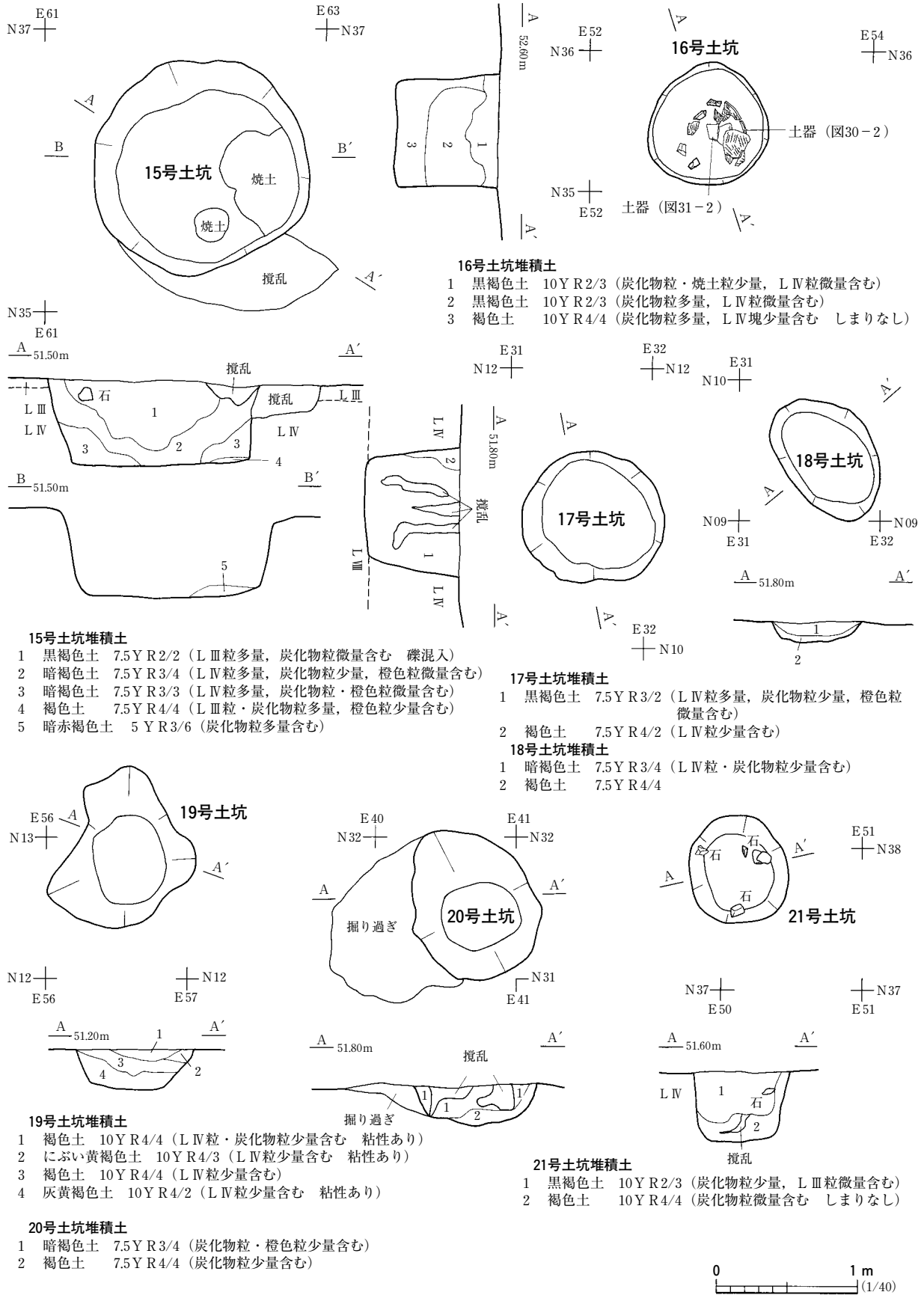


図27 15～21号土坑

である。攪乱により層位に乱れが生じてはいるものの、明らかな混土ではなく締まりもあることから、自然に堆積した土であると考えている。

平面形は南北に長軸を有する楕円形で、長径1.1m、短径は88cmを測る。検出面から底面までの深さは28cmである。底面は丸みを帯び、硬化状況は確認されなかった。底面から壁面にかけては緩やかに立ち上がる。壁面においても丸みを帯びる。

本遺構の出土遺物は縄文土器片13点である。図32-6はℓ1より出土した。口唇部に縦位に刻みを入れ、口縁部には細い半截竹管状の施文具による横位の押引文を施文している。器厚は薄い、硬質である。

本遺構の性格や時期を判断するのに必要な材料に乏しいが、図示した遺物は縄文時代前期後半の土器である。 (三 浦)

21号土坑 SK21 (図27・30, 写真44・58)

E・F7グリッドLIV上面より、暗褐色の円形の落ち込みとして検出した。付近は遺構が密集する区域で、より近接して東側には1・16号土坑が位置する。堆積土は2層に分けることができた。ℓ1は炭化物粒が混じる黒褐色土で、5cm前後の礫が含まれていた。ℓ2は締まりのない褐色土で、底面にかけて土器片が出土している。いずれの層も人為堆積である。

平面形はほぼ円形で、直径74cmを測る。検出面から底面までの深さは50cmである。底面は所々に若干の起伏があり、丸みを帯びている。底面の硬化状況は確認できなかった。底面から壁面にかけては緩やかに立ち上がり、周壁は僅かに外傾する。

器形が復元できた1点を図示した。図30-1は口縁部が垂直に立ち上がる小型の土器である。口縁部には断面蒲鉾形の隆帯が巡り、口縁部や隆帯上及び胴部には縄文が施文される。

本遺構は形態や規模や堆積状況などが16号土坑と類似することから、性格は貯蔵穴を再利用したゴミ捨て穴と考えられ、時期は縄文時代早期後半から縄文時代前期初頭と考えられる。 (三 浦)

22号土坑 SK22 (図28・32, 写真44)

本遺構は調査区中央部東寄りの平坦面に存在し、I12グリッドに位置している。周囲は後世の耕作による攪乱を大規模に受けており、本遺構は表土除去後のLIV上面における遺構検出作業では検出されなかったが、その攪乱穴に堆積している土を除去したところ、攪乱穴の底面から北端に偏平な礫が埋まった円形の落ち込みが検出された。南北方向の中軸線を設定して半截すると、周壁がオーバーハングしていることが判明し、更に、周壁と連続する平坦なLIVが検出された。この平坦面を底面と判断し、土層断面の記録後、残りの部分の堆積土の除去と底面の精査を実施した。

平面形は上端では南北主軸の楕円形で、底面では北西-南東主軸の不整楕円形である。規模は上端で長径70cm、短径66cm、底面で長径98cm、短径84cmを測り、深さは中央部で61cm、北部で77cm、南部で70cmを測る。遺構内堆積土は5層に分層され、ℓ2・4・5は不規則な堆積状況から人為的

な堆積土， $\ell 3$ は $\ell 4$ と周壁の間に入り込んだ自然流入土と推測される。なお， $\ell 1$ 上部より $45 \times 17 \times 11\text{cm}$ の偏平な花崗岩が平坦面を上に向けて出土した。

周壁及び底面はLⅣである。周壁は全体的に不整で，内湾ないしは内傾して立ち上がっている。底面は中央部が台状に若干高くなっており，この上面とその周囲は北側に浅いくぼみが若干認められる以外はほぼ平坦である。

遺物は遺構内堆積土より縄文土器片49点，石核1点が出土した。縄文土器片の内訳は，縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての土器が主体をなし，縄文時代前期後半の土器は少量である。その内，特徴的なものを図32に示した。

図32-21・22は縄文時代前期後半の浮島式土器の深鉢形土器の胴部破片で，21の外面には半截竹管の凹部による平行沈線が横方向に引かれ，22の外面には波状貝殻文が施されている。図32-7・23・24は縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての深鉢形土器の破片で，胎土には植物繊維を含んでいる。7は口縁部で，外面には撚糸文が施文され，面取りされた口唇部にも撚糸文が施文されている。23は胴部で，24は底部付近であり，外面には非結束の羽状縄文が施文されている。

本遺構は周壁がオーバーハングしているという特徴があるが，遺構の時期や性格については，断定できる資料がないことから，不明である。(能登谷)

23号土坑 SK23 (図28, 写真45)

本遺構はG・H7グリッドのLⅢ上面で暗褐色の不整形の落ち込みとして検出していたが，木の根による攪乱が激しいことから，明確に平面形を確認するためにLⅣ上面まで掘り下げて検出を行った。再検出後，楕円形の落ち込みを確認した。遺構内堆積土は1層のみである。炭化物粒が多量に混入する暗褐色土で，人為堆積の可能性はある。

平面形は楕円形で，長径88cm，短径64cmを測る。底面は緩やかに丸みを帯び，硬化状況は確認できなかった。底面2箇所にも木の根による攪乱が確認できた。底面から壁面にかけては緩やかに立ち上がる。堆積土中より遺物は確認できなかった。

本遺構は遺構内からの出土遺物がなく，時期や性格を判断する要因がない。(三浦)

24号土坑 SK24 (図28・34, 写真45)

本遺構は調査区北半のF7グリッドに位置し，検出面はLⅣ上面である。南西に2号住居跡が隣接して存在する。

平面形は南北主軸の楕円形で，規模は上端で長径1.62m，短径1.32mを測り，底面では長径1.3m，短径1mを測り，深さは53cmを測る。周壁はLⅢ・Ⅳで，底面から直立気味に外傾して立ち上がる。底面はLⅣでほぼ平坦である。遺構内堆積土は3層に分かれ，堆積土に礫が含まれることから，人為堆積の可能性が考えられる。

遺物は $\ell 1$ より縄文土器小片が10点， $\ell 2$ より石皿の破片が1点出土している。土器片は図示し

なかったが、表裏に貝殻条痕文を施文した土器が出土している。図34-3は石皿の一部である。円礫を素材とし、中央部は緩やかな丸みを帯びて窪む。

本遺構は長径約1.6m、深さ約50cmの大型の土坑で、堆積土は人為堆積であることから、墓坑または貯蔵穴の可能性が考えられる。また、本遺構出土の土器を根拠とすると、縄文時代早期後半以降の土坑となる。

(千葉)

25号土坑 SK25 (図28・32・33, 写真46)

本遺構はE13グリッドのLIV上面より暗褐色の楕円形の落ち込みとして検出した。現存での重複する遺構はないが、近接して8号住居跡が位置することより、8号住居跡との重複関係はあると考えている。なお、8号住居跡の堆積土が残存していない状況では新旧関係は判断し兼ねる。本遺構の遺構内堆積土は1層のみである。炭化物粒を多量に含む暗褐色土であり、5cm大の角礫などが混入する人為堆積土と判断した。

平面形は、主軸が南北に延びる長径1.2m、短径1mの楕円形である。検出面から底面までの深さは20cmを測る。底面は凸凹があり、硬化していない。南西壁では急峻に立ち上がるが、北東壁は緩やかな立ち上がりである。

本遺構からは礫とともに縄文土器片45点が出土している。その内、5点を図示した。図32-25~27は胴部資料である。25は単節のRL原体を横位回転した斜縄文が施文される。26・27は色調や胎土から同一個体と考えている。27はアナグラ属の貝殻により貝殻腹縁文を施している。図33-3~5は底部資料である。3は胎土に繊維混和痕が見られず、4・5には繊維混和痕が見られる。

本遺構は、堆積土の状況や遺物の出土状態からゴミ捨て穴と考えられ、時期は出土遺物より縄文時代前期後半と判断した。なお、出土土器片には底部の資料が6点と多い。

(三浦)

26号土坑 SK26 (図28, 写真47)

本遺構は調査区北東部のやや南寄りの平坦面に存在し、H9グリッドに位置している。北西30cmからは27号土坑が検出され、南東1.2mからは5号住居跡が検出されている。

表土除去後の遺構検出中に、LIV上面において楕円形の落ち込みを確認した。長軸方向に沿って中軸線を設定し、東半部の掘り下げを開始した。約15cm程掘り下げたところ、周壁と連続する平坦なLIVが検出されたことから、この平坦面を底面と判断した。更に、土層断面の記録後、西半部の堆積土を除去して、底面の精査を実施した。

平面形は南北方向からやや東へ傾いた主軸の不整楕円形で、北辺が歪である。規模は上端で長径80cm、短径49cm、底面で長径77cm、短径44cmを測り、深さは13~17cmを測る。遺構内堆積土は6層に分層され、いずれも不規則な堆積状況であることから人為的な堆積土と推測される。

周壁及び底面はLIVである。周壁は直線的に急に立ち上がっており、底面はほぼ平坦である。

本遺構からは遺物が出土せず、時期や性格については不明である。

(能登谷)

27号土坑 SK27 (図28, 写真47)

本遺構は調査区北東部のやや南寄りの平坦面に存在し、H9グリッドに位置している。南東30cmからは26号土坑が検出され、北方2.4mからは3号住居跡が検出されている。

表土除去後の遺構検出中に、LIV上面において26号土坑と隣接した南北主軸の不整形の落ち込みを確認した。南北方向の中軸線を設定して東半部の掘り下げを開始した。約40cm程掘り下げたところ、周壁と連続する狭い平坦なLIVが検出されたことから、この平坦面を底面と判断した。更に、土層断面の記録後、西半部の堆積土を除去して完掘した。

上端の平面形は南北主軸の不整楕円形で、規模は長径1m、短径55cmを測り、深さは35～43cmを測る。遺構内堆積土は黒褐色土の1層のみで、隣接する26号土坑の堆積土とは土色が異なるものの、その南東の5号住居跡や北方の3号住居跡の堆積土とは似ている。なお、人為的な堆積土なのか、自然堆積土なのかどうかは不明である。

周壁及び底面はLIVで、周壁は東壁が直立気味である以外は内湾気味に立ち上がり、底面が狭い平坦面であることから、長軸方向の断面形はボール状であり、短軸方向の断面形は「V」字形となっている。なお、底面は緩く南へ下降しており、規模は長径38cm、短径16cmを測る。

遺物は遺構内堆積土より縄文土器片2点が出土した。いずれも縄文時代前期初頭の花積下層式土器の胴部破片であるが、図示した資料はない。

本遺構の時期や性格については、断定できる資料がないことから不明であるが、遺構内堆積土が近接する3号住居跡や5号住居跡の堆積土と似ていることから、あるいは、それらの住居跡に近い時期の遺構の可能性もある。(能登谷)

28号土坑 SK28 (図28, 写真48)

本遺構はG14グリッドのLIV上面より暗褐色の楕円形の落ち込みとして検出した。町道北側の調査区の南端に位置し、近接する遺構はない。本遺構南半分は町道が敷設されているために調査は行っていない。遺構内堆積土は9層に分層できた。炭化物粒が混入する暗褐色土及び褐色土であり、人為堆積と考えている。

平面形は楕円形で、残存部の長径は1.4m、短径は96cmを測る。底面は丸みを帯び、硬化状況は確認できなかった。開口部は大きく開き、底面にかけて狭窄する。検出面から底面までの深さは64cmを測る。西壁は底面から10cm程度立ち上がった部分で緩やかに傾斜し、検出面にかけては急峻に立ち上がる。東壁は底面から急峻に立ち上がる。

遺物は縄文土器片がℓ3より6点出土している。図示しなかったが、胎土に多量の繊維が混入する厚手の土器である。

本遺構は形態より落とし穴的な機能をもつ土坑と考えられるが、時期は出土した土器から縄文時代早期末葉以降と考えている。(三浦)

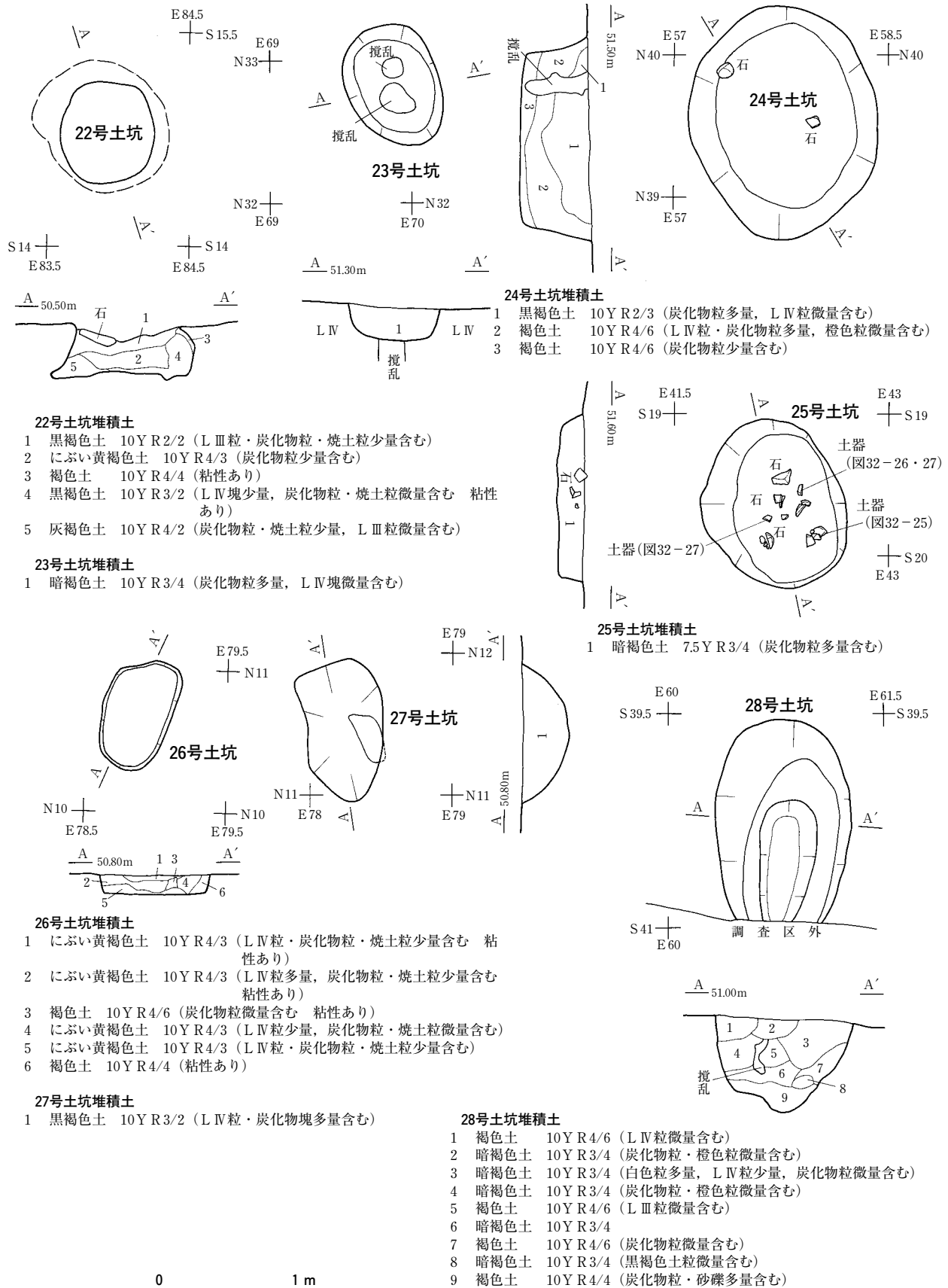


図28 22~28号土坑

29号土坑 SK29 (図29, 写真48・49)

本遺構はG17グリッドのLIV上面より褐色の楕円形の落ち込みとして検出した。近接して30・31号土坑が北側に位置する。遺構内堆積土は6層に分層できた。ℓ1～5は自然堆積と考えられている。ℓ1は褐色土であり、表土化している。ℓ2はLIV粒を多量に含む褐色土、ℓ3はLIV粒・炭化物粒を含む黒褐色土、ℓ4はLIV粒・炭化物粒を含む暗褐色土である。ℓ5はLIV粒を多量に含んだ混土である。ℓ6はLIV粒を多量に含む。いずれも混土で、不自然な堆積状況を示すため、人為堆積の可能性を考えている。

平面形は長楕円形で、主軸を東西方向に向ける。長径は1.92m、短径は74cmを測る。検出面から底面までの深さは48cmを測る。底面はほぼ平坦で、固く締まる状況が確認できた。底面から壁面にかけてはほぼ垂直に立ち上がる。

遺物は出土しなかった。

本遺構は平面形や近接する30・31号土坑を勘案して、落とし穴的な土坑と考えられる。本遺構が機能していた時期は、集落が存続していた時期ではあり得ないと考えられるが、出土遺物がないため特定は難しい。

(三 浦)

30号土坑 SK30 (図29, 写真48・49)

本遺構はG16グリッドのLIV上面より暗褐色の楕円形の落ち込みとして検出した。近接して29号土坑が南側に、31号土坑が北側に位置する。遺構内堆積土は3層に分層した。いずれの層も暗褐色土を主体とした混土で、人為堆積土と考えられる。

平面形は主軸が東西方向に延びる長楕円形である。長径2.02m、短径70cmを測る。検出面から底面までの深さは40cmである。底面は若干の凸凹があるが、固く締まる状況が確認された。底面から壁面にかけてはほぼ垂直に立ち上がる。

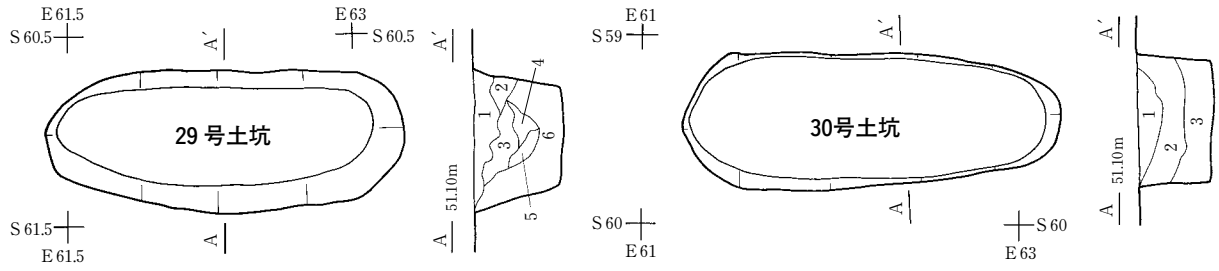
遺物は出土していない。

本遺構は29号土坑と並列し、29号土坑と一对の落とし穴的な機能を有する土坑と考えている。遺物は出土しないものの、近接する29・31号土坑と平面形が似ていることから、これら3基は同時期に存在していたものと推察できる。

(三 浦)

31号土坑 SK31 (図29, 写真49)

本遺構はG16グリッドのLIV上面より炭化物を含む褐色の不整楕円形の落ち込みとして検出した。本遺構の南側に近接して29・30号土坑が位置する。遺構内堆積土は6層に分層した。ℓ1は流入土である。ℓ2～4は北側より堆積した状況を示す流入土である。ℓ5はℓ6の後に堆積した流入土であり、レンズ状堆積を示す。ℓ6は壁面崩落土及び流入土である。いずれの層も自然堆積と考えている。

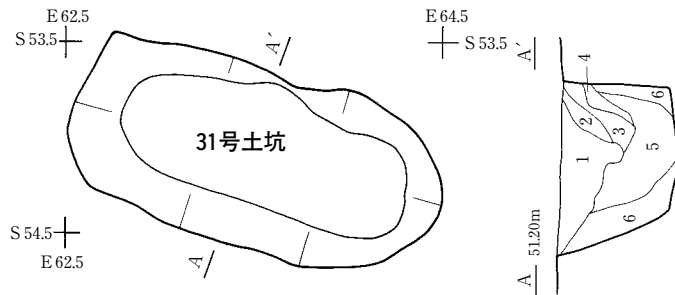


29号土坑堆積土

- 1 褐色土 10Y R4/6 (L IV粒多量, 炭化物粒少量含む)
- 2 褐色土 10Y R4/6 (L IV粒多量含む)
- 3 黒褐色土 10Y R2/2 (L IV粒・炭化物粒少量含む)
- 4 暗褐色土 10Y R3/4 (L IV粒・炭化物粒少量含む)
- 5 暗褐色土 10Y R3/4 (L IV粒多量, 炭化物粒少量含む)
- 6 褐色土 10Y R4/4 (L IV粒多量含む)

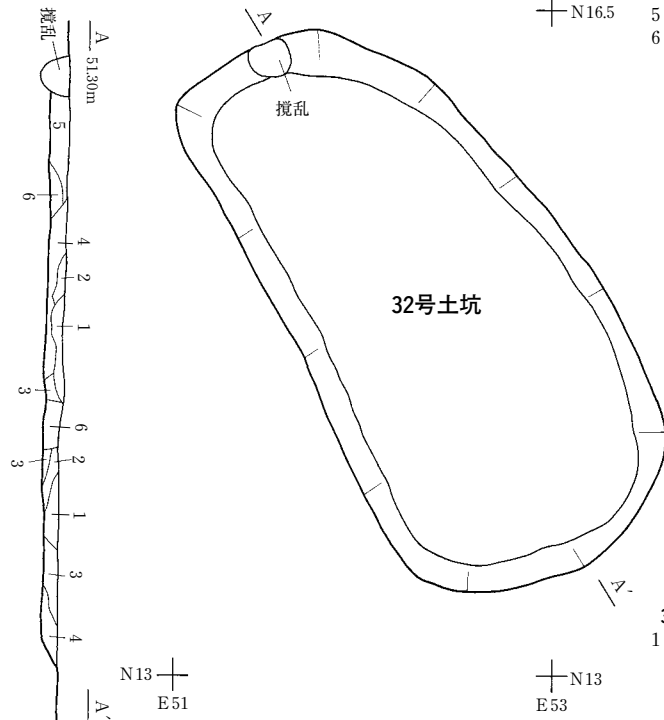
30号土坑堆積土

- 1 暗褐色土 10Y R3/4 (L III粒多量, L IV粒, 炭化物粒少量含む)
- 2 暗褐色土 10Y R4/6 (L IV粒多量, 炭化物粒・L III粒少量含む)
- 3 暗褐色土 10Y R4/6 (L IV粒多量含む)



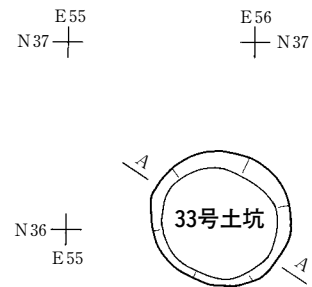
31号土坑堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R2/2 (L IV粒多量, 炭化物粒少量含む)
- 2 暗褐色土 10Y R3/4 (L IV粒・炭化物粒少量含む)
- 3 暗褐色土 10Y R3/4 (L IV粒多量, 炭化物粒少量含む)
- 4 褐色土 10Y R4/4 (L IV粒多量含む)
- 5 暗褐色土 10Y R3/4 (L IV粒・炭化物粒少量含む)
- 6 褐色土 10Y R4/4 (L IV粒多量含む)



32号土坑堆積土

- 1 褐色土 10Y R4/4 (L IV粒・炭化物粒少量含む 粘性あり)
- 2 褐色土 10Y R4/4 (L IV塊少量含む 粘性あり)
- 3 黒褐色土 10Y R3/2 (L IV粒少量含む 粘性あり)
- 4 褐色土 10Y R4/4 (L IV粒多量含む 粘性あり)
- 5 暗褐色土 10Y R4/4 (L IV粒少量含む 粘性あり)
- 6 黄褐色土 10Y R5/8 (粘性あり)



33号土坑堆積土

- 1 黒褐色土 10Y R3/2 (炭化物粒多量, L IV粒微量含む)

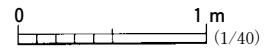


図29 29～33号土坑

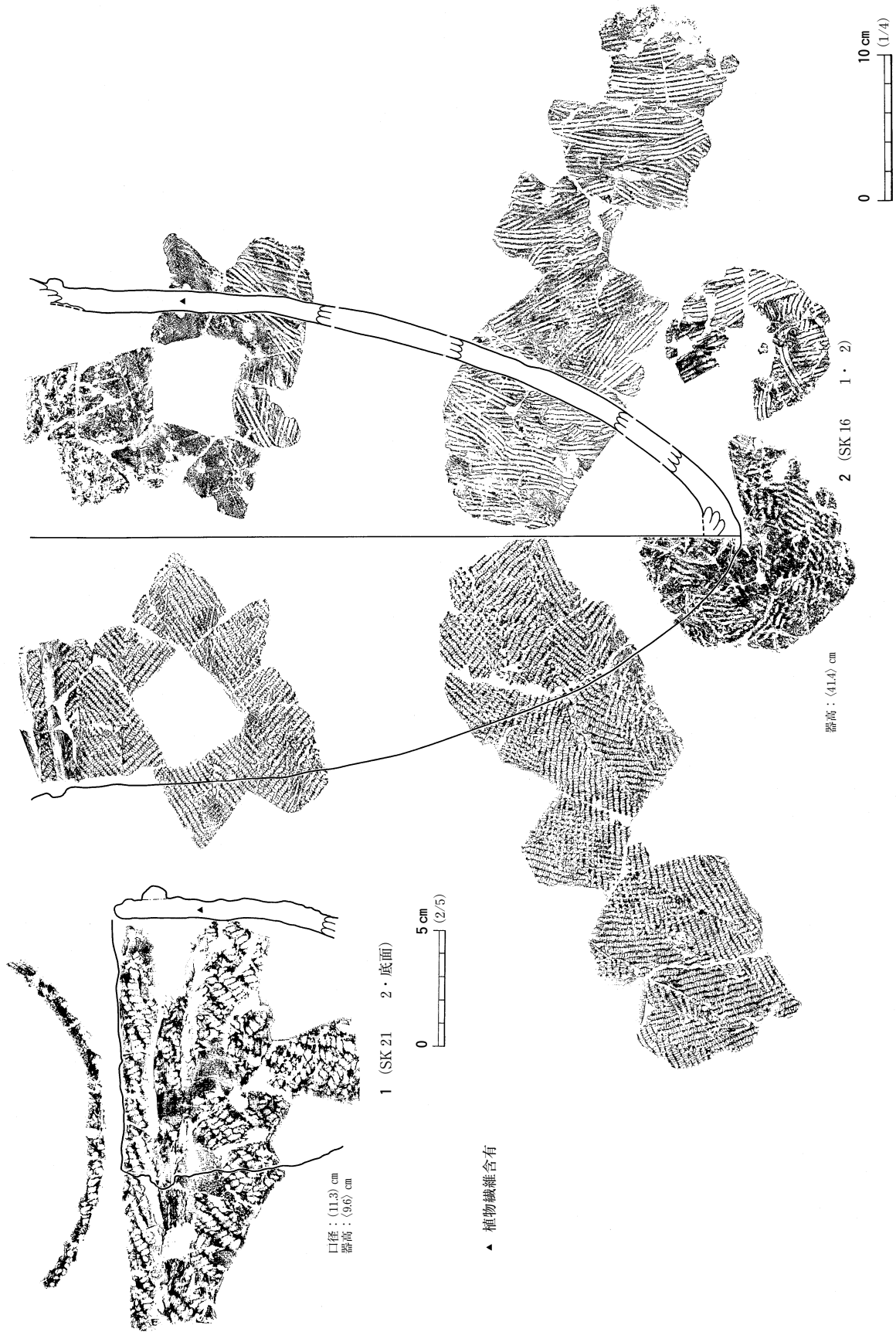
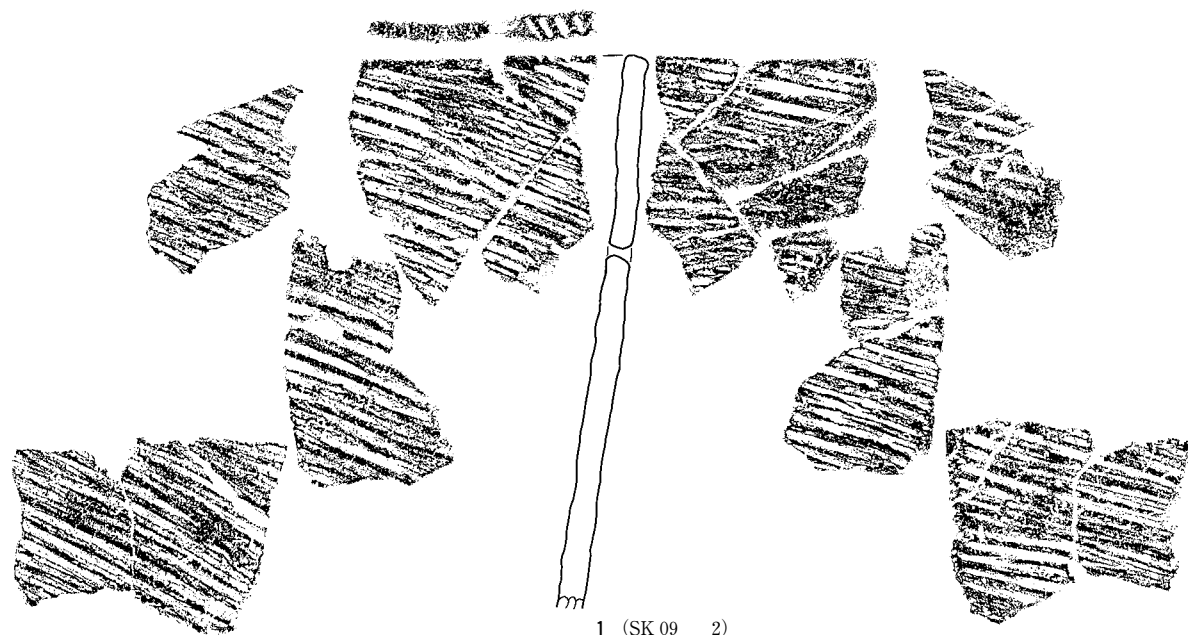


図30 土坑出土遺物 (1)



1 (SK 09 2)
器高：(18.3) cm



▲ 植物纖維含有

2 (SK 16 1・2)
口径：(23.5) cm
器高：(24.2) cm



図31 土坑出土遺物 (2)

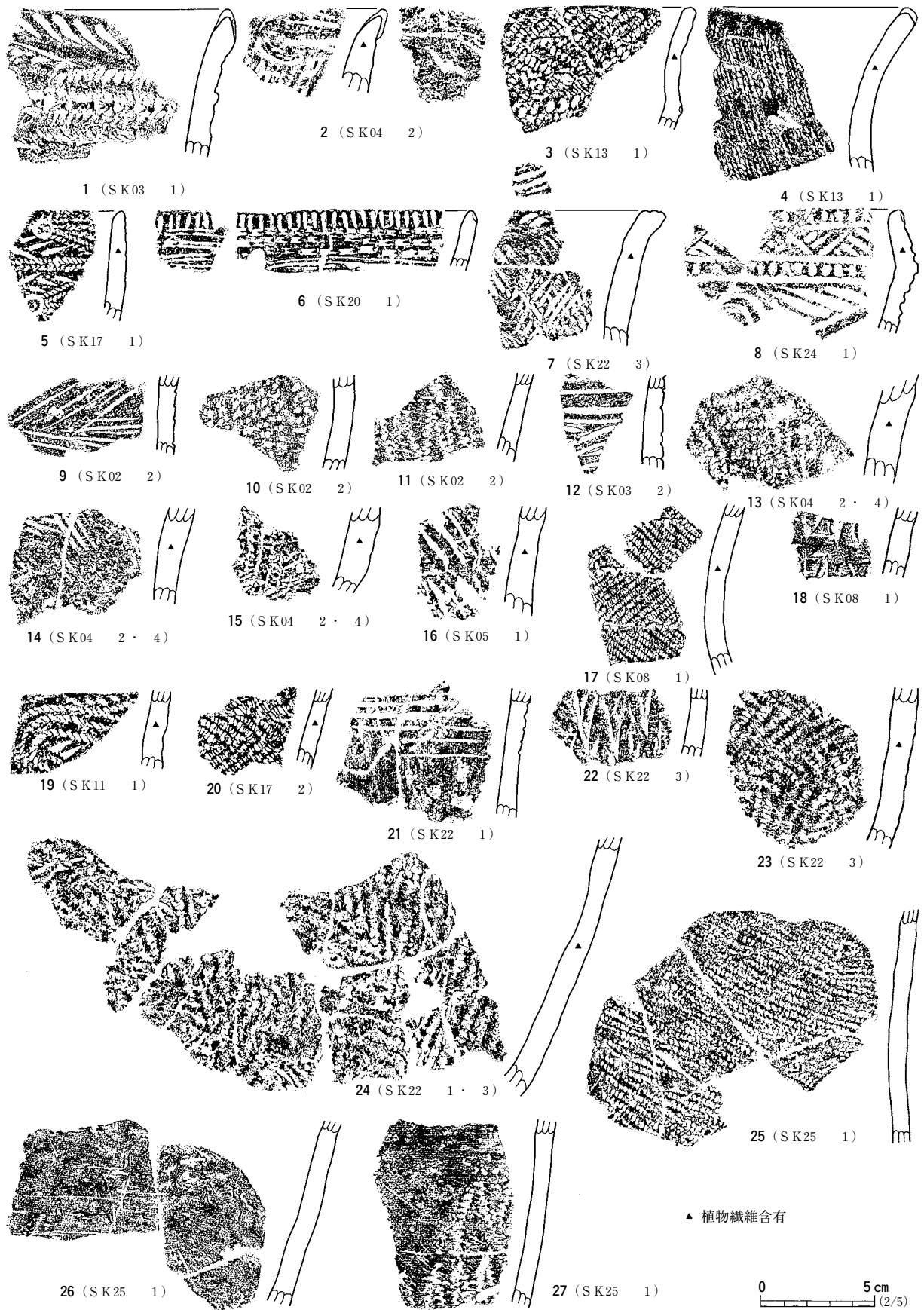


図32 土坑出土遺物 (3)

平面形は不整長楕円形で、長径2m、短径94cmを測る。長軸は29・30号土坑と同様に東西方向に向く。底面の平面形は楕円形を呈し、ほぼ平坦である。底面では若干固く締まった状況が確認できた。底面から壁面にかけての北壁では垂直に立ち上がり、南壁では僅かに傾斜して立ち上がる。検出面から底面までの深さは60cmを測る。

いずれの層からも遺物は出土しなかった。

本遺構は平面形や近接する29・30号土坑などを勘案して、落とし穴的な土坑と考えられる。時期の特定は困難であるが、近接する土坑と同時存在していた可能性が高い。 (三 浦)

32号土坑 SK32 (図29, 写真50)

本遺構は調査区北半部中央の平坦面に存在し、F9グリッドに位置している。南東2mからは19号土坑が検出された。

表土除去後の遺構検出中に、LIV上面において北西-南東主軸の大型の落ち込みを確認したことから、竪穴住居跡の遺構番号(SI08)を付して調査を開始した。長軸方向に沿って中軸線を設定して南西側半分の掘り下げを開始したところ、約10cm程掘り下げた段階で、周壁と連続する平坦なLIVが検出されたことから、この平坦面を底面と判断した。更に、土層断面の記録後、北東側半分の堆積土を除去して、底面の精査を実施した。その結果、底面からは炉と推測される焼土面や柱穴などの落ち込みが検出されないことから、本遺構は竪穴住居跡ではないと判断し、新たに遺構番号

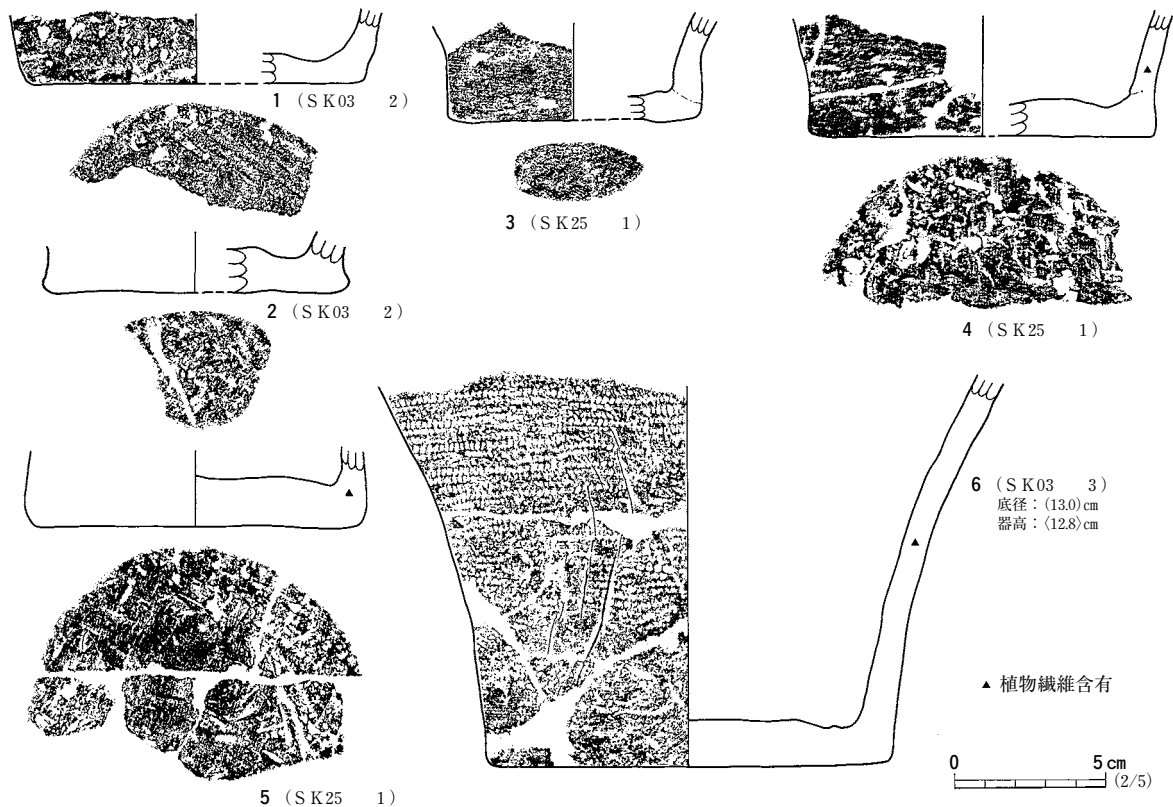


図33 土坑出土遺物 (4)

を振り直すことにした。

平面形は北西-南東主軸の不整長楕円形で、南西辺は直線的である。規模は上端で長径3.2m、短径1.6m、底面で長径2.9m、短径1.4mを測り、深さは5~10cmを測る。遺構内堆積土は6層に分層され、いずれも不規則な堆積状況であることから人為的な堆積土と推測した。

周壁及び底面はLIVで、周壁の立ち上がりは緩く、底面は若干起伏が認められるものの、ほぼ平坦である。なお、北西壁の北寄り部分は木の根の攪乱を受けていた。

遺物は遺構内堆積土より縄文土器片14点、剥片1点が出土した。縄文土器片の内訳は、縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての土器が主体をなし、縄文時代前期後半の浮島式土器も1点のみ認

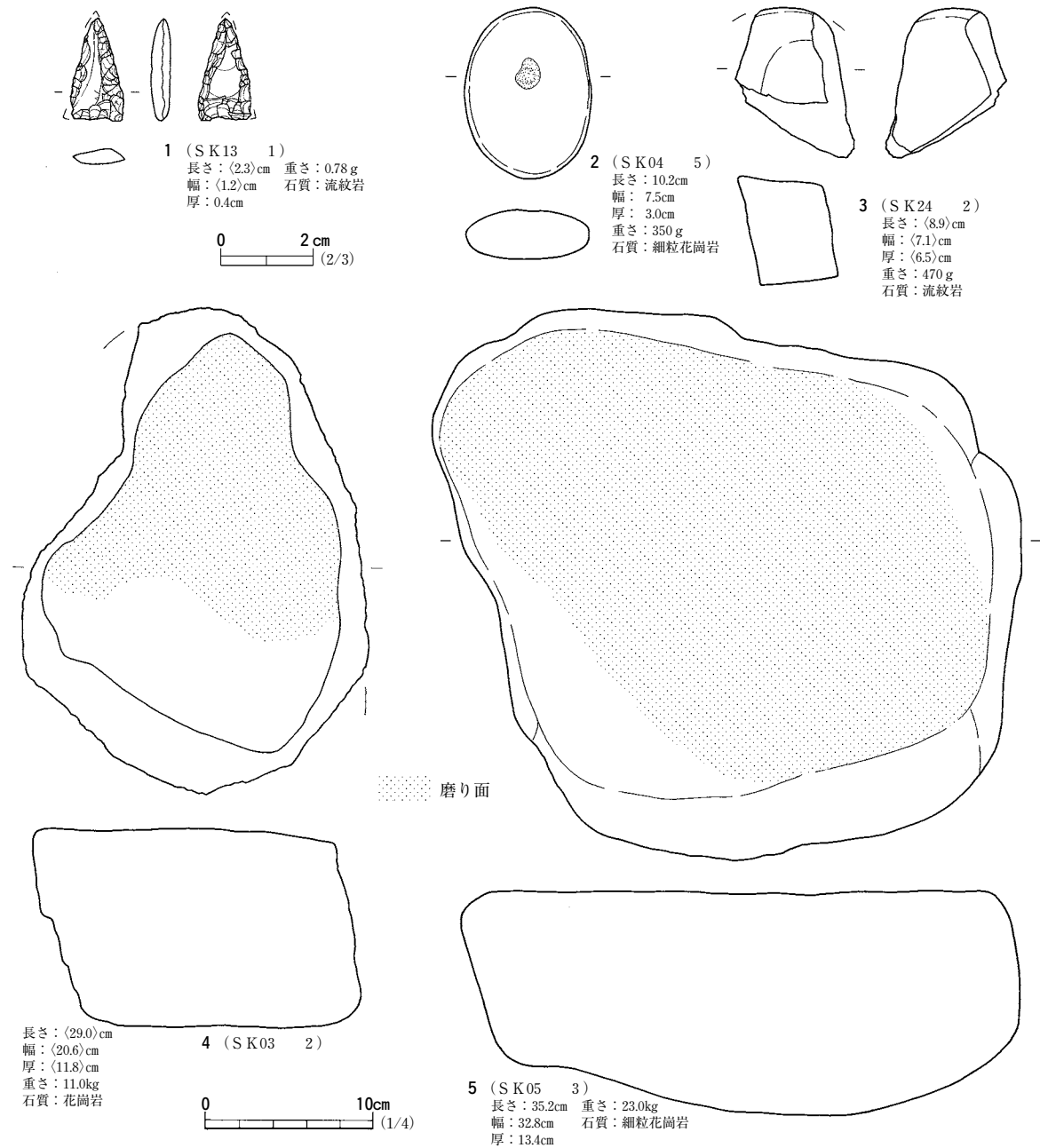


図34 土坑出土遺物 (5)

められるが、図示した資料はない。

本遺構の時期や性格については不明である。

(能登谷)

33号土坑 S K31 (図29, 写真50)

本遺構はF 7グリッドに位置する。2号住居跡の床面より暗褐色の円形の落ち込みとして検出した。2号住居跡内堆積土上面及び2号住居跡内堆積土掘り下げ時には本遺構は確認できず、2号住居跡床面より検出したことより、2号住居跡に伴うピットまたは2号住居跡構築以前の土坑のいずれかと考えた。調査の進展によって、本遺構の堆積土には2号住居跡の堆積土が確認できなかったことから、本遺構は2号住居跡よりも古い土坑であると判断した。遺構内堆積土は黒褐色土1層のみである。炭化物を多量に含む層で、締まりがない人為堆積である。

平面形は円形で、直径74cmを測る。検出面からの深さは42cmである。底面は丸みを帯び、固く締まる状況が確認できた。底面から壁面にかけては緩やかに立ち上がり、開口部にかけて垂直に立ち上がる。遺構内からは遺物は出土しなかった。

本遺構は円筒形の土坑で、近接する16・21号土坑と遺構内堆積土や平面形などが酷似することから、これらの遺構とほぼ同時期の同じような性格の遺構と考える。本遺構の性格は不明であるが、貯蔵穴の可能性もある。時期は、16号土坑では縄文時代早期末葉から縄文時代前期初頭にかけての時期と推測している。

(三浦)

第5節 その他の遺構

本遺跡からは前節までに記述してきた竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑の他に、2基の焼土遺構と21基の小穴(ピット)を検出した。焼土遺構は住居跡の炉の可能性もあるが、周囲に柱穴などが検出されなかったことから、住居跡の炉とはせずに焼土遺構として報告することにする。また、ピットは竪穴住居跡や掘立柱建物跡に付随しないが、ある程度まとまって検出されていることから、グリッドごとにピット番号を付けて、グリッドピットとして報告する。

1号焼土遺構 S G01 (図35, 写真51)

本遺構は調査区北東部の平坦面に存在し、H 8グリッドに位置している。南東約2mから3号住居跡が検出された。

表土除去後の遺構検出中に、L IV上面において北西-南東主軸の細長い焼土面を確認した。付近は後世の耕作等により基盤層の上部まで削平を受けていることから、住居跡の炉の可能性も考慮して周囲の柱穴の検出に努めたが、柱穴は検出されなかったため、焼土遺構として調査を進めた。

焼土面の平面形は不整長楕円形で、北西部は細く、南東にいくにつれて幅が広がっている。長さは1.05mで、幅は南東部で最大33cmを測る。焼土面は平面観察では赤褐色であるが、この焼土面

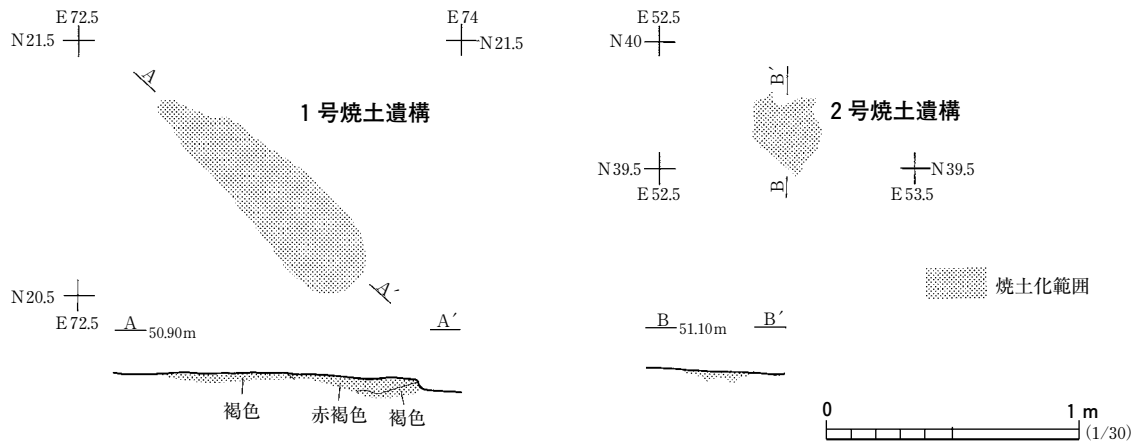


図35 1・2号焼土遺構

を長軸方向に断ち割ってみたところ、底面から最大7cmまで熱変化が確認され、熱変化の度合いが強いことを示す赤褐色部分とその周りに熱変化の度合いが弱いことを示す褐色部分があることが確認できた。また、断ち割り面の観察によると、中央部では底面から2cmまでしか熱変化していないことから、この焼土面は主にその北西部及び南東部で火を焚いたことにより形成されたものと推測される。

本遺構は焼土面のみで遺構であることから、時期を特定する資料に欠けるが、本遺構の南東から近接して検出された3号住居跡の炉の主軸線と本遺構の主軸線がほぼ一致していることから、本遺構は3号住居跡と何らかの関係があったものと推測される。(能登谷)

2号焼土遺構 S G 02 (図35, 写真51)

本遺構は調査区北側のF6グリッドのLⅢ上面より暗赤褐色のハート形の焼土面として検出した。本遺構の検出面では住居跡床面と見られる硬化状況や柱穴と考えられるピットなどが確認できなかったため、焼土遺構と判断した。本遺構南側には近接して2号住居跡が位置する。遺構の重複はない。東西長26cm、南北長34cmを測り、厚さ6cmにわたり焼土化していた。(三浦)

グリッドピット G P (図36)

本遺跡では掘立柱建物跡に伴う柱穴の他にも、同様のピットが21基確認されている。これらのピットは配列が不明で、竪穴住居跡や掘立柱建物跡に付随するピットとは認められなかったものである。D8・D12・E7・E8・E10・E12・F8・F9・G9・G11・H10グリッドからの検出である。検出面はLⅣ上面である。各グリッドごとにピット番号を付けた。

各ピット内の堆積土はいずれも1層のみで、柱痕は確認されていない。

ピットの平面形は円形または楕円形を基調とし、長径24~36cm、短径20~36cmを測る。検出面からの深さは4~84cmと疎らである。ピットの平面形の規模は統一性が感じられるが、検出面からの深さに関しては著しく異なり、機能の差を示すものなのか、時期差を示すものなのか不明である。

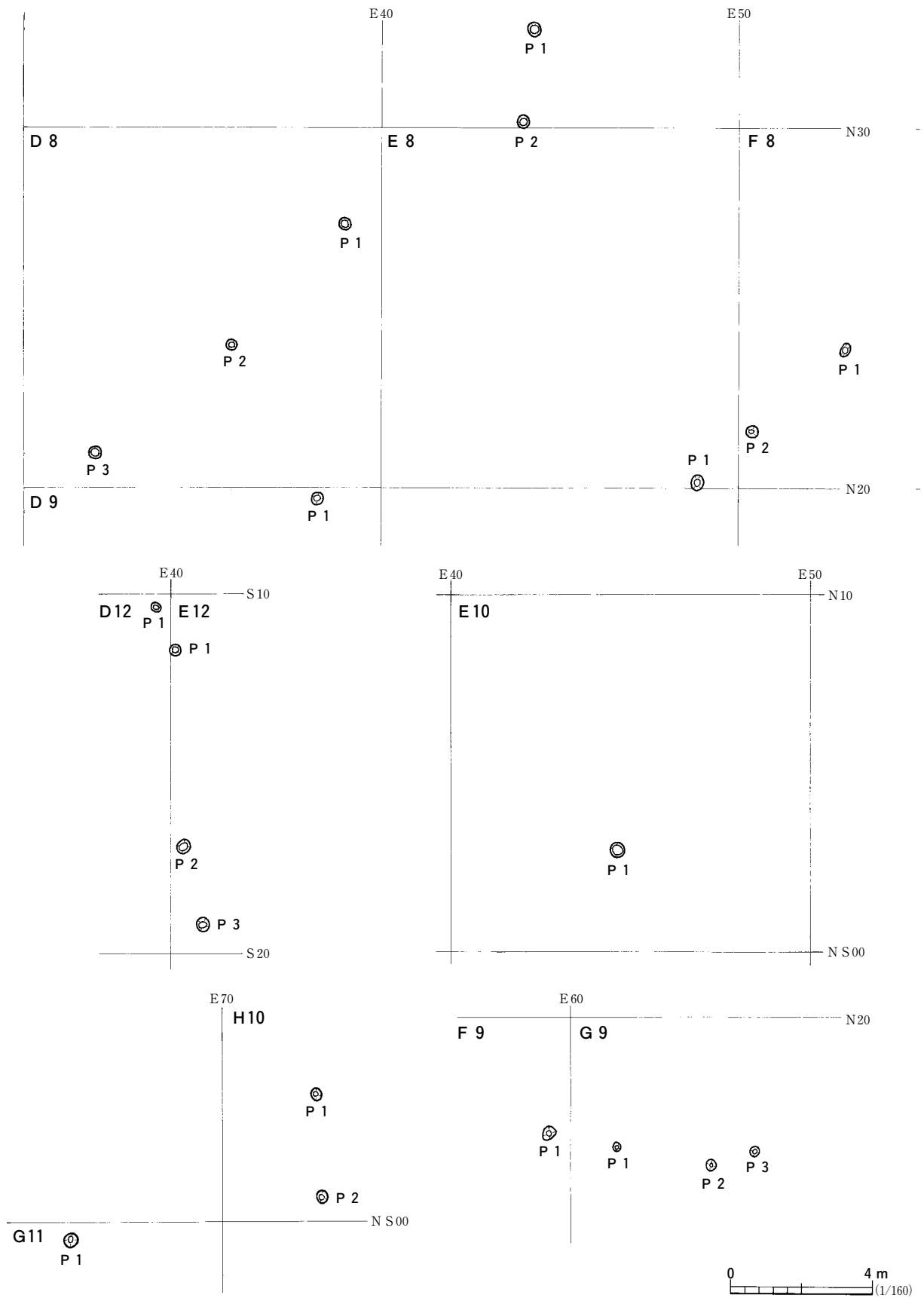


図36 グリッドピット

表1 グリッドピット一覧

グリッド	番号	平面形	規模			柱痕		堆積土	
			長径	短径	深さ	柱痕	層数	土色(混入物)	
D 8	P 1	楕円形	30	26	10	無	1	褐色土	10Y R 4 / 6
	P 2	円形	24	24	7	無	1	黒褐色土	10Y R 2 / 3 (炭化物粒微量含む)
	P 3	円形	30	30	6	無	1	暗褐色土	10Y R 3 / 4
D 9	P 1	楕円形	30	26	5	無	1	褐色土	10Y R 4 / 4 (炭化物粒少量含む)
D12	P 1	円形	24	22	4	無	1	褐色土	10Y R 4 / 6
E 7	P 1	楕円形	34	31	7	無	1	暗褐色土	10Y R 3 / 4
	P 2	円形	32	32	9	無	1	黒褐色土	10Y R 2 / 3 (褐色土, 炭化物粒少量含む)
E 8	P 1	楕円形	36	28	5	無	1	黒褐色土	10Y R 2 / 3
E10	P 1	円形	36	36	10	無	1	暗褐色土	10Y R 3 / 4 (炭化物粒微量含む)
E12	P 1	円形	30	28	7	無	1	暗褐色土	10Y R 3 / 4 (炭化物粒多量含む)
	P 2	楕円形	40	32	9	無	1	褐色土	10Y R 4 / 6 (炭化物粒微量含む)
	P 3	円形	32	32	8	無	1	褐色土	10Y R 4 / 6
F 8	P 1	楕円形	34	22	8	無	1	暗褐色土	10Y R 3 / 4 (炭化物粒微量含む)
	P 2	円形	30	28	12	無	1	暗褐色土	10Y R 3 / 4 (褐色土多量含む)
F 9	P 1	楕円形	38	30	84	無	1	褐色土	10Y R 4 / 4
G 8	P 1	円形	20	20	20	無	1	褐色土	10Y R 4 / 6
	P 2	楕円形	26	22	64	無	1	暗褐色土	10Y R 3 / 4
	P 3	円形	24	24	33	無	1	暗褐色土	10Y R 3 / 4 (炭化物粒多量含む)
G11	P 1	楕円形	36	30	62	無	1	暗褐色土	10Y R 3 / 4
H10	P 1	円形	28	28	16	無	1	黒褐色土	10Y R 2 / 2
	P 2	円形	30	30	49	無	1	暗褐色土	10Y R 3 / 4

凡例：規模の単位はcm

総じて北側のピットの深さが浅い傾向にある。個々のピットの計測値については表1に示した。

検出したピットの多くは、規模や形態より柱穴と推測されるが、疎らに点在するため、配列は明らかにできなかった。なお、北側のD 8・E 7・E 8・F 8グリッドのピットは比較的浅く、これらのピットについては中世の柱穴と明確な時期を与えるのではなく、縄文時代前期後半からの時期を念頭に置いて時期設定を考えたい。また、掘立柱建物跡の周囲から検出されたピットは、建物跡や柱列跡として組むことができなかったが、中世頃の所産の柱穴であったと考えられる。このように、本遺跡で検出したピットには、2時期ある可能性を考慮したい。(三 浦)

第6節 遺構外出土遺物

本遺跡の遺構外からは、旧石器時代の石器1点、縄文・弥生土器片6,468点、縄文時代の石器・石製品・剥片386点、縄文時代の土製品3点、中世陶器片107点、中世の石製品1点が出土した。これらのほとんどは町道北側の調査区より出土している。旧石器時代の石器以外の遺物の時期は、本章第1節で示したように、縄文時代早期後半・早期末葉から前期初頭・前期後半、縄文時代中期・晩期、弥生時代、中世(14世紀)である。

出土状況(図37・38)

図37・38は遺構外出土の縄文・弥生土器の出土傾向を見るために、遺構外より出土した土器の点

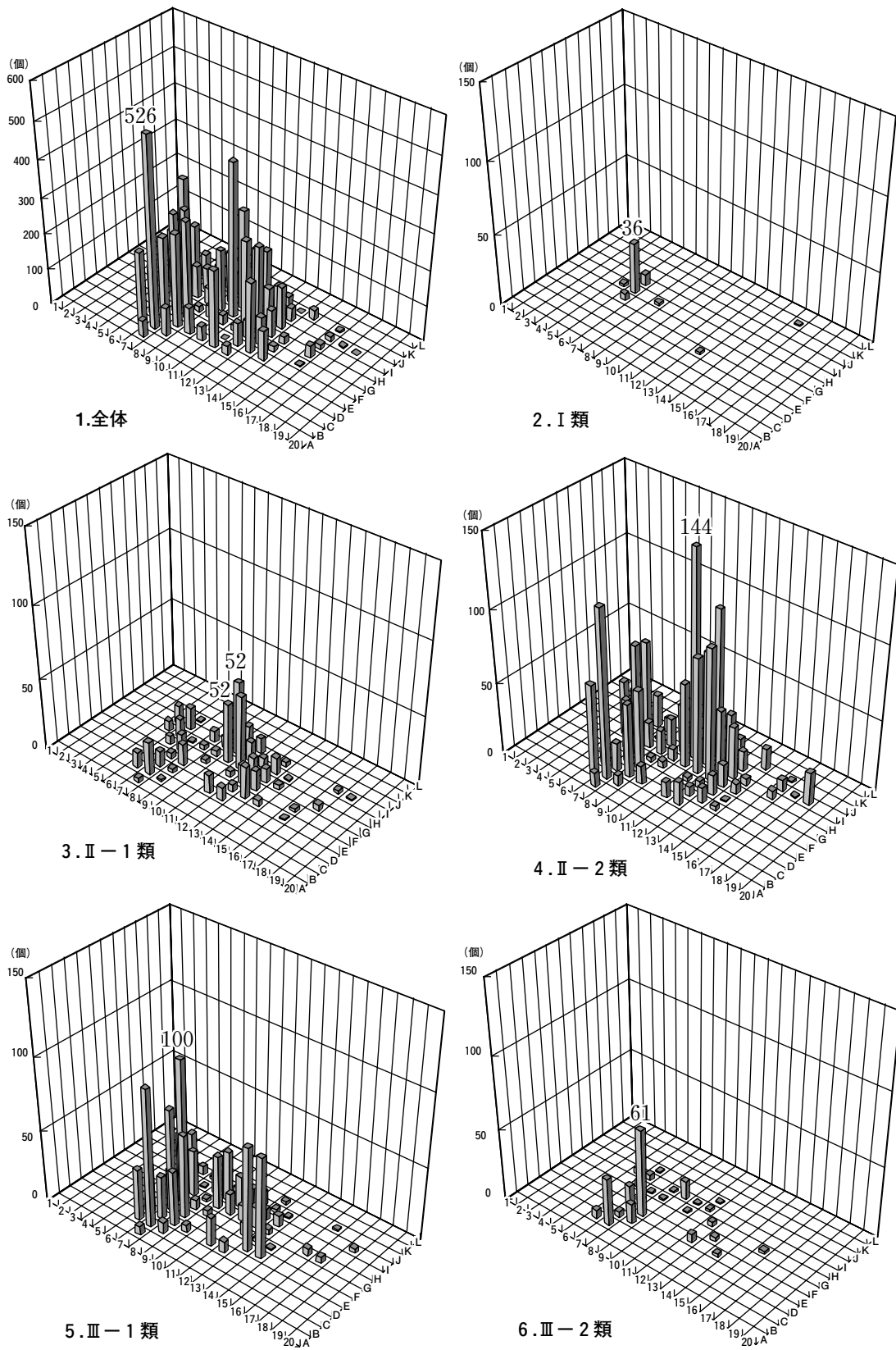


図37 遺構外出土土器分布図 (1)

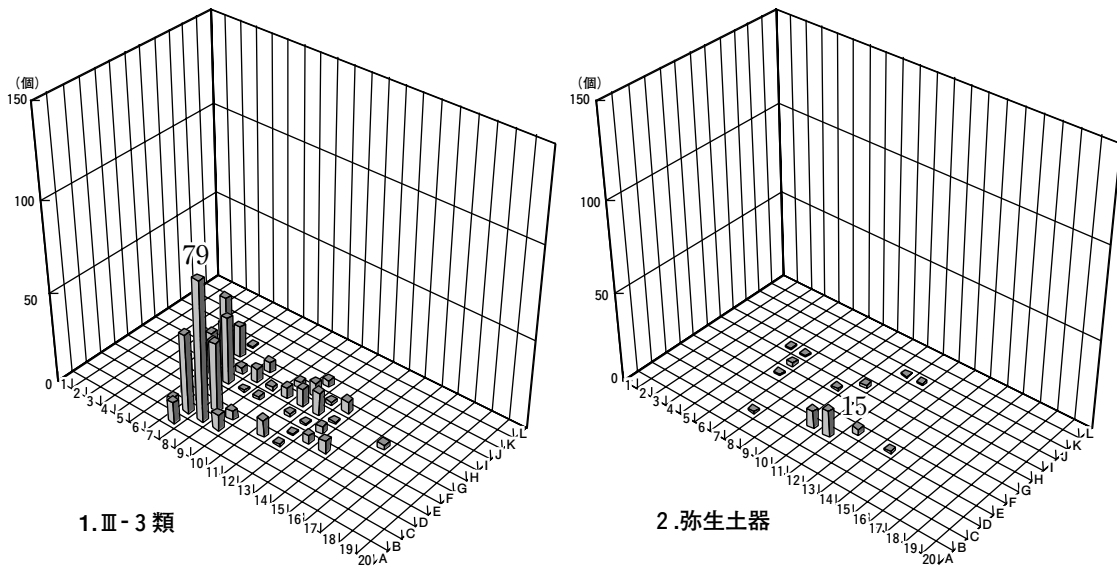


図38 遺構外出土土器分布図(2)

数をグリッドごとに棒グラフで示した図である。

図37-1で全体的にみた場合、調査区北側のC~F 7・D~E 8・G 6・G~H 10グリッドで出土量が多いことが分かる。この区域は竪穴住居跡や土坑などの遺構が多く検出された区域であり、後世の攪乱もあまり受けていないことから、遺物の量が多かったものと推測される。その中で、最も多い出土量を示しているのがC 7グリッドで、C 7グリッドを含めたG 6・10グリッドは竪穴住居跡などの遺構の密度が特に高い区域である。

本章第1節で示した土器分類に従って、主な土器について出土傾向を図37-2~6と図38で見ると、各類は比較的集中して出土する傾向が見受けられる。

I類土器は限定された区域でのみでまとまって出土し、H 9グリッドの出土量が過半数を占めている。II-1類土器は調査区中央部のG 10・G 11・H 10グリッドからの出土が目立つ。II-2類土器は調査区の北・中央・南部を問わず一様に出土している。その中で、G 11・H 10・I 11グリッドからの出土量が多く、調査区中央部で最大値を示す。III-1類土器は調査区北側での出土量が多く、III類土器の時期に該当する2・4号住居跡が位置するC 7・F 6・F 7グリッドからの出土量が多い。III-2類土器とIII-3類土器も同様に調査区北側で出土量が多い。なお、II・III類土器は遺構内堆積土中からも混在して出土している。IV-3類とした弥生土器は少量しか出土していないが、D 10・11グリッドからまとまって出土している。(三浦)

土 器 (図39~51, 写真59~72)

I類土器 (図39, 図40-1~4, 写真59)

本類は縄文時代早期後半の野島式土器及び茅山下層式土器に比定される土器である。いずれも胎土に僅かの繊維混和痕が認められ、表裏に条痕文が施文されている。

図39-1～4は同一個体で、波状口縁の深鉢形土器と推測される。口縁部と胴部を区切る細隆起線が巡り、口縁部から縦位ないしは斜位に細隆起線を垂下させ、細隆起線から派生するかのよう平行沈線が斜位に施文される。

同図5は図上復元をした尖底の深鉢形土器である。各破片はH9グリッドの1地点からまとまって出土した。口縁部は波状口縁で、ほぼ垂直に近い角度で立ち上がる。胴部の下半では緩く内湾し、上半では緩やかに外反している。口縁部には口唇に沿って細隆起線が巡り、口唇とその細隆起線の間には縦位の細沈線で刻みを施している。外面は波頂部から垂下する縦位の細隆起線により推定4区画され、縦位の細隆起線上には横位の刻みが施されている。更に、口縁部から胴部上半には、縦位の細隆起線を横に連絡するような弧状の細隆起線により模様が描かれている。この横位の弧状の細隆起線は上位では下に弧を描き、下位では上に弧を描いていることから、全体的なモチーフは菱形状となっている。また、この細隆起線によって区画された小区画内には縦方向や横方向の細い平行沈線が充填されている。

図40-1は幅7mmの半截竹管により縦位や斜位の文様が描かれている。区画内には格子目状の細い撚糸文が充填されている。同図2～4は表裏条痕文のみの施文である。

Ⅱ 類土器 (図40-5～25, 図41・42, 写真60～63)

本類は縄文時代早期末葉～縄文時代前期初頭に比定される土器である。施文文様・型式の違いから3類に細分した。

Ⅱ-1 類土器 (図40-5～22, 写真60)

本類は縄文時代早期末葉～縄文時代前期初頭の縄文条痕文土器である。内面には条痕文が施文され、5～7以外の土器は外面に撚糸文が施文されている。また、6以外の土器片の胎土には繊維混和痕が認められる。

5は器壁の厚い胴部資料である。外面は単節のLR原体を横位に転がしている。内面は縦位の後、横位に条痕文を施文している。6は口縁部資料で、口唇部が外側に僅かに張り出している。外面には幅5mmの半截竹管状の施文具による押引文が施文される。内面には横位の条痕文が施される。7・8は口縁部に近い資料で、隆帯を有する。7は細い隆帯を挟んで上下に円形刺突が施されている。8は内外面に撚糸文を施している。撚糸文は隆帯上にも施文し、外面は縦位に、内面は横位に施文される。9～11は平縁になる口縁部資料である。いずれもやや外傾し、口唇部が僅かに外側に張り出す。外面には縦位に撚糸文が施文され、口唇部及び口縁部内面にも撚糸文が施文されている。11の内面には径1cm、深さ3mmの盲孔が存在する。12～22は胴部資料である。いずれも撚糸文が斜位に施文される。

Ⅱ-2 類土器 (図40-23～40, 図41, 図42-1～7, 写真61～63)

本類は縄文時代前期初頭の花積下層式土器併行の土器を主体とする。すべての土器の胎土には繊維混和痕が認められる。多くは胴部に羽状縄文が施文される。それぞれの特徴から、さらにa～g種に分類している。なお、本類にはⅡ-1類に併行する土器も若干混入している。

a種(図40-23~25) 口唇部が肥厚して、口縁部端部が隆帯状に張り出すものである。隆帯より下位には非結束の羽状縄文が施され、隆帯上及び口唇部にも縄文が施文されている。

b種(図41-1~9) 頸部に横位の隆帯を巡らして、口縁部と胴部を区切るものである。1・2は3~6に比べて口縁部幅が広いものである。1は口縁部が外反し、口唇部が平坦になる。隆帯上は無文である。2も隆帯上は無文である。3~6は口縁部幅が狭いものである。いずれも口縁部は無文である。隆帯の幅は6~13mmと概して太い。胴部及び隆帯上にも縄文が施文されている。7~9は口縁部上位を欠失しているが、8・9の口縁部には、横位の捺糸圧痕が認められる。胴部には羽状縄文が施文されている。

c種(図41-10~15・19) 頸部に隆帯が巡らないものである。いずれにも非結束の羽状縄文が施される。10~12・15・19は口唇部が平坦になるものであり、13・14は口唇部が丸みを帯びるものである。また、11の口縁端部には口唇に沿って刺突列を配する。13には焼成後に両面から穿孔された補修孔がある。

d種(図41-16~18・20~22) 頸部が屈曲し、口縁部に向かって内傾する器形である。16~18・20は屈曲部に押捺がされるものである。屈曲部より上には右下がりと左下がりの短沈線による鋸歯状のモチーフが施文されており、16・20では口唇部に沿って横位に捺糸圧痕が施され、17の口唇部には縦位の刻みが施文されている。また、屈曲部より下には16・17・20では捺糸圧痕と沈線により文様が描かれ、18では羽状縄文が施文されている。21・22は捺糸圧痕により文様が描かれ、斜行する短沈線を隙間に充填している。なお、16・21・22には捺糸圧痕による渦巻文が見られる。

e種(図41-23~35) 口縁部が直線的に外傾しながら立ち上がる器形で、捺糸圧痕で主たる文様を描いている。捺糸圧痕による渦巻文を描き、隙間に短沈線文を充填する。23・25・27は口唇部に刻みを有する。30は内傾する器形で、d種に含まれるのかもしれない。4条の捺糸圧痕が施文されている。34・35は接合はしないものの、胎土や色調、文様などの特徴から同一個体と判断した。緩やかに外反する器形で、波状口縁となる。ヘラ状の施文具による押引文を施文し、矢羽根状の捺糸圧痕が押引文に沿って施文される。

f種(図42-1) 捺糸圧痕を沈線に置き換えて文様を描いたものである。捺糸圧痕により渦巻きを描き、隙間に短沈線文を施文するモチーフを沈線による施文に置換している。

g種(図42-2~7) 地文のみの胴部資料である。いずれも非結束の羽状縄文が施されている。2・7のように原体が長いもの、3・4のように施文原体が短いものがある。なお、3には上下する縄文帯の間に先の薄い弧状の工具による「X」字状の刺突文が施されている部分が見られる。

II-3 類土器(図42-8~14)

縄文時代早期末葉~縄文時代前期初頭の底部資料を一括した。すべての土器の胎土に繊維混和痕が認められる。8~11は尖底、12・13は丸底、14は平底である。8・10~12は外面に捺糸文が施文されている。9・13は外面には非結束の羽状縄文が施文され、内面には捺痕が認められる。14の底面には捺糸圧痕が渦状に施され、胴部には羽状縄文が観察される。



図39 遺構外出土遺物 (1)

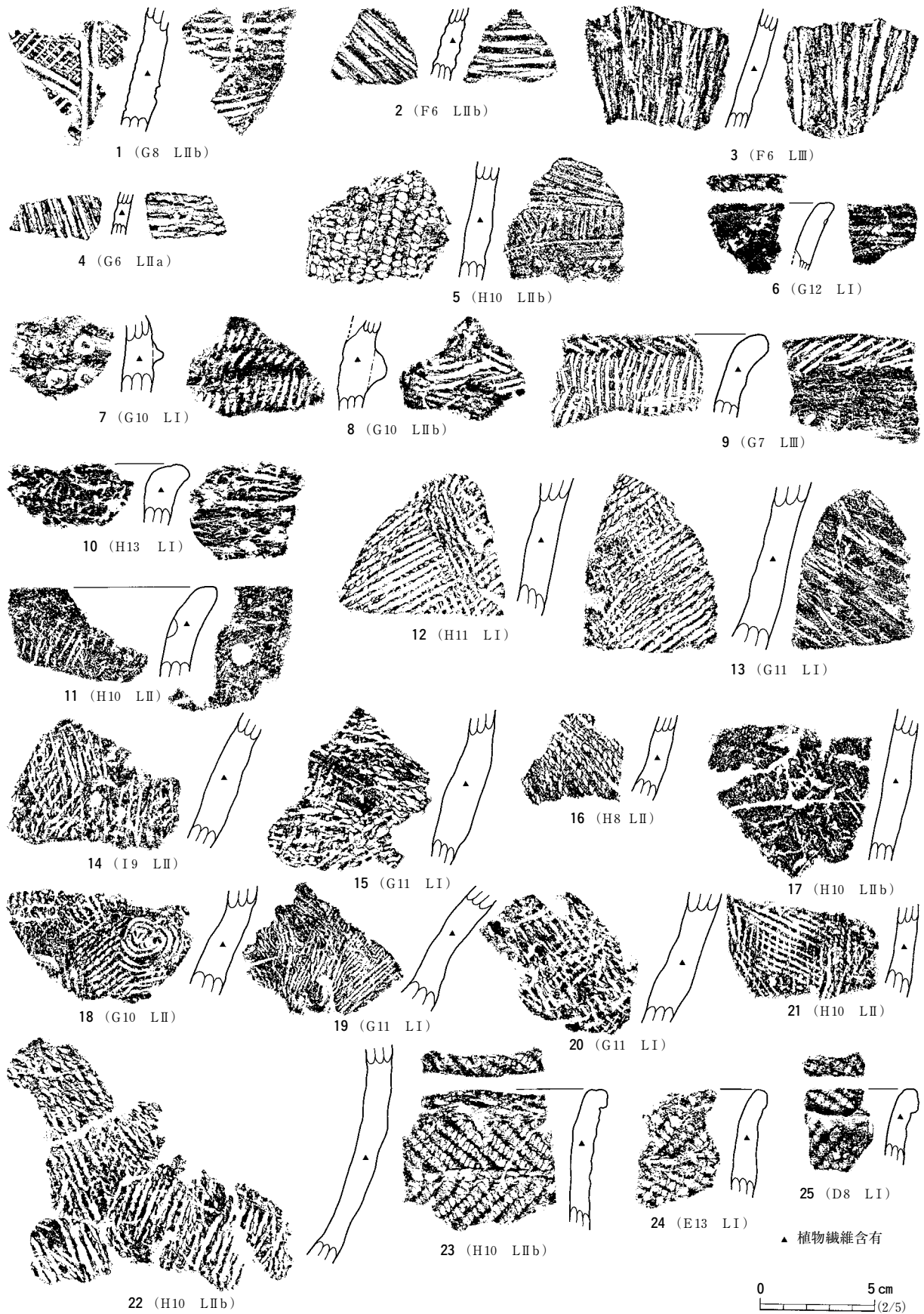


図40 遺構外出土遺物 (2)

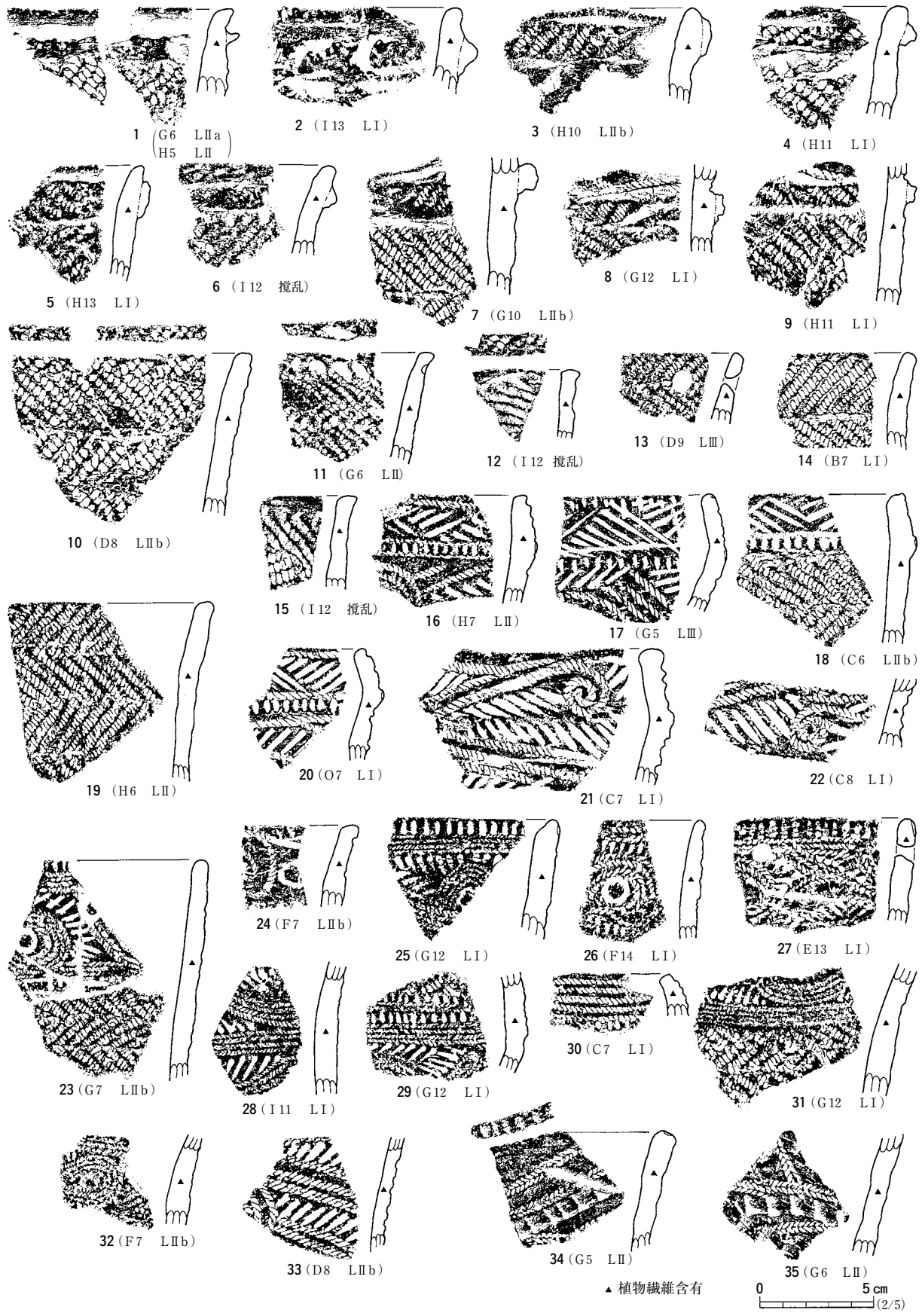


図41 遺構外出土遺物 (3)

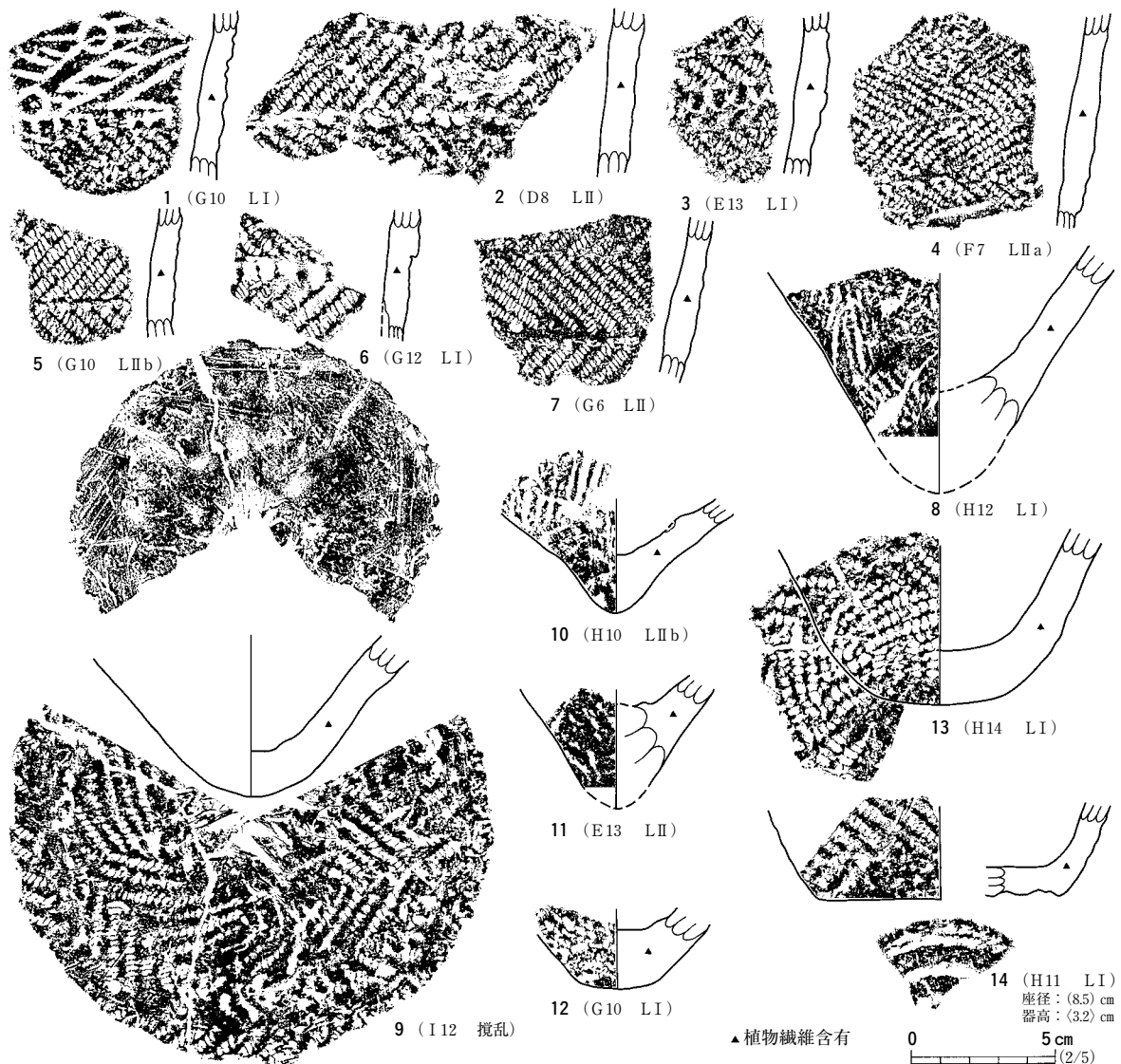


図42 遺構外出土遺物（4）

Ⅲ類土器（図43～49，写真64～70）

本類は縄文時代前期後半に比定される土器で，4分類した。1～3類は土器型式ごとに分類し，4類は縄文時代前期後半の底部資料を一括した。

Ⅲ-1類土器（図43・44，図45-1～8，写真64～66）

大木4式土器を中心とした大木式系土器である。胎土に繊維混和痕が認められるものと認められないものが混在する。特徴によりa～i種に分類した。

a種（図43-1～5）口縁部に隆帯を有するものである。1・4・5は頸部に横位の隆帯をもつものである。1は直線的に外傾する器形の小型深鉢形土器である。口唇部には5単位の円形の小突起が貼り付けられている。小突起は直径1cm前後の粘土を貼り付け，上面には1条の切り込みがなされている。口縁部は無文である。頸部を巡る幅8mmの隆帯上には，ヘラ状工具で縦位に刻み目を施している。胴部文様は地文のみで，地文の原体は単節のLRであり，長さは5cm程度である。なお，

外面の小突起及び口縁部内外には炭化物の付着が観察できる。胎土に繊維混和痕が認められる。4・5は5mm程度の幅の狭い隆帯上に刻み目を施文している。4は口縁部にも隆帯に沿って刺突を施している。2・3は波状口縁で、波頂部から縦位に隆帯が垂下するものである。幅5mmの隆帯上にはヘラ状工具による横位の刻みが施される。2は隆帯を挟んでシンメトリーに「八」の字状に縄文が施文される。3は隆帯の左右に垂下する2条の波状沈線文を施文している。これらの土器に関しては類似する資料もなく明確ではないが隆帯を有する特徴から、大木3式土器併行期であると考えられる。

b種 (図43-6・7) 網目状撚糸文が施文されるものである。地文のみの文様であるが、特徴から大木2式土器に相当するものと考えられる。

c種 (図43-8~15) 結節回転文を多用するものである。胎土に繊維混和痕が認められるものと認められないものがある。8~12は口縁部資料で、8~10は横走する多段の結節回転文を境とし、口縁部は無文となり、胴部には斜行縄文が施文される。11は口唇部に「S」字状の粘土紐を貼り付け、この貼付文直下から縦走する結節回転文が施文される。施文原体の長さは1.5cmと短い。12は波状口縁で、波頂部には刺突が施され、波頂部直下から3条の縦走する結節回転文が垂下する。13~15は胴部破片である。結節回転文以下には斜縄文が施文される。大木4式土器に比定される。

d種 (図43-16・17) 山形沈線文が施文されるものである。16は無文地に連続山形文を描いている。17は口縁部資料で、斜縄文を地文とし、1条の連続山形文を施文している。大木4式土器に比定される。

e種 (図43-18~23) 半截竹管によるコンパス文を施文するものである。18は波状口縁の口縁部資料で、波頂部は中央を窪ませて、一对の山形となり、口唇部には刺突が施されている。波頂部直下には縦位のコンパス文が垂下する。胎土には繊維混和痕が認められない。19はコンパス文に類似するが、結節回転文を模倣した平行沈線施文と考えられる。20~23は横走するコンパス文により口縁部と胴部を区画し、口縁部は無文とし、胴部には斜縄文を施文する。21は縦位にもコンパス文が施文される。22の胎土には繊維混和痕が認められない。大木4式土器に相当すると思われる。

f種 (図44-1~17) 沈線文を特徴とするものである。1~9は口縁部資料である。1~3は口縁部と胴部を2条の沈線によって区画し、口縁部は無文で、胴部には斜縄文を施文する。4~9は無文地に平行沈線により蕨手状のモチーフを描いている。4・7の口唇部には刻みを入れている。7には横位の隆帯が貼り付けられ、上面には縦位の刻みが施されている。10~17は胴部資料である。10は平行沈線による波状文で口縁部と胴部を区画している。口縁部は無文で、平行沈線による蕨手状のモチーフが描かれていると思われる。胴部には斜縄文が施文される。12~14は無文地、11・17は撚糸地文、15・16は縄文地文で、それぞれに平行沈線で山形状や半円状のモチーフを描いている。概ね大木4式土器の範疇に含まれると思われる。

g種 (図44-18) 円形刺突文が施文される土器である。1点のみ出土した。やや内傾する器形である。RLの単節の縄文帯を挟んで、上下に円形刺突文を施文している。口縁部は無文で、2列の円

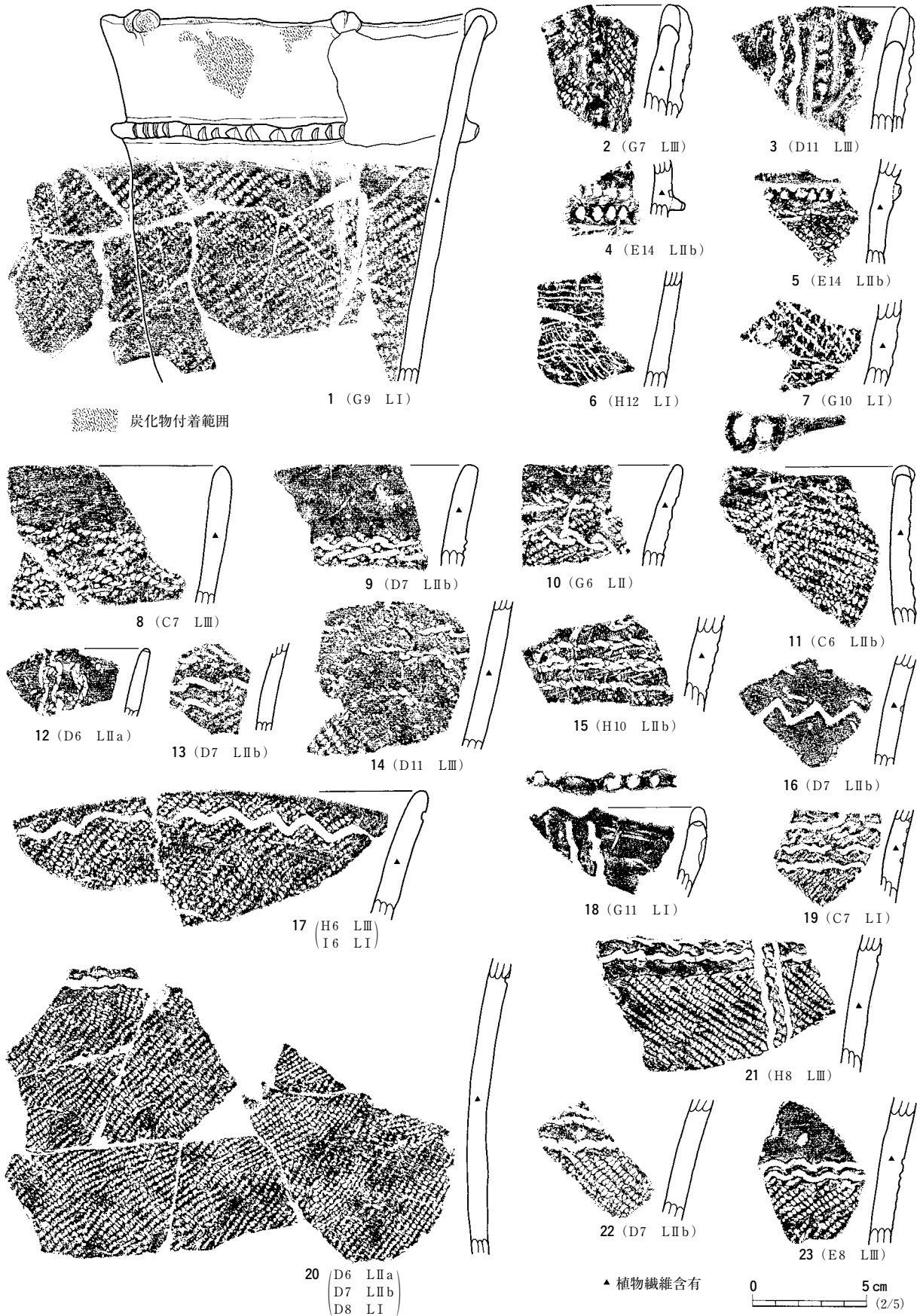


図43 遺構外出土遺物 (5)

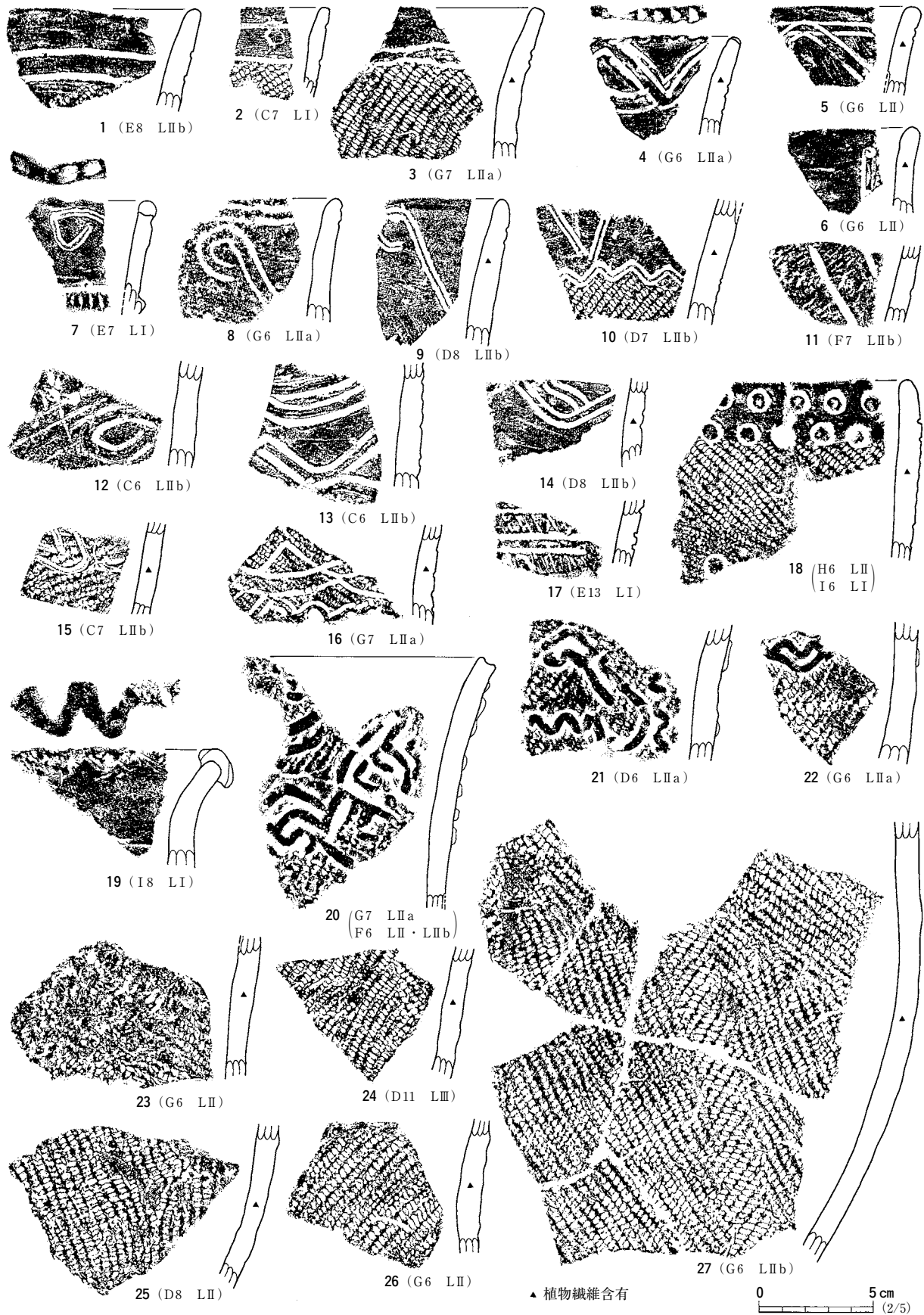


図44 遺構外出土遺物 (6)

形刺突文を施文している。大木3～4式土器に相当する土器であろう。

h種 (図44-19～22) 粘土紐貼付文を特徴とするものである。出土数は図示した4点のみである。色調や胎土・文様などから同一個体と考えられる。口縁部は無文で、外反し、口唇部には太い粘土紐による鋸歯状の貼付文が施される。胴部には縄文地に概ね2条1単位の粘土紐を貼り付けて幾何学文様を描いている。大木4式土器に比定される。

i種 (図44-23～27, 図45-1～8) 地文のみの資料である。図44-23は胎土に多量の砂粒を含む。図45-1～3は口縁部資料である。いずれも口唇部が丸みを帯び、1は大きく外反している。また、1には原体の閉端を縛った細い撚り紐による結節回転文が認められ、3・4には無節の斜縄文が施文されている。同図5・6は胎土が乾燥してからの施文により浅い文様となっている。同図7の縄目には炭化物の付着が認められる。地文のみで明確に特定できないが、概ね大木4式土器に相当するものと思われる。

Ⅲ-2 類土器 (図45-9～24, 写真59・67)

諸磯b式土器である。胎土には繊維混和痕は認められない。a～c種に細分した。

a種 (図45-9～20) 浮線文を特徴とする。9～12は口縁部資料である。9・10の平坦な口唇部には刻みのない浮線文により文様を描いているのに対して、口縁部には刻みのある浮線文を用いている。11・12は大きく内湾するキャリパー形の器形で、12は浅鉢形土器であろう。11は4条の粘土紐を横位に貼り付けた後、縄文を施文している。13～20は胴部資料である。いずれも縄文地上に浮線文が貼り付けられる。13～15は胎土や文様から同一個体と判断され、段を有するキャリパー形の器形を呈するものと思われる。

b種 (図45-21・22) 爪形文を特徴とする。幅の狭い半截竹管により弧状の文様を描く。22の外面には僅かにではあるが朱彩が認められる。

c種 (図45-23・24) 獣面突起を集めた。いずれも目・鼻・口を表現した動物意匠で、浮線文には刻み目が施される。23は縦長の輪郭に丸い粘土を貼り付け、沈線で目を表現している。鼻と口は前面に張り出し、鼻は刺突で、口は沈線で表している。イノシシを表現したと思われるが面長の顔からは「馬」の印象を受ける。また、23の特徴として、真上から見た場合も動物を意識した表現がされている。突起の頂部には横位に沈線を施し、口のようにも見える。真上から観察するとカエルを連想させる。突起と言うよりは把手であろうか。24は指で粘土を押し上げ刺突して目を表わし、鼻と口は粘土を引き出して刺突と沈線により表現している。イノシシを模したと思われる。

Ⅲ-3 類土器 (図46・47, 図48-1～5, 写真59・68～70)

浮島Ⅱ式土器を中心とした浮島式系土器である。胎土には繊維混和痕は認められない。a～g種に細分した。

a種 (図46-1～9) コンパス文を特徴とするもの。いずれも口縁部資料である。1～6は口唇部に刺突を施し、外面には横位のコンパス文を施文する。1・4は胎土・文様から同一個体と判断した。7～9は口縁部に2段のコンパス文を横位に施文し、下位には平行沈線による山形状や菱形状

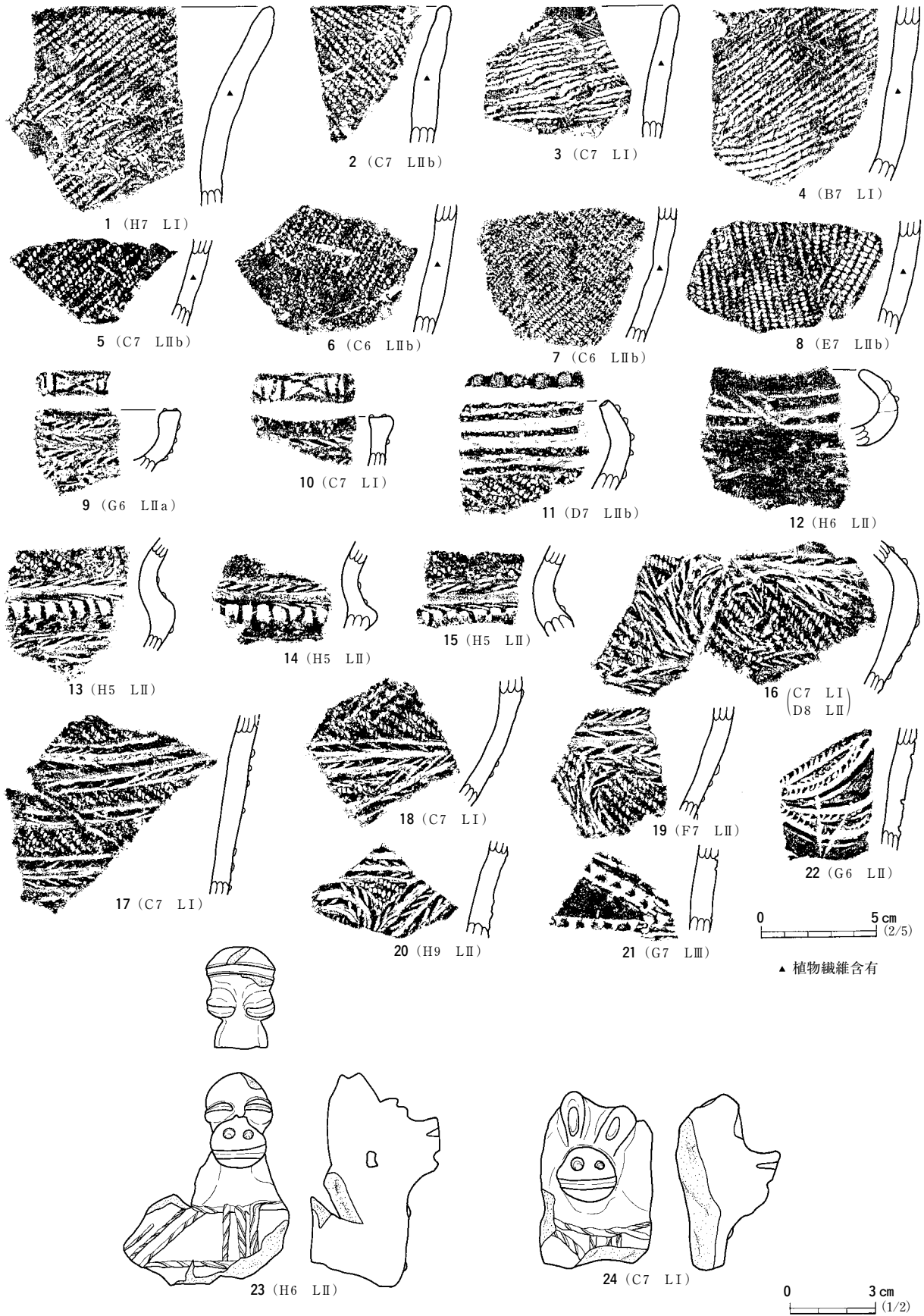


図45 遺構外出土遺物 (7)

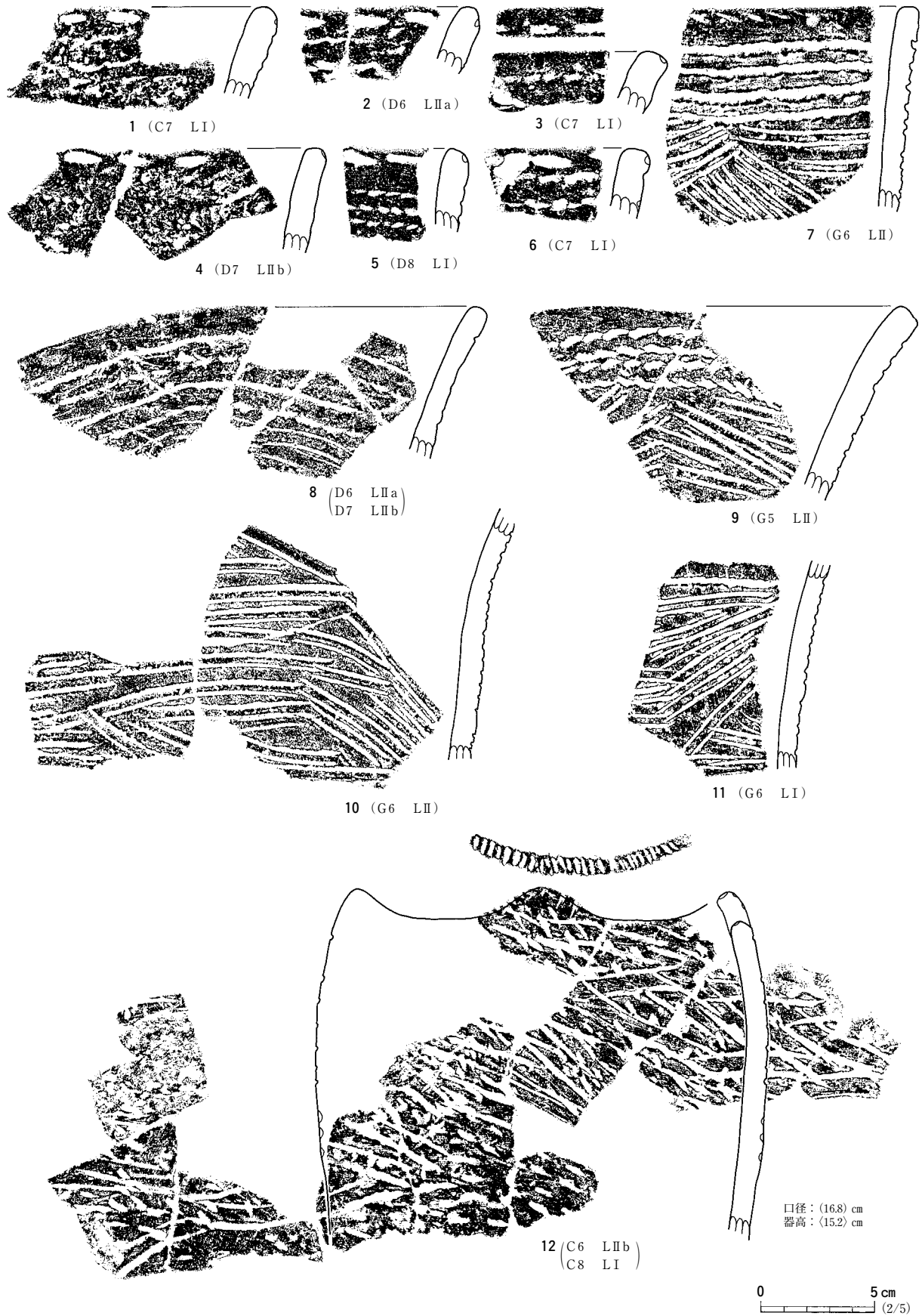


図46 遺構外出土遺物 (8)

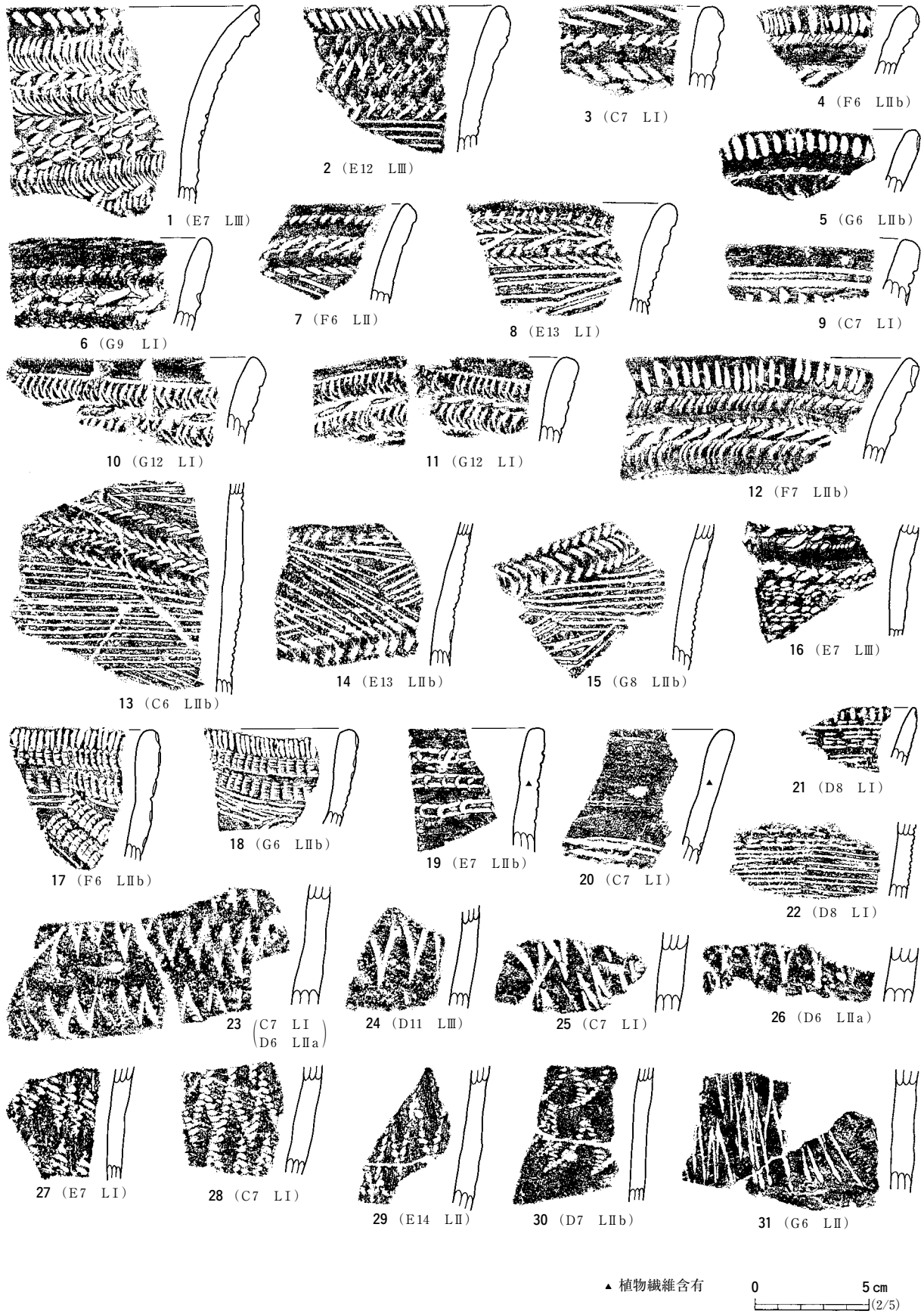


図47 遺構外出土遺物 (9)

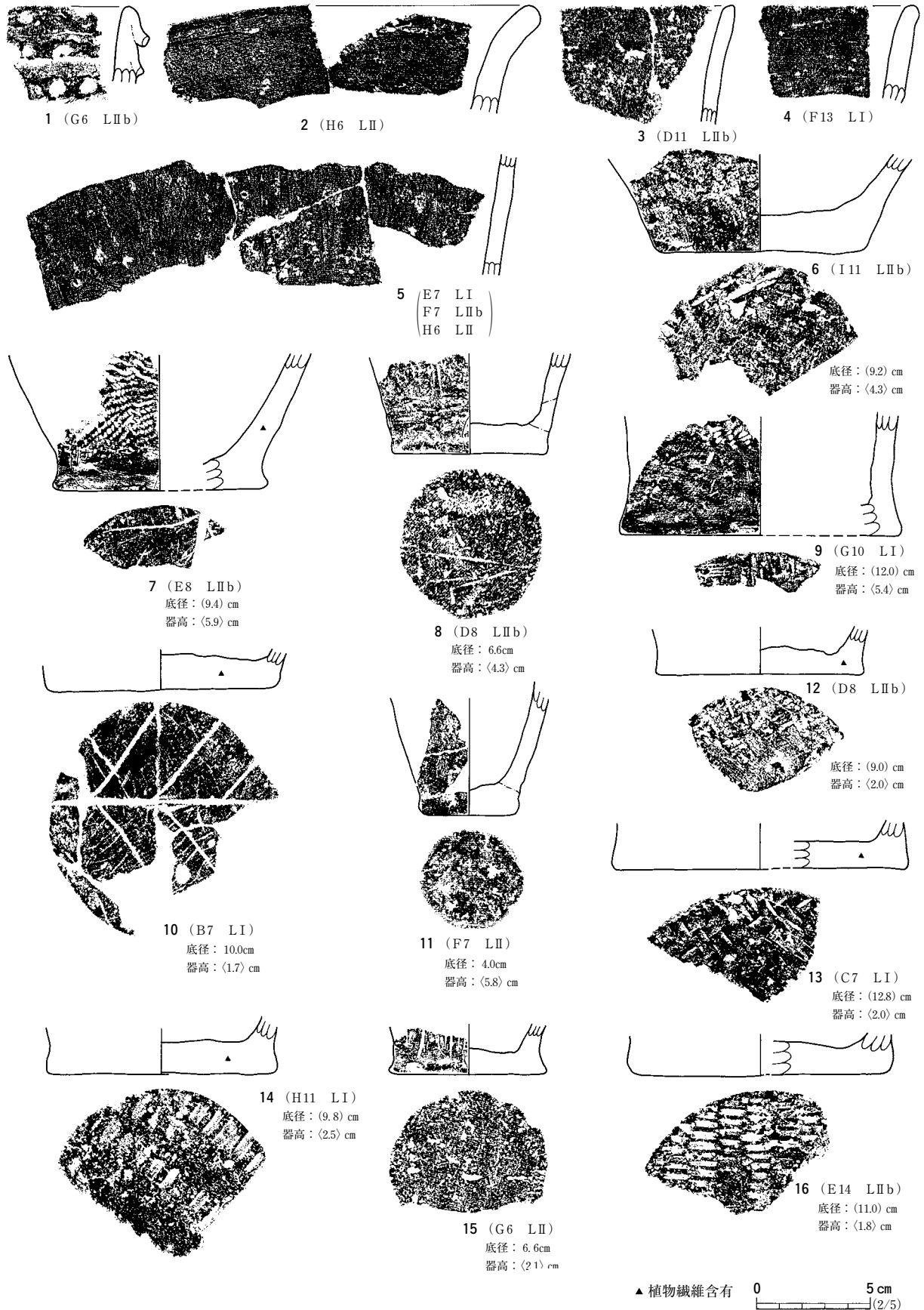


図48 遺構外出土遺物 (10)

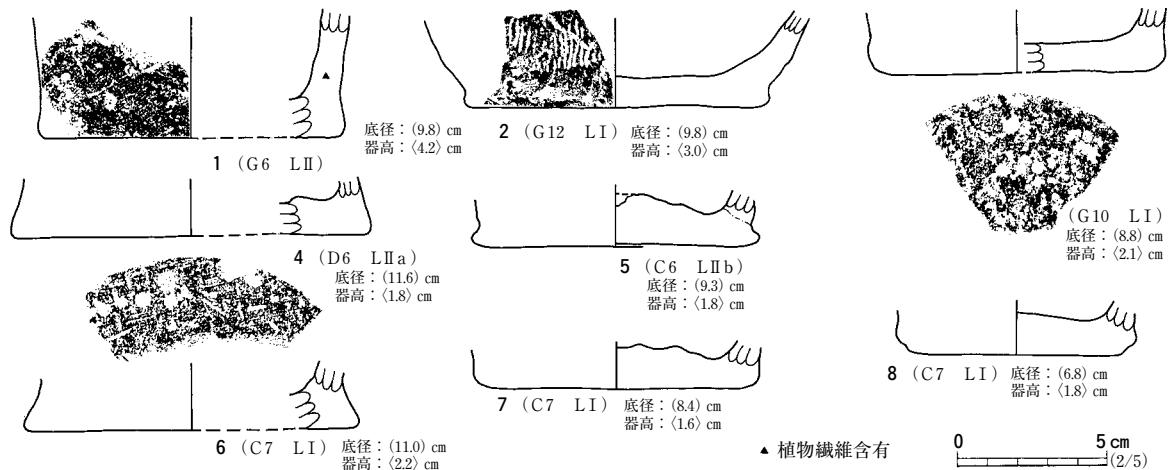


図49 遺構外出土遺物 (11)

のモチーフを描いているものと思われる。7は直線的に立ち上がり、8・9は緩く外反している。口唇部の断面形は箱形になる。浮島Ⅱ式土器に比定される。

b種 (図46-10~12) 沈線文を特徴とするものである。10・11はa種の胴部にあたり、平行沈線により山形状や菱形状のモチーフが描かれている。12は波状口縁の深鉢形土器で、内湾して立ち上がっている。口唇部には細かな刻みを施している。平行沈線により山形状・菱形状とも判別できない文様意匠を描き、半截竹管による刺突を施している。浮島Ⅱ式土器に相当すると思われる。

c種 (図47-1~18) 変形爪形文を特徴とするものである。いずれも内面は良く磨かれている。1~16は浮島Ⅱ式土器に比定され、幅1cm程度の施文具を用いている。1~12は口縁部資料で、口唇部が丸みを持ち外反するものが多い。1~5の口唇部には刻み目が斜位や縦位に施されている。変形爪形文は2列一組で施され、その間には斜めの刻みや刺突が施されている場合が多い。1では変形爪形文間の刺突と同じ刺突が幅広の変形爪形文間に充填され、16では変形爪形文の他に貝殻腹縁の押引文が見られる。また、2・7・8・13~15では変形爪形文の他に横位や斜位の平行沈線によるモチーフが描かれている。

17・18は興津式土器に比定される資料で、同一個体と判断した。若干の波状口縁となる資料である。口唇部はやや平坦になる。口縁部には条線帯を配し、胴部には幅7mmの貝殻腹縁の押引文が施文される。

d種 (図47-19~22) 半截竹管の押引文が施文されるもので、平行沈線間に爪形状の刺突を有するものである。19・20は無文地に数条の押引文を横位に施文している。浮島Ⅱ式土器併行期の土器であろう。21・22は薄い器壁で直線的に外反する器形である。口唇部には刻みが施され、外面には3mm程度の幅の狭い半截竹管状の施文具で、横位に数条施文している。以下は平行沈線が横走する。浮島Ⅲ式土器から興津式土器頃に相当するものだろうか。

e種 (図47-23~31) 波状貝殻文を特徴とするもので、胴部資料である。23~26は放射肋を有しない貝殻腹縁による施文、27~30は放射肋を有する貝殻腹縁による施文である。31は貝殻ではなく、沈線により貝殻腹縁文をモチーフとした施文をしている。浮島Ⅱ式土器と想定される。

f種(図48-1) 輪積み痕を明瞭に残すものである。2段の突帯を有し、突帯の上部に指頭により窪みをつけている。浮島Ⅱ～Ⅲ式土器に比定される。

g種(図48-2～5) 無文土器である。2～4は口縁部資料、5は胴部資料である。外反する器形で、削りの後に磨いている。浮島Ⅱ式土器に想定される。

Ⅲ-4類土器(図48-6～16, 図49)

縄文時代前期後半に該当すると思われる底部資料を一括している。図48-8・10の底面には木葉痕が認められ、同図12・14・16の底面には網代痕が認められる。網代痕はいずれも一単位の素材木葉を編み込んでいる。同図7の外面には結節回転文、9の外面には縄文が施文されている。同図15の外面には細かい沈線が施文されている。また、同図10の内面には底部から胴部への立ち上がり部分に輪状に炭化物が付着している状況が観察できる。

Ⅳ類土器(図50-1～14, 写真71)

縄文時代中期・晩期、弥生時代の土器を一括した。いずれも数点しか出土していない。

Ⅳ-1類土器(図50-1・2, 写真71)

本類は縄文時代中期の土器を一括した。1・2の2点のみの出土である。1は波状口縁となるやや外傾した器形である。波頂部には沈線で円文が描かれ、数条の沈線文により口縁部文様帯を区画する。区画する沈線上には数列の三角形の刻みが施文されている。大木6式土器の新しい段階から大木7a式土器にかけての土器と想定される。2はキャリパー形の器形を呈するものと思われる。大木8b式土器であろう。

Ⅳ-2類土器(図50-3～9, 写真71)

本類は縄文時代晩期の土器を一括した。3は近畿系の土器である櫃原式土器に相当する浅鉢形土器である。口唇に沿った2条の平行沈線間及び口縁部と胴部を区切る2条の平行沈線間には刻みが施されている。この内部に刻みを持つ平行沈線によって挟まれた部分は口縁部文様帯と推測され、口縁部文様帯は縦方向の楕円形の刺突によって区画され、この楕円形の刺突を結ぶように3条の弧線が描かれている。4～7は網目状撚糸文が施文された胴部資料である。大洞BC～C1式土器期かと想定している。8・9は大洞BC式土器期の口縁部資料である。

Ⅳ-3類土器(図50-10～14, 写真71)

本類は弥生時代の土器を一括した。10は口縁部に近い無文の胴部資料である。器形は甕形土器であろう。11・13は付加条の施文原体を用いている。12・14は縦走する縄文が特徴的である。天王山式土器であろうか。

Ⅴ類土器(図51, 写真72)

本類には中世陶器を一括した。1は甕の口縁部から肩部にかけての資料で、口縁端部は面取りされて内傾し、下端は下方へ鋭く引き出されている。この口縁端部の幅は1.5～2cmである。肩部は内湾して立ち上がり、頸部は直立気味に立ち上がった後、上部では外反している。頸部から肩部の外面には、タタキメがわずかに観察できることから、器面を叩いて整形していたことが伺えるが、

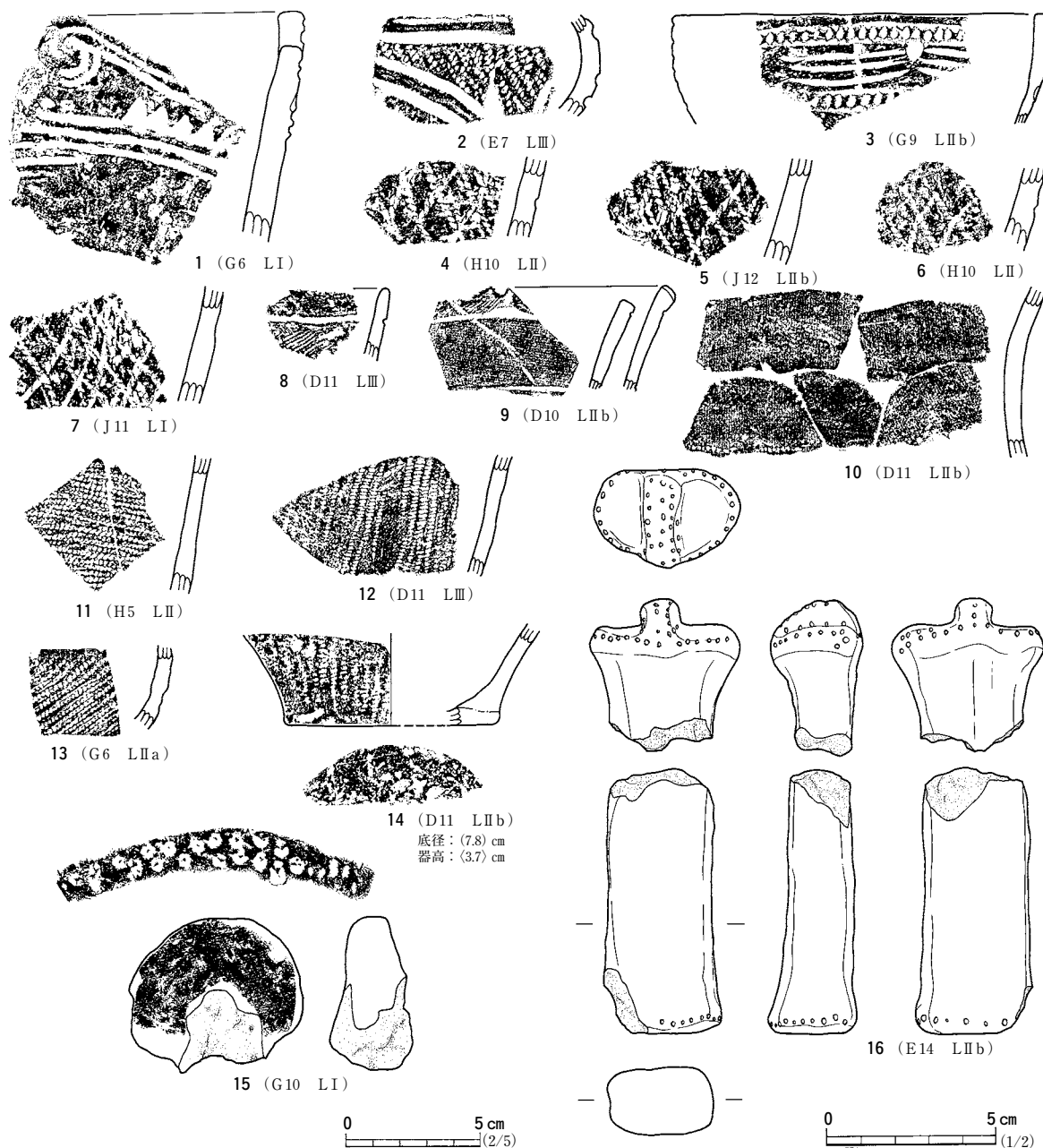


図50 遺構外出土遺物 (12)

頸部は整形後に強いヨコナデによって調整されており、肩部もナデられている。頸部から肩部の色調は灰褐色、口縁端部から内面の色調は黄灰色及び褐灰色である。胎土には砂粒を含み、堅く焼け締まっている。産地は常滑と推測され、中野晴久による常滑編年（中野1995）の6 b 型式（13世紀第4 四半期）の甕と推測される。

2～4は同一個体と推測され、前後の口縁部に注ぎ口が付く双口鉢と推測される。ほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は面取りされて、断面箱形となっている。口縁部付近はヨコナデされ、外面には斜行沈線が数本あり、内面は使用により摩耗している。また、注ぎ口は注ぎ口となる部分の口縁部を指で摘んで外側に軽く押し出して作られている。外面の色調は口縁部で黒褐色、胴部で灰黄

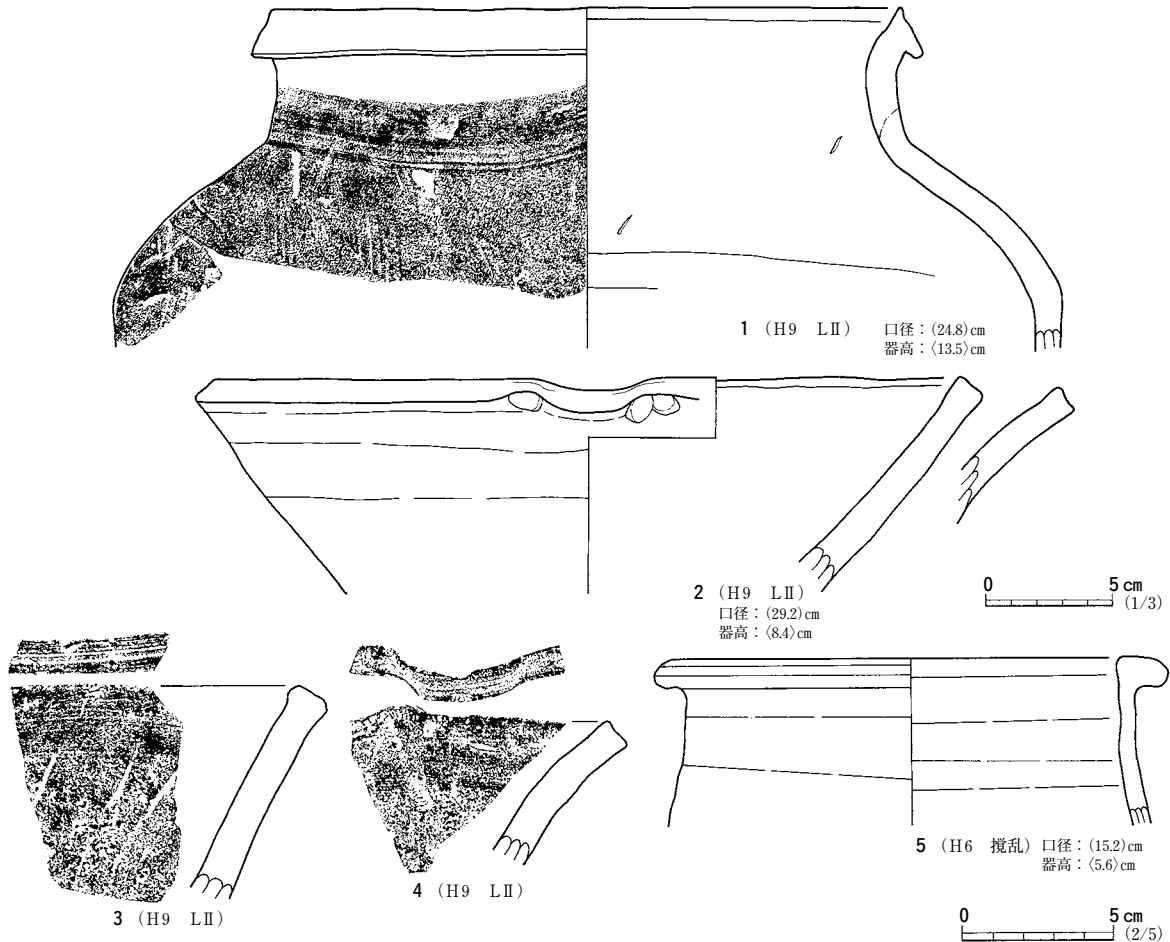


図51 遺構外出土遺物 (13)

褐色，内面の色調は黄灰色である。胎土には砂粒を多く含み，堅く焼け締まっている。産地推定のため蛍光X線分析に試料を供した結果，「西日本からの搬入品」で，1号建物跡から出土した大甕とは生産地が異なることが判明したが，産地は特定されなかった（本書「付編2」FBCJ0022）。おそらく，常滑産と推測されるが，宮城県白石市一本杉窯跡群産の可能性もある。常滑産の場合，中野晴久による常滑編年（中野1995）の7型式（14世紀前半）にあたる。

5は胴部が直立気味に立ち上がる小型の甕で，口縁部は水平方向に外側に引き出されている。色調は内外面とも灰褐色であるが，外面の方が赤みが強く，口縁部の一部に黄灰色の部分がある。胎土には砂粒を含み，堅く焼け締まっている。産地・年代は不明である。（三浦・能登谷）

土製品 (図50, 写真72)

図50-15は扁平な半円状の側面に連続した刺突が施されている。胎土に繊維混和痕が認められる。縄文時代前期の土偶または縄文時代後期の土偶の頭部の可能性が考えられるが，明確ではない。

図50-16は同一地点から出土した。胎土や文様から同一個体と判断した。稜線上に刺突を施している。上部は頭と両腕を表現していると考えられる。棒状の土偶と考えているが，下部は土偶の右足とも考えられ，図示通りの土偶であるか疑問が残る。（三浦）

石器・石製品 (図52・53, 写真74・75)

ナイフ形石器 (図52-1, 写真75)

本調査における唯一の旧石器時代の遺物である。G5グリッドで木根除去の際にLIIより出土した。珪質頁岩を素材としたナイフ形石器で、背面と腹面の加撃方向が異なることから、石核は両設打面のものと考えられる。基部側が折れていて打面は確認できない。末端部の一側縁には急角度の調整加工が施されている。

石 鏃 (図52-2~5, 写真75)

2・3は無茎凹基石鏃, 4は無茎平基石鏃, 5は有茎凸基石鏃である。2は周縁にのみ調整剥離が施されている。3~5は調整剥離が全面に施されている。3・4は比較的厚い剥片を用いている。2・5はチャート製, 3・4は流紋岩製である。

石 錐 (図52-6・7, 写真75)

6は簡単な調整剥離を施して製作されており、錐先は欠損している。7は自然面を残す剥片を素材とし、錐先は簡単な調整剥離により作られている。6はチャート製, 7は珪質頁岩製である。

石 匙 (図52-8~11, 写真75)

いずれも縦長の石匙である。打面方向につまみが作られる傾向があり、つまみは両面加工により製作されている。8は先端が尖る形態で、背面には全面に丁寧な調整剥離が施されるが、腹面は周縁のみの調整剥離がされる。9~11は素材自体のカーブを生かした調整剥離がなされている。9・11は両面とも全面に加工される。10は背面のみ丁寧な調整剥離が施されている。8はチャート製, 9・11は流紋岩製, 10は珪質頁岩製である。

2次加工石器 (図52-12・13, 写真75)

12は珪質頁岩を素材として用いた石器である。両面に簡単な調整剥離を施して鋭角な刃部を作り出している。13は黒曜石を素材とし、基部に調整が見られる石器である。腹縁の基部近くの一側縁に微細な剥離が観察できる。

磨 石 (図53-1)

偏平な凝灰岩の円礫を用いている。両側縁と平坦面の一部に光沢のない摩耗面が認められる。

凹 石 (図53-2~7, 写真74)

2は垂角礫, 3~7は円礫を用いている。2・5は安山岩, 3・6は花崗岩, 4はカタクラサイト, 7は砂岩を素材としている。いずれも平坦面の中央にくぼみが見られる。2は縦に浅いくぼみがあり、裏面の一部には光沢のない摩耗面が認められる。3・4・7は片面のみにくぼみをもち、5・6は両面にくぼみをもつ。

砥 石 (図53-8)

H9グリッドのLIIから出土した。凝灰質頁岩を素材とした砥石で、板状の礫の側縁を使用面としている。使用面には細かな擦痕や光沢が認められる。

第2編 本町西A遺跡

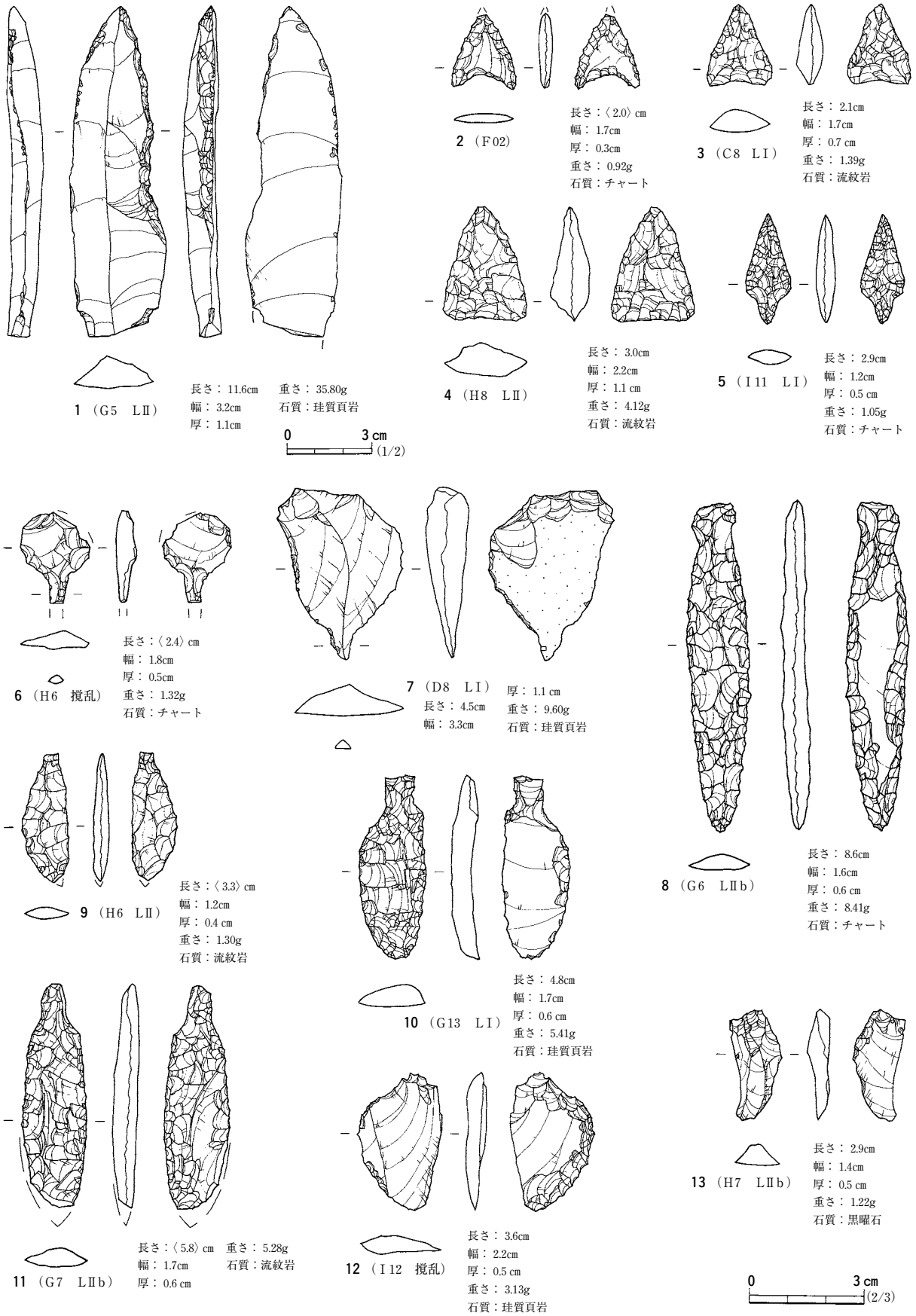


図52 遺構外出土遺物 (14)

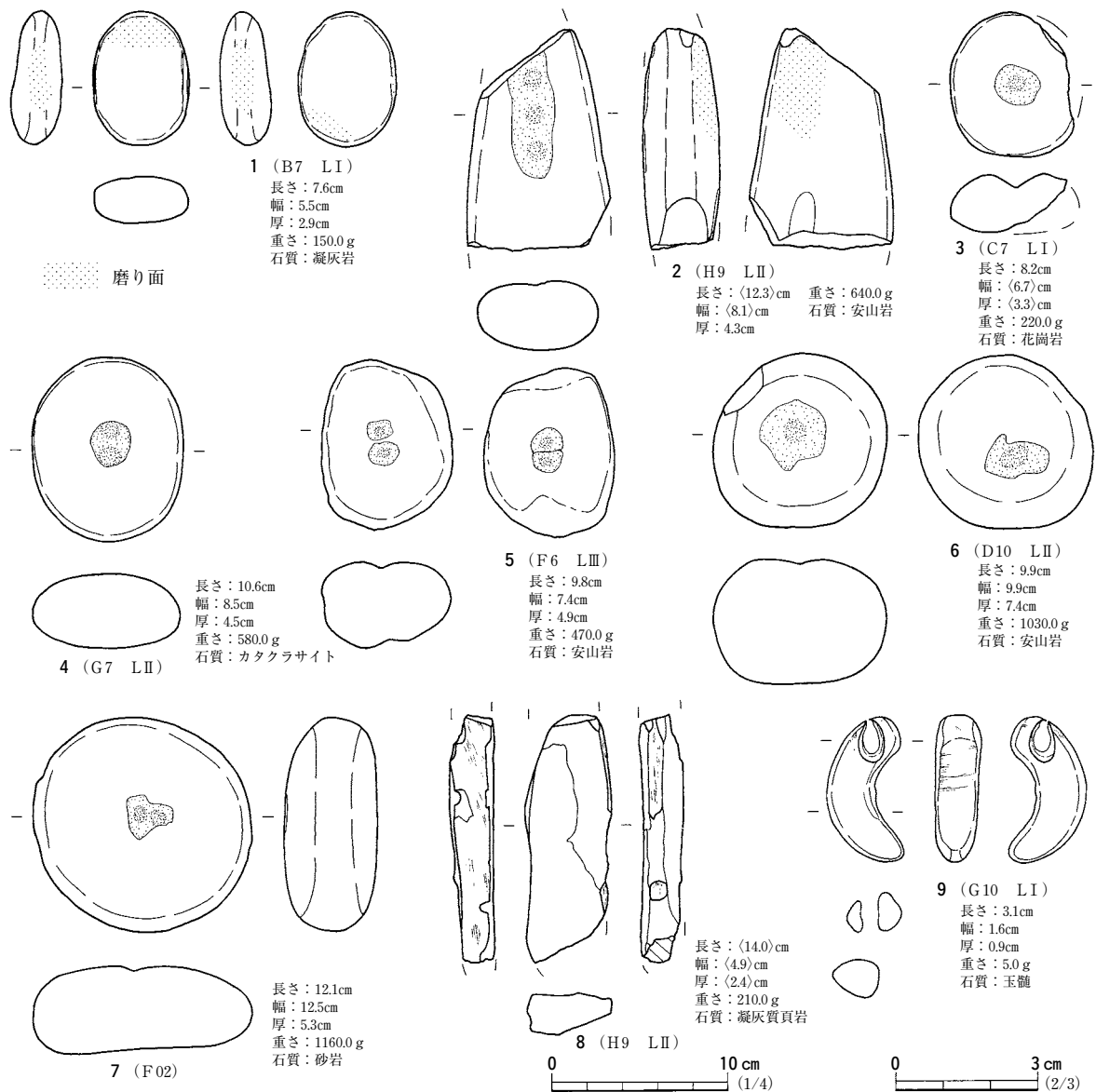


図53 遺構外出土遺物 (15)

勾玉 (図53-9, 写真75)

G10グリッドのL Iより出土した。玉髓製の完形品で、「ノ」の字状の形状をなし、表面は磨かれているが、両面には縦方向の磨痕が見られる。また、両面から楕円状に穿孔しているが、穿孔時に大きく外側まで開けてしまっている。

(三 浦)

第3章 考察

第1節 遺物について

今回の調査で、本町西A遺跡からは縄文時代早期末葉～縄文時代前期初頭及び縄文時代前期後半の遺物が主体的に出土し、その他に、旧石器時代、縄文時代早期後半・中期・晩期、弥生時代の土器片及び石器・土製品、中世陶器が出土した。この内、本遺跡で特徴的な縄文土器及び土製品について、以下において述べることにする。

遺構外出土縄文土器の割合 (図54)

前章で記したように、本遺跡の遺構外より出土した土器をⅠ～Ⅴ類に分類した。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ-1・Ⅳ-2類は縄文土器、Ⅳ-3類は弥生土器、Ⅴ類は中世陶器である。

図54の円グラフは本町西A遺跡の遺構外出土縄文・弥生土器の割合を示したもので、この割合は出土した土器片の点数から算出したものである。この円グラフから分かるように、出土量が多いのは、縄文時代早期末葉～前期初頭のⅡ類土器と縄文時代前期後半のⅢ類土器である。

Ⅱ類土器は遺構外出土縄文・弥生土器全体の50%を占める。Ⅱ類土器の中では、花積下層式に比定されるⅡ-2類土器が主体的であり、遺構外出土縄文・弥生土器全体の36%を占め、縄文条痕文土器のⅡ-1類土器は11%と少量である。

Ⅲ類土器は遺構外出土縄文・弥生土器全体の48%である。Ⅲ類土器の中では、Ⅲ-1類土器が全

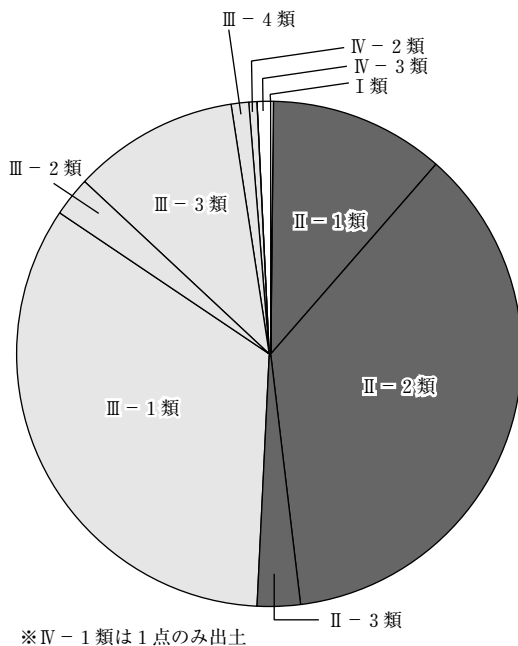


図54 遺構外出土縄文・弥生土器の割合

体の33%と主体的であり、Ⅲ-3類土器が11%、Ⅲ-2類土器は3%と僅かである。

また、縄文時代早期後半に属するⅠ類土器が特定の地点から少量まとまって出土しており、Ⅳ類土器も少量である。

このように、本遺跡出土土器の98%をⅡ類土器とⅢ類土器で占めることから、本遺跡ではⅡ類土器及びⅢ類土器の時期に主に集落が営まれていたことが推測でき、検出した竪穴住居跡・土坑などの遺構もⅡ・Ⅲ類土器の時期に該当するものが多いのも事実である。ここで、Ⅲ類土器について更に詳しくみてみる。

前章で、縄文時代前期後半に属するⅢ類土器を4分類した。Ⅲ-1類は大木式土器、Ⅲ-2

類は諸磯式土器、Ⅲ－3類は浮島式土器、Ⅲ－4類はいずれに属するか不明な土器底部とした。本遺跡は後世の削平・攪乱を受けていることから保存状況が必ずしも良いとは言えないものの、当期の各遺構から3系統の土器片が混在して出土しており、大木式土器の出土量が多く、次いで浮島式土器が多く、諸磯式土器は少量である。諸磯式土器と浮島式土器は関東地方において併行関係が認められ、近年、両型式の土器と東北地方南部の大木式土器との併行関係を示す類例も増加しつつある。本遺跡のように、大木式土器・諸磯式土器・浮島式土器の3系統の土器が共伴して出土した遺跡を県内において渉猟してみたところ、以下の8例を抽出できた。

- ・富岡町上本町G遺跡（宮田^他2002）：主体は大木式土器であり、次いで浮島式土器、諸磯式土器が少数出土する様相を示し、本遺跡と同様の出土土器の割合を示す。
- ・いわき市綱取貝塚（佐藤1996）：大木式土器と浮島式土器が多量に出土している。
- ・船引町仲ノ縄B遺跡（山岸^他1993）：大木4式土器と浮島式土器がほぼ同量出土している。
- ・小野町小滝遺跡（松本^他1993）：大木4式土器の割合が少なく、浮島式土器や諸磯b式土器の出土量が豊富である。
- ・小野町柳作B遺跡（吉田功^他1999）：大木3式土器の出土量が少なく、浮島I b式土器の出土量が多い。
- ・須賀川市関林A遺跡（吉田秀^他1999）：浮島I式土器を主体として、次いで大木3式土器であり、諸磯b式土器は僅かである。
- ・会津高田町冑宮西遺跡（芳賀^他1990）：大木5式土器が多く、興津式土器と諸磯c式土器が客体的となる。
- ・会津高田町鹿島遺跡（本間^他1991）：大木5式土器が主体で、興津式土器は少数である。

以上のように、本遺跡におけるⅢ類土器の時期、縄文時代前期後半の県内には、大木式土器が主体となる遺跡、浮島式土器が主体となる遺跡、大木式土器と浮島式土器が同程度の遺跡があり、一様ではない。このような異なる土器型式の一遺跡内における出土傾向の違いは地域的差によるものなのだろうかとも考えたが、3系統の土器が錯綜する複雑な様相である。縄文人が複雑に移動している根拠となるものであろう。このような様相が県内における当期の特徴なのであろうか。今後の資料の増加を待ちたい。

I類土器について（図55）

本類は、縄文時代早期後半の野島式土器・茅山下層式土器に相当する土器である。個体数は4個体と少ないが、9号土坑、F～H 6グリッドからまとまって出土している。

器形が復元できた図39－5は条痕文を地文とし、表面に細隆起線による区画文を特徴とすることから、野島式土器に比定される。胴部文様帯上半は縦位の直線的な細隆起線を弧状の細隆起線で連絡し、肋骨文のようにも見える。弧状の区画線によって区画された小区画内には一区画おきに縦位の沈線が梯子状に充填されている。胴部文様帯下半には上半とは逆に上に湾曲する細隆起線を配し、

胴部中央で菱形のモチーフが描出されている。菱形内には中心の隆起線を境にして、縦位と横位の沈線が充填されている。このように、上下2種の異なる文様を構成するが、文様帯としては明確に分割されてはいない。

県内において、野島式土器は破片としては出土するものの、器形を復元できる資料は少なく、図39-5と全く同じようなモチーフの土器の類例はない。ここで、菱形文をモチーフとした土器の参考資料として、いわき市竹之内遺跡（馬目1982）と県外の埼玉県大宮市上ノ宮遺跡（新屋1999）の出土土器を挙げ、本遺跡例と比較してみる。

- ・本遺跡例は縦位に垂下する4本の細隆起線以外は弧状の細隆起線で文様モチーフを描くのに対して、竹之内遺跡例と上ノ宮遺跡例は直線的な微隆起線（竹之内遺跡）ないしは細隆起線（上ノ宮遺跡）で文様モチーフを描いている。
- ・文様モチーフは、竹之内遺跡例は見方によっては菱形文にも見えるが、主体をなすのは幾何学文であるのに対して、本遺跡例と上ノ宮遺跡例では波頂部から直線的に垂下する細隆起線を中心に菱形文をモチーフとしている。
- ・本遺跡例では区画内に沈線を充填するのに対して、竹之内遺跡例では区画内には微隆起線を梯子状に充填しており、上ノ宮遺跡例では細隆起線の梯子状文を用いて菱形文を描いている。

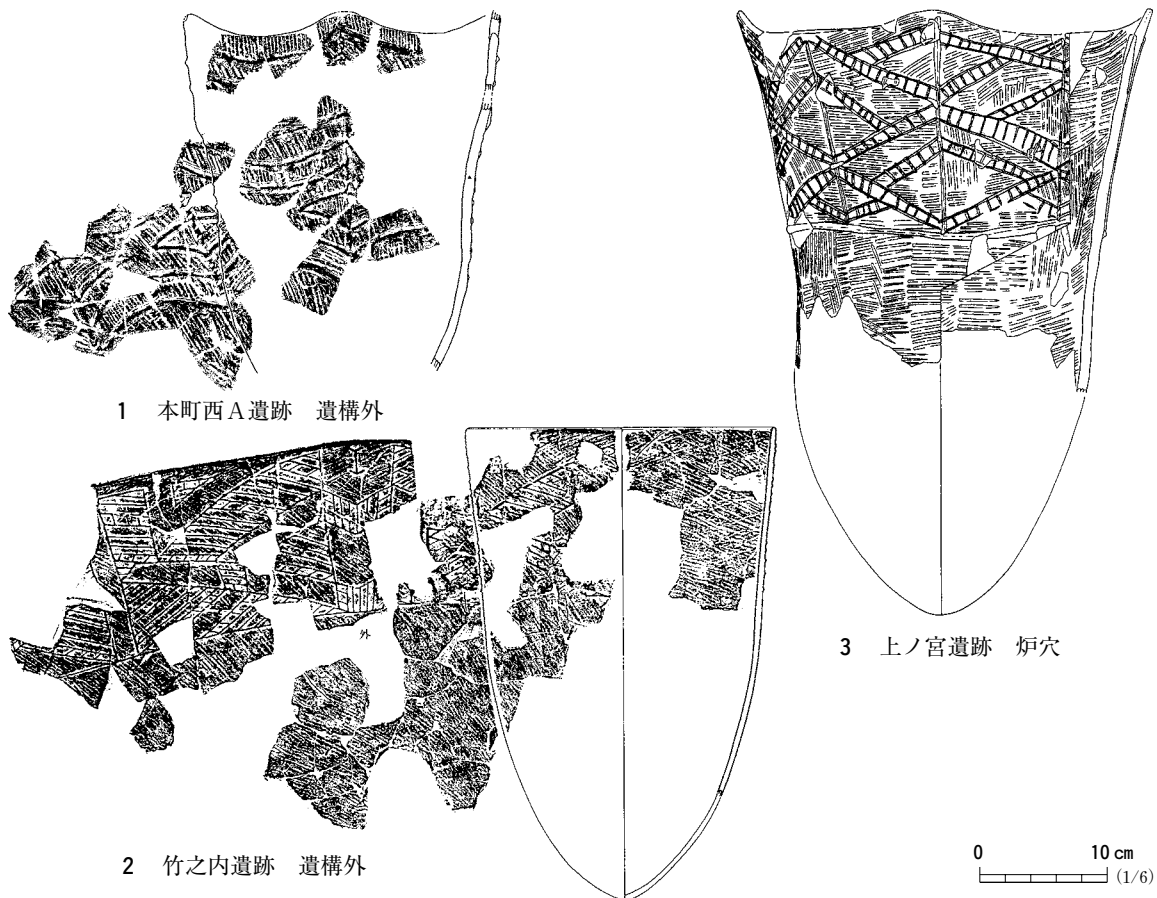


図55 野島式土器の類例

・竹之内遺跡例は口縁が平縁であるのに対して、本遺跡例と上ノ宮遺跡例では4単位の波状口縁である。

以上のように、これら3点の土器には共通点・相違点が認められた。

本遺跡例(図39-5)は、明確に上下2段の文様帯構成を持たないものの、胴部に緩やかにくびれが見られ、胴部文様帯の上下では文様構成が異なる点や縦位隆起線文上に刻み目が施文されることなど、鶺鴒ヶ島台式土器の要素に近似するものと推測される。

Ⅱ類土器について

本遺跡より出土したⅡ類土器は、縄文時代早期末葉から前期初頭の土器である。便宜的に胎土や焼成、条痕文の有無から2種に分類したが、縄文時代前期初頭は土器群が不明瞭な時期であり、Ⅱ-2類と分類した土器にもⅡ-1類に属する土器が混入している可能性は否定できない。

Ⅱ-1類土器の類例として、広野町上田郷Ⅵ遺跡のⅡ群土器が挙げられる(本間^他1999)。

隆帯が無く地文に撚糸文が施文される土器(図31-2, 40-9~11)は上田郷Ⅵ遺跡ⅡA群2類土器に相当する。上田郷Ⅵ遺跡では、ⅡA群土器の中に半截竹管の施文具による弧状・鋸歯状の沈線モチーフを描いた土器(大畑G式土器)も組成されている。本遺跡ではこの手の土器は1点も出土していないが、上田郷Ⅵ遺跡のⅡA群土器を一つの土器群であると信じるならば、本遺跡の上田郷Ⅵ遺跡ⅡA群2類土器に相当する土器は、大畑G式土器に併行するものと推測される。

横位の隆帯をもち撚糸文が施文される土器(図40-8)は上田郷Ⅵ遺跡ⅡB群1類土器、横位の隆帯により区画された口縁部文様帯が狭い土器(図30-1・2)は上田郷Ⅵ遺跡ⅡB群2類土器、断面が三角状の小さな横位の隆帯を挟んで円形刺突が上下に並列される土器(図40-7)は上田郷Ⅵ遺跡ⅡB群3類土器に相当する。前章の16号土坑においても記したが、16号土坑の同一層より図30-2と図31-2の土器が出土した。図30-2は上田郷Ⅵ遺跡ⅡB群2類土器に相当し、図31-2は上田郷Ⅵ遺跡ⅡA群2類土器(大畑G式土器併行)に相当する。この2種の土器はほぼ同時に廃棄された状況で出土していることから、同時期に存在していたと考えるのは当然であろう。つまり、併行関係を有する土器であるようだ。これは、本間宏が上田郷Ⅵ遺跡報文中で提示した大畑G式土器と非結束羽状縄文をもつ土器の一部が同時存在するという仮説を追認できる事例ではないのかと考えられる。16号土坑の一括資料は、不明瞭であった縄文時代早期末葉～前期初頭の土器様相を解明する一助になる好事例である。なお、図40-7のような円形刺突が施される土器は、上田郷Ⅵ遺跡では円形刺突が縦位区画線の一部に取り込まれ、いわき市竹之内遺跡では横位の隆帯上に並列されている(馬目1982)。

その他、上田郷Ⅵ遺跡ⅡC・D群土器に相当する土器も出土している。

Ⅱ-2類土器は今回の調査で多数出土した花積下層式土器に比定される資料である。福島県内の花積下層式土器については、飯館村羽白D遺跡(第1・2次)の成果を基に鈴鹿良一により5段階の変遷が示され(鈴鹿^他1987・1988)、小野町小滝遺跡の成果を基に松本茂によって古・中・新に3

区分されている（松本^他1993）が、ここでは、松本茂の区分を参考にした。小滝遺跡で松本が抽出した文様要素の撚糸圧痕文、沈線文、隆帯文、縄文地文の4種は、本遺跡出土の花積下層式土器でもすべて確認された。

Ⅱ-2類土器はa～gの7種に細分したが、b種は先の上田郷Ⅵ遺跡ⅡB群2類土器に相当する土器である。a・c種は花積下層式土器でも古段階から中段階の資料であり、羽白D遺跡Ⅱ群0類土器に相当するものと思われる。また、d種の内、図41-18は日向前B式土器に類似する資料であるが、胴部文様は縦走縄文ではなく羽状縄文を施文する差異により、花積下層式土器の古段階に位置づけられる。類似する資料に小滝遺跡Ⅲ群1類土器の一部の土器（松本^他1993；図36-1～9）がある。

d～f種は花積下層式土器中段階に当る。撚糸圧痕と沈線や刺突により文様を描いている。花積下層式土器新段階には円形刺突が顕著になるようであることから、円形刺突を用いるe・f種は中段階の中でも若干新しい資料であろうか。図41-24・34・35は矢羽根状の撚糸圧痕や押引文が施文され、異趣の資料である。

Ⅲ類土器について

Ⅲ-1類土器は大木4式土器が多数を占める。文様の特徴からa～iの9種に細分して述べてきた。その中で大木4式土器に含まれるものはc～f・hとiの一部が該当し、他に、2～4号住居跡出土遺物の一部、3号土坑出土遺物（図33-6）、25号土坑出土遺物（図32-25）が挙げられる。大木4式については明確な細分案が出されていないが、沈線を用いて文様を描出するタイプと粘土紐を用いて文様を描くタイプの2種類がある。本遺跡ではいずれのタイプも出土している。前者は結節回転文を用いるc種と沈線文を多用するd～f種で、後者はh種である。

前者は大木3式土器の流れを汲み、沈線による曲線文や結節の回転文による綾絡文が特徴的である。飯館村羽白C遺跡Ⅱ群7類土器の一部（鈴木^他1989）、同村岩下D遺跡Ⅳ群2類土器（鈴木^他1986）、船引町仲ノ縄B遺跡Ⅲ群1類土器の一部（山岸^他1993；図39-1・2以外）に類例を求めることができる。4号住居跡出土土器（図15-1）は頂部から垂下する3条の波状沈線と横位の波状沈線により構成されているが、これは仲ノ縄B遺跡出土のⅢ群1類土器の綾線文で施文する文様を沈線に置換しているものと考えられる。また、図44-4の沈線によるモチーフは、宮城県迫町糠塚貝塚出土の大木2b式土器まで系統を辿ることができ（興野1984）、図44-5に見られるような山形状への中途とも考えることができる。図44-7～10は同図4のモチーフを発展させた文様で、沈線文様の直線部分が長くなり蕨手状に変化したものとも考えられる。このことを考慮すると、若干の時間差があるのかもしれない。

後者は粘土紐を用いて前者の沈線のモチーフである曲線的な幾何学的文様を描き、口唇部に太い粘土紐を鋸歯状に施す様は大木5式土器を彷彿とさせるが、本遺跡内においては出土量が少なく、当該期の県内の他の遺跡、飯館村羽白D遺跡Ⅱ群3類土器の一部（鈴木^他1988）や仲ノ縄B遺跡Ⅲ群

1類土器の一部（山岸他1993；図39-1・2）においてもこの傾向は同様である。粘土紐を用いて幾何学文を描く文様が主体の仙台湾周辺とは大きく異なるようである。

Ⅲ-2類土器は諸磯b式土器である。Ⅲ-1・3類に比べ出土量が少なく、遺構内から出土したのは1号住居跡（図7-16・17）と3号住居跡（図12-14・15）の資料である。口縁部が内湾するキャリパー形の深鉢で、縄文の地文上に浮線文を貼り付けている土器が主体である。例外として、図45-11は粘土紐を貼り付けた後に縄文を施文している。図45-9・10のように口唇部上には、刻みのない浮線文が貼り付けられる例も認められる。なお、わずか2点のみであるが、爪形文による施文も認められ、小破片のため文様構成は不明であるが、曲線的な文様構成をとるものと思われる。また、今回の調査では県内でも珍しい獣面突起が2個体出土している。この獣面突起は諸磯b式土器に特徴的であり、口縁部に4単位ほどで飾られる。獣面突起は簡略化されずに丁寧な製作で、諸磯b式土器中段階の前半の資料である。

Ⅲ-3類土器は遺構外その他、1号住居跡（図7-9～15）、2号住居跡（図9-7～13）、3号住居跡（図12-12・13）、4号住居跡（図15-8～12）、7号住居跡（図19-6）、2号土坑（図32-9～11）、3号土坑（図32-1・12）、8号土坑（図32-18）、20号土坑（図32-6）、22号土坑（図32-21・22）、25号土坑（図32-26・27）など多くの遺構からも出土している。Ⅲ-3類土器の多くは浮島Ⅱ式土器と判断した。浮島Ⅱ式土器と浮島Ⅲ式土器の間には、編年を左右する修正が行われてきた経緯がある。浮島Ⅲ式土器のメルクマールとして口縁部条線帯のある幅広爪形文をあげるものと三角文の出現を挙げるものがあるが、今回の分類においては、三角文の出現により浮島Ⅲ式土器とする松田光太郎の編年に準拠した（松田1995）。本遺跡出土遺物においても、口縁部に条線帯を持つもの（図47-1・4・5・12）と条線帯を持たないもの（図47-6・10・11）が出土している。両者には胎土や焼成状況などに差異が認められ、これは時間差によるものなのだろうか。口縁部に条線帯を持つ前者に関しては、条線が斜位または粗い施文であり、浮島Ⅲ式土器に近似する資料と判断した。

本遺跡において、大木4式土器と諸磯b式土器中段階前半の土器及び浮島Ⅱ式土器の後半の土器が混在して出土している。これらは明確な関係を有し出土しているわけではないが、出土する型が限定されていることから、共伴する資料であると考えられる。また、出土量の多い大木式土器と浮島式土器は本遺跡が位置するこの地域が東北地方の大木式土器文化圏と関東地方東部の浮島式土器文化圏に含まれていたことの傍証となろう。なお、当該期の関東地方には諸磯式土器文化圏も存在する。今回の調査で諸磯式土器が少量であったことは、本遺跡と諸磯式土器文化圏の間に浮島式土器文化圏が存在したことと諸磯式土器文化圏が本遺跡からは遠隔地であったことに起因するものとも考えられる。この問題は、今後、資料の増加を待って検討していく課題であろう。

Ⅳ類土器について

Ⅳ-2類とした縄文時代晩期の土器の中で、図50-3は西日本磨研土器様式の範疇に含まれる近

畿地方の榎原式土器に比定され、関東・東北地方でも散見される。図50-3は浅鉢形の土器である。県内でもいわき市薄磯貝塚（大竹1986）、飯館村日向南遺跡（鈴鹿他1987）・羽白C遺跡（鈴鹿他1988）・湯舟渡戸遺跡（芳賀他1982）から出土している。薄磯貝塚では大洞B式から大洞BC式にかけての文化層より出土している。本遺跡では遺構には伴わないものの、大洞BC式土器に比定される土器片が僅かに出土している。理化学的な分析を行っているわけではないが、胎土や焼成より近畿地方からの搬入品ではなく、本遺跡周辺または当地域と近畿地方との間の地域で模倣された土器である可能性が高いと考えられる。本資料を含め、今後両地域の編年対比が重要となる。

土製品について

E14グリッドのほぼ同地点より、図50-16に図示した土製品が欠損した状態で出土した。周囲には何らかの施設も確認できなかった。この土製品については、まず「何であるか」と言うところから始めなければならない。私見ではあるが、この土製品は土偶と判断している。上半は頭・両手・胴体を表現し、下半は胴体・両足を表していると思われる。上半は長さ5.6cm、幅5.5cm、厚さ3.4cmである。下半は長さ9.8cm、幅4.1cm、厚さ3.3cmである。胎土には3mm程度の砂粒が混入するが、焼成は良い。手のひらで握って成形した断面長方形の棒状の体部である。体部には稜線上や変換点に串状の施文具で刺突している。手足は未発達で、顔や体部の表現もされていない。上半と下半は胎土や焼成、文様構成から同一個体と判断しているが接合しない。しかし、このような特徴を持つ土偶の類例が見あたらず、時期も特定できていない。本遺跡の生活痕跡は縄文時代早期末葉から前期初頭、縄文時代前期後半に主に認められ、遺構に問わずに縄文時代早期後半・中期・晩期、弥生時代の土器が少量出土している程度であることから、本遺跡の主体の時期である縄文時代前期の土偶の可能性が高いのではないかと。縄文時代前期には板状土偶が多く製作されるようである。本資料は頭部・両手が簡易な表現である点など板状土偶に近似する要素をもつが、けっして板状ではない。板状土偶以外に類似する土偶の例として、縄文時代前・中期に盛行した円筒土器文化の十字形土偶、縄文時代後期の体部と右足などが本例に近い^{註1}。しかし、いずれも断定するには至らない。類例の少ない状態での検討はこの程度に止め、資料の増加を待って再度検討したい。

縄文土器の産地について

近年、土器の胎土を蛍光X線分析して産地の同定を進める研究が行われていることから、今回調査した本町西A遺跡と上本町G遺跡より出土した縄文・弥生土器片に関しても産地を推定するため、三辻利一教授に蛍光X線分析を依頼した。本遺跡からは8点、上本町G遺跡からは20点の土器片を分析に供した。分析の結果、K、Ca、Rb、Srの元素比率の分布図より、偏在して分布する3グループ（A～C群）とそれに属さない試料（未分類）に分かれ、本遺跡出土の土器は以下のように分類された。I類土器（野島式土器：1点）はB群、II-1類土器（縄文条痕文土器：1点）はC群、II-2類土器（花積下層式土器：1点）はA群、III-1類土器（大木4式土器：2点）はB

・C群, III-2類土器(諸磯b式土器:1点)は未分類, III-3類(浮島II式土器:1点)はA群, IV-3類土器(弥生土器:1点)は未分類という結果が得られた。三辻教授によると, A・B群に属する試料はそれぞれまとまった分布を示し, 同地域・同素材であり在地産の可能性が高く, C群については外部からの搬入品である可能性が高いとされている。また, 未分類とした試料はK, R b量が少ないことから, 東北地方太平洋側の製品で, 福島県内のものであるとすれば, 太平洋側の浜通り地域のものであろうと指摘されている。

ここで, この未分類とされた土器に注目してみると, 本遺跡の未分類とされた土器片は諸磯b式土器であり, 上本町G遺跡の4点の諸磯b式土器の内3点が未分類であった。つまり, 本遺跡と上本町G遺跡から分析に供した諸磯b式土器5点中4点が未分類ということになる。本遺跡と上本町G遺跡出土の諸磯b式土器の産地はどこなのであろうか。

考古学で搬入品・搬出品という場合, 土器については器形・成形技法・文様(帯)構成・施文技法・胎土などの観点から検討するのが一般的である。器形・成形技法・文様(帯)構成・施文技法は人間が製作者として介在することより, 伝統・流行・経験などに左右される性質があり, 搬入品であるか模倣品であるかは型式学的に識別される。一方, 胎土は製作者に因らず, 素地粘土が採取された地域が特定されることで, その粘土が採集地から遠隔地へ運ばれた場合を別として, 製作地を直接表しているものと思われる。

以下では, 5つの観点から本遺跡と上本町G遺跡の諸磯b式土器が搬入品であるのかどうかを検証してみたい。

- ①胎土: 肉眼観察においては, 本遺跡の諸磯b式土器は大木式土器及び浮島式土器と大きな相違がない胎土の密度・焼成状態であった。「関東地方においては, 浮島式土器に比較して諸磯式土器の胎土には石英粒が混入し, 粗い胎土が目立つ^{註2)}」が, 本遺跡出土の諸磯b式土器は確かに砂粒が混入するものの, 浮島式土器と比較しても際立つものではなかった。
- ②器形: 今回の調査において器形を復元できる資料は少なかったが, 口縁部が内湾する資料が数点出土し, おそらくキャリパー形の深鉢に復元できるものと推定される。また, 獣面突起が2点出土している。
- ③成形技法: 明確に輪積み痕が確認できる資料は少ないが, すべての土器は輪積みにより形作られていると思われる。本遺跡出土の諸磯b式土器の器厚は9~10mmと一定し, キャリパー形の肥厚する内湾部分では12mmを測る。大木式土器の器厚は6~11mm程度, 浮島式土器は10mm前後が最も多いが, 15mmの器厚を持つ土器もある。内面調整では浮島式土器が特に平滑に仕上げられており, 諸磯b式土器の器壁はそれには及ばない。
- ④文様(帯)構成: 口縁部は細い粘土紐を貼付する浮線文によって曲線を描いている。
- ⑤施文技法: 本遺跡における諸磯b式土器の文様は1点のみが変形爪形文である以外, すべて浮

線文が施文されている。縄文を地文とし、その上に浮線文を貼付したタイプと無文地に浮線文を貼付し、その上に縄文を施文するタイプの2種があるが、関東地方にも両タイプが存在する。また、本遺跡出土の2点の獣面突起及び上本町G遺跡出土の1点の獣面突起は簡略化せず丁寧に製作され、技法・表情においても関東地方の獣面突起とほとんど変わらない。

以上の②・④・⑤より、本遺跡と上本町G遺跡の諸磯b式土器の土器は、関東地方の諸磯b式土器中段階の資料と何等変わるところのない資料といえ、両遺跡では同時期の土器の中で出土量が少なく客体的な存在である。

ある地域に普遍的に存在する土器群の中に、異なる地域に分布域をもつ土器が出土する例がままある。この土器は搬入品ないしは模倣品と考えられるが、その搬入品・模倣品が存在する背景について、5通りのパターンが考えられる。

ケース1：製品のみが移動するケースで、A地域で製品として完結した土器がA地域からB地域へ運び込まれた場合である。物々交換などの交易が考えられるだろうか。搬入した製品にはB地域の影響が見られることはない。

ケース2：製作者と土器がともに移動するケースで、A地域で製品として完結した土器とともに、製作者もB地域へ移動した場合である。主に、婚姻や住み替えが考えられるだろう。搬入した製品にはB地域の影響が見られることはない。土器の質に差異はなく、ケース1との区別が困難であるが、出土する土器の量が一つの目安になると考えられる。ケース1と比較すると、ケース2の方が人間とともに移動するという点で、土器の量が多くなると考えられる。この製作者が持っていく土器と移動先の粘土で作ったA地域の土器が混在する。

ケース3：製作者のみが移動するケースで、人間がA地域からB地域へ移動して、B地域の粘土を用いてA地域の土器を作る場合である。住み替えや婚姻などが考えられるだろう。器形・成形技法・文様（帯）構成・施文技法などは製作者がA地域の人間であり、A地域の土器と差異はなく、胎土のみが異なる。

ケース4：土器の情報が移動するケースで、土器に関する器形・成形技法・文様（帯）構成・施文技法などが人間を介在して伝達される場合である。人間と人間の交流があった場合に成立する。B地域の人間がA地域の人間から得た土器の情報を基にB地域で土器を製作する。製作者がA地域の人間でないという点が大きく、模倣品の域を出ない。

ケース5：A地域から搬入された土器をB地域の人間が模倣して作ったケースで、見本が目の前にある分、ケース4よりはリアルである。

本遺跡及び上本町G遺跡出土の諸磯b式土器は、先の①及び蛍光X線分析の結果から、諸磯式土器の主たる分布域の西部関東からの搬入の可能性は低いといえ、ケース1は考えられないが、両遺跡の諸磯b式土器に関しては、先の②・④・⑤で記したようになりに関東的であることから、残る

ケース2～5に関しては、ケース2・3、ケース5、ケース4の順に可能性が高いように思える。なお、両遺跡の諸磯b式土器はその中段階の資料のみであることから、西部関東方面からの人あるいは土器の移動の時期が限定できる点は興味深い。

最後になるが、蛍光X線分析で未分類とされ、「東北地方の太平洋側の製品で、福島県内のものであるとすれば、太平洋側の浜通り地域のものである可能性」が指摘されたことから、両遺跡が所在する富岡川流域以外の地域、例えば、いわき方面から搬入された可能性、遺跡近隣の特別な粘土を用いた可能性、更には、県内で他に諸磯b式土器が出土した中通り地方南部からの搬入の可能性を提起しておきたい。

(三 浦)

注1 吉田秀享氏と佐藤啓氏の御教示による。

注2 流山市教育委員会増崎勝仁氏の御教示による。また、流山市長崎遺跡出土の諸磯式土器・浮島式土器を実見し、確認した。

第2節 遺構について

今回の調査では竪穴住居跡8軒、掘立柱建物跡2棟、土坑34基などが検出された。以下では、縄文時代の竪穴住居跡について述べる。

竪穴住居跡について (図56)

本遺跡より検出された竪穴住居跡の内、平面形が不明瞭な7・8号住居跡以外の竪穴住居跡に関して、平面規模の分布図を図56-1に示した。横軸には住居跡の長軸長をとり、縦軸には住居跡の短軸長をとった。この図から判るように、明確に2つのグループに分けることができ、それぞれを1・2類とした。

1類：長軸長が3m弱の竪穴住居跡（5・6号住居跡）

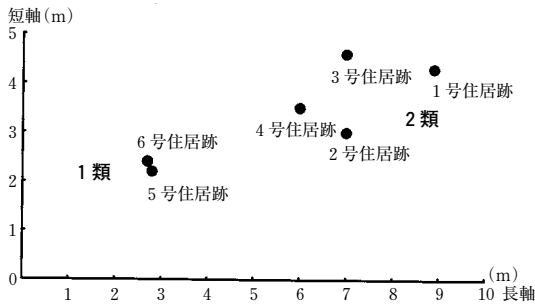
2類：長軸長が6mを超える竪穴住居跡（1～4号住居跡）

各類型ごとに遺跡内における分布や住居内施設などの特徴を概観することにする。

1類住居跡は5・6号住居跡が該当する。出土土器よりいずれも縄文時代早期末葉～前期初頭に属する小型で方形を基調とした住居跡である。本町西A遺跡内における遺構の分布は、2軒とも北側の崖際より約40～50m離れた中央部の平坦面に位置する。いずれの住居内施設も2基の柱穴と1基の屋内炉のみの簡単な作りである。柱穴は床面の中央より一側壁の壁際に寄って構築されている。2本の柱穴以外、他の柱穴が確認できず、1類住居跡の上屋構造は不明である。炉は柱穴間に地床炉を設けている。床面の熱変化が厚く、長期間強い火を受けていたことが想定できる。2軒の住居内施設の配置・規模・数は同一であり、規格性があると考えられる。

1類住居跡と同時期の施設として、16・21・33号土坑が該当する。これらの土坑は1類住居跡が位置する中央部から北に約30mの丘陵北端にある。1類住居跡と該期の土坑は占地を異にしている。

1. 本町西A遺跡



2. 福島県内の大型住居

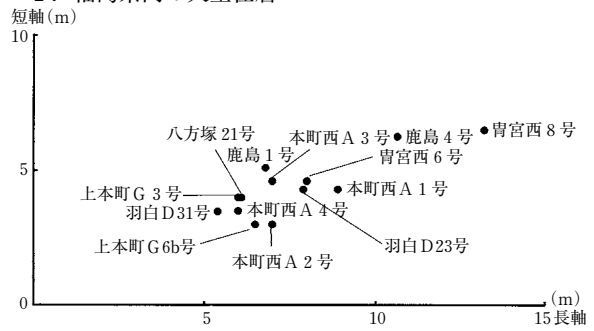


図56 竪穴住居跡の平面規模

これは住居域と土坑などの貯蔵域を区別して小規模な集落を営んでいたと考えられる。

2類住居跡には1～4号住居跡が該当する。出土土器より縄文時代前期後半に属する長方形を基調とした大型の住居跡である。本町西A遺跡内における遺構の分布は河岸段丘上の北端を占地し、特に1・2・4号住居跡は崖際より10mと離れない平坦面に位置している。しかし、3号住居跡に限っては崖際から約30m南に離れた中央部平坦面に位置する。2類住居跡同士の距離は20m前後を測ることができる。住居構築時には一定の距離を保ち、住居を配置していたような規則性が伺える。2類住居跡の規則性については遺跡内における平面分布だけでなく、遺構内の付属施設においても看取できる。本類に特徴的な住居内施設として、多数の柱穴と複数の炉を持つことが挙げられる。柱穴は周壁際の床面に巡らす壁柱穴と床面中央部に1本存在する「センターピット」(現報告では仮に「センターピット」と呼称する。)がある。「センターピット」をもつ住居跡は、1～3号住居跡が挙げられる。炉はすべての住居跡について複数存在し、床面中央の長軸線上に「センターピット」を挟み込む様にして2基または3基確認できる。2類住居跡は1類住居跡と比較して複雑な住居内施設が有りながら、各施設の配置・規模・数などは規格化されている印象を受ける。

2類住居跡と同時期の遺構として、1～3・8・14・15・17号土坑が該当する。これらの土坑は2類住居跡の周囲に位置し、丘陵北半部に分布する。これらの土坑の大半は貯蔵穴的な役割を果たしたと推測され、貯蔵穴と住居跡が遺跡内の北側から多く検出されることより、2類住居跡の時期には主に丘陵北半部を生活の場としていたと推測できる。また、生活区域の北端の急崖には残滓などを投棄していた可能性も否定できない。

1・2類住居跡それぞれにおいて、規模・平面形はもちろん、住居跡の分布・住居内施設も酷似する。縄文時代早期末葉～前期初頭に比定される1類住居跡は、ほぼ同時期に2棟が併存して小さな集落を営んでいたと推測できる。縄文時代前期後半の2類住居跡の集落は、隣接する住居跡と一定の距離を保ち、住居跡の周囲に貯蔵穴状の土坑を構築していたと考えられる。2類住居跡も本町西A遺跡内では、同時期に併存して集落を構成していたと推測できる。

2類住居跡について (図56)

本町西A遺跡では、便宜的に2類住居跡とした、長軸が6mを超える比較的大型の竪穴住居跡が

4軒検出されている。この4軒の竪穴住居跡は全て縄文時代前期後半の住居跡である。以下では、本町西A遺跡検出の2類住居跡の特徴を再確認し、県内の他の大型の住居跡との比較検討を行い、本遺跡2類住居跡の性格を考えてみたい。

本町西A遺跡の2類住居跡に見られる共通点を挙げてみたい。「センターピット」を持つこと、複数の炉を持つこと、長軸方位が北西-南東で同一であることの3点が挙げられる。

2類住居跡内においてピットの位置は壁側に寄る傾向があり、壁際を巡り壁柱穴状になる。また、本住居跡で特徴的である床面中央に位置する「センターピット」は、1～3号住居跡で認められる。「センターピット」は各住居跡の他の柱穴としたピットよりも規模が大きく、深い。1号住居跡のP15、2号住居跡のP12、3号住居跡のP13がそれにあたる。3軒とも「センターピット」は支柱穴であると判断している。2号住居跡報文中では中央に位置するP12とやや中央寄りのP11・13の3基を支柱穴と考え、P1～9は壁柱穴として上屋を支えていたと推測した。

複数存在する2類住居跡の炉は、床面中央の長軸線上に「センターピット」を挟んで2基ないしは3基位置するようである。1号住居跡では2基、2号住居跡では3基、3号住居跡では2基確認している。地床炉が主であるが、2号住居跡の炉3と4号住居跡の炉2は一段掘り窪められた掘込炉であり、4号住居跡の炉2は2号住居跡炉3よりも大きく掘り窪められている。

各住居跡の長軸方位がほぼ同一であることは、図3の遺構配置図でより鮮明であり、2類住居跡とした1～4号住居跡は、北西-南東を意識した集落構成であることが理解できる。この規則性は2類住居跡が同時併存した傍証となるのではないだろうか。

2類住居跡のような比較的大型の住居跡の特徴は、本町西A遺跡に限ったものなのであろうか。管見に触れたもので平面形・住居内施設について考えてみたい。県内での当期に該当し、本町西A遺跡2類住居跡のような長軸長7～9mサイズの「長方形大形住居跡」と呼ばれる住居跡は、大木3式土器期の福島市八方塚A遺跡21号住居跡（山内他1999）、大木4式土器期の飯館村羽白D遺跡23・31号住居跡（鈴鹿他1988）、大木5式土器期の会津高田町胃宮西遺跡3・6・7・8・11号住居跡（芳賀他1990）、同町鹿島遺跡1・4号住居跡（本間他1991）が挙げられる。また、本遺跡に隣接する上本町G遺跡3・6b号住居跡も該当する（宮田他2002）。県内において、当期の住居跡の検出例自体少なく稀である。

図56-2に上記の住居跡の平面規模の分布図を示した。なお、平面形が推定や一部破壊されている住居跡については用いなかった。胃宮西遺跡8号住居跡と鹿島遺跡4号住居跡の長軸長が10mを超えている以外、平面規模は本町西A遺跡2類住居跡と大差はない。

上本町G遺跡例以外では以下のような共通項がある。住居内施設は柱穴が4基以上あり、主軸と長辺の周壁との中間に帯状に検出される傾向がある。本遺跡検出の2類住居跡の柱穴位置よりはやや内側に寄るようである。床面中央に「センターピット」は見られない。炉は床面中央の主軸線上に列点状に位置する点で本遺跡2類住居跡と同様であるが、掘込炉は認められない。それに対して、上本町G遺跡3・6b号住居跡では壁際に壁柱穴が巡り、複数の炉がある。上本町G遺跡3号住居

跡には「センターピット」、同遺跡1号住居跡には掘込炉が認められる。上本町G遺跡は本町西A遺跡と隣接する地域に位置することで、同様の住居内施設を持っていると思われる。

本遺跡2類住居跡のような大型の住居跡の機能としては、日本海側を中心に検出される長軸長が15mを超えるような大形住居跡については集会所・祭祀遺構・共同作業所などの諸説が議論されてきた。県内の長軸長7～9mの住居跡に対して、これらの説をそのまま当てはめることは適当でない。芳賀英一は冑宮西遺跡で検出の大型の住居跡は複数家族の共同家屋が妥当ではないかとの見解を示した(芳賀他1990)。冑宮西遺跡では、主軸方位を同一にする複数の住居跡が検出されたことから、集落構成において計画性が伺われる本町西A遺跡と類似し、拝聴すべき指摘である。本町西A遺跡検出の2類住居跡についても集会所・祭祀遺構・共同作業所ではなく、遺跡内に同形態・同時期の住居跡が複数併存すること、炉や柱穴などの住居内施設に規格性が認められることから一般的な家屋であると推測できる。複数の炉について、武藤康弘は炉を一つの居住単位としてみた場合、核家族かそれに近い規模の単位集団の複合居住家屋とも捉えることも民族例から可能ではないかと示唆した(武藤1985)。本町西A遺跡2類住居跡は、床面中央の「センターピット」を境にして炉が分割できることから複数家族の共同家屋である可能性もある。

なお、平面形が不明瞭であるが複数の炉を所有することから、8号住居跡は2類住居跡の可能性があり、これも含めると当時期の住居跡はすべて2類住居跡となる。このように、本町西A遺跡と上本町G遺跡では長棟の竪穴住居跡は特別な存在ではなく、一般的な居住形態であったと考えられる。規模が大きく深い「センターピット」は、平面形に合う大きな上屋を支えるためであり、列点状の複数の炉は、縦長になった住居形に合わせた特有の形態なのであろう。近年、檜葉町大谷ノ原遺跡で縄文時代前期前葉と推測される7.5×3.6mの長楕円形の住居跡が検出されている(山元他2001)。浜通り地方において竪穴住居の長棟化の傾向は、縄文時代前期前葉から見られるようである。

(三 浦)

第3節 ま と め

本町西A遺跡は平成7・8年度の試掘調査の結果、出土遺物より縄文時代早期から晩期にかけての集落遺跡で、特に、縄文時代前期初頭の遺物が多いことから、当期のこの地域における代表的集落遺跡であることが推測されていたが、今回の調査で更に多期に亘る遺跡であることが判明した。ここでは、前章において詳述した事実報告及び前節における考察をもとに、今回の調査成果についてまとめてみることにする。

本遺跡の上限は、調査区北端付近より出土したナイフ形石器から、後期旧石器時代に溯るものと推測される。このナイフ形石器は基部の一部を欠損しているが、両設打面の石刃核から素材剥片を取り出したもので、基部に細かい調整が施されていることから東山型ナイフ形石器の部類に入る。東山型ナイフ形石器の類例は東北地方を中心に見られるが、それらの出土層位が遺物年代を決定す

る際に重要である。南九州の始良カルデラを噴出源とする始良Tn火山灰（AT）は、汎日本的に見られる広域テフラであり、おおよそ2.2～2.5万年前の年代が与えられている。この始良Tn火山灰を鍵層としてナイフ形石器の年代が推測でき、本遺跡のLVが始良Tn火山灰に相当する層であるとの教示を柳田俊雄東北大学総合学術博物館教授より得ているが、本遺跡のナイフ形石器は遺跡基盤層としたLV以下から出土したものではなく、木の根の攪乱坑より出土したものであり、年代の特定にはいたっていない。この木の根の攪乱はLV以下まで達していることから、本遺跡のナイフ形石器は2.2～2.5万年前よりも遡る可能性もあるが、ここでは、おおよそ1.4～2万年前の石器と推測しておくことにする。なお、本遺跡の北西約3.6kmの日南郷遺跡で石刃が1点出土しており、南接する榎葉町ではナイフ形石器が採集される天神原遺跡や始良Tn火山灰下より石器が出土する大谷上ノ原遺跡が知られている。

その後、縄文時代早期後葉までは人の痕跡は認められない。縄文時代早期後葉には、遺構は9号土坑以外に認められなかったものの、野鳥式土器期の土器が9号土坑近くの1地点からまとまって出土していることから、9号土坑付近に小規模な生活の場が営まれていたことが推測される。

本遺跡が最盛期を迎えるのは、更に時期が下った縄文時代早期末葉から前期初頭にかけてと前期後半である。今回の調査で出土した遺物の大半と竪穴住居跡を始めとした遺構はこれらの時期に帰属するものと推測している。

縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての時期は、大きくⅡ-1類土器の時期とⅡ-2類土器の時期とに分れる。Ⅱ-1類土器期は広野町上田郷VI遺跡Ⅱ群土器期に比定され、上田郷VI遺跡の成果により、本土器期は大畑G式土器に併行する時期と推測される。本遺跡の5・6号住居跡及び4・16・21・33号土坑は本類土器期に帰属する。また、遺物の出土傾向としては、調査区北側より広く出土しているが、両住居跡は東へ延びる舌状の河岸段丘面のほぼ中央部にやや近接して存在し、16・21・33号土坑は北の段丘崖に近い部分に存在することから、本時期の集落は両住居跡が存在する河岸段丘面ほぼ中央部を居住域、その北方を土坑域（貯蔵穴？）としていたものと推測され、6号住居跡に近い5号土坑も当期の居住域を構成する遺構と考えておきたい。また、両住居跡は形態・規模・住居内施設等近似した特徴を持っていることから、同時ないしは相前後して存在していたものと推測される。

Ⅱ-2類土器は花積下層式土器に比定されるが、この時期の遺構は明確にできなかった。調査区外に遺構が存在するのであろうか。なお、Ⅱ-1・2類土器は本遺跡の推定範囲内から広く表面採集できることから、この範囲が当期の集落範囲と推測した場合、広域であることが分かる。

縄文時代前期後半の大木4式土器期になると、縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての時期には小型であった竪穴住居跡が長楕円形を基調とした大型のものへと変化して集落を構成している。1～4号住居跡が当期の住居跡で、いずれも調査区北側に存在しているが、その中で1～3号住居跡は形態・規模・住居内施設等の特徴が近似し、主軸方位をほぼ同一にしていることから、この3軒は同時ないしは近接した時期に計画的に建てられたものと推測される。また、今回の調査で検出

された土坑の内、縄文時代早期後葉に帰属すると推測された9号土坑と縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての時期に帰属すると推測された5基の土坑以外の土坑に関しては、これらの住居跡に伴う可能性があるものも存在すると推測している。この時、遺物の出土傾向からしても、集落は調査区北側、つまり、河岸段丘面北半部に営まれていたものと推測され、集落の範囲は調査区内に止まらず、調査区外の東方及び西方にさらに延びるものと推測している。なお、沢を挟んで本遺跡の北に隣接する上本町G遺跡からも当期の集落が発見されている。本遺跡が標高約50mの段丘面に存在するのに対して、上本町G遺跡は標高約74mの段丘面に存在しているという立地上の違いが見受けられるが、それぞれの時期は大木4式土器期で共通しており、興味深いところである。また、両遺跡では竪穴住居跡が長楕円形基調であることや大木4式土器が主体をなすことなど当地方が大木式土器文化圏内にあったことが明白であるが、これに大木4式土器と併行関係にあるとされる東関東の浮島Ⅱ式土器、西関東の諸磯b式土器も少量出土していることから、当時、関東地方の文化も移入していたことが伺える。なお、関東系の土器が認められる事象は本遺跡のみのことではなく、県内における当期の遺跡では散見されるが、大木式土器・浮島式土器・諸磯式土器の組成比率に遺跡ごとの違いがあり、一律には扱えない。

その後、本遺跡では集落の中心が今回の調査区外に存在したのか、それとも小規模な集落であったのか、遺構・遺物とも貧弱になり、縄文時代前期末葉～中期前葉・中期中葉・晩期前葉、弥生時代の土器片が少量出土しているのみである。この中で、縄文時代晩期前葉の土器の中には、近畿地方の当期の櫃原式土器の破片が1点認められ、縄文時代前期後半と同様に、他地域からの移入土器が注目される。

弥生時代以降、本遺跡における人間の生活の痕跡はしばらくの間途絶えるが、時代が下って中世になると、掘立柱建物跡により構成される集落あるいは屋敷が営まれている。主屋と推測される建物とそれに付属すると推測される建物の各1棟の建物跡が柱筋を通して近接しており、主屋の身舎の北西隅柱穴内堆積土及びその周囲からは、この建物跡の年代を示唆する13世紀第3四半期～14世紀前半の常滑産の大甕や片口鉢が出土しているのが注目されるが、整理中に瀬戸市埋蔵文化財センターの藤澤良祐氏からも指摘を受けたように、出土遺物に年代幅があるという点と、出土遺物は日常雑器ばかりであり瀬戸などのハレのものが組成されていない点に疑問が残る。なお、主屋とした建物跡は二間取りで、庇が北面と東面に付属しているという特徴があるが、両建物跡の周囲に他に同時期の建物跡などの遺構が存在していたのかどうかは不明であり、今回の調査で検出した建物跡の性格や遺構群の広がりについては言及できない。

以上見てきたのは、遺跡北側における状況であるが、調査区南端付近より検出された29～31号土坑はその形態・配列から落とし穴と推測される。この落とし穴の時期に関しては不明であるが、周囲に竪穴住居跡などの生活臭のする遺構が存在しないことから、遺跡北側が一貫して居住域であったのに対して、遺跡南側は狩猟の場であった時期がある。

以上のように、本遺跡では旧石器時代以降、中世まで調査区北側を中心とした断続的な人間の生

活の痕跡を確認することができた。その中で、縄文時代早期末葉から前期初頭にかけてと前期後半には最も活性化していたものと推測される。なお、北隣の上本町G遺跡では、本遺跡の最盛期の一つである縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての資料がほとんど認められず、それに後続する前期前葉の宮田Ⅲ群土器期の資料が認められ、この資料が本遺跡では認められないことから、両遺跡間で集落の移動があったのではないかと推測が可能であろう。また、南方300mに所在する本町西C遺跡では縄文時代前期初頭の花積下層式土器期の資料が試掘調査で多く出土していることから、前期後半に本遺跡と北隣の上本町G遺跡に集落が営まれていたのと同じように、当期には本遺跡と隣接する本町西C遺跡で集落が営まれていたことは興味深いところである。

なお、今後予定されている本町西B・C・D遺跡の調査成果や既に調査の終了している周辺遺跡の調査成果を総合的に分析することにより、当地域の集落の変遷や本遺跡の位置付けが可能となるものと期待している。(能登谷)

引用・参考文献

- 興野 義一 1968 「大木式土器理解のために (IV)」『月刊考古学ジャーナルNo.24』 ニュー・サイエンス社
- 下津谷達男他 1979 『北前貝塚』 野田市郷土博物館
- 山内 清男 1979 『日本先史土器の縄紋』 先史考古学会
- 西村 正衛 1980 「茨城県稲敷郡興津貝塚 (第2次調査) - 東部関東における縄文前期後半文化研究 その六」『學術研究 - 地理学・歴史学・社会学編 - 第29号』 早稲田大学教育会
- 今村 啓爾 1981 「諸磯式土器」『縄文文化の研究 第3巻 縄文土器Ⅰ』 雄山閣出版株式会社
- 金子 直行 1982 「野島式土器について - 金平遺跡出土土器を中心として -」『土曜考古6』 土曜考古学研究会
- 馬目 順一 1982 『竹之内遺跡』 いわき市教育委員会
- 芳賀 英一他 1982 「湯舟渡戸遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅲ』 飯館村教育委員会
- 興野 義一 1984 「大木式土器について」『宮城の研究Ⅰ 考古学篇』 清文堂
- 西村 正衛 1984 「茨城県稲敷郡浮島貝ヶ窪貝塚」「茨城県北相馬郡取手町向山貝塚」「茨城県稲敷郡美浦村興津貝塚」『石器時代における利根川下流域の研究 - 貝塚を中心として -』 早稲田大学出版部
- 武藤 康弘 1985 「縄文集落研究の動向」『民俗建築 第87号』 日本民俗建築学会
- 秋元 一夫 1985 『千葉県流山市長崎遺跡』 流山市遺跡調査会
- 大竹 憲治 1986 「遺跡解説 薄磯貝塚」『いわき市史 第一巻 原始・古代・中世』 いわき市
- 福島県富岡町 1987 『富岡町史 第三巻 考古・民俗編』
- 福島県富岡町 1990 『富岡町の文化財』
- 久保 和也他 1994 『浪江及び磐城富岡地域の地質』 地質調査所
- 『土偶とその情報』研究会 1994 『土偶シンポジウム2 秋田大会 東北・北海道の土偶Ⅰ』
- 中野 晴久 1995 「常滑・渥美」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編 真陽社
- 松田光太郎 1995 「浮島式土器の研究」『古代探叢Ⅳ』 早稲田大学出版部

第2編 本町西A遺跡

- 佐藤 典邦 1996 『網取貝塚』 いわき市教育委員会
- 関根 慎二 1999 「群馬県における諸磯b式土器の細分」『第12回縄文セミナー 前期後半の再検討』縄文セミナーの会
- 細田 勝 1999 「南関東における諸磯式土器の様相」『第12回縄文セミナー 前期後半の再検討』縄文セミナーの会
- 新屋 雅明 1999 『上ノ宮遺跡』 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 旧石器文化談話会 2000 『旧石器考古学辞典』 学生社
- 戸田 哲也 2000 「茨城県浮島貝ヶ窪貝塚の資料」『浮島貝ヶ窪貝塚資料 米倉山遺跡資料 山内清男考古資料11』 奈良国立文化財研究所編 真陽社

〔福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター（財団法人福島県文化振興事業団）関係〕

- 福島県教育委員会 1984 『福島県埋蔵文化財一覧表』
- 福島県教育委員会 1984 『福島県埋蔵文化財分布図』
- 鈴鹿 良一他 1986 「岩下D遺跡」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅷ』
- 鈴鹿 良一他 1987 「日向南遺跡（第3次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅸ』
- 鈴鹿 良一他 1987 「羽白D遺跡（第1次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅹ』
- 鈴鹿 良一他 1988 「羽白D遺跡（第2次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅺ』
- 鈴鹿 良一他 1988 「羽白C遺跡（第1次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅻ』
- 鈴鹿 良一他 1989 「羽白C遺跡（第2次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅼ』
- 芳賀 英一他 1990 「冑宮西遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅷ』
- 本間 宏他 1991 「鹿島遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅸ』
- 山岸 英夫他 1993 「仲ノ縄B遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告19』
- 松本 茂他 1993 「小滝遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告21』
- 福島県教育委員会 1996 『福島県遺跡地図 浜通り地方』
- 吉田 功他 1999 「柳作B遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告4』
- 吉田 秀享他 1999 「関林A遺跡」『福島空港公園遺跡発掘調査報告Ⅱ』
- 山内 幹夫他 1999 「八方塚A遺跡（第1次調査）」『摺上川ダム遺跡発掘調査Ⅶ』
- 本間 宏他 1999 「上田郷Ⅵ遺跡（1次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告18』
- 井 憲治他 2001 「上田郷Ⅵ遺跡（2・3次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告22』
- 山元 出他 2001 「大谷上ノ原遺跡（1次調査）」『常磐自動車道遺跡調査報告26』
- 宮田 安志他 2002 「上本町G遺跡」『常磐自動車道遺跡調査報告33』

写 真 図 版

第1編 ^{かみ}上 ^{ごおり}郡 B 遺 跡

写 真 目 次

1	調査区全景	173	12	3号木炭窯跡	178
2	調査区全景・作業風景	173	13	1～4号土坑	179
3	1号住居跡	174	14	5～7号土坑	179
4	1号住居跡細部	174	15	集石遺構，溝跡，ピット	180
5	1号建物跡	175	16	基本土層	180
6	2・3号建物跡	175	17	1号住居跡出土遺物	181
7	Ⅱ区ピット群・建物跡群	176	18	3号建物跡，3号木炭窯跡 2・3号土坑，P25出土遺物	182
8	Ⅰ区ピット群	176	19	1号集石遺構，P25出土遺物	183
9	1号木炭窯跡	177	20	遺構外出土遺物（1）	183
10	1号木炭窯跡細部	177	21	遺構外出土遺物（2）	184
11	2号木炭窯跡	178			



1 調査区全景（北から）



1



2



3



4

2 調査区全景，作業風景

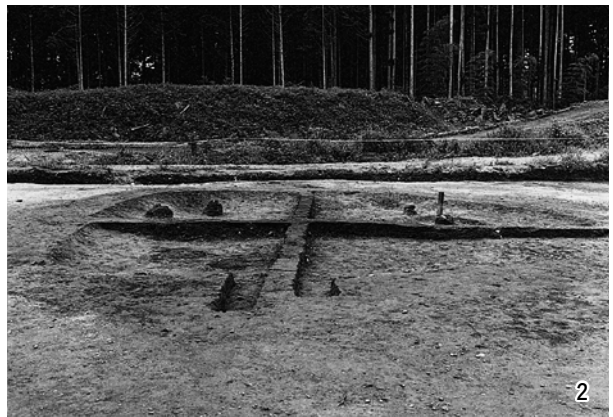
1 I区全景（西から） 2 I区南部（西から）
3 II区全景（西から） 4 作業風景（東から）



3 1号住居跡（東から）



1



2



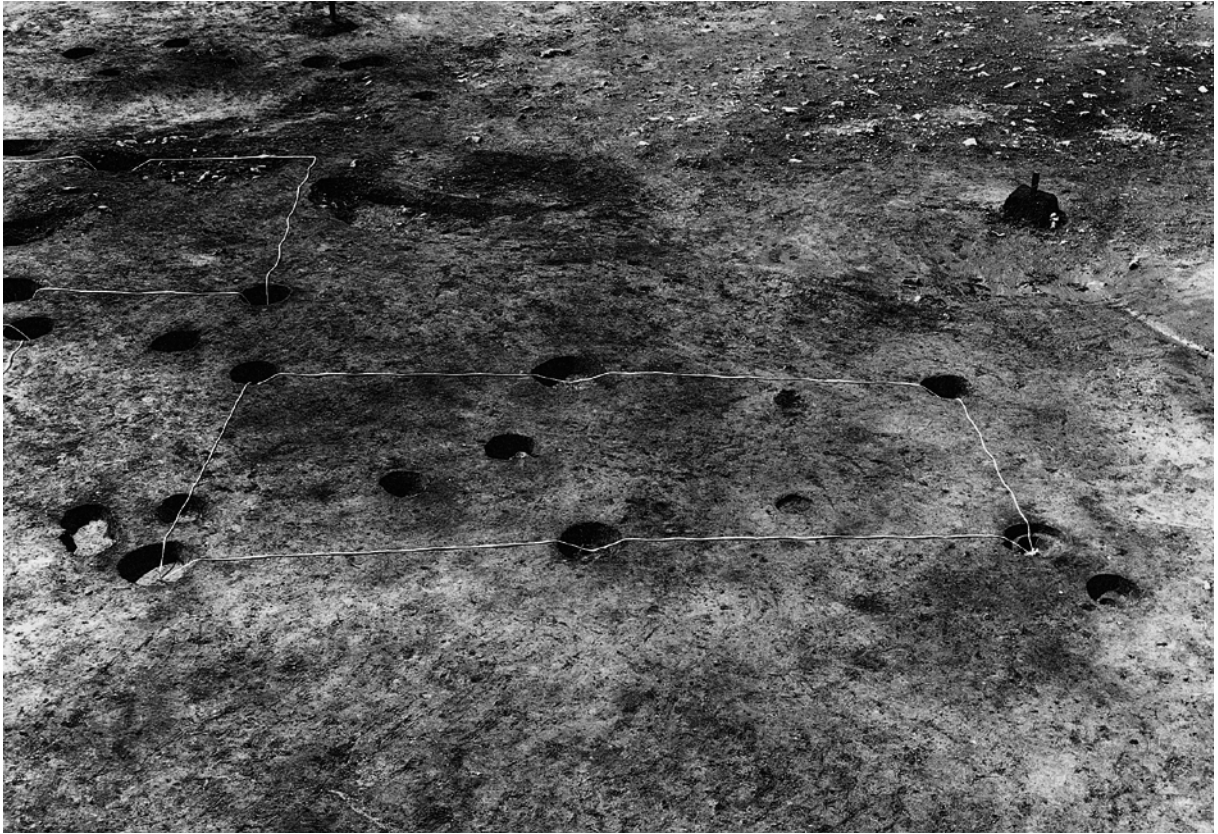
3



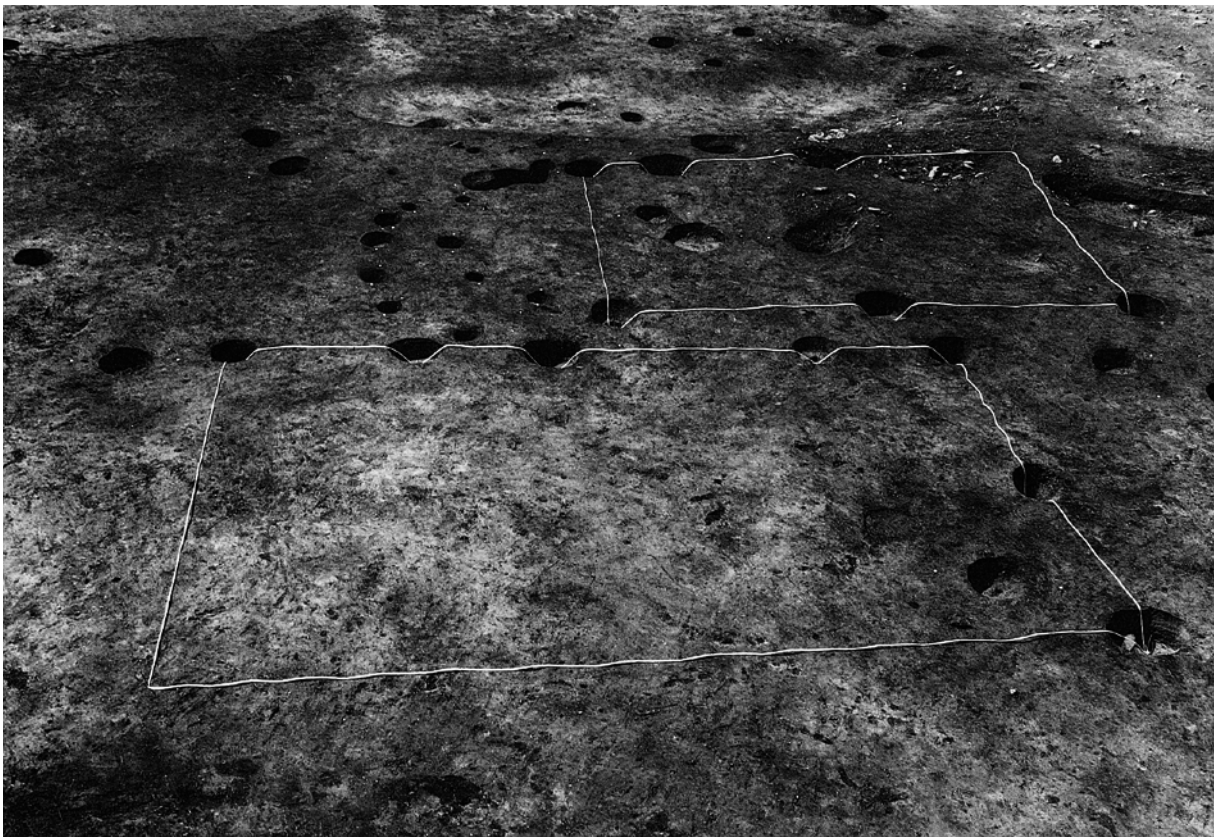
4

4 1号住居跡細部

1 断面A-A'（南から） 2 断面B-B'（東から）
3 遺物出土状況（北から） 4 床面検出状況（南から）



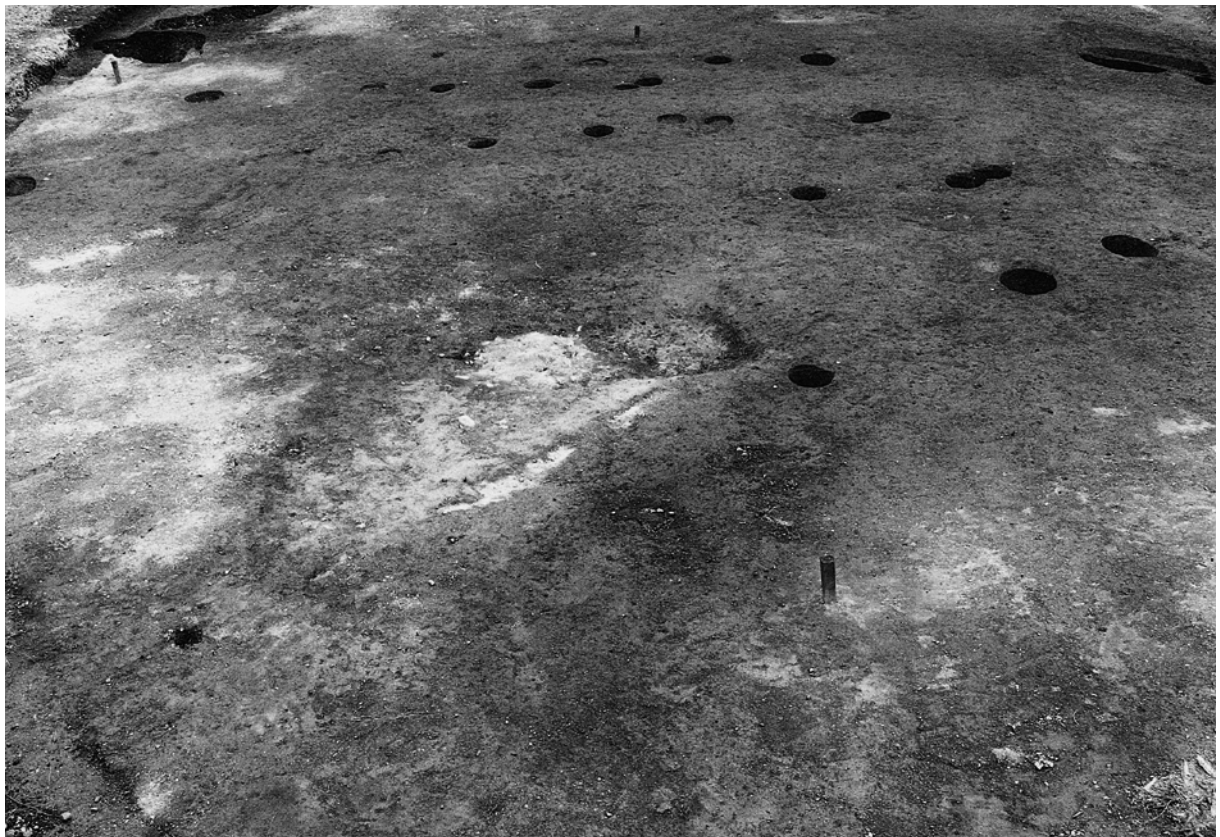
5 1号建物跡（北東から）



6 2・3号建物跡（北東から）



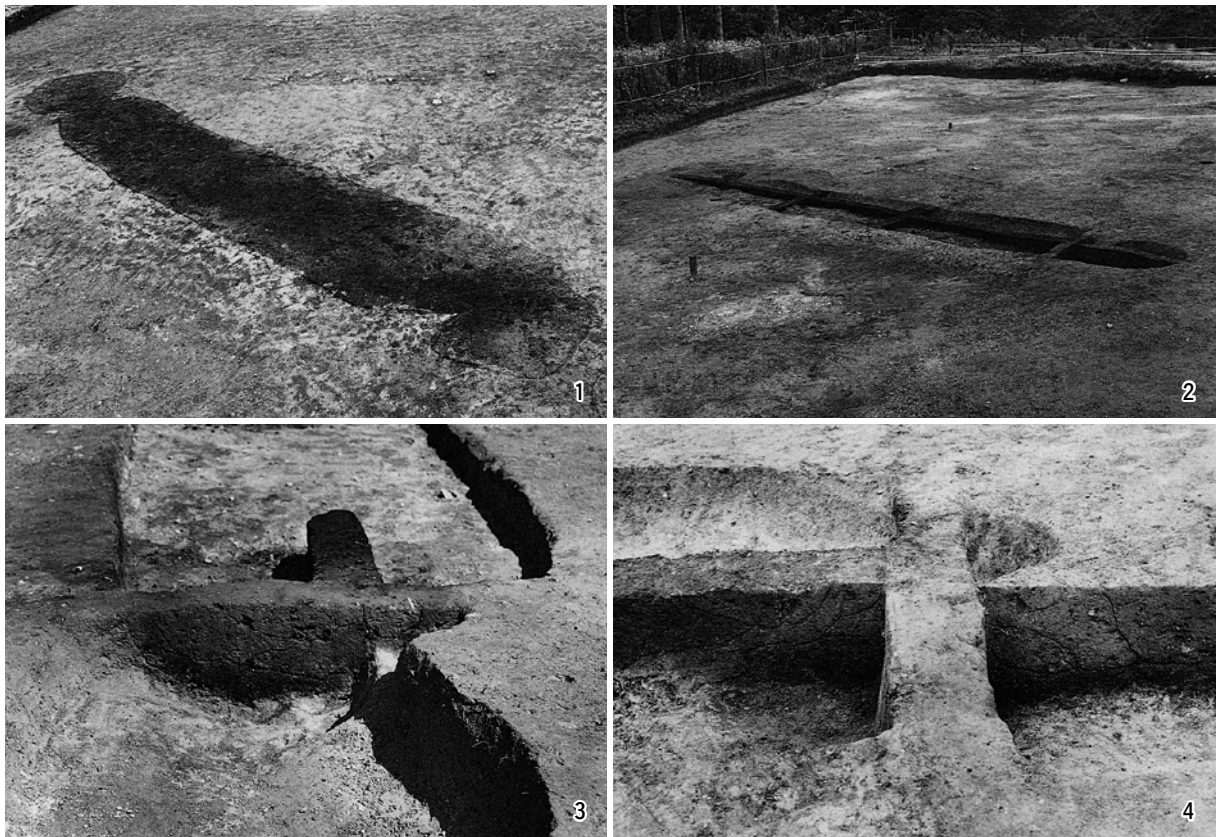
7 II区ピット群・建物跡群（北東から）



8 I区ピット群（南から）



9 1号木炭窯跡（北西から）



10 1号木炭窯跡細部

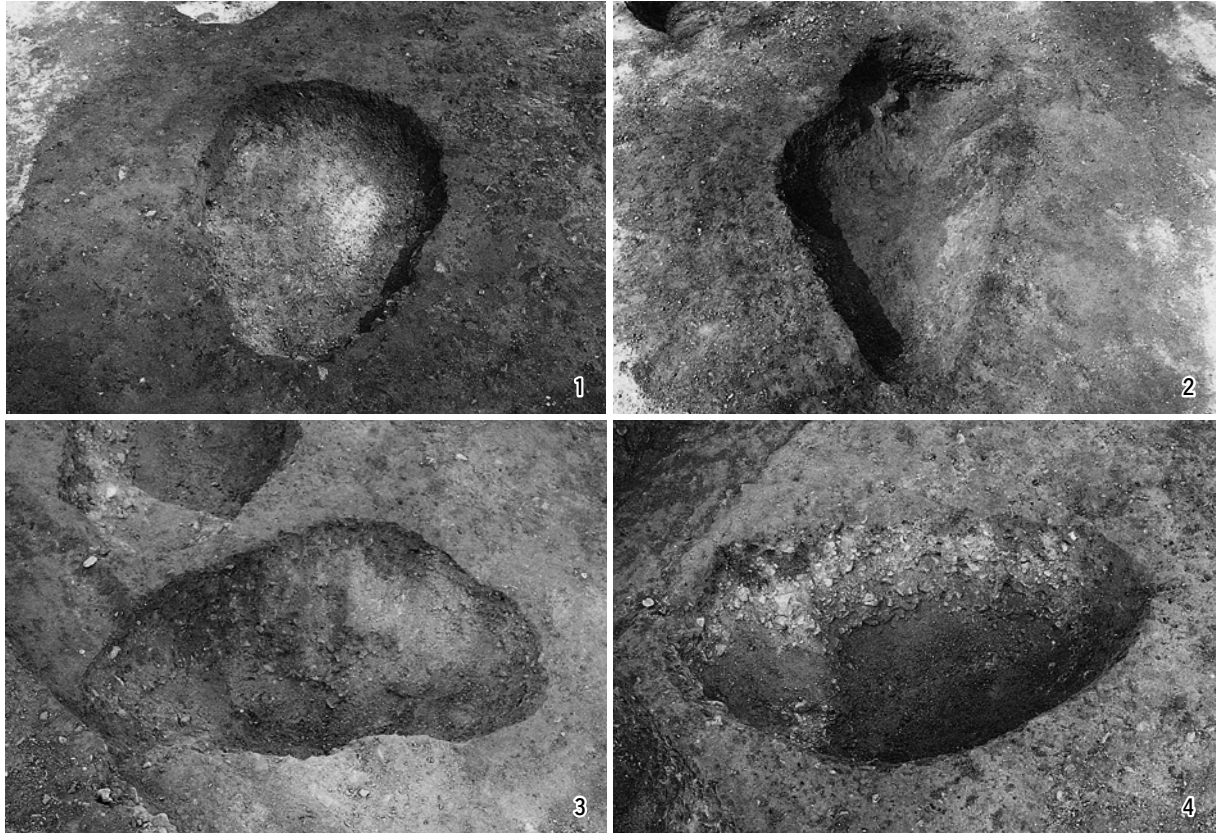
1 検出状況（北西から） 2 断面AA'（北東から）
3 断面CC'（西から） 4 断面AA'西部（北から）



11 2号木炭窯跡（南西から）

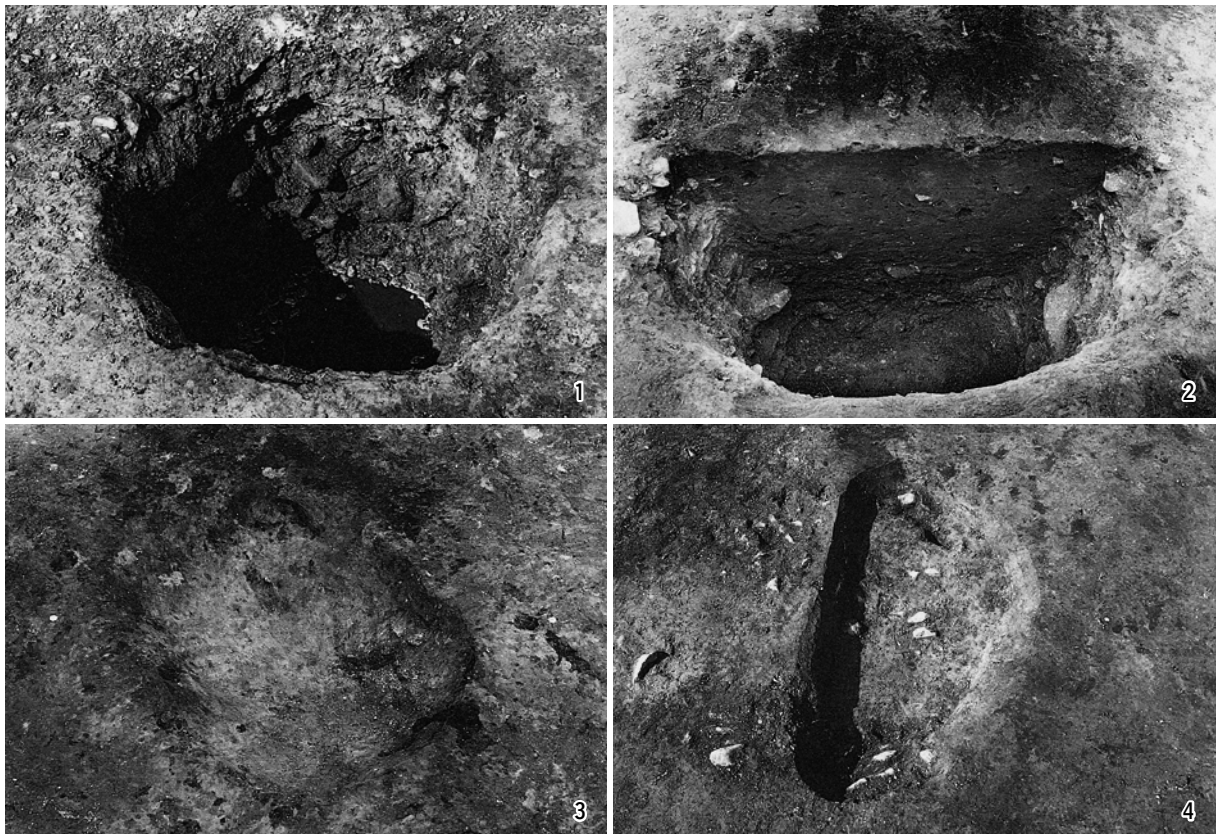


12 3号木炭窯跡（南西から）



13 1～4号土坑

- 1 1号土坑 (南から) 2 2号土坑 (南から)
3 3号土坑 (南西から) 4 4号土坑 (南東から)



14 5～7号土坑

- 1 5号土坑 (南から) 2 5号土坑断面 (南から)
3 6号土坑 (南から) 4 7号土坑 (南から)



15 集石遺構, 溝跡, ピット

1 1号集石遺構 (南から) 2 1号集石遺構断面 (南から)
3 1号溝跡 (西から) 4 P25遺物出土状況 (東から)



16 基本土層

1 I区断面G20グリッド (西から) 2 I区断面G24グリッド (西から)
3 I区断面F25グリッド (南から) 4 II区断面E12グリッド (南から)



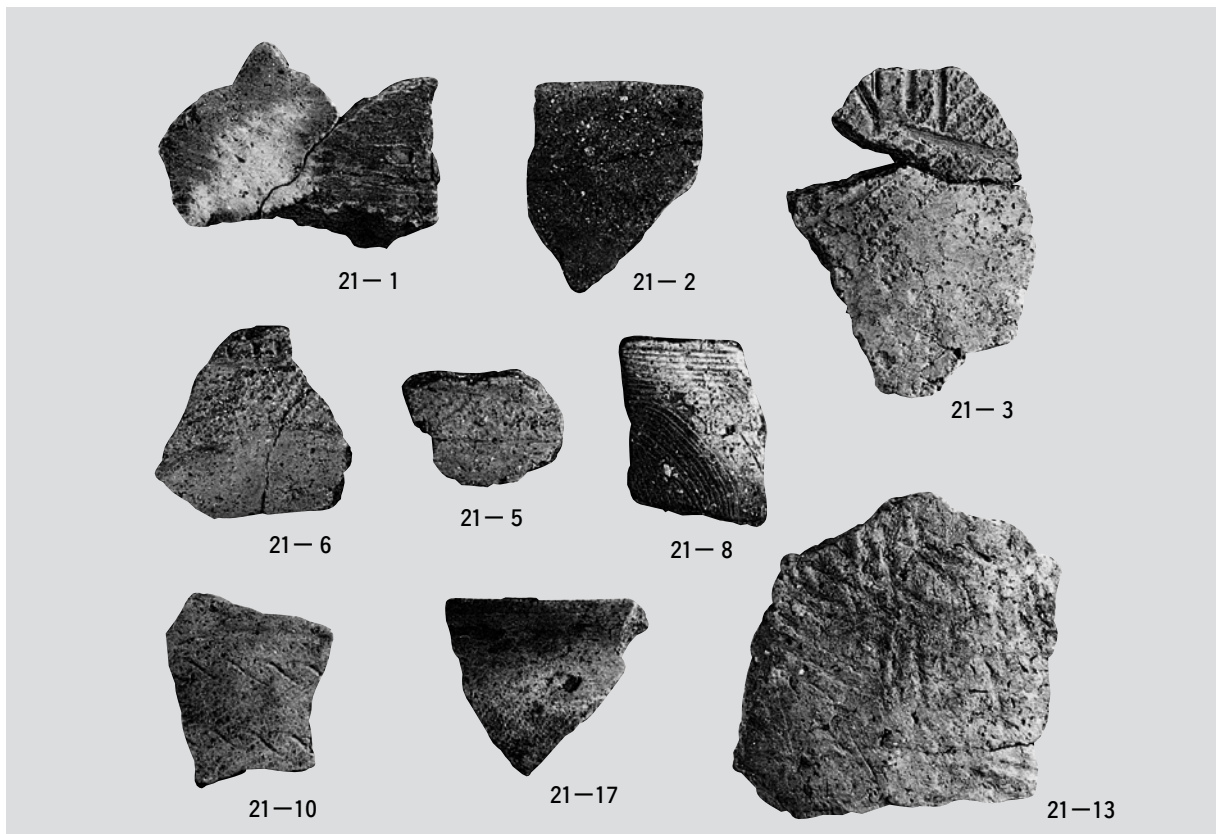
17 1号住居跡出土遺物



18 3号建物跡, 3号木炭窯跡, 2・3号土坑, P25出土遺物



19 1号集石遺構，P25出土遺物



20 遺構外出土遺物 (1)

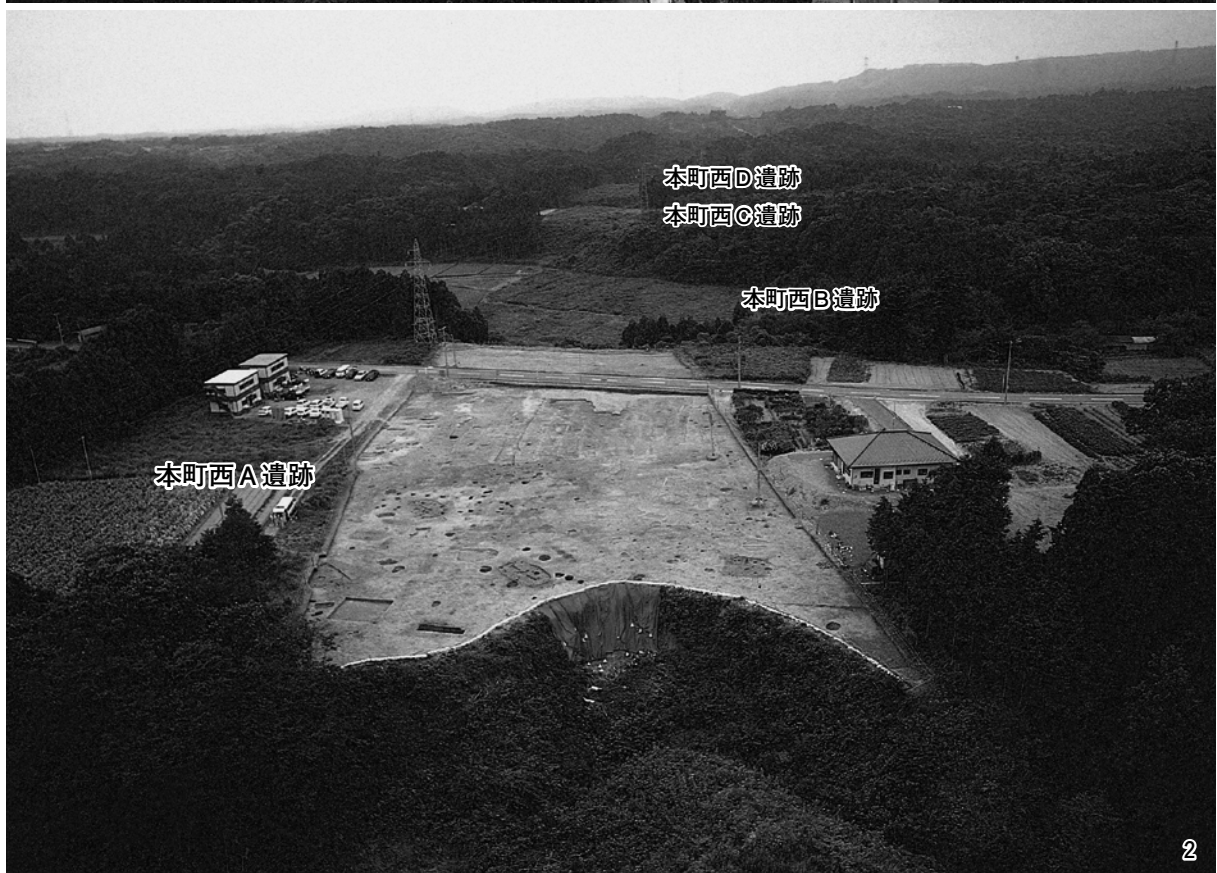


21 遺構外出土遺物 (2)

第2編 もと まち にし 本町西 A 遺跡

写真目次

1	調査区遠景	187	39	13・14・34号土坑	207
2	調査区全景	188	40	15号土坑	208
3	調査区全景と基本土層	189	41	16号土坑	208
4	1号住居跡(1)	190	42	17・18号土坑	209
5	1号住居跡(2)	190	43	19・20号土坑	209
6	1号住居跡(3)	191	44	21・22号土坑	210
7	1号住居跡(4)	191	45	23・24号土坑	210
8	2号住居跡(1)	192	46	25号土坑	211
9	2号住居跡(2)	192	47	26・27号土坑	211
10	2号住居跡(3)	193	48	28～30号土坑	212
11	2号住居跡(4)	193	49	29～31号土坑	212
12	3号住居跡(1)	194	50	32・33号土坑	213
13	3号住居跡(2)	194	51	1・2号焼土遺構	213
14	3号住居跡(3)	195	52	1号住居跡出土土器	214
15	3号住居跡(4)	195	53	2号住居跡出土土器	214
16	4号住居跡(1)	196	54	3号住居跡出土土器	215
17	4号住居跡(2)	196	55	4号住居跡出土土器	215
18	5号住居跡(1)	197	56	4～8号住居跡出土土器	216
19	5号住居跡(2)	197	57	6号住居跡・3号土坑出土土器, 1号建物跡出土陶器	217
20	6号住居跡(1)	198	58	9・16・21号土坑出土土器	218
21	6号住居跡(2)	198	59	遺構外出土土器(1)	219
22	7号住居跡(1)	199	60	遺構外出土土器(2)	220
23	7号住居跡(2)	199	61	遺構外出土土器(3)	220
24	8号住居跡(1)	200	62	遺構外出土土器(4)	221
25	8号住居跡(2)	200	63	遺構外出土土器(5)	221
26	1号建物跡(1)	201	64	遺構外出土土器(6)	222
27	1号建物跡(2)	201	65	遺構外出土土器(7)	222
28	1号建物跡(3)	202	66	遺構外出土土器(8)	223
29	1号建物跡(4)	202	67	遺構外出土土器(9)	223
30	2号建物跡(1)	203	68	遺構外出土土器(10)	224
31	2号建物跡(2)	203	69	遺構外出土土器(11)	224
32	1・2号土坑	204	70	遺構外出土土器(12)	225
33	3・4号土坑	204	71	遺構外出土土器(13)	225
34	5号土坑	205	72	遺構外出土陶器・土製品	226
35	6・7号土坑	205	73	遺構内出土石器	227
36	8・9号土坑	206	74	遺構内外出土石器	227
37	10・11号土坑	206	75	遺構外出土石器	228
38	12号土坑	207			



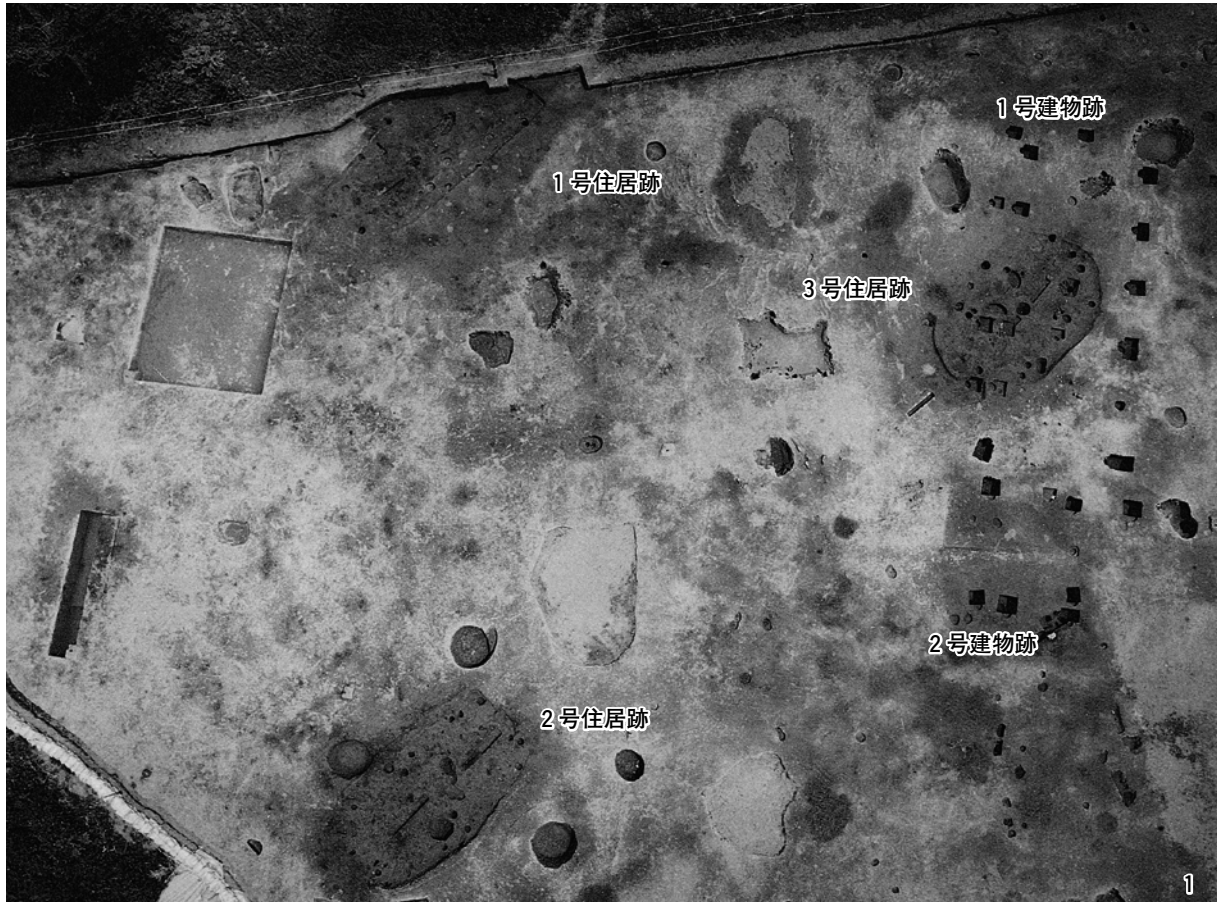
1 調査区遠景

1 調査区遠景 (西上空から)
2 調査区遠景 (北上空から)



2 調査区全景

1 調査区全景 (西上空から)
2 調査区全景 (南上空から)



3 調査区全景と基本土層

1 調査区北東部全景（真上から）
2 調査区全景（北から） 3 町道北側調査区（東から）
4 基本土層 I（西から） 5 基本土層 II（北から）

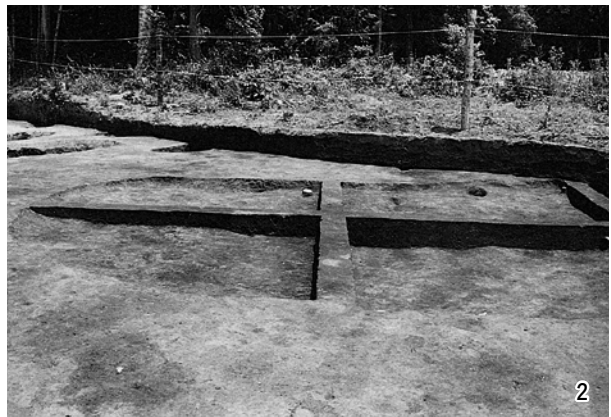


4 1号住居跡(1)

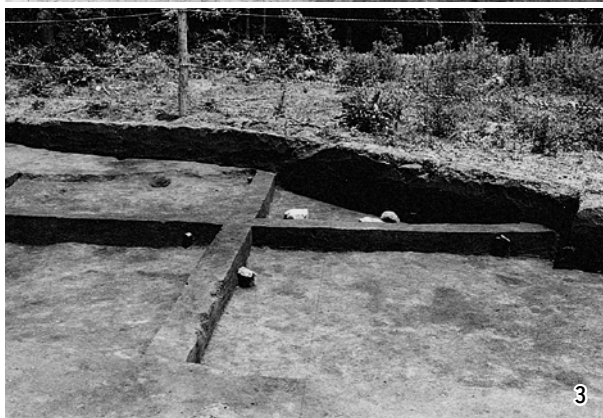
全景(南西から)



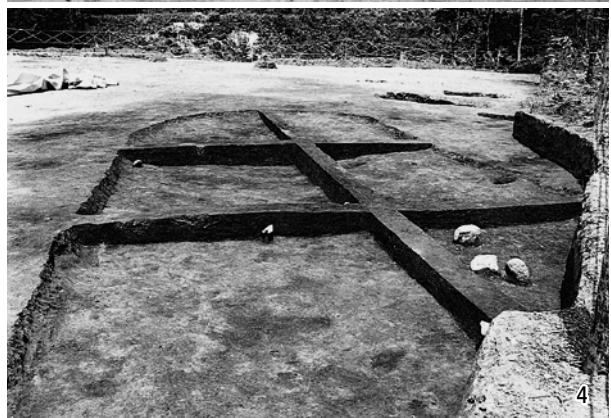
1



2



3



4

5 1号住居跡(2)

1 検出状況(南西から)

2 AA'断面北部(南西から)

3 AA'断面南部(南西から)

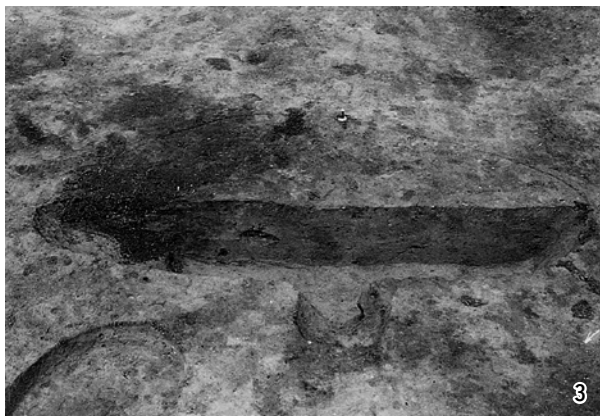
4 BB'・CC'断面(南東から)



6 1号住居跡(3)



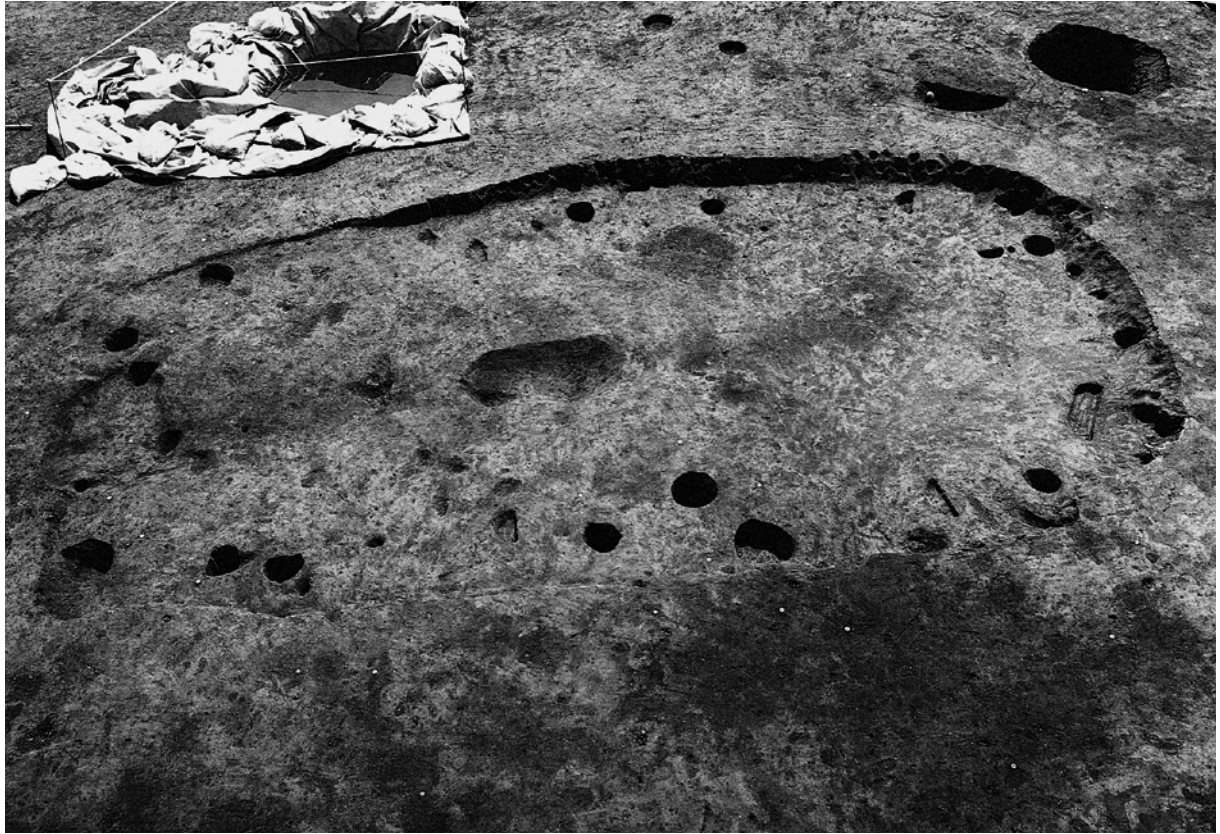
1 全景(真上から) 2 全景(北西から)
3 作業風景(南西から)



7 1号住居跡(4)



1 炉1全景(南西から) 2 炉2全景(南西から)
3 炉1断割(南西から) 4 炉2断割(南西から)



8 2号住居跡(1)

全景(東から)



1



2



3



4

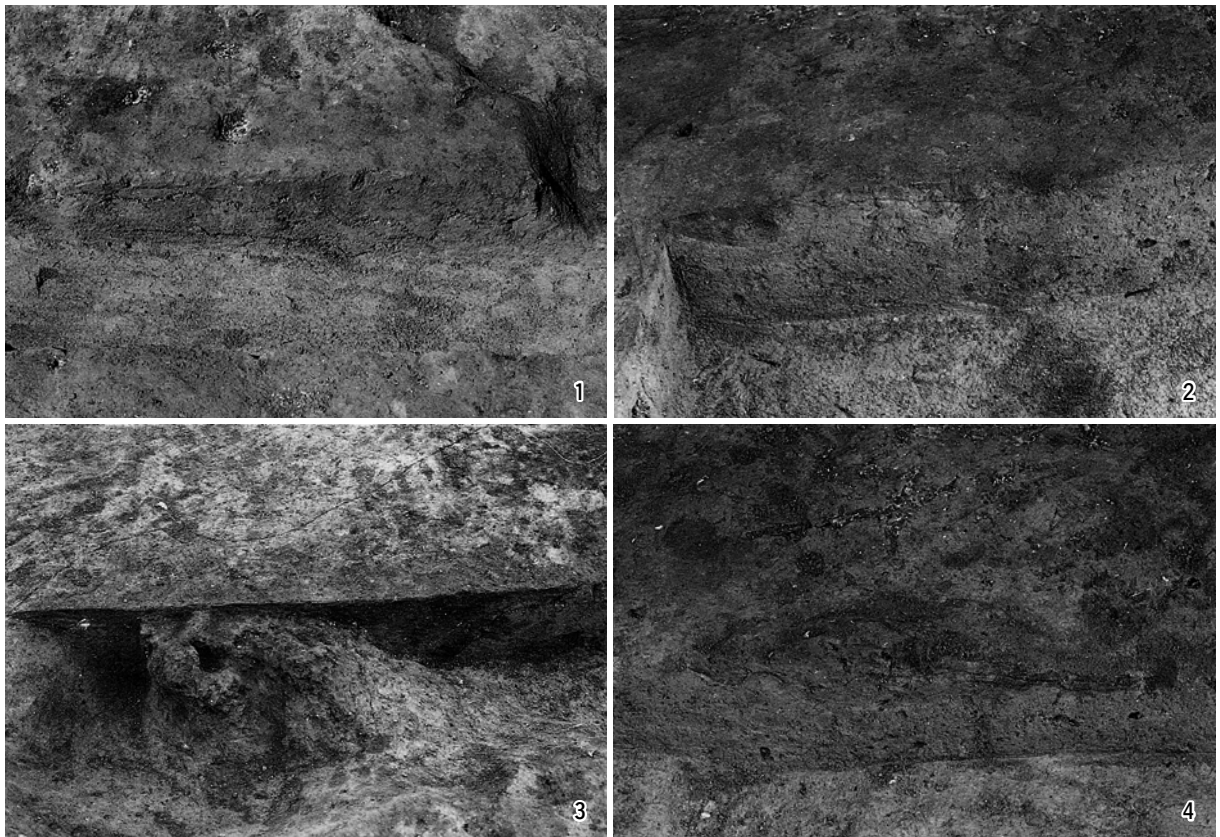
9 2号住居跡(2)

1 検出状況(南から) 2 断面(南から)
3 全景(南から) 4 P10断面(東から)



10 2号住居跡(3)

全景(上空から)



11 2号住居跡(4)

1 炉1断割(西から) 2 炉2断割(東から)
3 炉3断面(東から) 4 炉3断割(東から)



12 3号住居跡(1)

全景(北東から)



1



2



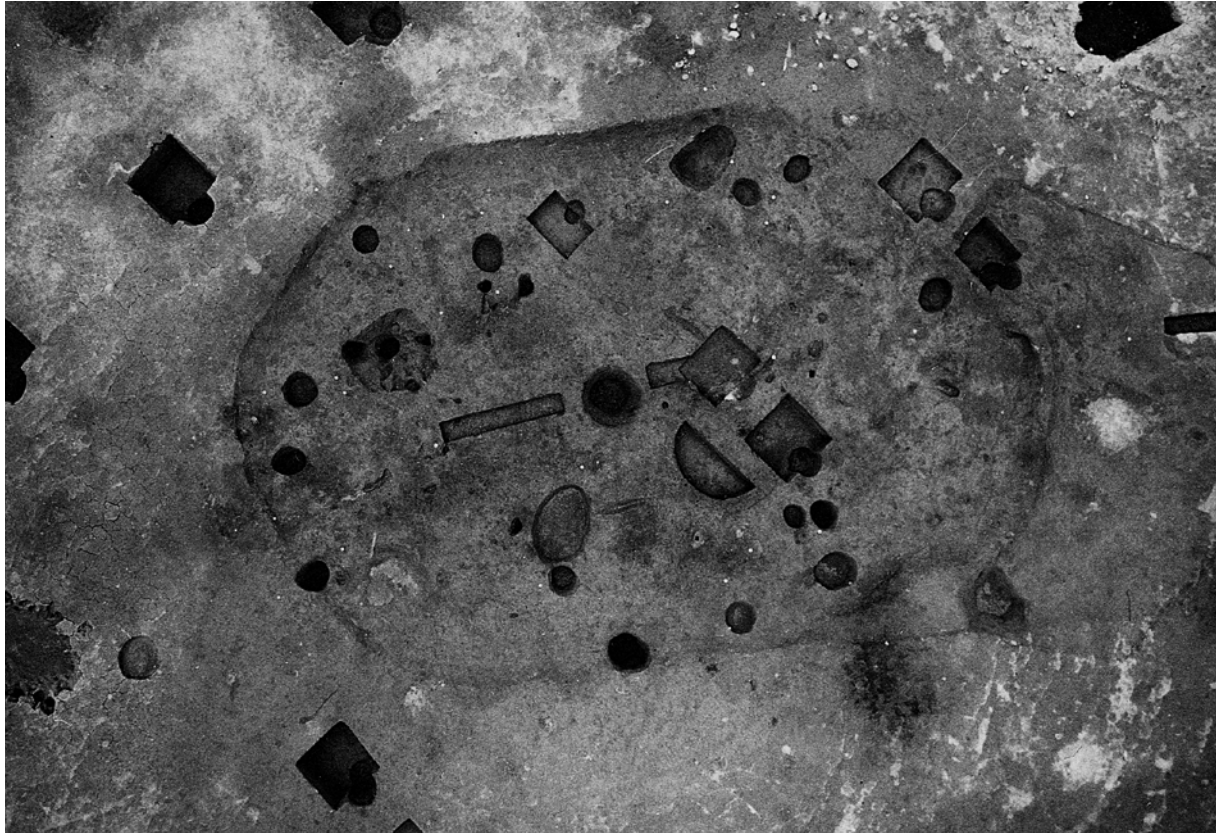
3



4

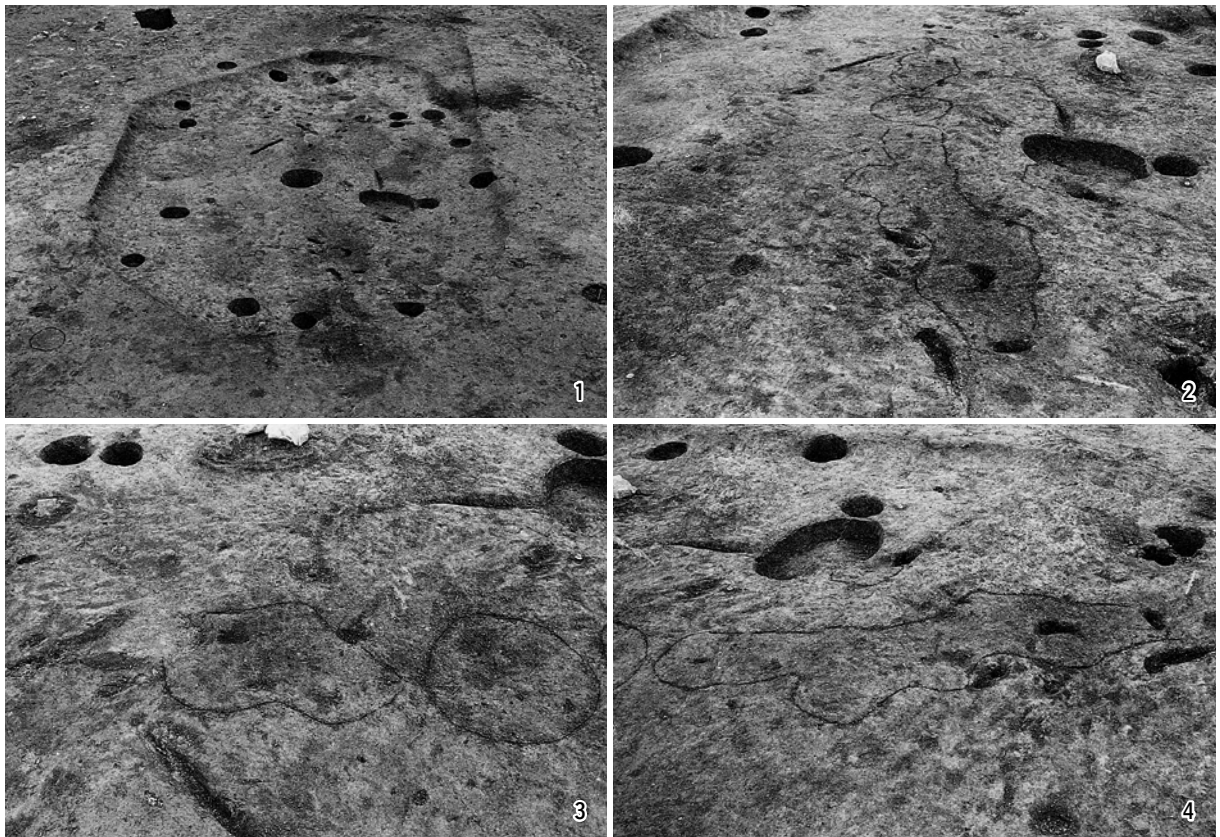
13 3号住居跡(2)

1 検出状況(南西から) 2 断面(東から)
3 P13断面(南西から) 4 P14断面(南西から)



14 3号住居跡(3)

全景(上空から)



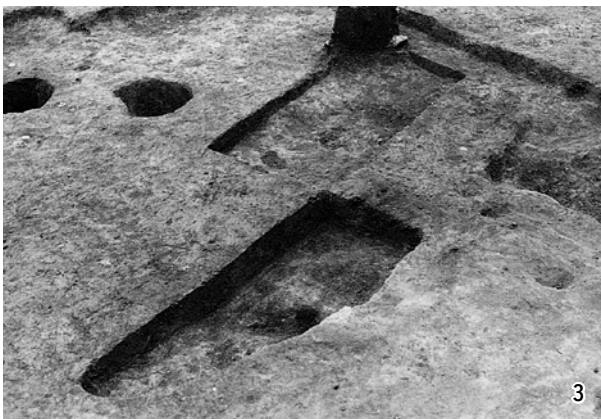
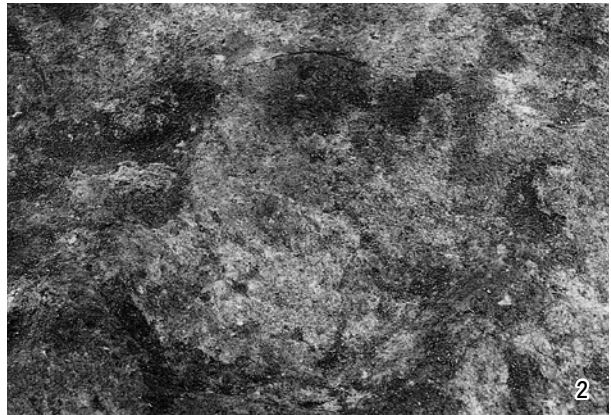
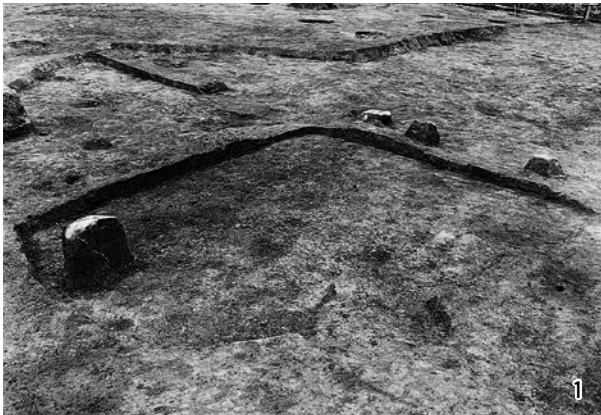
15 3号住居跡(4)

1 全景(南東から) 2 炉1・2とP13検出状況(南西から)
3 炉1全景(南西から) 4 炉2全景(南西から)



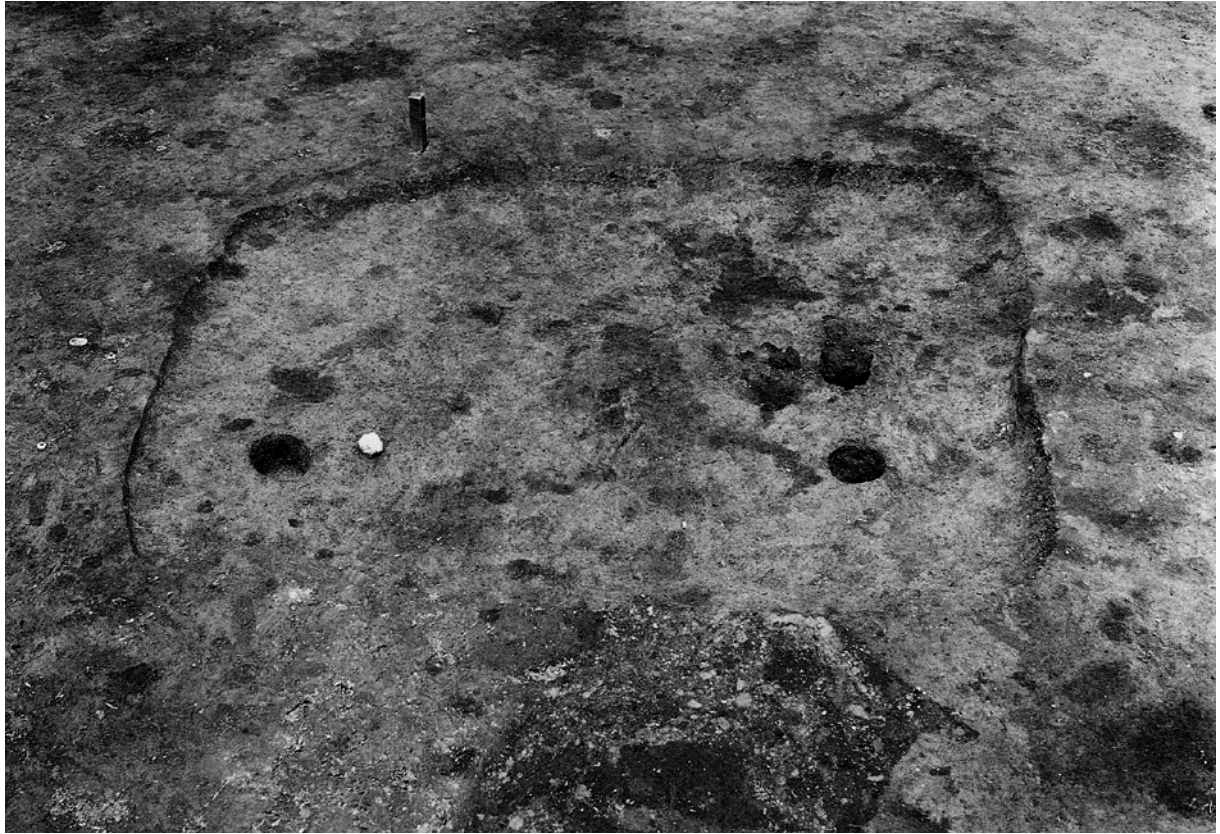
16 4号住居跡(1)

全景(東から)



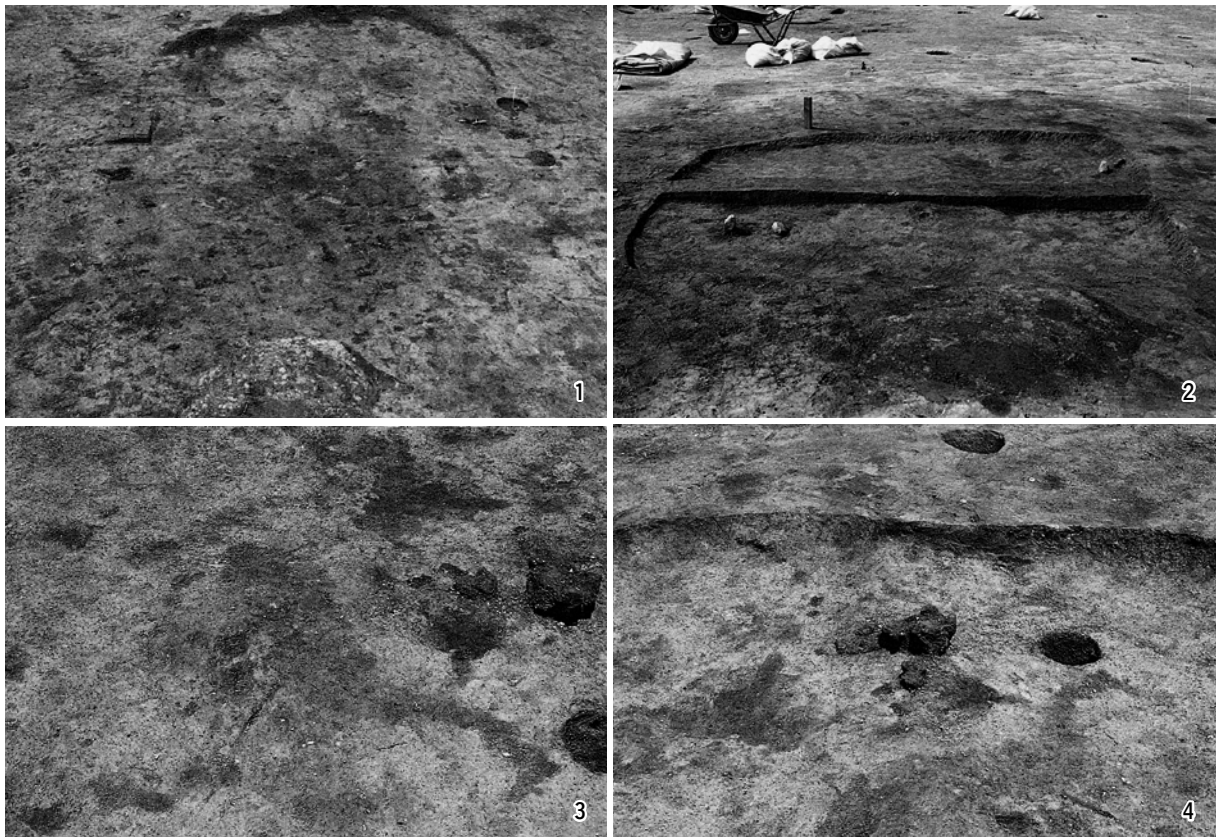
17 4号住居跡(2)

1 断面(南東から) 2 炉1全景(東から)
3 炉2断面(北西から) 4 炉2断割(西から)



18 5号住居跡(1)

全景(南から)



19 5号住居跡(2)

1 検出状況(南から) 2 断面(南から)
3 炉全景(南から) 4 遺物出土状況(西から)



20 6号住居跡(1)

全景(南東から)



21 6号住居跡(2)

1 AA'断面(南西から) 2 BB'断面(南東から)
3 炉全景(南西から) 4 炉断割(南東から)

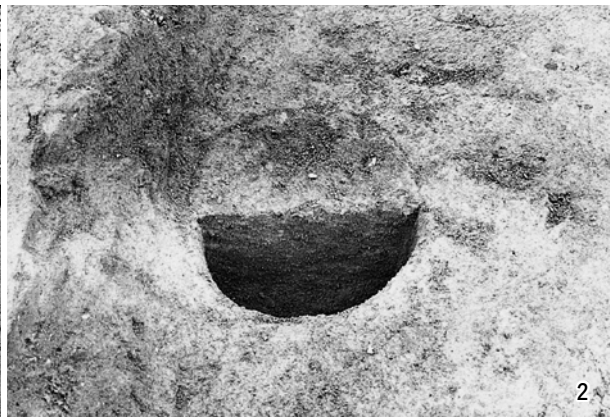


22 7号住居跡(1)

全景(南東から)



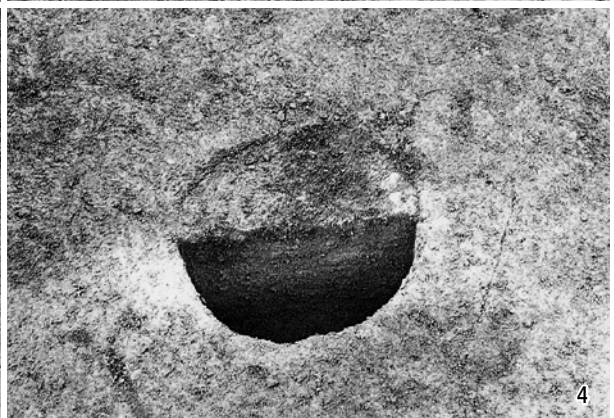
1



2



3



4

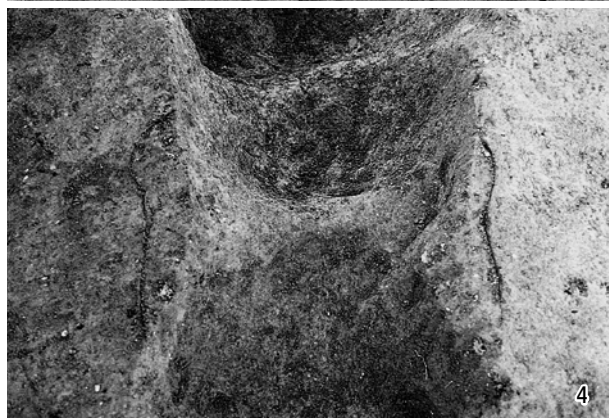
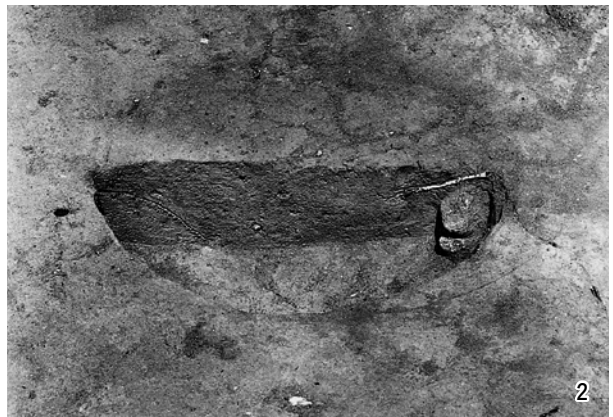
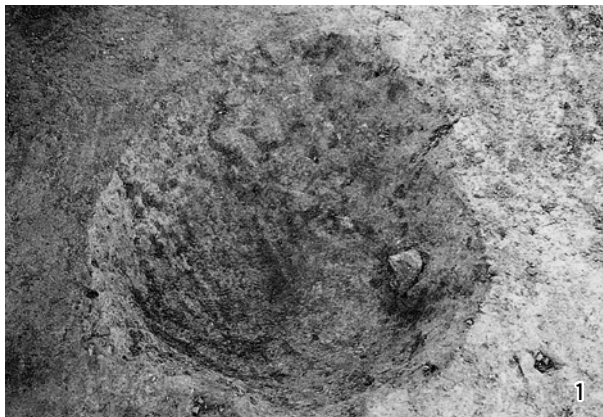
23 7号住居跡(2)

1 断面(南から) 2 P1断面(北東から)
3 P2断面(北東から) 4 P4断面(南東から)



24 8号住居跡(1)

全景(南西から)



25 8号住居跡(2)

1 P5全景(南から) 2 P5断面(南から)
3 炉1全景(南から) 4 炉2全景(南から)



26 1号建物跡(1)

全景(南から)



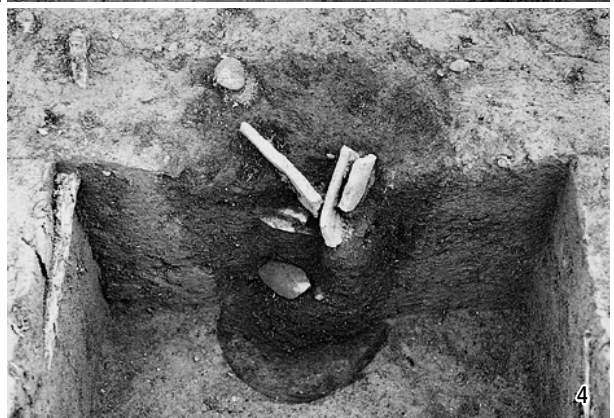
1



2



3



4

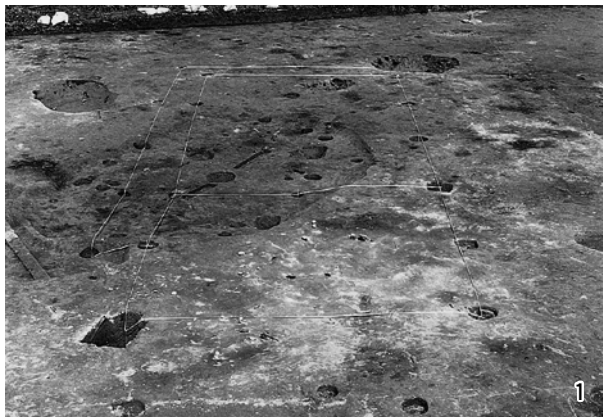
27 1号建物跡(2)

1 西側近景(南から) 2 東側近景(南から)
3 P1遺物出土状況(西から) 4 P1断面(西から)

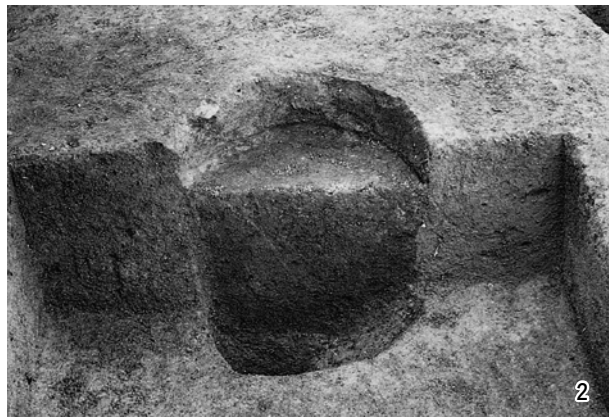


28 1号建物跡 (3)

全景 (東から)



1



2



3



4

29 1号建物跡 (4)

1 全景 (西から) 2 P 3 断面 (東から)
3 P 6 断面 (南から) 4 P 8 断面 (南から)



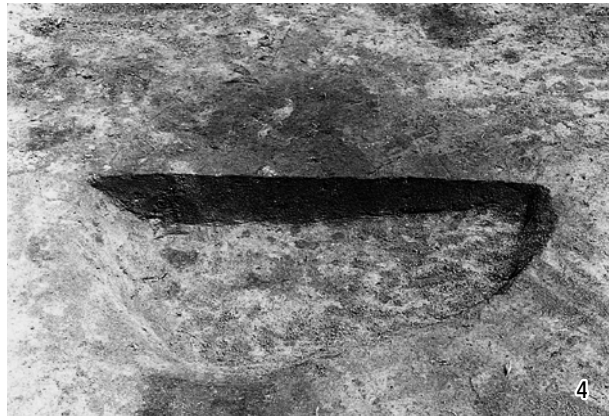
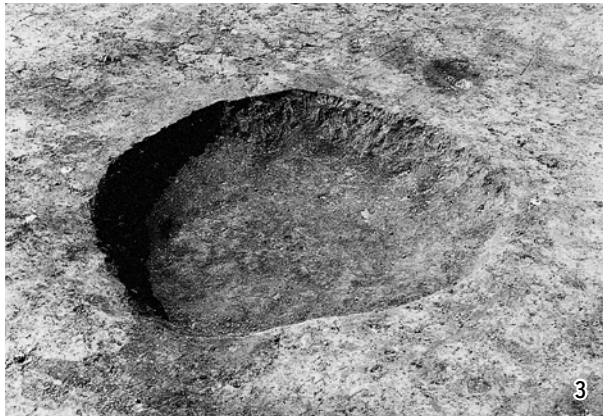
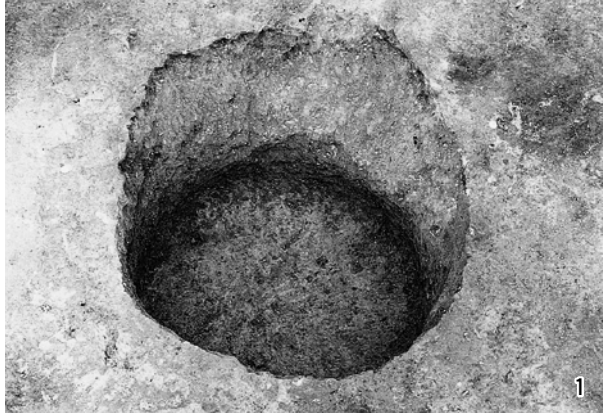
30 2号建物跡(1)

全景(北東から)



31 2号建物跡(2)

1 全景(南から) 2 P1断面(東から)
3 P3断面(東から) 4 P8断面(東から)



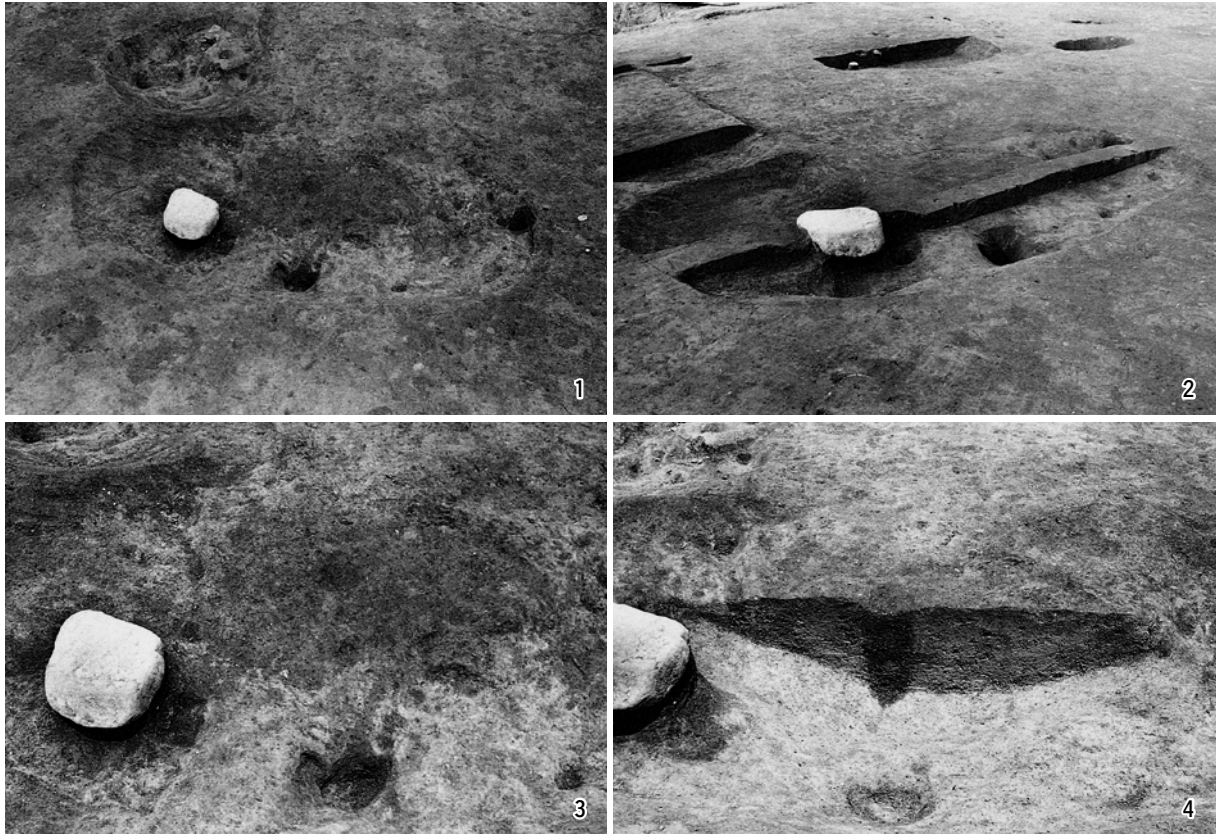
32 1・2号土坑

1 1号土坑全景 (南から) 2 1号土坑断面 (南から)
3 2号土坑全景 (南から) 4 2号土坑断面 (南から)



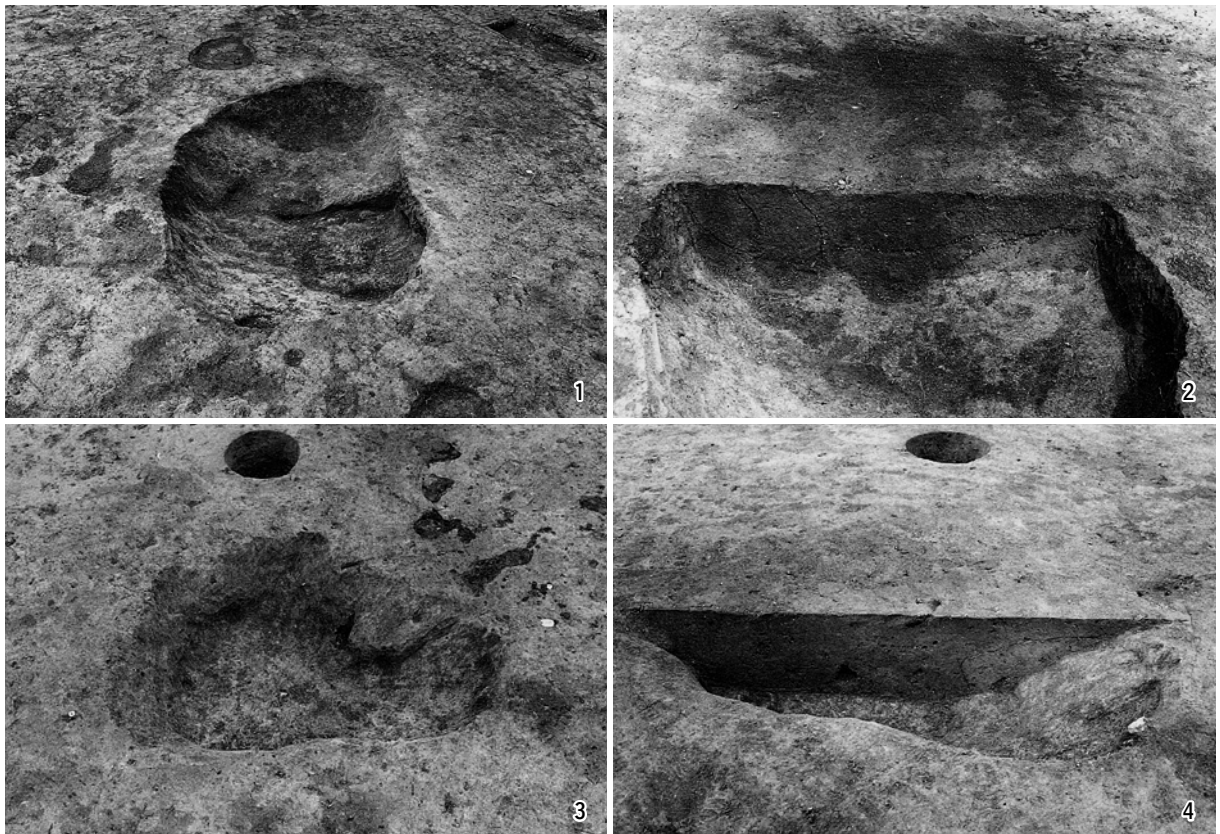
33 3・4号土坑

1 3号土坑全景 (南から) 2 3号土坑断面 (南から)
3 4号土坑全景 (南から) 4 4号土坑断面 (南から)



34 5号土坑

1 全景（南から） 2 断面（南から）
3 磔・焼面全景（南から） 4 焼面断割（南から）



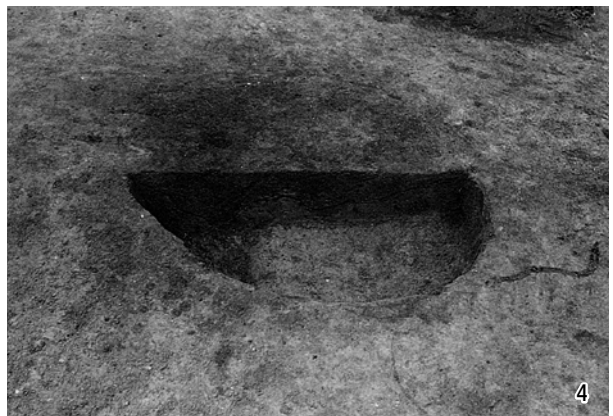
35 6・7号土坑

1 6号土坑全景（東から） 2 6号土坑断面（東から）
3 7号土坑全景（南から） 4 7号土坑断面（東から）



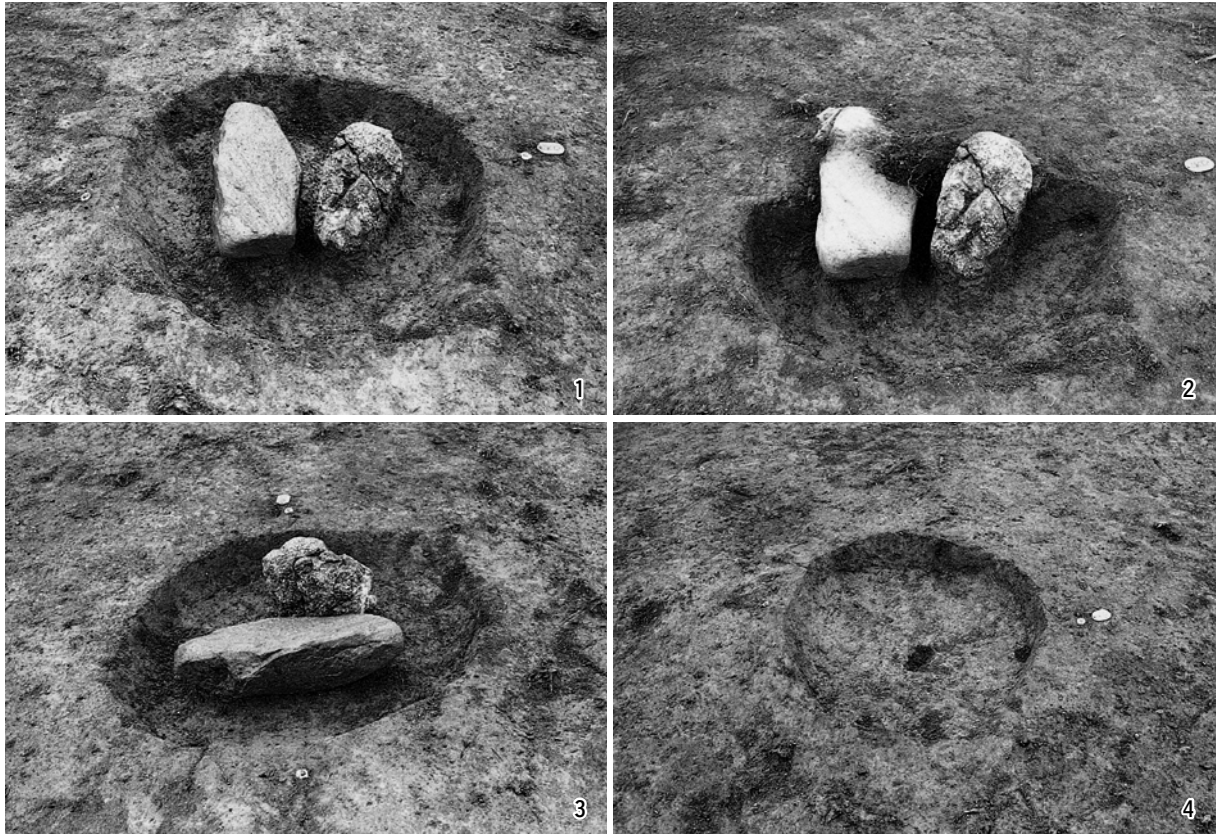
36 8・9号土坑

1 8号土坑全景 (南から) 2 8号土坑断面 (南から)
3 9号土坑全景 (南から) 4 9号土坑断面 (南から)



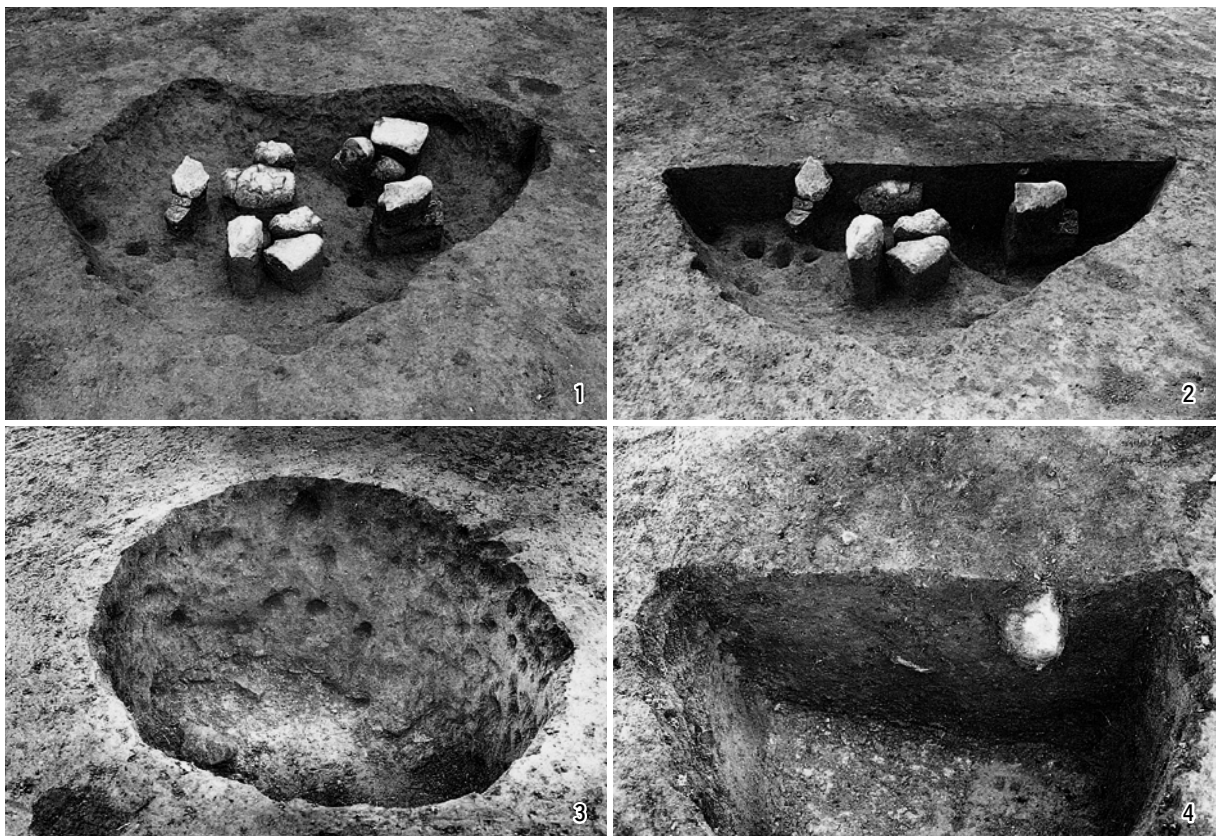
37 10・11号土坑

1 10号土坑全景 (東から) 2 10号土坑断面 (東から)
3 11号土坑全景 (東から) 4 11号土坑断面 (東から)



38 12号土坑

- 1 全景（南西から） 2 断面（南西から）
3 遺物出土状況（北西から） 4 礫除去後全景（南西から）



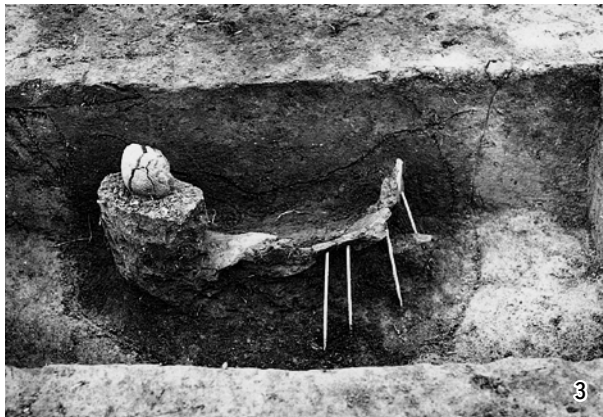
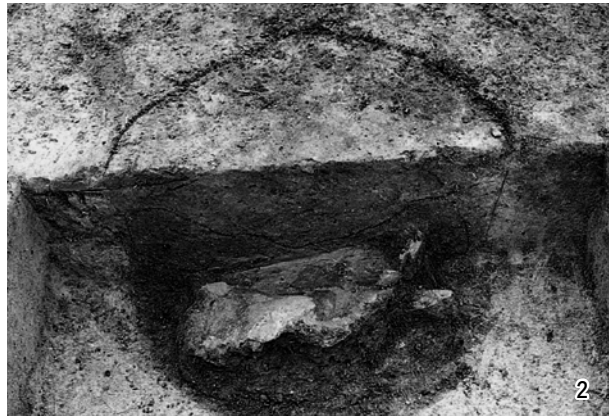
39 13・14・34号土坑

- 1 13・34号土坑全景（東から） 2 13・34号土坑断面（南東から）
3 14号土坑全景（東から） 4 14号土坑断面（東から）



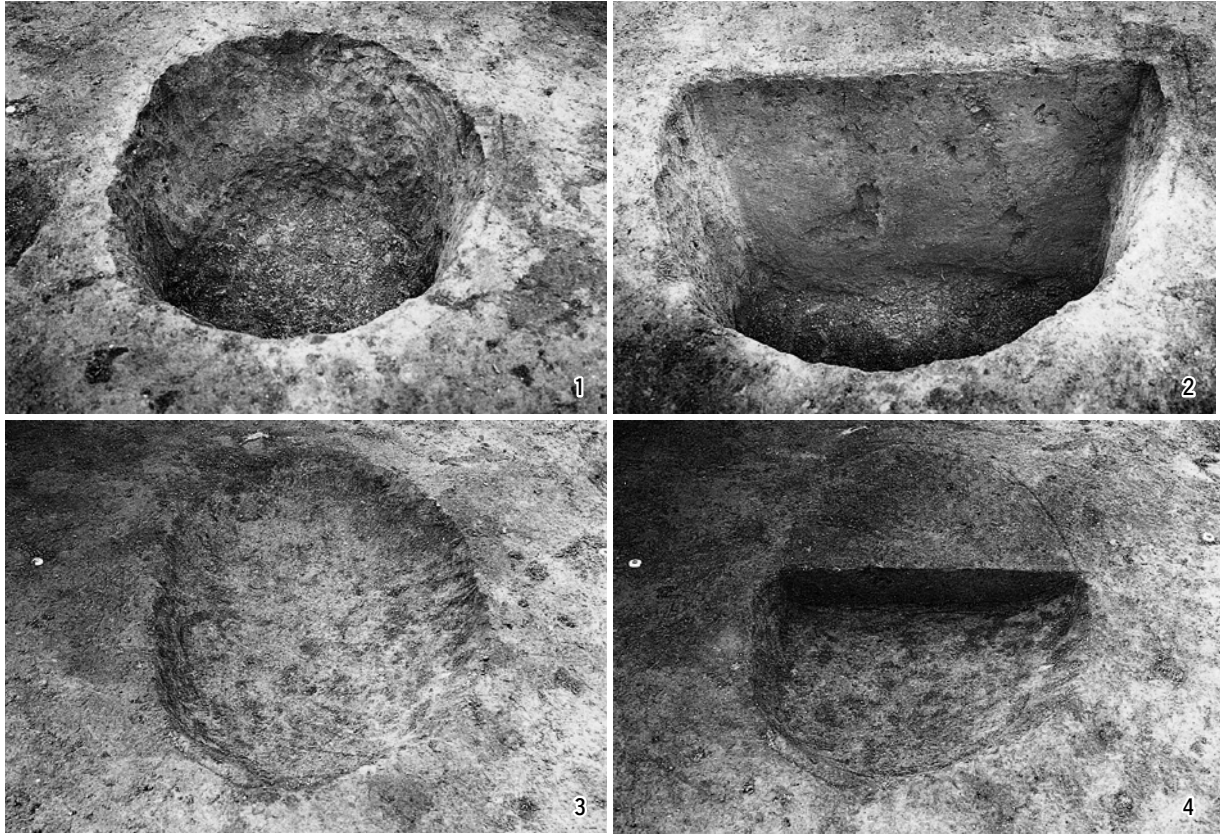
40 15号土坑

1 全景（東から） 2 断面（西から）
3 焼土全景（北から） 4 焼土断面（北から）



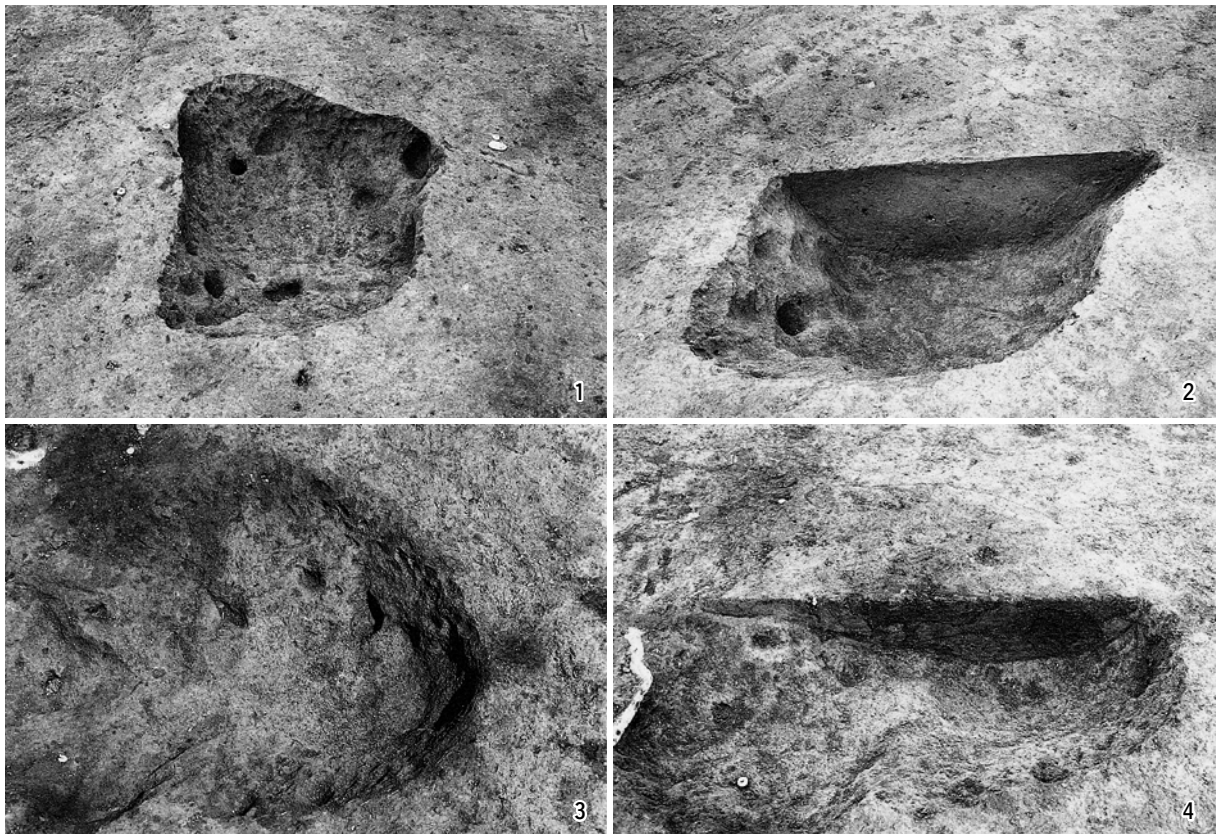
41 16号土坑

1 全景（東から） 2 断面（東から）
3 遺物出土状況（東から） 4 遺物出土状況（南から）



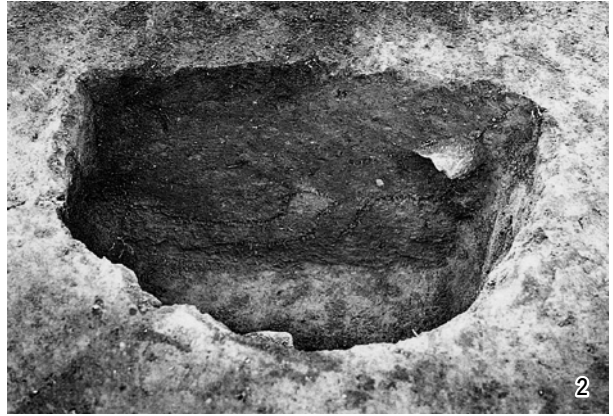
42 17・18号土坑

1 17号土坑全景（東から） 2 17号土坑断面（東から）
3 18号土坑全景（南東から） 4 18号土坑断面（南東から）



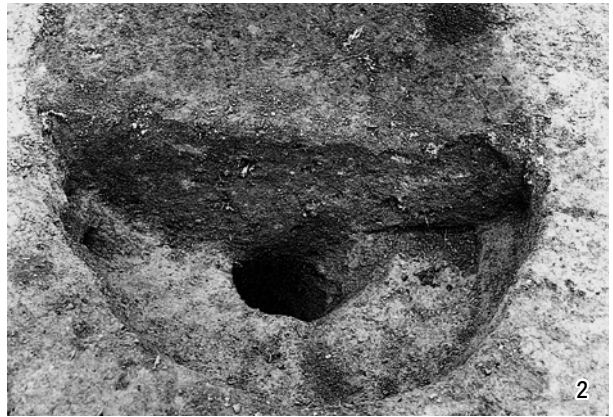
43 19・20号土坑

1 19号土坑全景（南東から） 2 19号土坑断面（南から）
3 20号土坑全景（南から） 4 20号土坑断面（南から）



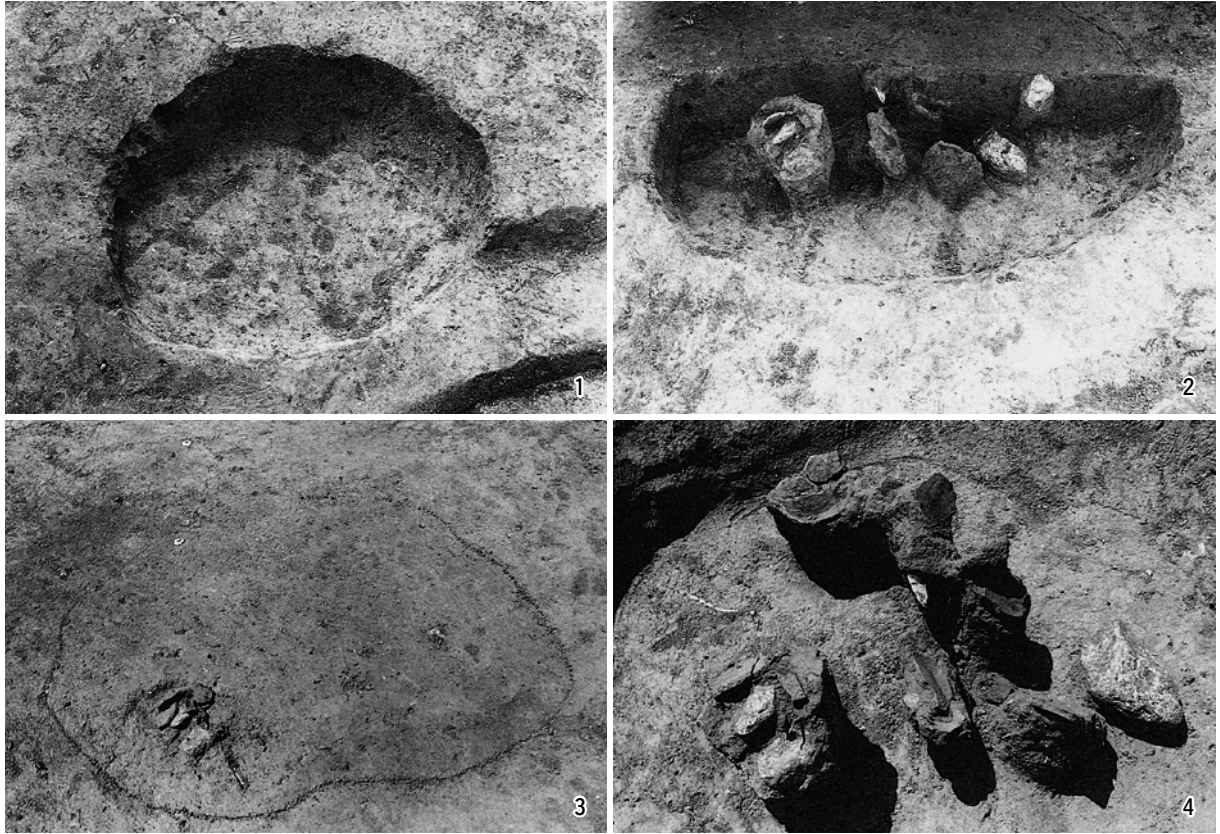
44 21・22号土坑

1 21号土坑全景 (南から) 2 21号土坑断面 (南から)
3 22号土坑全景 (東から) 4 22号土坑断面 (東から)



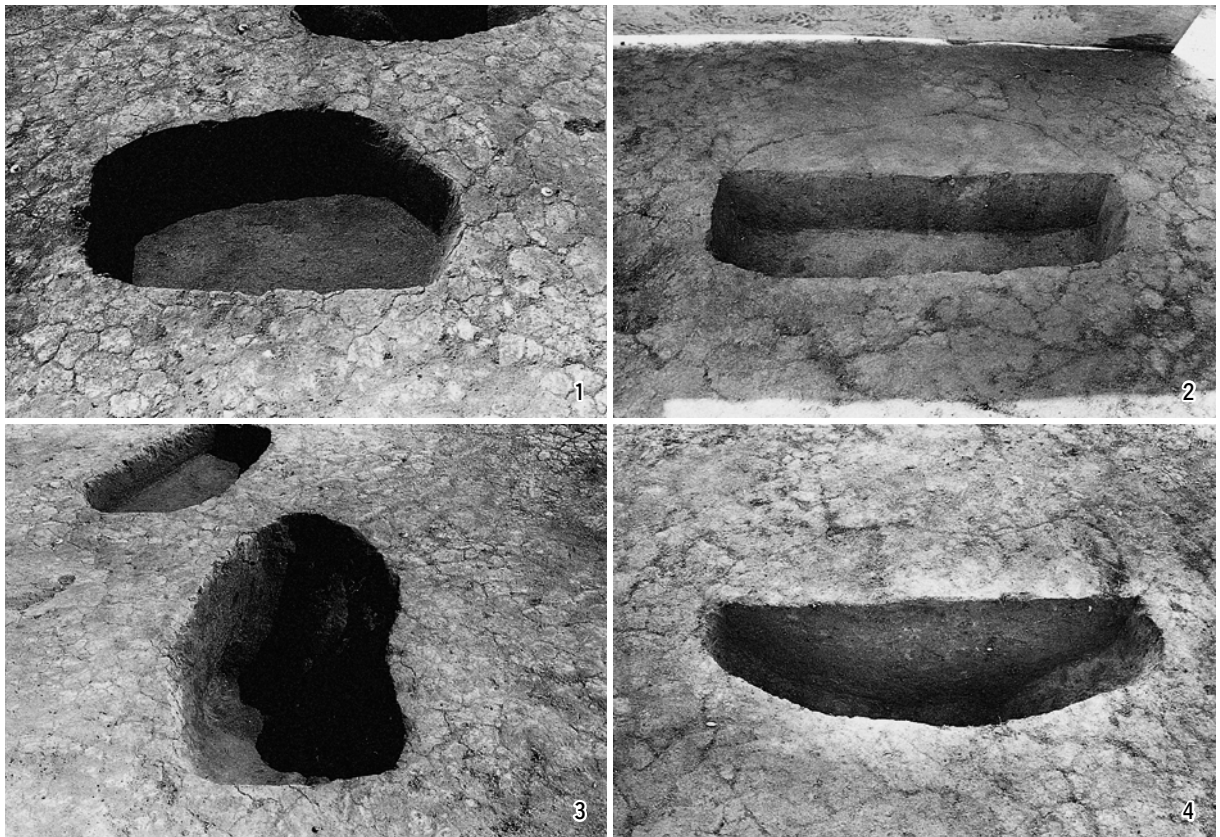
45 23・24号土坑

1 23号土坑全景 (南から) 2 23号土坑断面 (南から)
3 24号土坑全景 (東から) 4 24号土坑断面 (東から)



46 25号土坑

1 全景（東から） 2 断面（東から）
3 検出状況（東から） 4 遺物出土状況（東から）



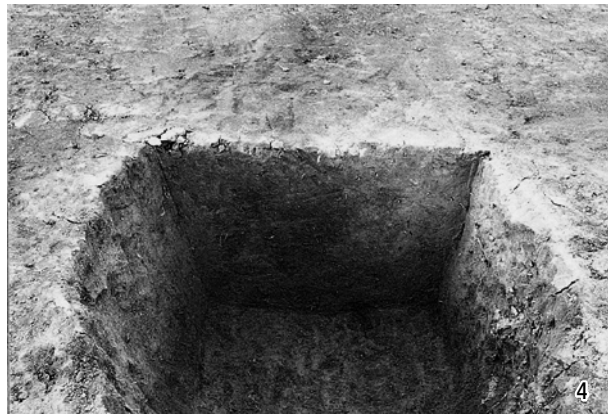
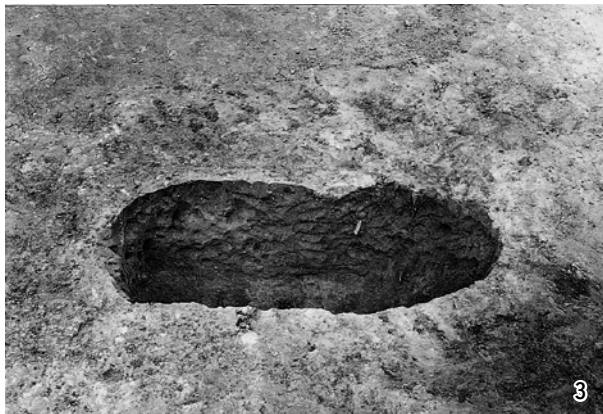
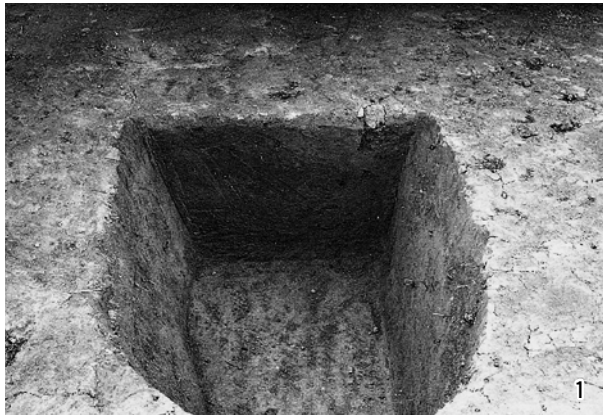
47 26・27号土坑

1 26号土坑全景（南東から） 2 26号土坑断面（南東から）
3 27号土坑全景（北西から） 4 27号土坑断面（東から）



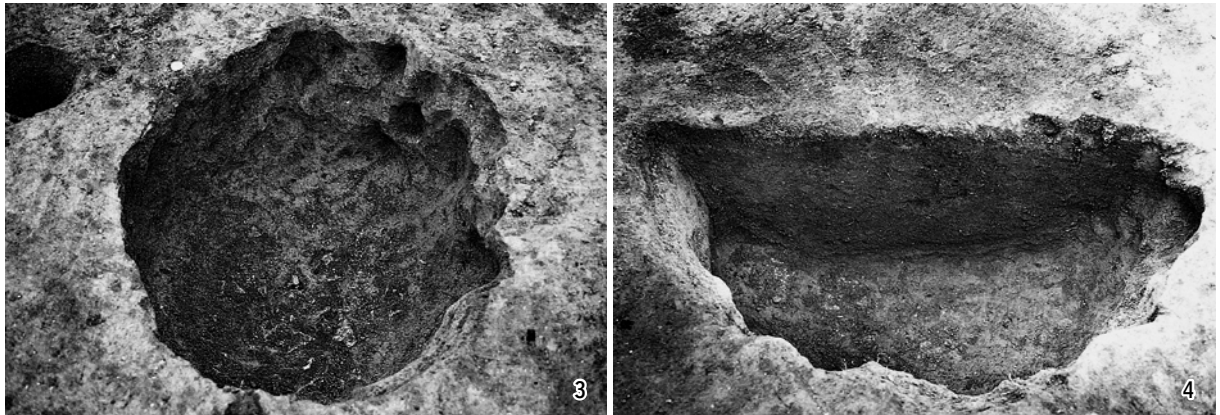
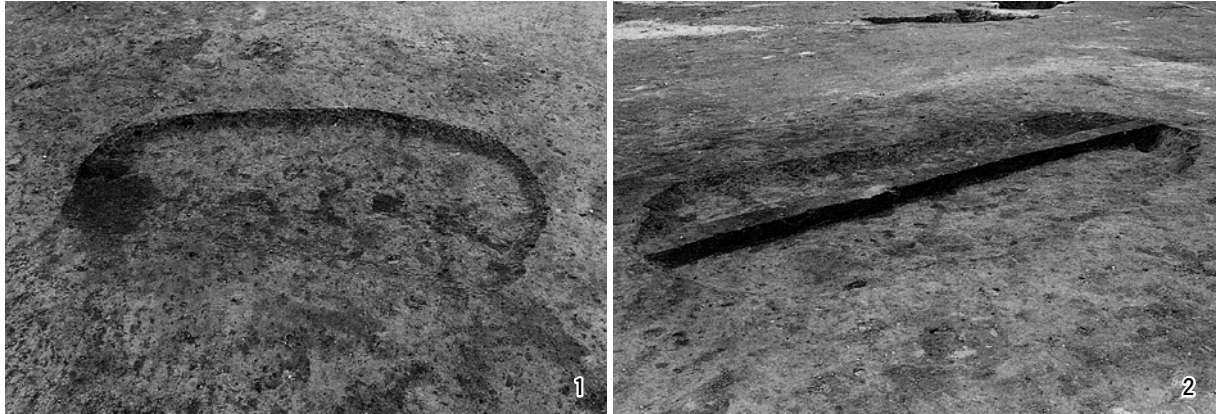
48 28～30号土坑

1 28号土坑全景（北から） 2 28号土坑断面（北から）
3 29・30号土坑全景（南から） 4 29・30号土坑全景（東から）



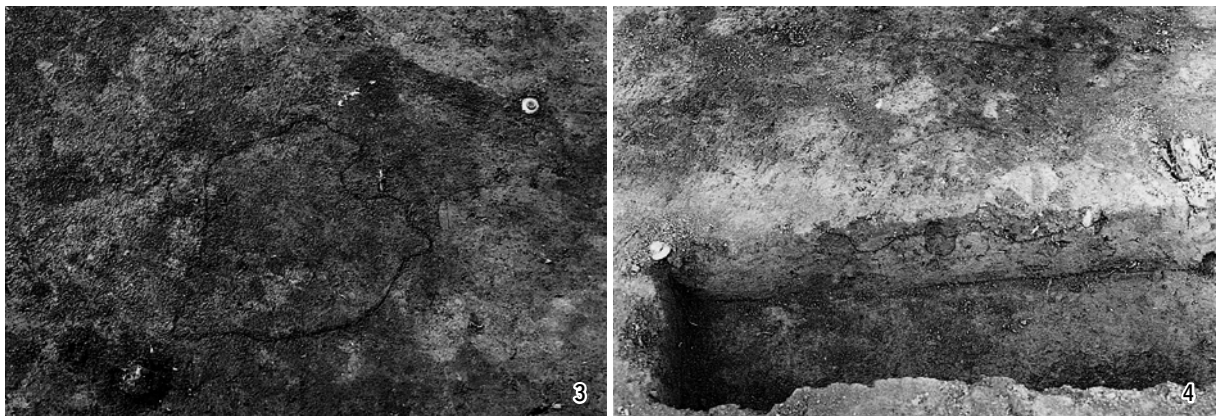
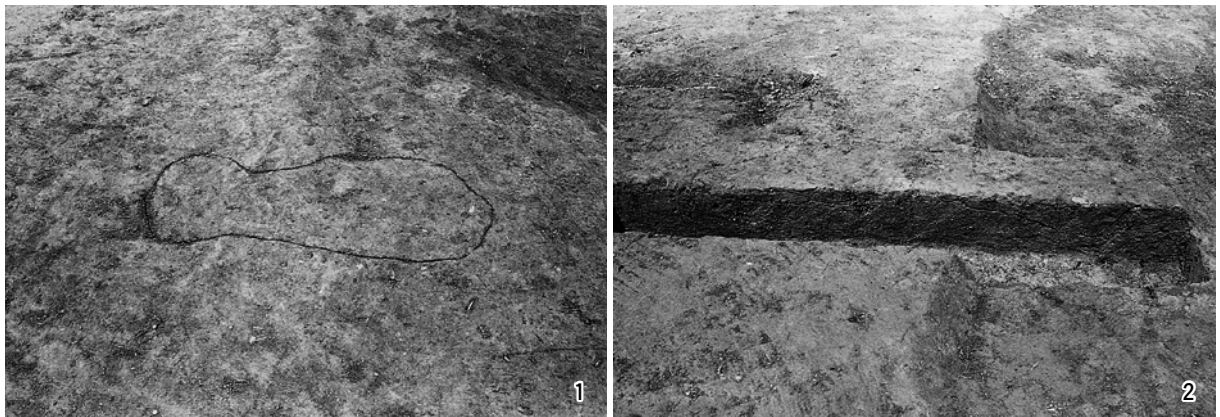
49 29～31号土坑

1 29号土坑断面（東から） 2 30号土坑断面（東から）
3 31号土坑全景（南から） 4 31号土坑断面（東から）



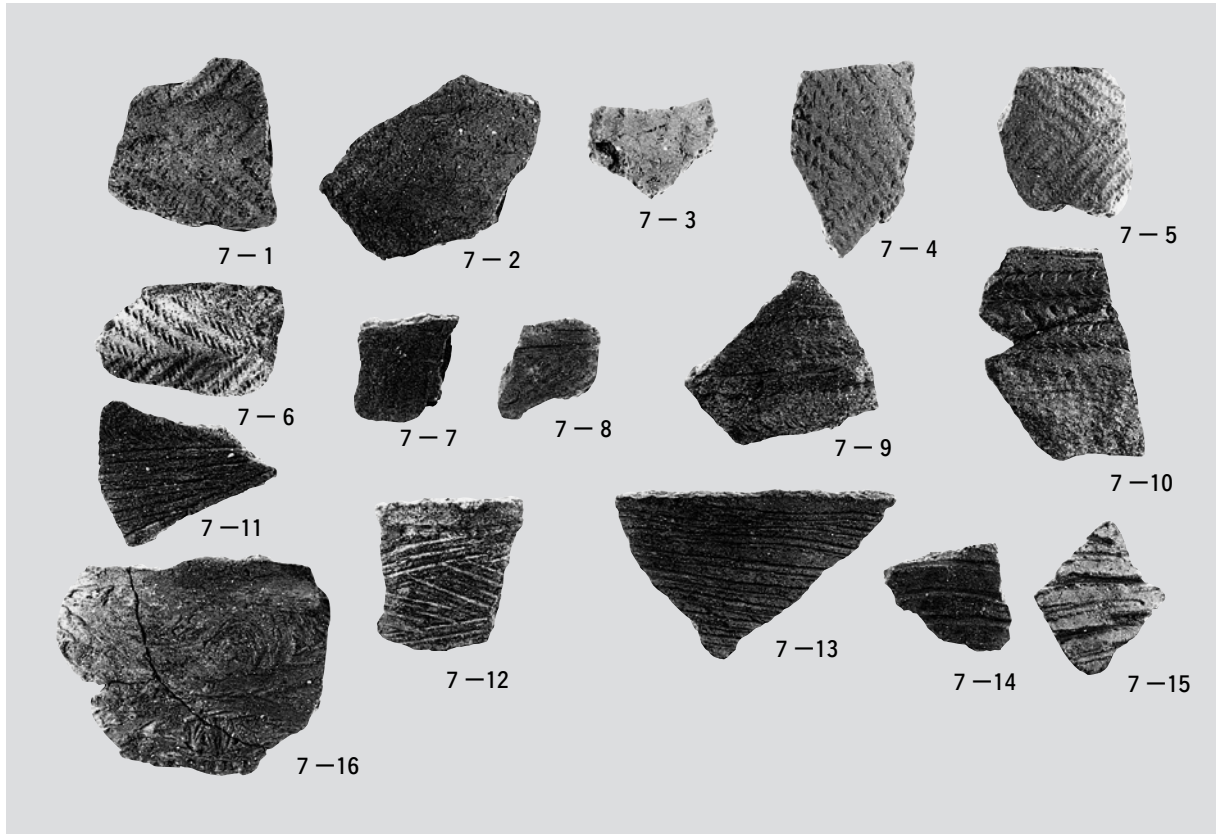
50 32・33号土坑

1 32号土坑全景（南西から） 2 32号土坑断面（東から）
3 33号土坑全景（南から） 4 33号土坑断面（東から）

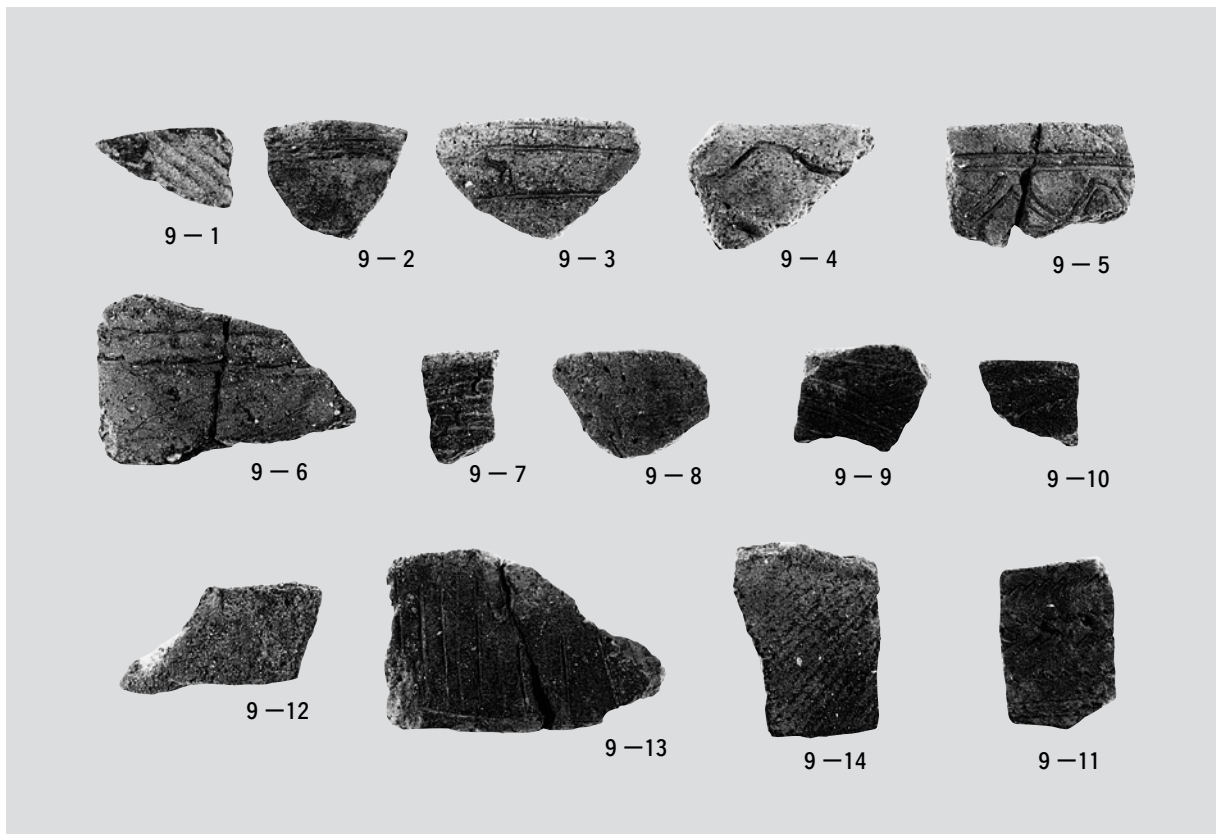


51 1・2号焼土遺構

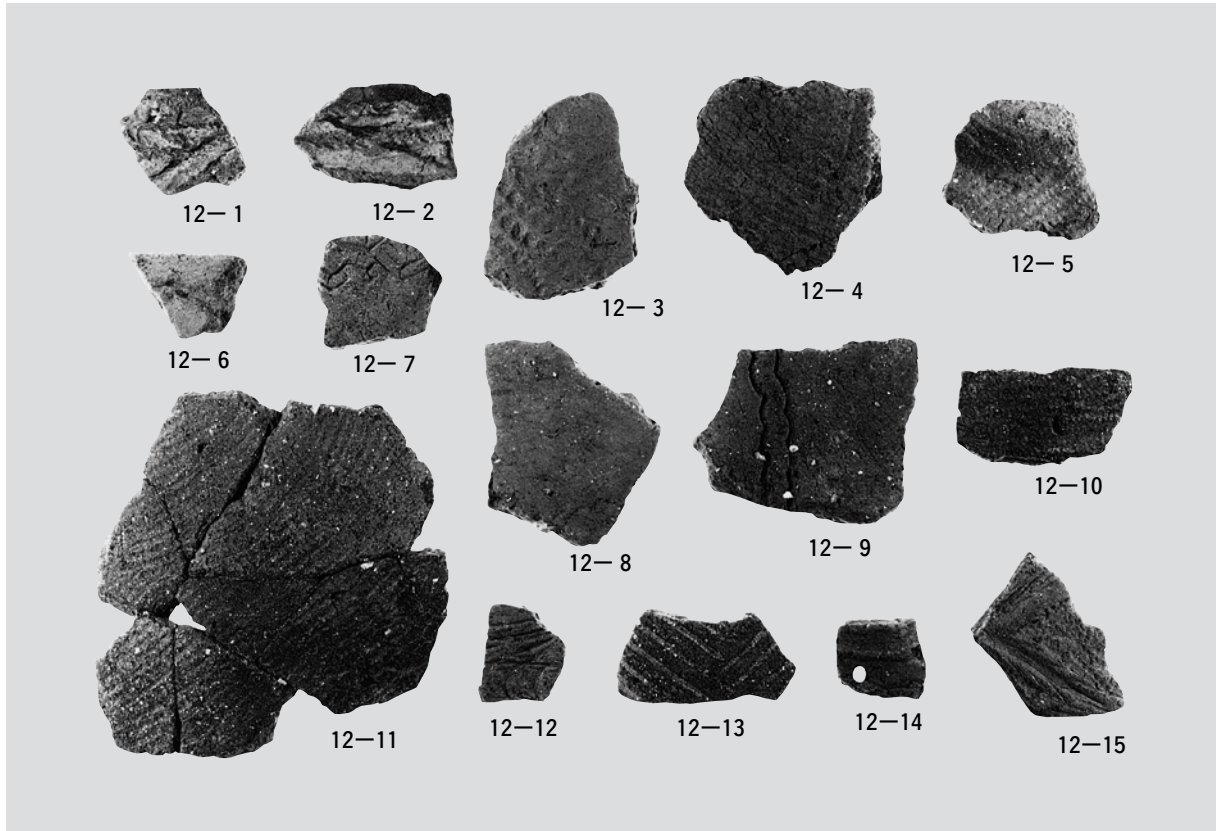
1 1号焼土遺構全景（南西から） 2 1号焼土遺構断割（南西から）
3 2号焼土遺構全景（南から） 4 2号焼土遺構断割（西から）



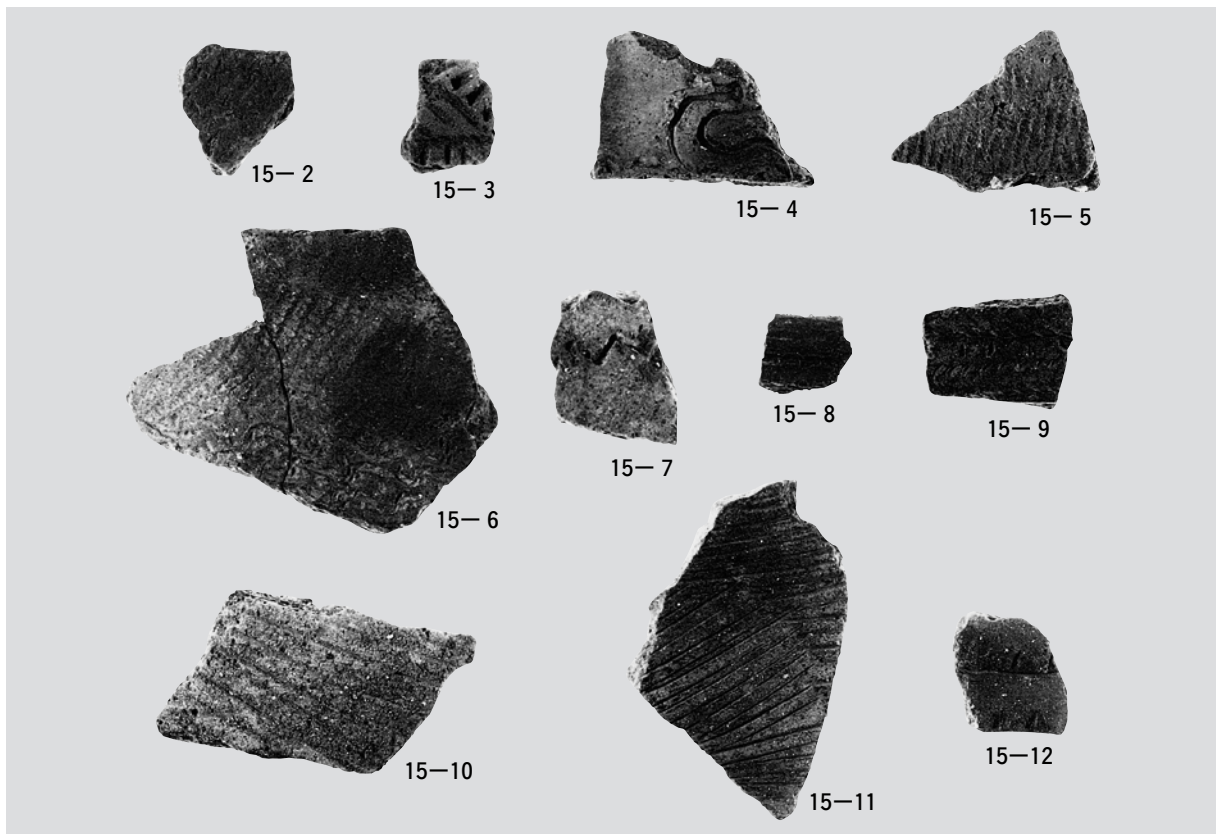
52 1号住居跡出土土器



53 2号住居跡出土土器



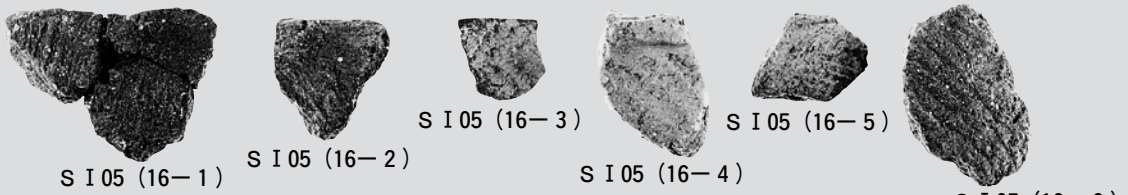
54 3号住居跡出土土器



55 4号住居跡出土土器



S I 04 (15-1)



S I 05 (16-1)

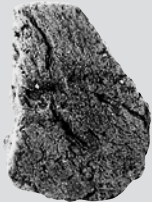
S I 05 (16-2)

S I 05 (16-3)

S I 05 (16-4)

S I 05 (16-5)

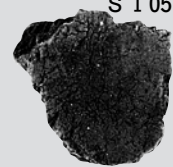
S I 05 (16-6)



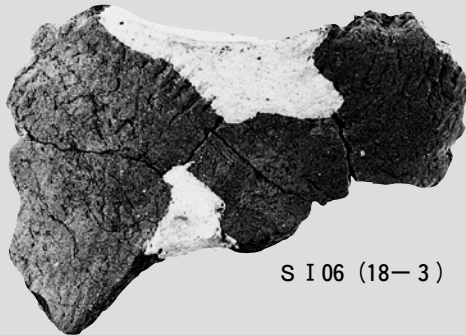
S I 05 (16-7)



S I 06 (18-1)



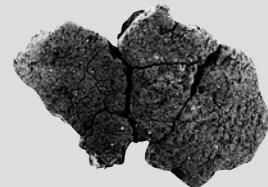
S I 06 (18-2)



S I 06 (18-3)



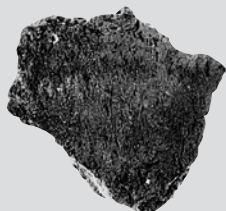
S I 06 (18-6)



S I 06 (18-4)



S I 06 (18-5)



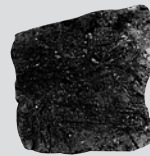
S I 07 (19-1)



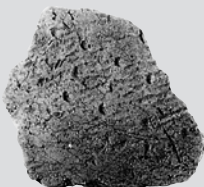
S I 07 (19-2)



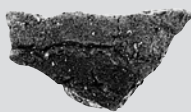
S I 07 (19-3)



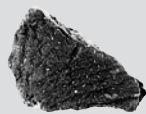
S I 07 (19-4)



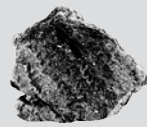
S I 07 (19-5)



S I 07 (19-6)



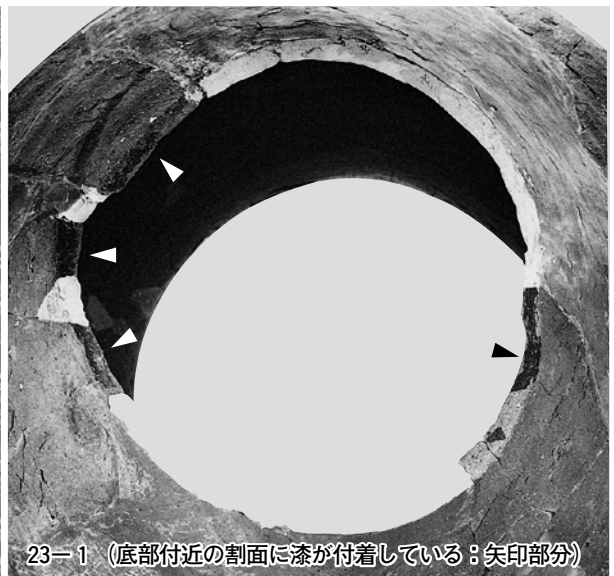
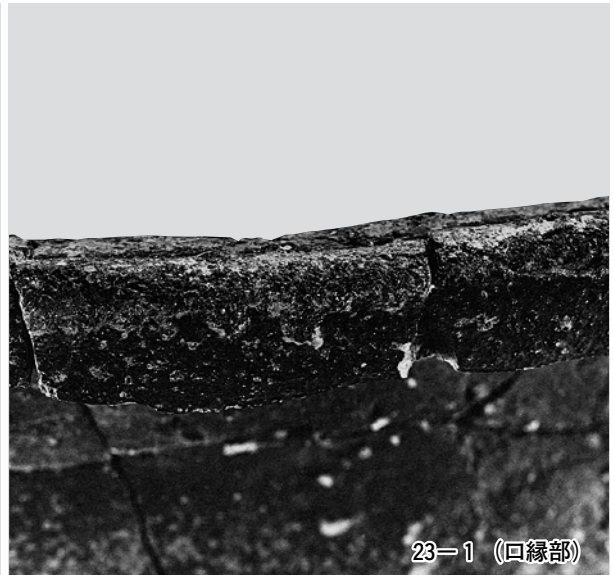
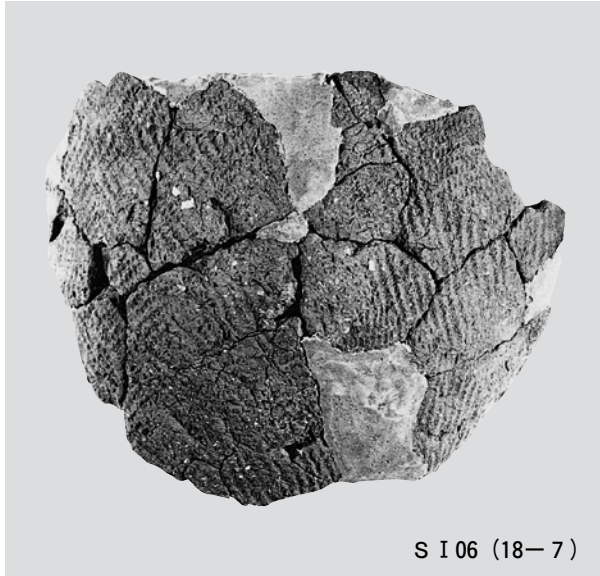
S I 08 (20-1)



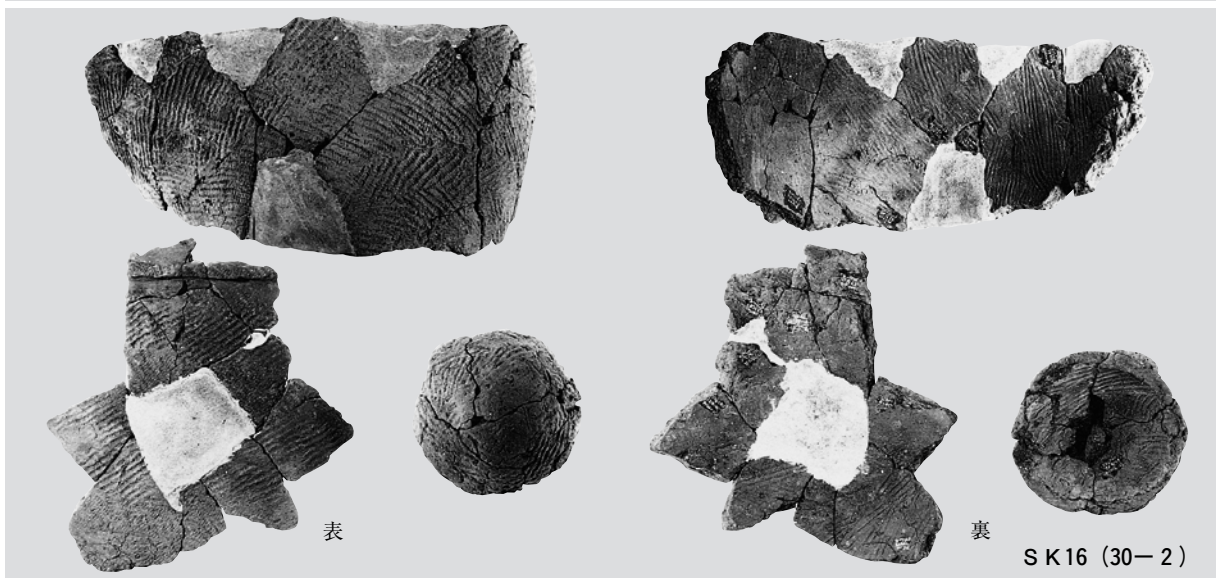
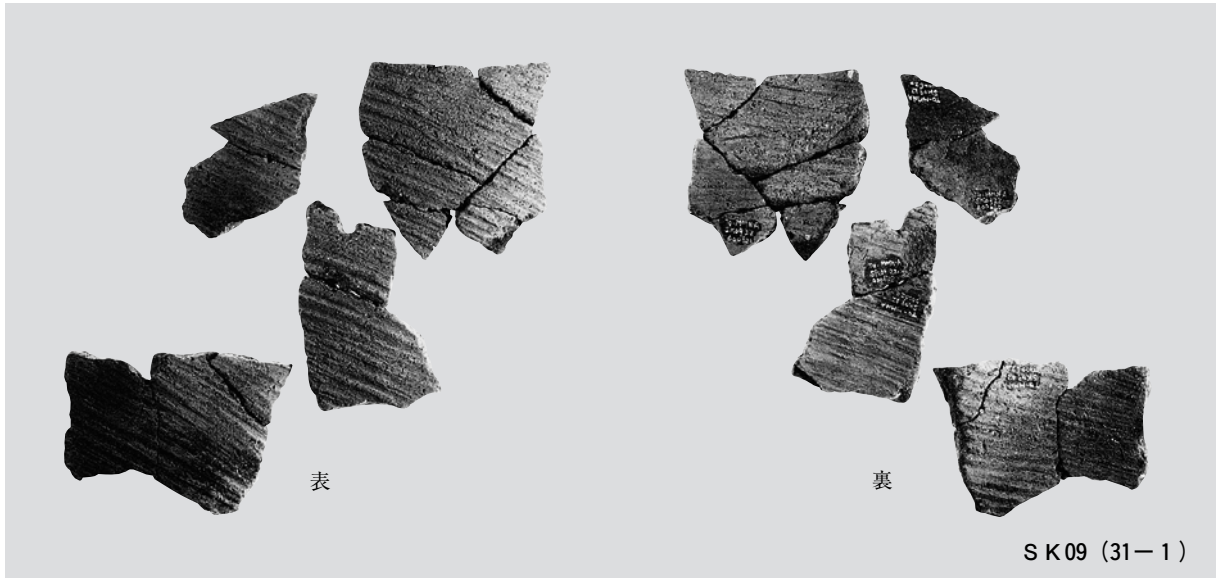
S I 08 (20-2)

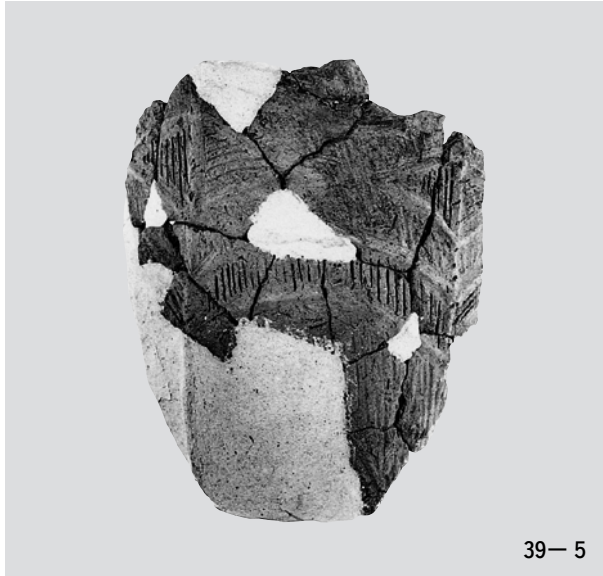


S I 08 (20-3)



57 6号住居跡・3号土坑出土土器, 1号建物跡出土陶器

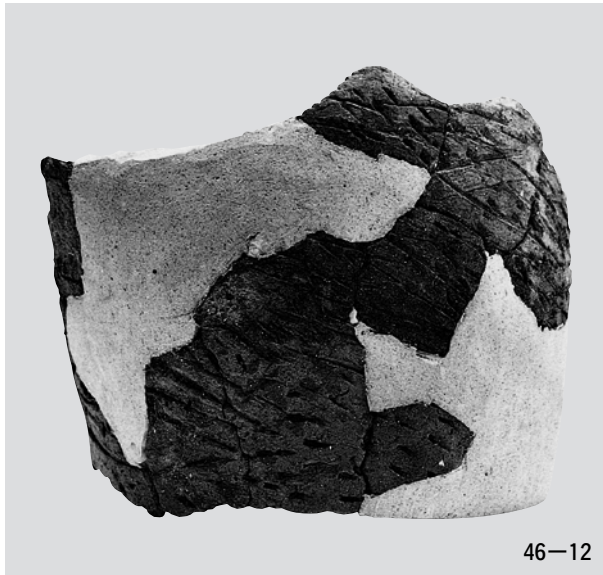




39-5



43-1



46-12



上面



45-24

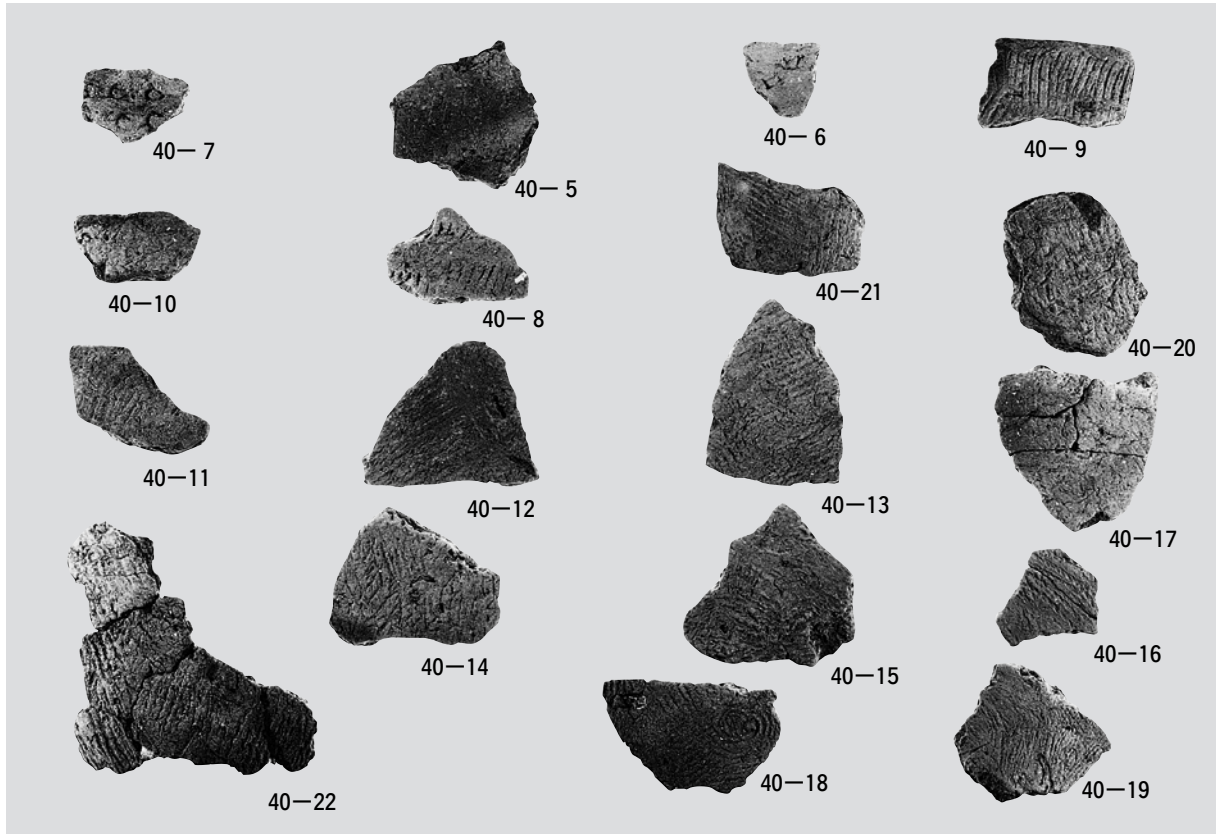


正面

45-23

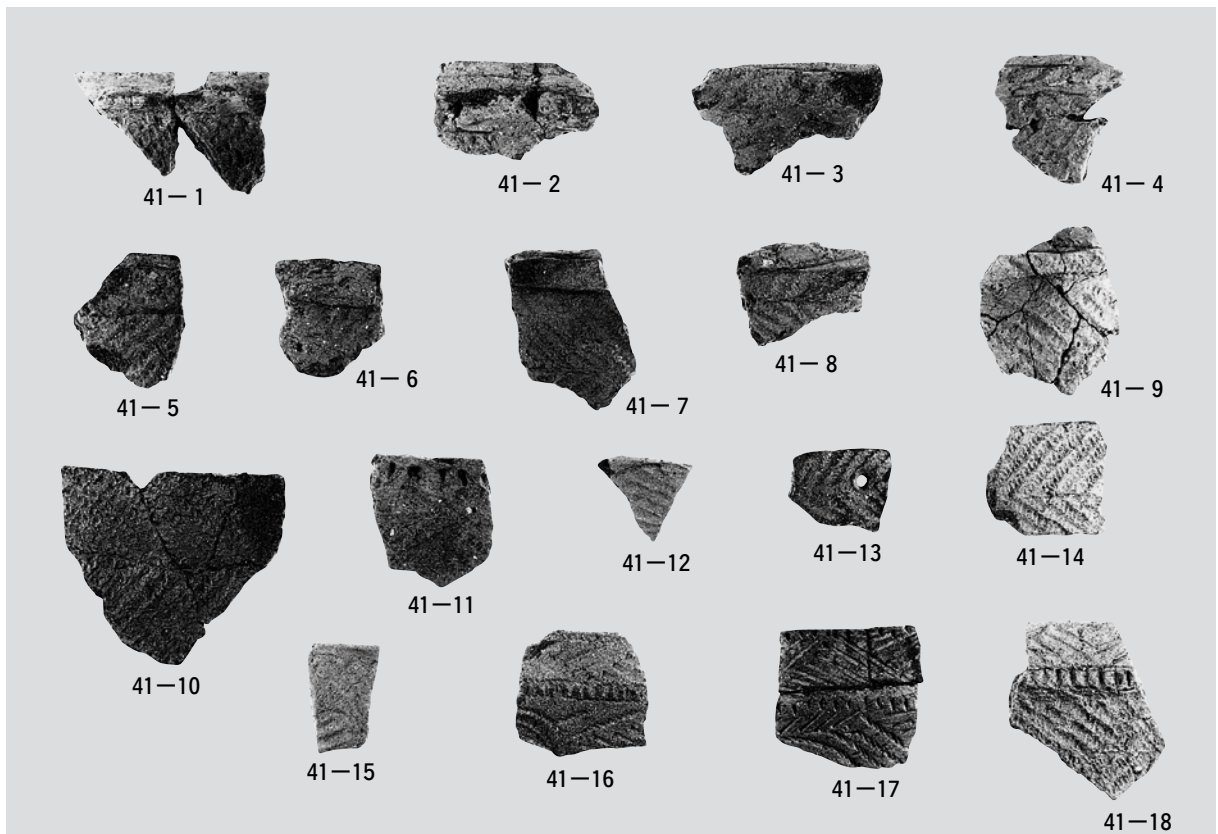
59 遺構外出土土器 (1)

I類, III-2・3類



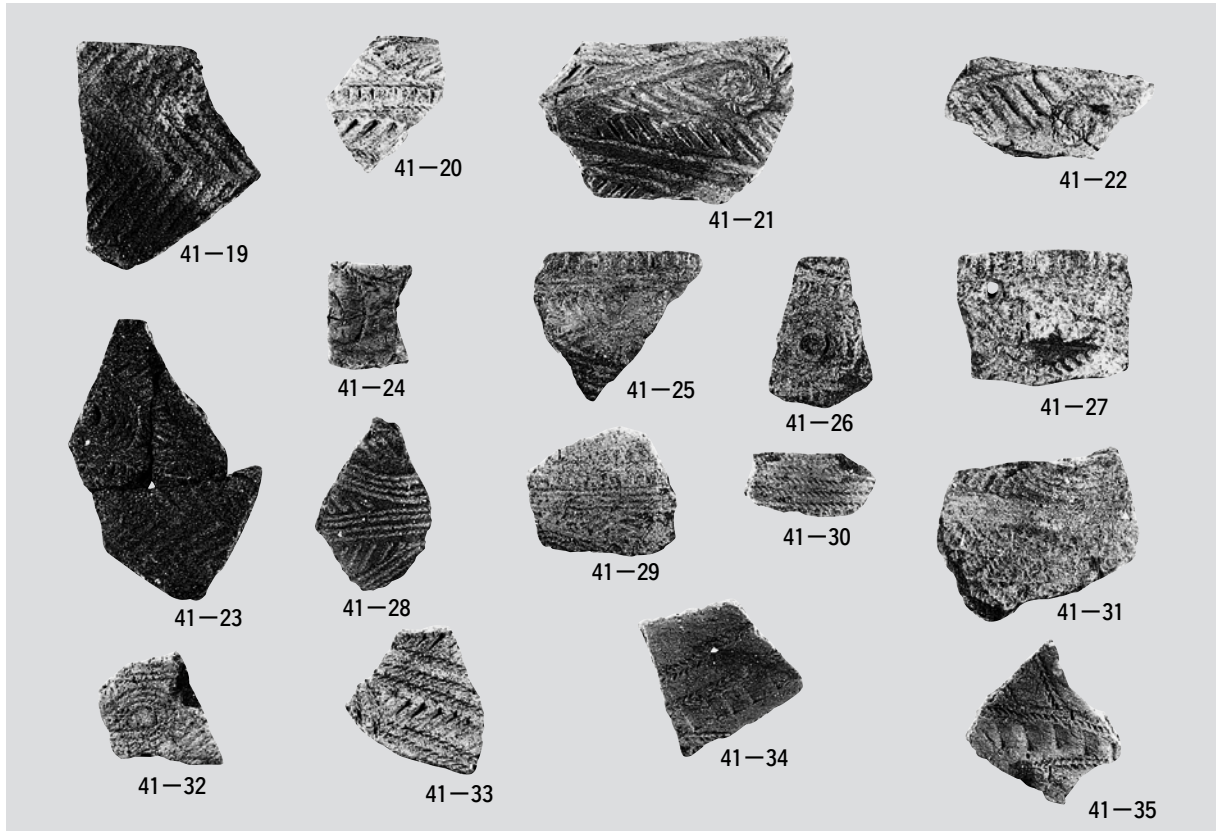
60 遺構外出土土器 (2)

II - 1 類



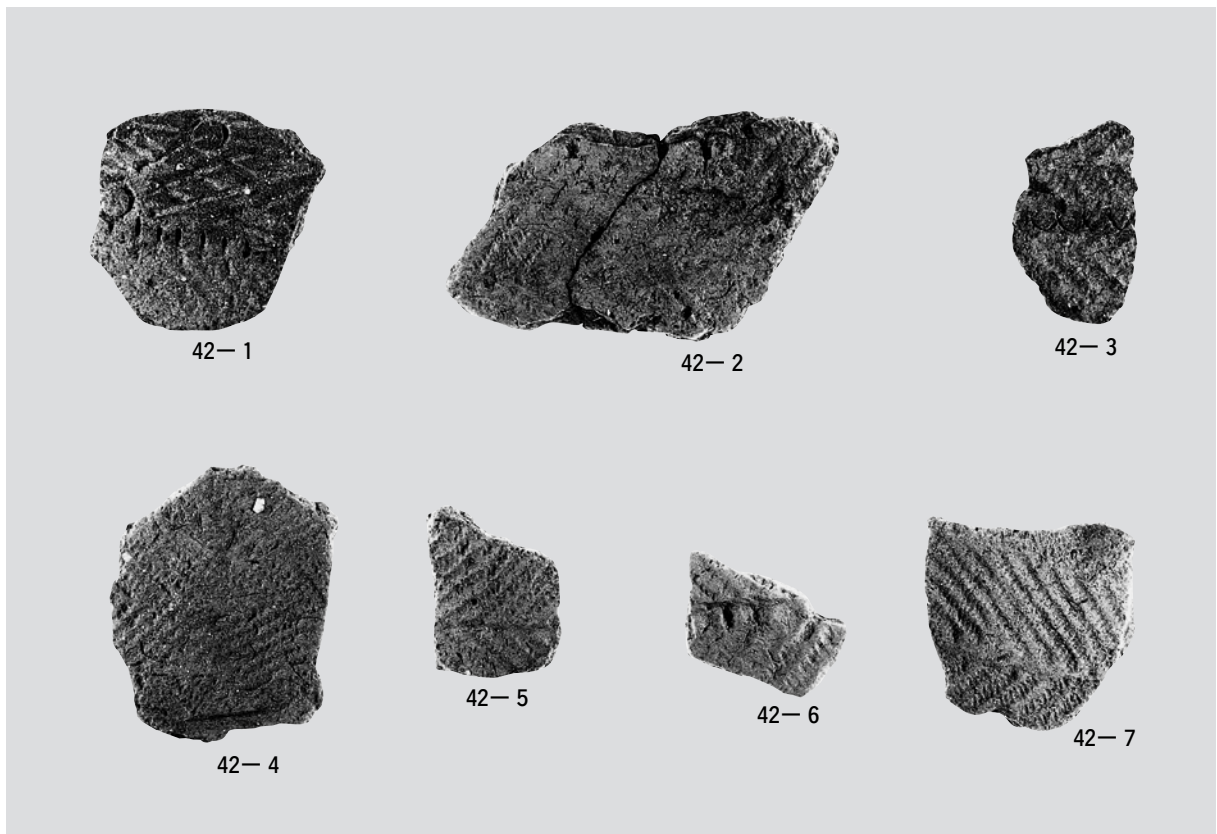
61 遺構外出土土器 (3)

II - 2 類



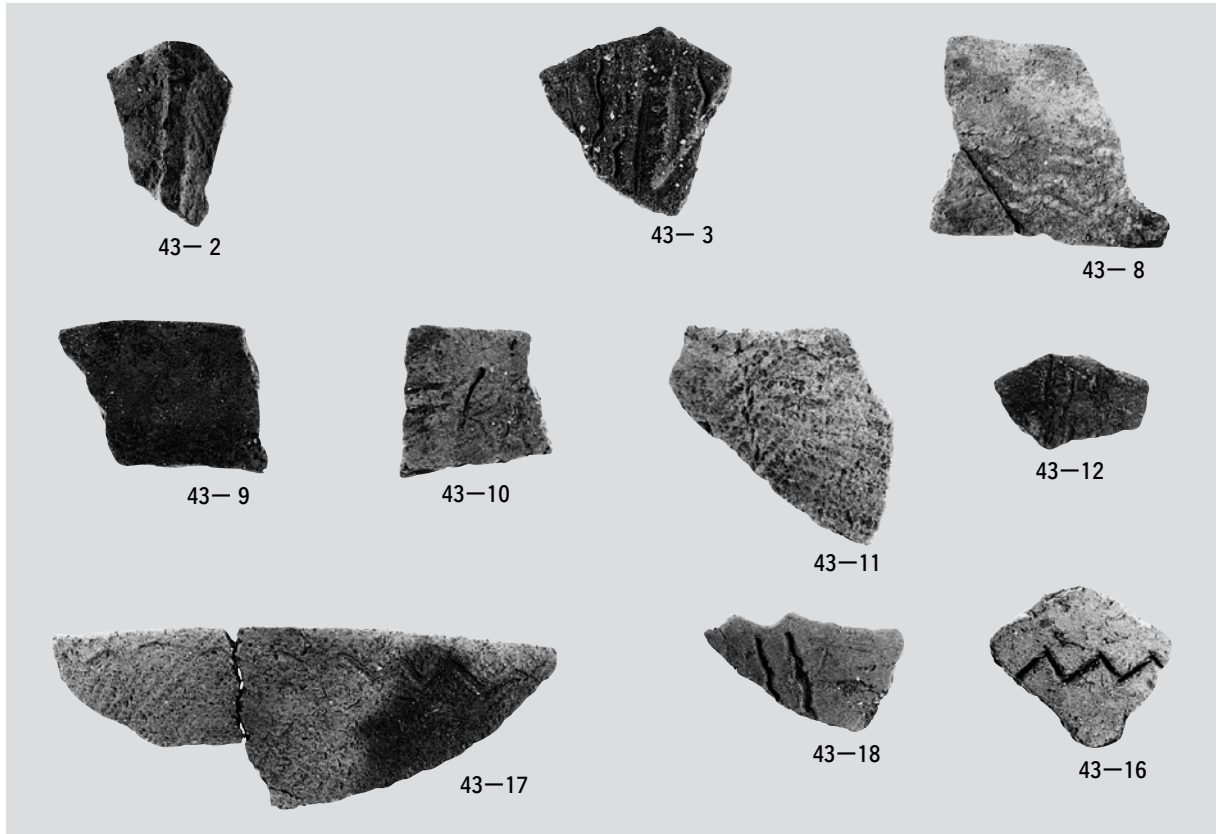
62 遺構外出土土器 (4)

II - 2類



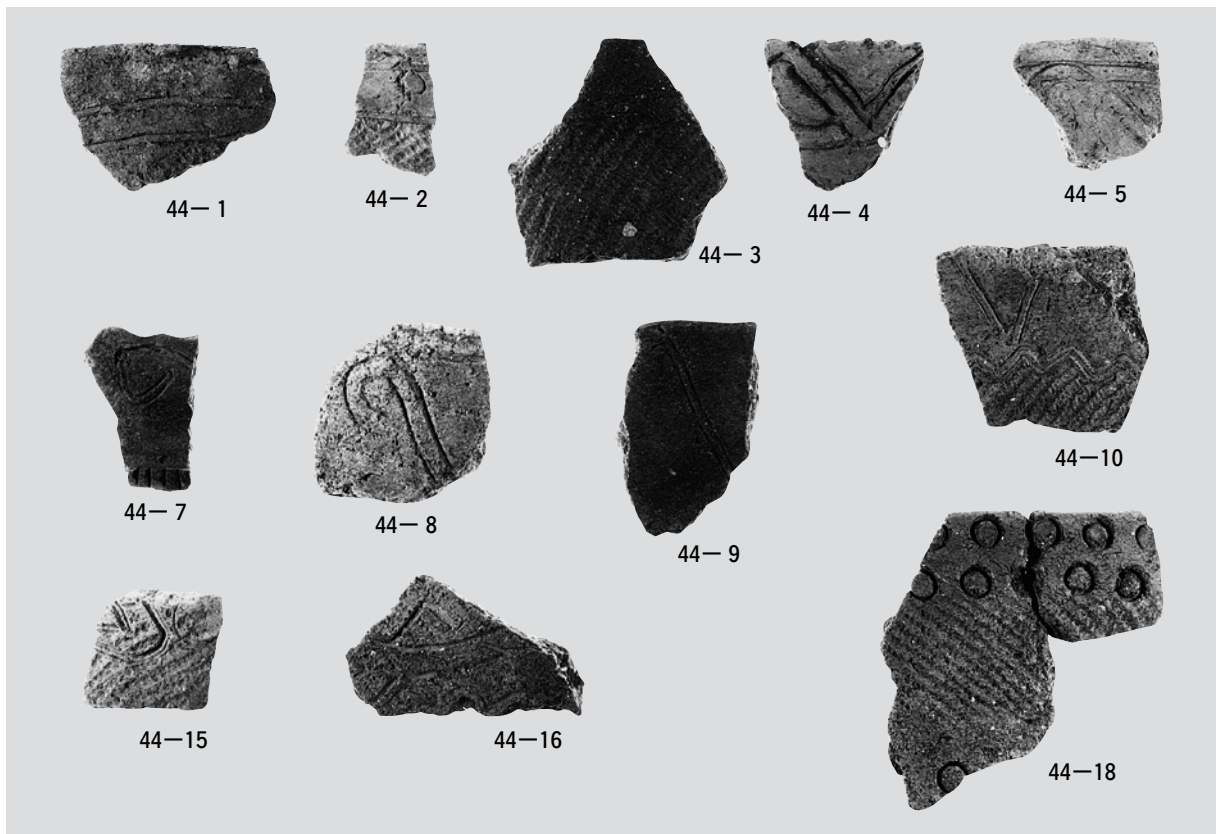
63 遺構外出土土器 (5)

II - 2類



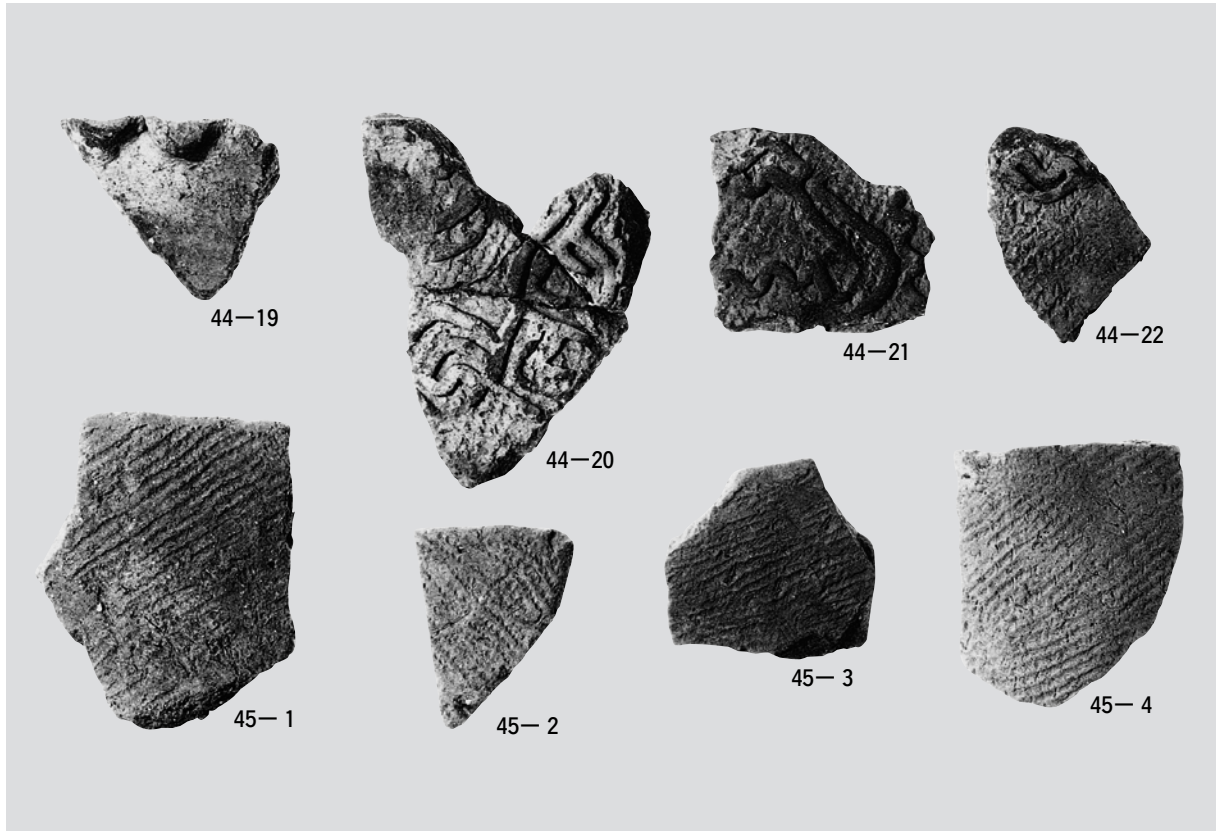
64 遺構外出土土器 (6)

Ⅲ-1類



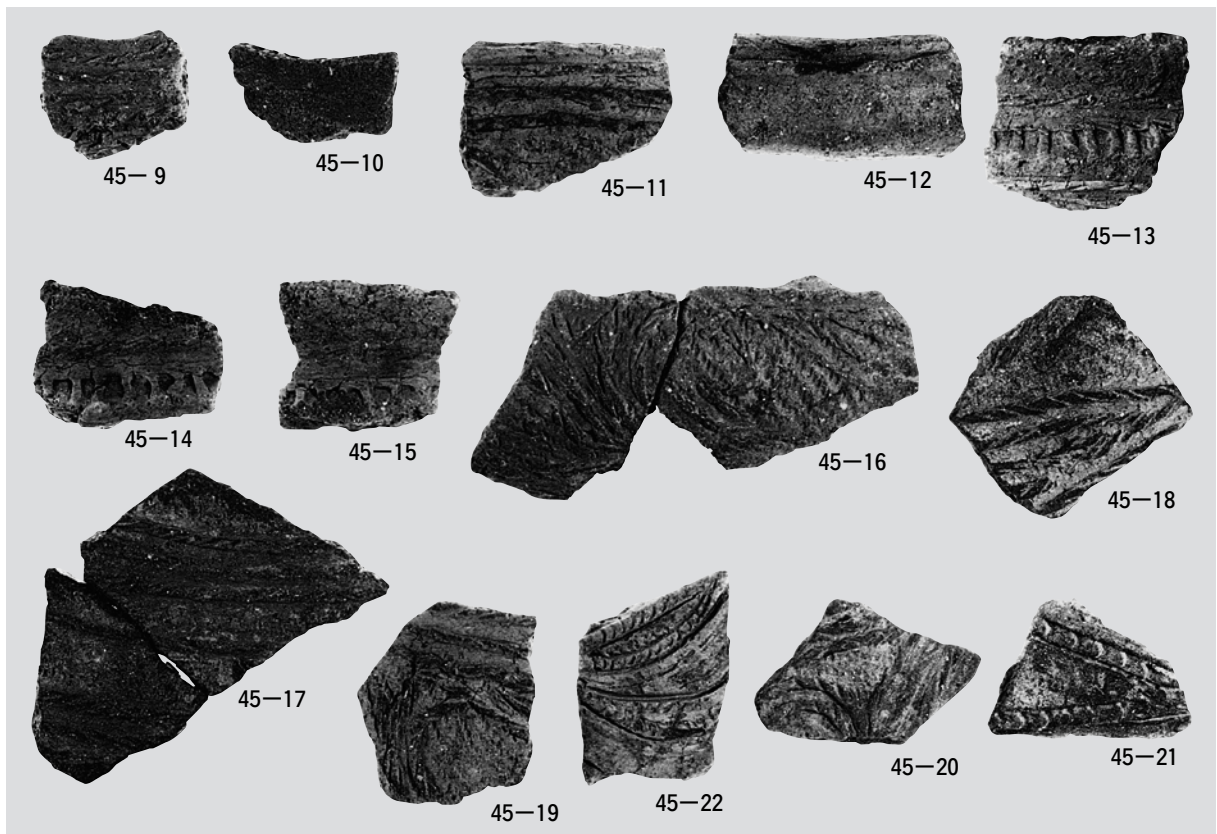
65 遺構外出土土器 (7)

Ⅲ-1類



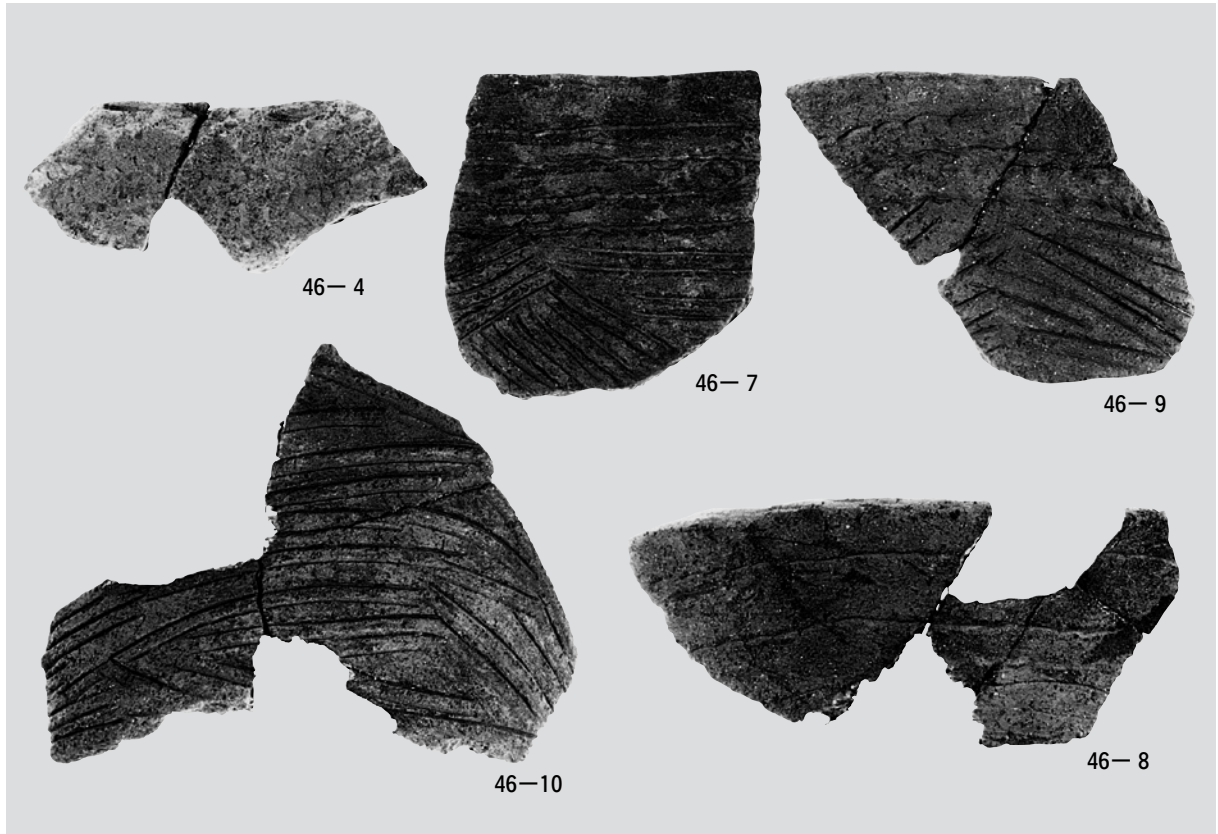
66 遺構外出土土器 (8)

Ⅲ-1類



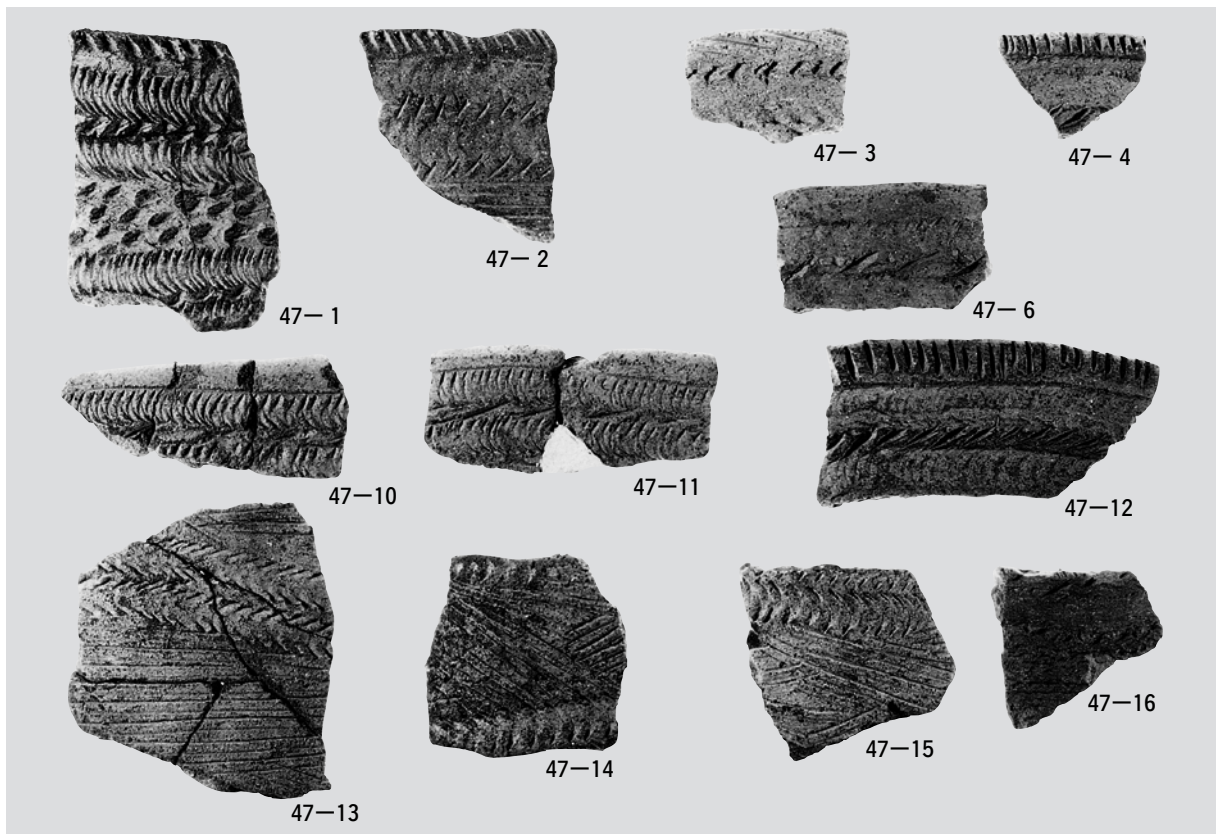
67 遺構外出土土器 (9)

Ⅲ-2類



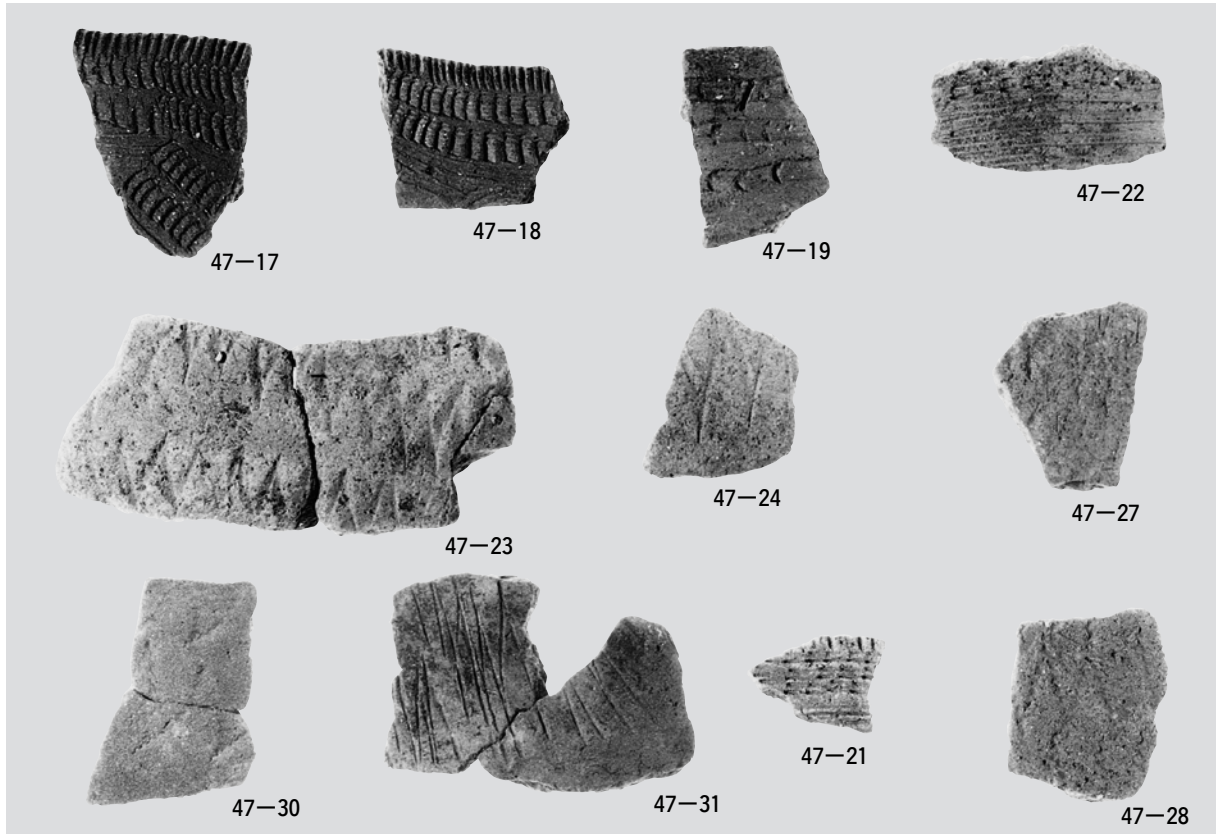
68 遺構外出土土器 (10)

Ⅲ - 3類



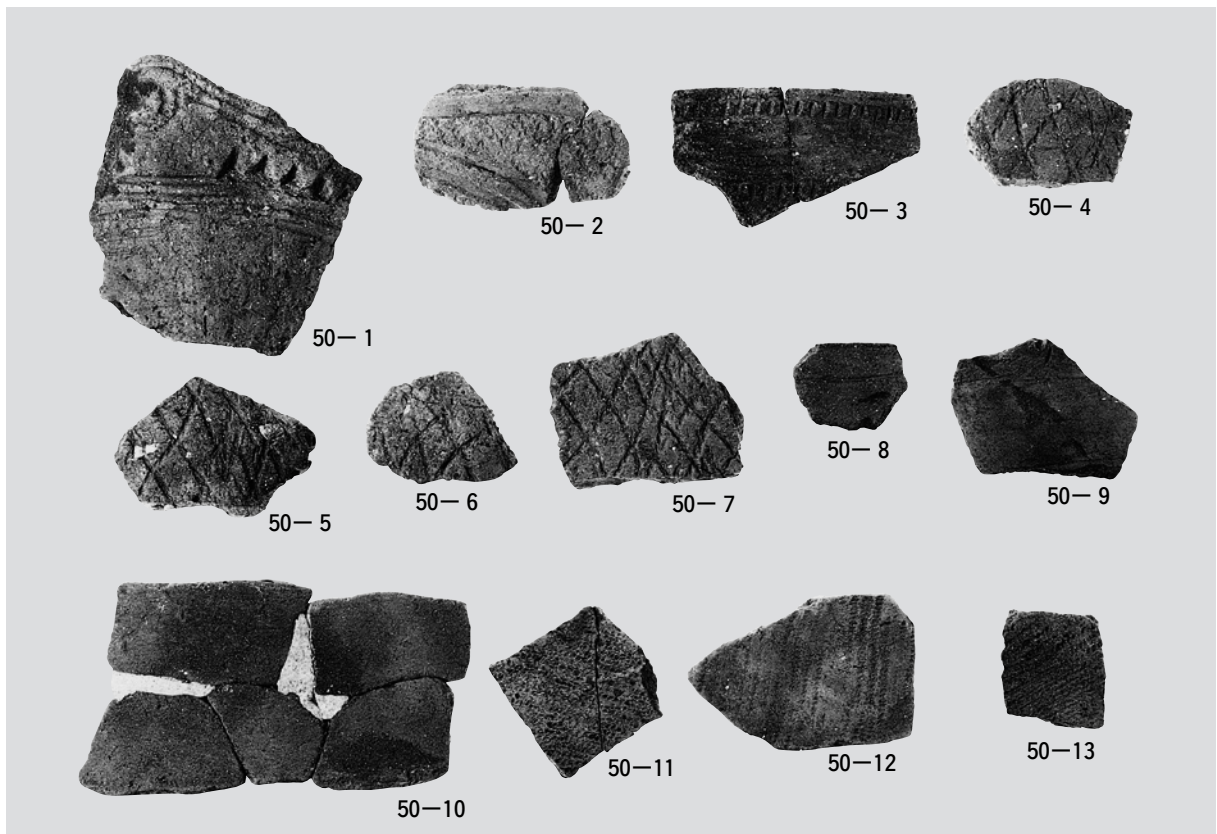
69 遺構外出土土器 (11)

Ⅲ - 3類



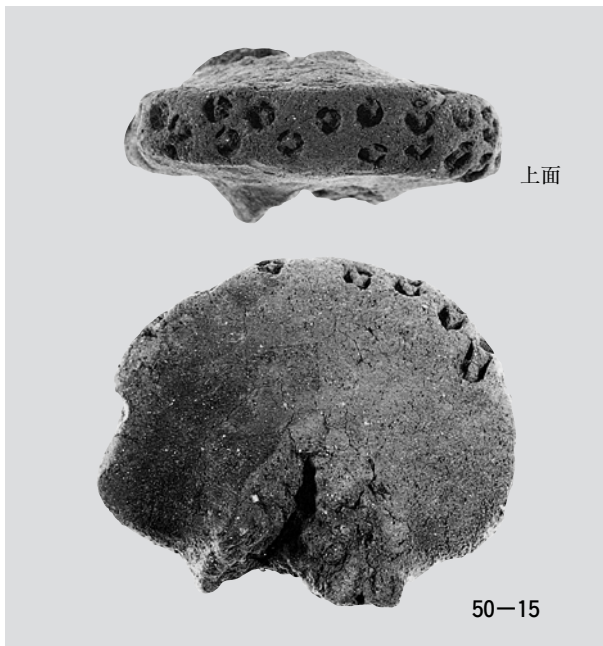
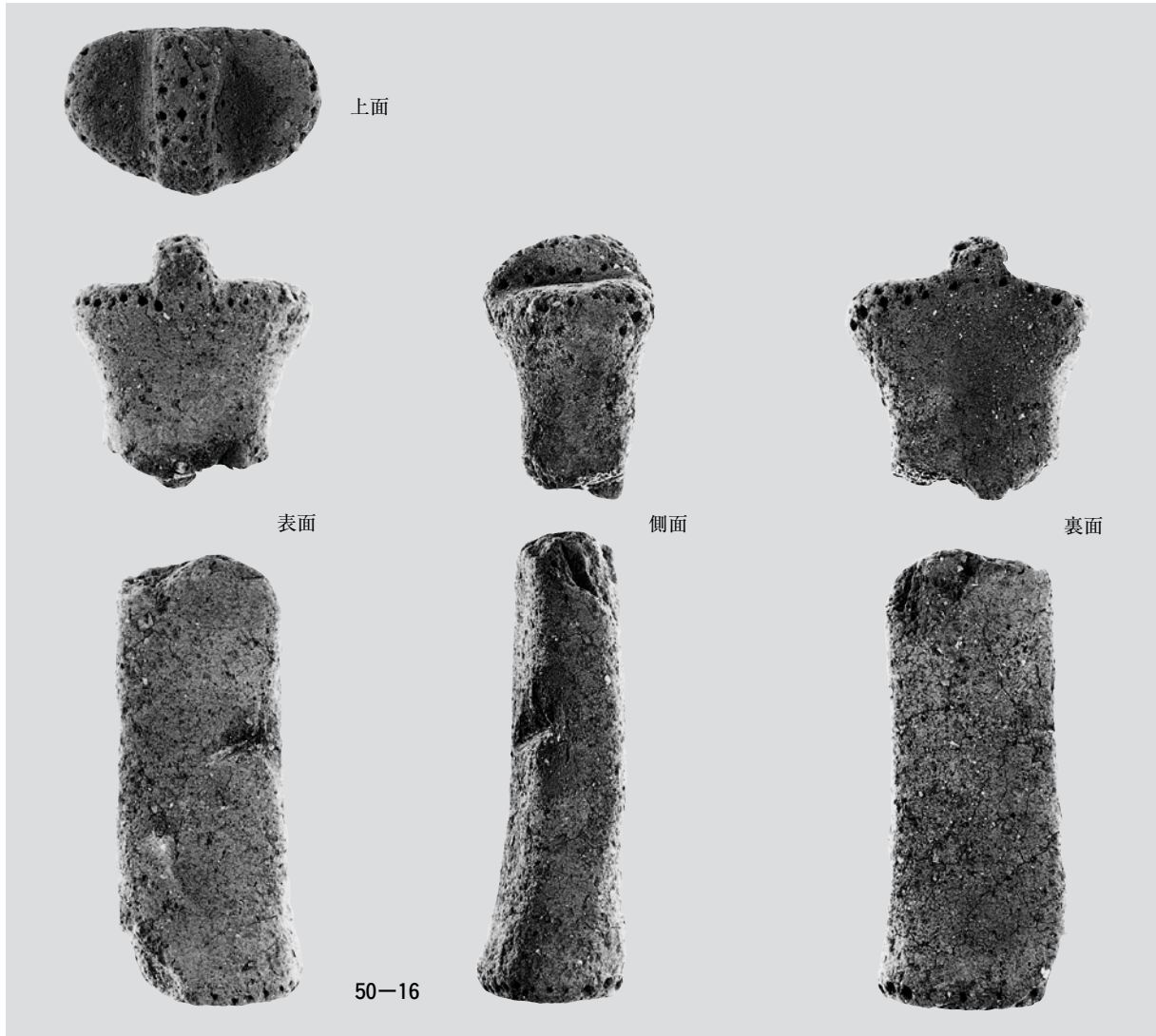
70 遺構外出土土器 (12)

Ⅲ - 3類

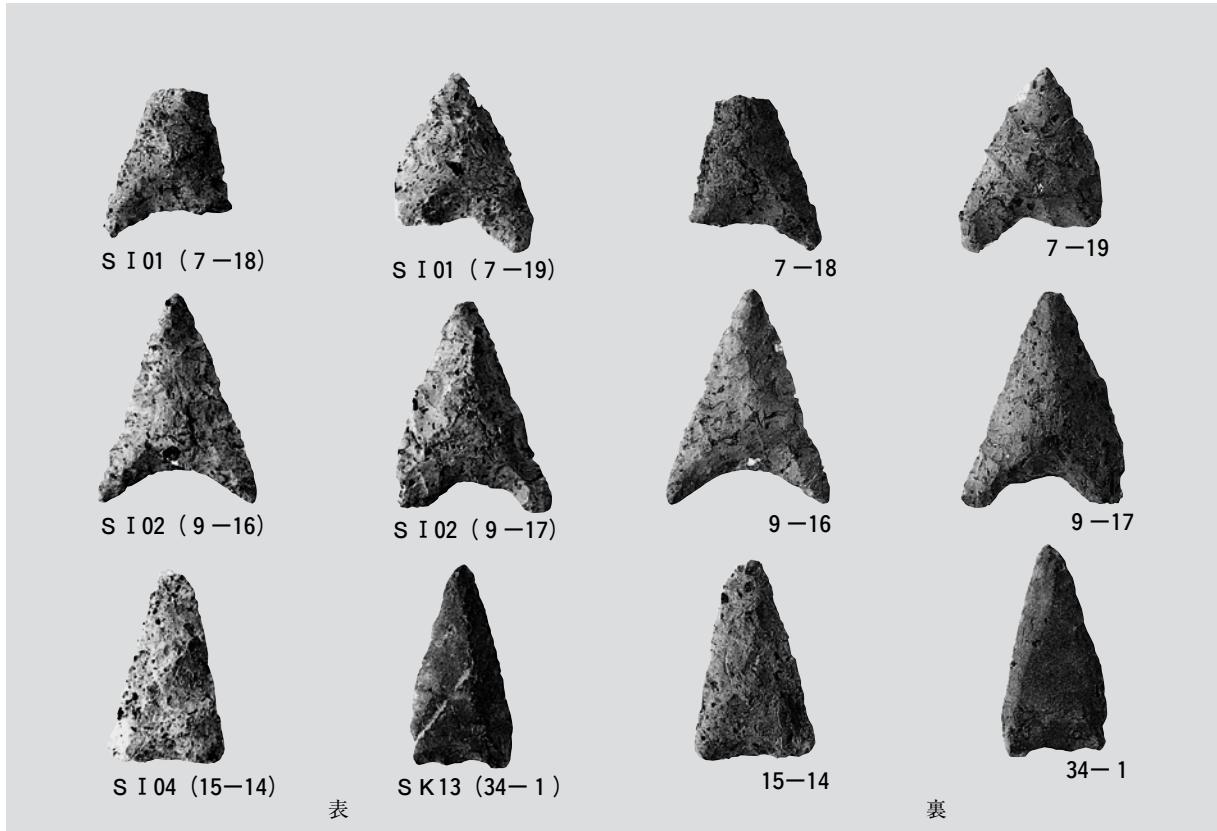


71 遺構外出土土器 (13)

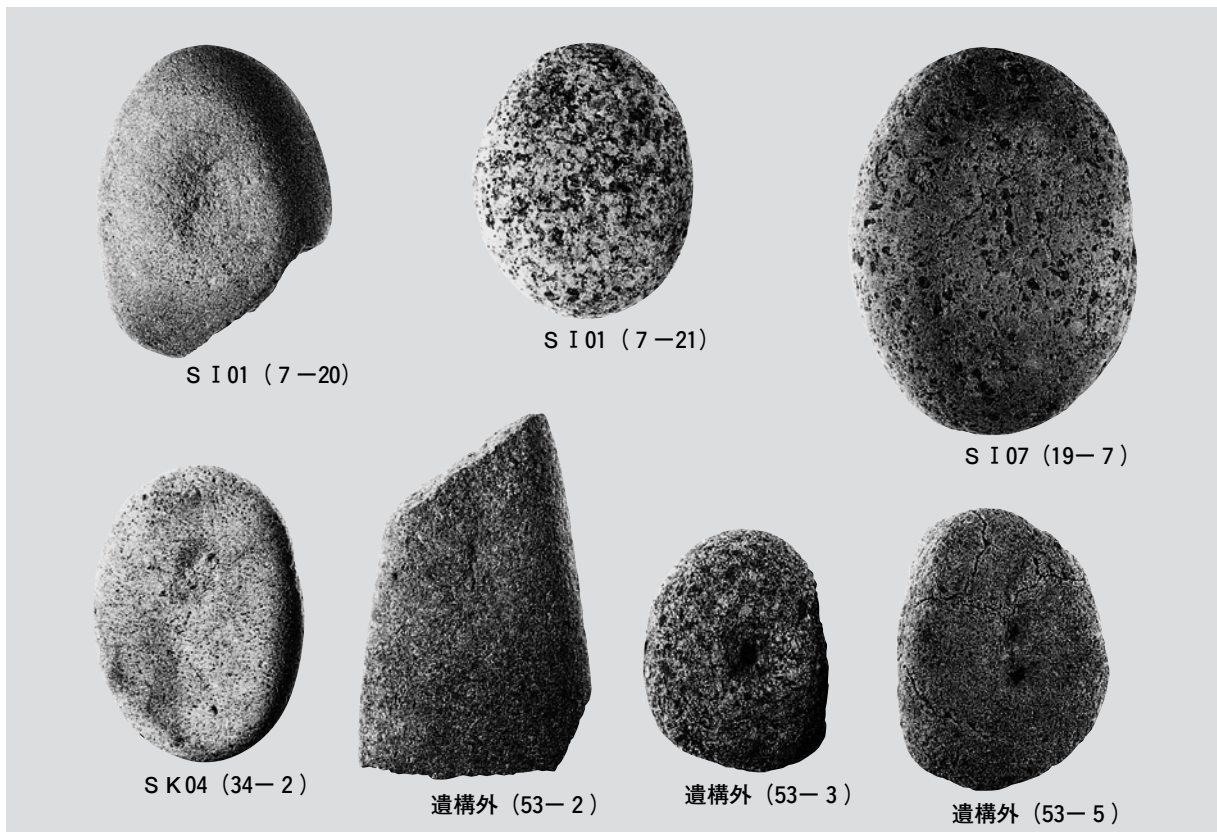
Ⅳ類



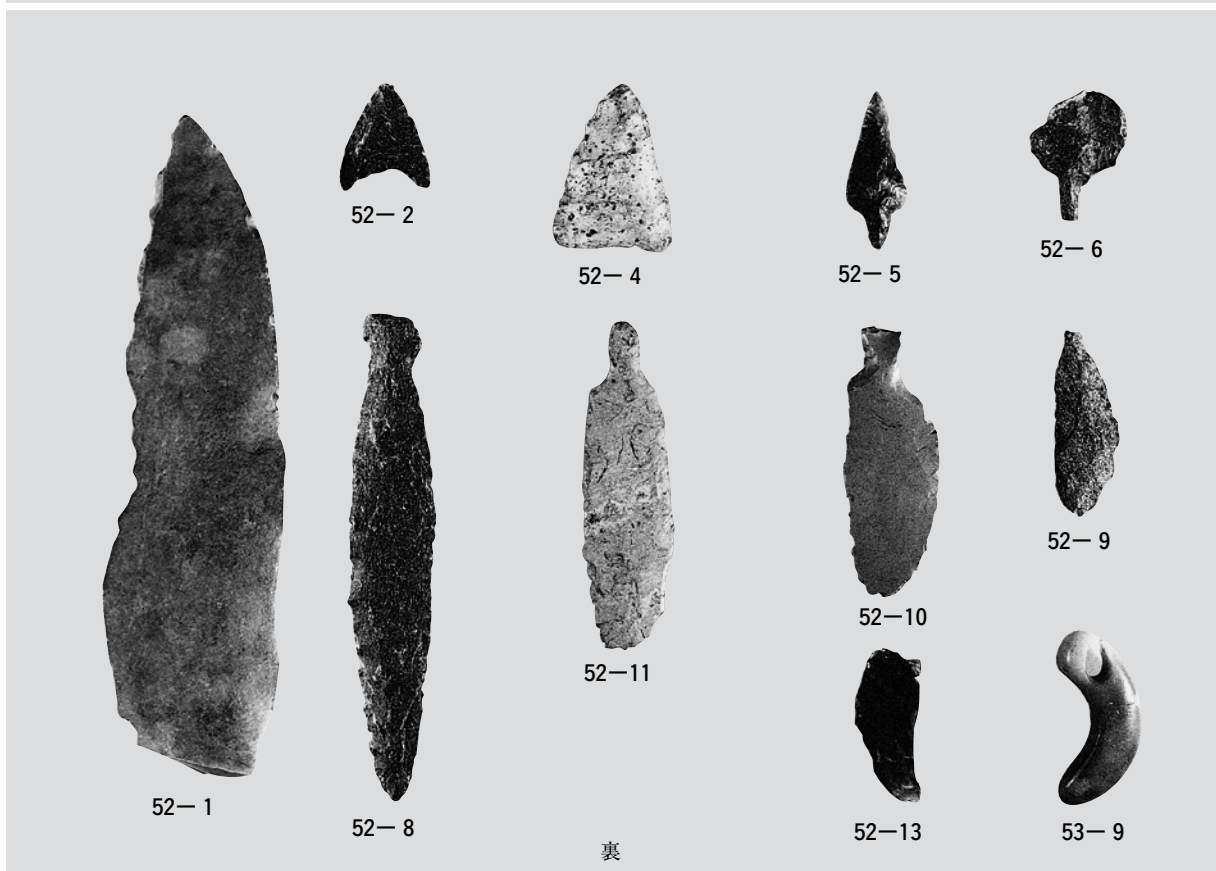
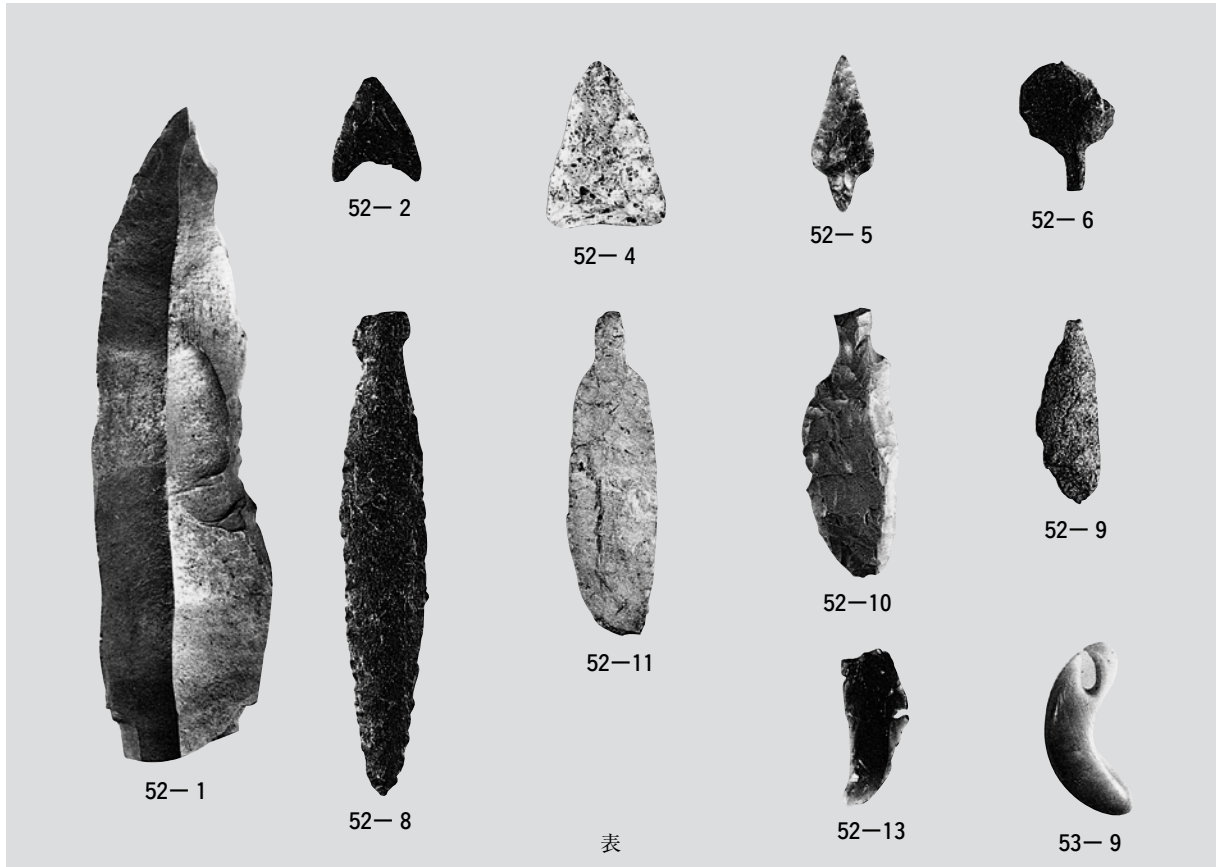
72 遺構外出土陶器・土製品



73 遺構内出土石器



74 遺構内外出土石器



75 遺構外出土石器

付 編 自 然 科 学 分 析

付編 1 福島県富岡町上郡 B 遺跡出土の炭化材の樹種同定

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、その構造は年輪が形成され針葉樹材や広葉樹材で特徴ある組織をもつ。そのため、解剖学的に概ね属レベルの同定が可能となる。木材は大型の植物遺体であるため移動性が少なく、堆積環境によっては現地性の森林植生の推定が可能になる。考古学では木材の利用状況や流通を探る手がかりになる。

2. 試料

試料は、上郡 B 遺跡 1 号木炭窯跡出土の炭化材 5 点、3 号木炭窯跡出土の炭化材 1 点の計 6 点である。

3. 方法

試料を割折して、新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柁目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本的な 3 断面を作製し、落射顕微鏡によって 75～750 倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

結果は表 1 に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus sect. Carpinus* カバノキ科 図版 1

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは数個放射方向に複合し、全体として放射方向に配列する放射孔材である。集合放射組織が見られる。

放射断面：道管の穿孔は、単穿孔である。放射組織は同性である。

接線断面：放射組織は、同性で 1～3 細胞幅のものと、集合放射組織からなる。

以上の形質よりクマシデ属イヌシデ節に同定される。落葉の中高木で、北海道、本州、四国、九州の山野に分布する。

コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科 図版 2

横断面：大型の道管が、年輪のはじめに 1～2 列配列する環孔材である。晩材部では厚壁で丸い小道管が単独でおおよそ放射方向に配列する。早材部から晩材部にかけて、道管の径

は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものとは大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属クヌギ節に同定される。コナラ属クヌギ節にはクヌギ、アバマキなどがあり、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ15m、径60cmに達する。材は強靱で弾力性に富み、器具、農具などに用いられる。

5. 所 見

上郡B遺跡1号・3号木炭窯跡出土の炭化材は、クマシデ属イヌシデ節1、コナラ属クヌギ節5であった。コナラ属クヌギ節は、温帯下部の暖温帯に分布する落葉高木で、水はけのよい乾燥した台地や丘陵地に生育し、二次林要素でもある。クマシデ属イヌシデ節は、温帯上部の冷温帯に主に分布する落葉広葉樹である。いずれの樹種も周辺地域において一般的に分布する樹木である。

参考文献

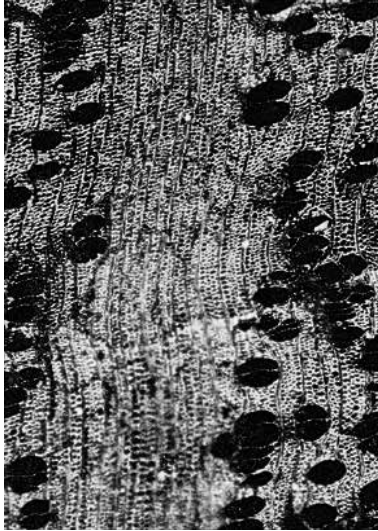
佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.

表1 上郡B遺跡における樹種同定結果

試料番号	遺跡名	出土遺構	層位	結果（和名／学名）	
FBCJ0008	上郡B遺跡	1号木炭窯跡	ℓ6	クマシデ属イヌシデ節	Carpinus sect. Carpinus
FBCJ0009	上郡B遺跡	1号木炭窯跡	ℓ6	コナラ属クヌギ節	Quercus sect. Aegilops
FBCJ0010	上郡B遺跡	1号木炭窯跡	ℓ6	コナラ属クヌギ節	Quercus sect. Aegilops
FBCJ0011	上郡B遺跡	1号木炭窯跡	ℓ6	コナラ属クヌギ節	Quercus sect. Aegilops
FBCJ0012	上郡B遺跡	1号木炭窯跡	ℓ6	コナラ属クヌギ節	Quercus sect. Aegilops
FBCJ0013	上郡B遺跡	3号木炭窯跡	ℓ1	コナラ属クヌギ節	Quercus sect. Aegilops



横断面 ————— : 0.4mm



放射断面 ————— : 0.2mm

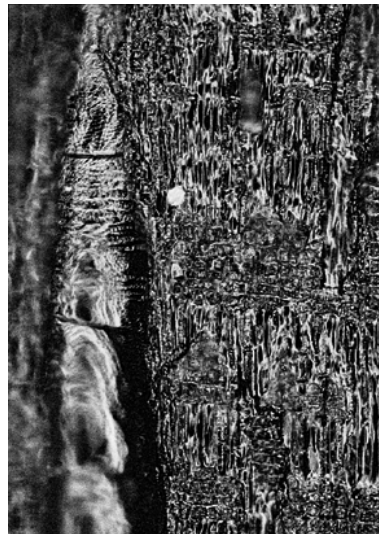


接線断面 ————— : 0.2mm

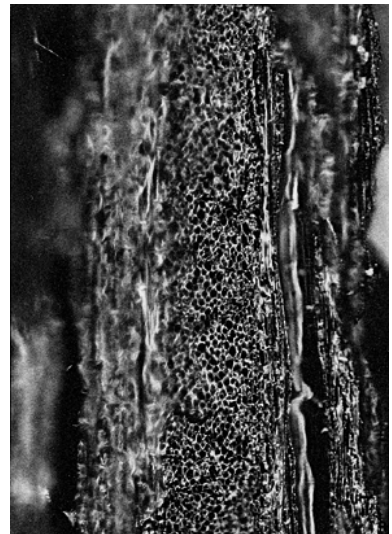
1 FBC J 0008 上郡B遺跡 1号木炭窯跡 ℓ6 クマシデ属イヌシデ節



横断面 ————— : 0.4mm



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

2 FBC J 0011 上郡B遺跡 1号木炭窯跡 ℓ6 コナラ属クスギ節

付編 2 福島県富岡町本町西 A・上本町 G 遺跡出土縄文土器・中世陶器の蛍光 X 線分析

大谷女子大学 三 辻 利 一

1 はじめに

須恵器や埴輪の胎土分析の基礎データは相当量集積されているので、未知試料の分析データも何らかの形で解読することができる。しかし、縄文土器についてはまだまだ基礎データが不足しており、未知試料の分析データは十分に解読できない状態にある。

本町西 A 遺跡・上本町 G 遺跡の縄文土器についても、クラスター分析で胎土を分類することから始めた。

2 分析結果

分析データは表 1 にまとめられている。全分析値は同時に測定した岩石標準試料 J G - 1 による標準化値で示されている。通常、統計計算や K - C a, R b - S r などの分布図作成はこの標準化値を使って行われる。

K, C a, R b, S r の 4 因子を使ってクラスター分析した結果は図 1 に示されている。樹状図ではどの小枝で区切って分類するかについては任意性がある。縦軸には類似度がとられているが、クラスター結合距離が比較的小さいところで区切っておく方が無難である。その結果、図 1 に示すように A, B, C の 3 群に分類した。残りは未分類試料となった。なお、横軸に並んでいる番号はコンピューターに試料を打ち込んでいった順番を示す番号（クラスター番号としてある）であり、表 1 に示してある。分類結果も分析値とともに、表 1 に併記してある。

この分類結果は必ず、K - C a, R b - S r の両分布図で確認しておくことが必要である。図 2 には、A, B, C 群に分類された試料の両分布図を示す。A, B 両群の試料を包含するようにして A, B 領域を示してある。この領域は比較のための領域であって、特に統計学的な意味は持っていない。この領域の中で、A, B 両群の試料は、それぞれ偏在して分布することがわかる。別のいい方をすれば、A, B 群に分類された試料は、それぞれまとまって分布していることがわかる。各群の試料は、それぞれ同一胎土をもつ土器と考えられ、同じところで同じ素材粘土を使って製作された土器とみられる。A 群, B 群の試料は比較的近接して分布するところから、同じ地域内で作られた土器である可能性をもつ。そうすると、今回分析した試料の過半数を A, B 両群で占めることになる。常識的にはこの多数派の土器が在地産の土器と考えられる。そうすると、C a, S r 量がやや少ない C 群の 3 点の試料は外部からの搬入品である可能性をもつ土器ということになる。どの地域からの搬入品であるかを調べるためには、他の遺跡出土縄文土器の胎土と比較対照しなければならないので、今後の宿題ということになる。

endrogram using Average Linkage (Between Groups)
Rescaled Distance Cluster Combine

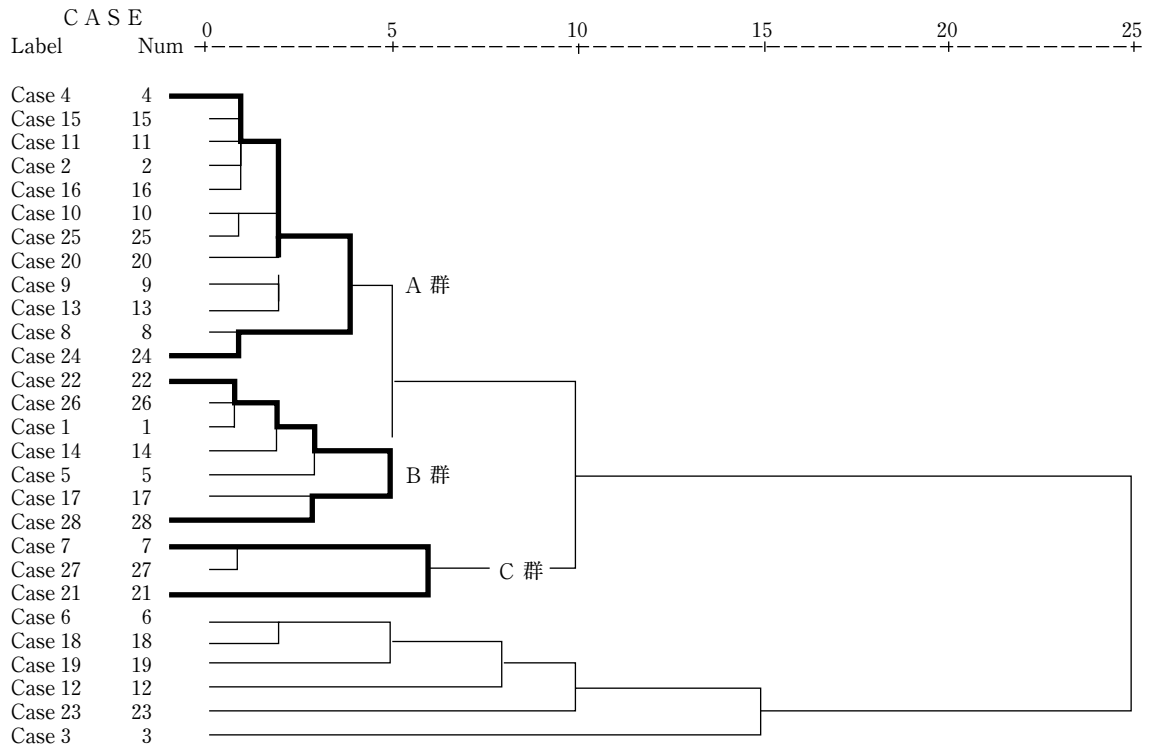


図1 クラスタ分析の結果

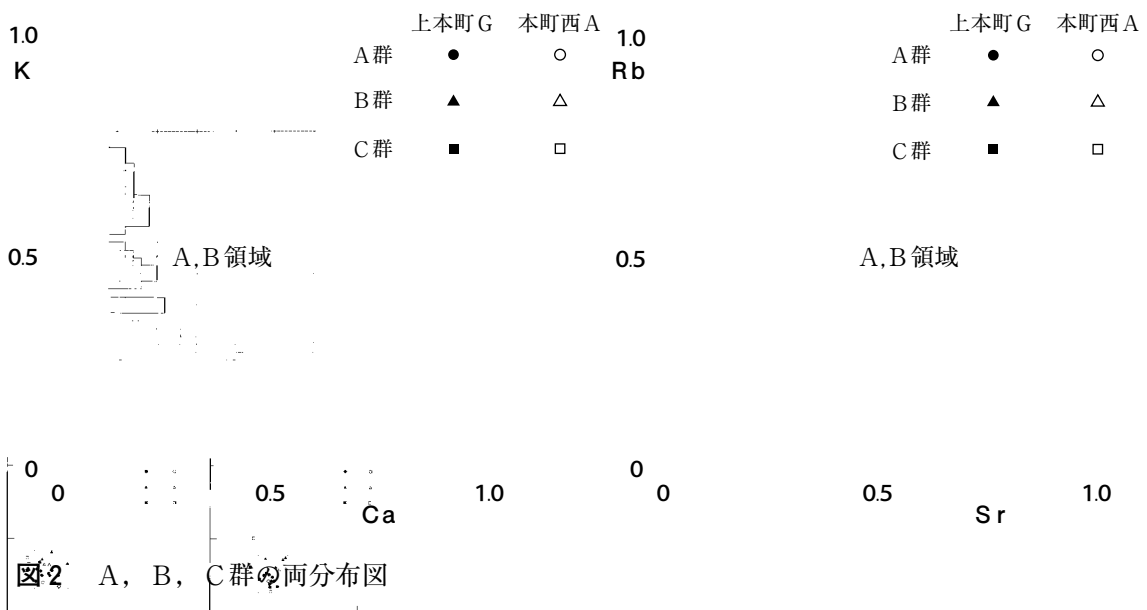


図2 A, B, C群の両分布図

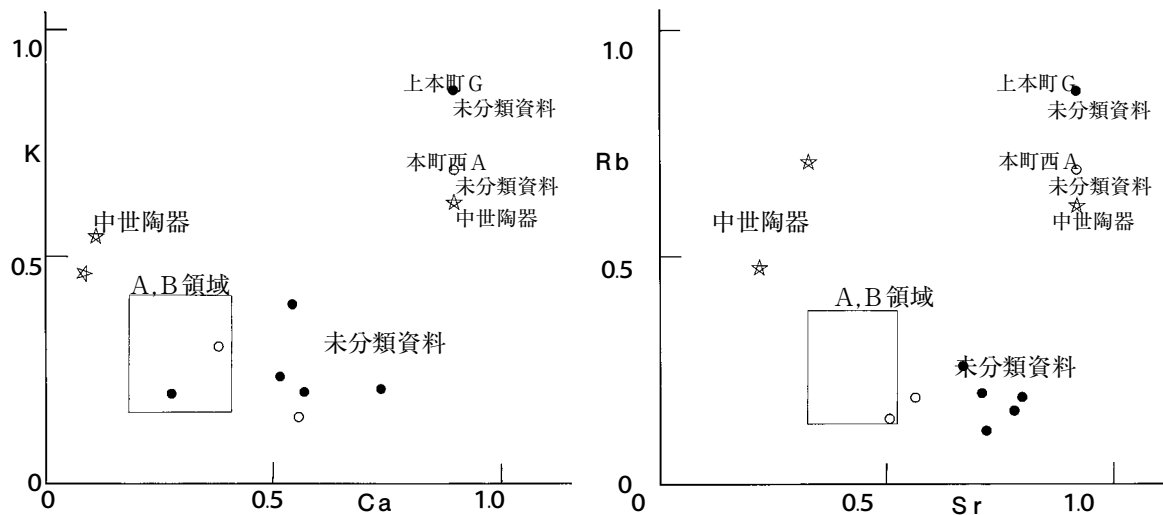


図3 未分類資料と中世陶器の両分布図

未分類試料と中世陶器の両分布図は図3に示されている。未分類試料はRb-Sr分布図ではまとまって分布しているが、K-Ca分布図では少し拡散する。これがもう一つの群を形成できなかった理由である。しかし、大半のものはK、Rb量が少ないところから、東北地方太平洋側の製品である。福島県内のものであるとすれば、太平洋側の浜通り地域のものであろう。この点についても、今後、他遺跡出土縄文土器胎土との比較が問題となろう。

2点の中世陶器については、いずれも西日本からの搬入品とみられるが、珠洲陶器ではない。また、この2点は同一生産地の製品ではなく、別々の産地の製品である可能性がある。中世陶器については生産地の試料の分析が遅れており、産地を推定できる段階にまでは至っていない。

表1 分析試料一覧

遺跡名	試料番号	出土位置	種類	器形	時期	期	クラスターNo.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	分類
上本町G	FBCJ0001	SK27 8 No8	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(浮島II式土器)	No.1	0.323	0.206	1.670	0.348	0.496	0.283	B
上本町G	FBCJ0002	SK09 2	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(大木4式土器)	No.2	0.256	0.231	2.680	0.211	0.416	0.185	A
上本町G	FBCJ0003	SK05 検出面	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(大木4式土器?)	No.3	0.199	0.275	2.450	0.115	0.717	0.183	未分類
上本町G	FBCJ0004	SK09 2	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(浮島II式土器)	No.4	0.257	0.284	3.740	0.188	0.406	0.200	A
上本町G	FBCJ0005	SK33 1	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(大木4式土器?)	No.5	0.364	0.229	2.760	0.359	0.377	0.214	B
上本町G	FBCJ0006	G8 カクラン	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(諸磯b式土器)	No.6	0.196	0.566	2.230	0.158	0.785	0.207	未分類
上本町G	FBCJ0007	E9 LII	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(大木4式土器?)	No.7	0.292	0.130	2.280	0.301	0.277	0.146	C
上本町G	FBCJ0008	H7 カクラン	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(浮島II式土器?)	No.8	0.194	0.323	2.300	0.173	0.464	0.235	A
上本町G	FBCJ0009	SI03 1	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(大木4式土器?)	No.9	0.350	0.222	3.630	0.263	0.405	0.199	A
上本町G	FBCJ0010	SI03 1	縄文土器	深鉢	縄文時代早期後半		No.10	0.211	0.188	3.310	0.263	0.377	0.141	A
上本町G	FBCJ0011	SI03 1	縄文土器	深鉢	縄文時代早期後半		No.11	0.285	0.295	3.900	0.236	0.425	0.190	A
上本町G	FBCJ0012	G10 カクラン	縄文土器	深鉢	縄文時代前期前半		No.12	0.400	0.539	3.720	0.255	0.669	0.196	未分類
上本町G	FBCJ0013	G7 LII	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(浮島II式土器?)	No.13	0.296	0.201	3.580	0.226	0.335	0.150	A
上本町G	FBCJ0014	G10 カクラン	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(浮島II式土器?)	No.14	0.408	0.302	3.930	0.364	0.524	0.258	B
上本町G	FBCJ0015	C7 LII	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(浮島II式土器?)	No.15	0.253	0.280	4.020	0.172	0.407	0.168	A
上本町G	FBCJ0016	G8 LII	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(浮島II式土器?)	No.16	0.283	0.224	3.690	0.213	0.426	0.202	A
上本町G	FBCJ0017	E8 LII	縄文土器	深鉢	縄文時代前期初頭	(宮田III群土器)	No.17	0.328	0.406	4.010	0.299	0.453	0.233	B
上本町G	FBCJ0018	H8 LIII	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(諸磯b式土器)	No.18	0.235	0.516	2.300	0.203	0.712	0.205	未分類
上本町G	FBCJ0019	E7 LII	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(諸磯b式土器)	No.19	0.209	0.736	2.430	0.186	0.799	0.262	未分類
上本町G	FBCJ0020	C6 LII	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(諸磯b式土器)	No.20	0.248	0.344	3.910	0.247	0.371	0.219	A
本町西A	FBCJ0021	H9 LII	中世陶器	甕	中世 (13世紀後半)			0.551	0.114	1.680	0.703	0.325	0.180	未分類
本町西A	FBCJ0022	H9 LII	中世陶器	擂鉢	中世 (14世紀前半)			0.460	0.083	2.650	0.474	0.234	0.159	未分類
本町西A	FBCJ0023	E8 LII b	縄文土器	深鉢	縄文時代早期末葉~前期初頭		No.21	0.333	0.146	4.510	0.498	0.296	0.147	C
本町西A	FBCJ0024	H9 LII	縄文土器	深鉢	縄文時代早期末葉	(野島式土器)	No.22	0.320	0.276	2.830	0.290	0.524	0.176	B
本町西A	FBCJ0025	C7 LI	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(諸磯b式土器)	No.23	0.150	0.549	5.200	0.138	0.510	0.175	未分類
本町西A	FBCJ0026	C7 LI	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(浮島II式土器)	No.24	0.171	0.353	3.900	0.128	0.415	0.212	A
本町西A	FBCJ0027	C7 LI	縄文土器	深鉢	縄文時代前期初頭	(花積下層式土器)	No.25	0.196	0.240	3.200	0.207	0.399	0.165	A
本町西A	FBCJ0028	D7 LII b	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(大木4式土器)	No.26	0.330	0.254	2.460	0.283	0.464	0.232	B
本町西A	FBCJ0029	D11 LIII	縄文土器	深鉢	縄文時代前期後半	(大木4式土器)	No.27	0.371	0.130	2.740	0.268	0.263	0.144	C
本町西A	FBCJ0030	D11 LIII	弥生土器	甕	弥生時代		No.28	0.305	0.379	2.960	0.194	0.570	0.262	未分類

報告書抄録

ふりがな	じょうばんじどうしゃどういせきちようさほうこく							
書名	常磐自動車道遺跡調査報告32							
シリーズ名	福島県文化財調査報告							
シリーズ番号	第391集							
編著者名	山内幹夫・福島雅儀・能登谷宣康・井 憲治・富田 修・千葉秀樹・鈴木広子・門脇秀典・三浦武司							
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部遺跡調査課 ☎960-8116 福島県福島市春日町5-54 TEL 024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 ☎960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL 024-521-1111							
発行年月日	西暦2002年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 。 , ”	東 経 。 , ”	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
かみ ごとり 上 郡 B	とみおかまちかみごとりやま 富岡町上郡山 あざかみごとり 字上郡	07543	54300060	37 13 18	140 58 47	平成12年 6月13日～ 9月20日	3,140㎡	道路（常磐自動車道）建設に伴う事前調査
もと まち にし 本 町 西 A	とみおかまちもとおか 富岡町本岡 あざもとまちにし 字本町西	07543	54300009	37 20 21	140 59 36	平成12年 4月17日～ 8月11日	6,800㎡	同 上
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特記事項		
上 郡 B	集 落 跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代	竪穴住居跡(1) 建物跡(3) 木炭窯跡(3) 土坑(7) 溝跡(1) 集石遺構(1)	縄文土器 弥生土器 土師器		古墳時代前期の竪穴住居跡と平安時代の掘立柱建物跡・木炭窯などが検出された。北側の中位段丘面から検出された竪穴住居跡からは、塩釜式期の土師器が良好な状態で出土した。また低位段丘面からは掘立柱建物跡を検出した。		
本 町 西 A	集 落 跡	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 中世	竪穴住居跡(8) 建物跡(2) 土坑(34) 焼土遺構(2)	縄文土器 弥生土器 中世陶器 土製品 石器・石製品		縄文時代早期末葉から前期初頭にかけての集落跡と縄文時代前期後半の集落跡が確認された。前期後半の竪穴住居跡は長径9mを超える楕円形を呈する大型のものである。遺物は、大木式土器の他、関東系の諸磯b式土器や浮島式土器が出土した。		

福島県文化財調査報告書第391集

常磐自動車道遺跡調査報告32

上郡 B 遺跡
本町西 A 遺跡

平成14年 1 月31日発行

編集 財団法人 福島県文化振興事業団（遺跡調査課）
発行 福島県教育委員会（〒960-8688）福島市杉妻町 2-16
財団法人 福島県文化振興事業団（〒960-8116）福島市春日町 5-54
TEL 024-534-2733 FAX 024-536-3781
日本道路公団東北支社いわき工事事務所
（〒970-0101）いわき市平下神谷字仲田100
印刷 株式会社 山川印刷所（〒960-2153）福島市庄野字清水尻 1-10

本報告書は中性紙を使用しています。